市原市椎津茶ノ木遺跡

1992

財団法人 市原市文化財センター

123号遺構付近

123号遺構出土琥珀玉

椎津稲荷山古墳
外郭古墳
椎津茶ノ木遺跡

椎津茶ノ木遺跡と姉崎古墳群　1961撮影

序　　文

千葉県の中央部に位置し、「王賜」銘鉄剣、あるいは上総国分寺・尼寺に代表される埋蔵文化財の宝庫として知られる市原市は、豊かな自然環境を背景に縄文時代のいにしえより永く人々に愛され続け現代に至った地でもあります。

このような我々祖先の残した貴重な文化遺産を保護・活用し、後世に継承していくことは我々市民に課せられた大きな課題でもあり、切望するところでもありますが、一方では首都圏に位置することから、宅地造成・道路整備事業・教育施設の建設など、人工の増加に伴う一連の地域開発事業の整備も急務であるといえます。

地域開発は現代に生きる我々市民にとって、よりよい生活環境を提供してくれるものでありますが、その反面、貴重な文化遺産の破壊につながることもしばしばあり、これらの地域開発と埋蔵文化財保護との調和の必要性が強く求められています。

当センターでは、地域開発に伴う埋蔵文化財の調査成果を、遺跡発表会・遺跡見学会などの開催や、「私たちの文化財」の発行などを通して広く市民の皆様に還元するよう努め、また今後ともいっそうの御理解をいただけるよう努力邁進致すつもりでおります。

今回ここに報告する「椎津茶ノ木遺跡」は、宅地造成工事に先立ち、造成と埋蔵文化財保護との調整に基づき、関係諸機関の御協力をいただいて発掘調査を実施した遺跡であります。

本報告書は、この調査成果をまとめたものであり、学術的な資料としてはもとより、埋蔵文化財の保護・普及のために広く市民の皆様にも活用していただけるならば幸いです。

本報告書の刊行にあたり、御指導・御協力をいただいた千葉県教育庁文化課、ならびに千葉ホーム株式会社の方々に厚く御礼申し上げます。

平成4年3月

財団法人　市原市文化財センター
理事長　　星　野　一　郎

例　　言

1．本書は千葉県市原市椎津５４５番地に所在する椎津茶ノ木遺跡の調査報告書である。

2．調査は宅地造成工事に伴い実施したものである。

3．発掘調査・整理作業は以下のとおり行なった。

発掘調査	平成２年２月１日～平成２年８月31日	担当　木對和紀
整理作業	平成２年10月１日～平成３年10月31日	担当　木對和紀

4．本書の原稿執筆及びレイアウトは、獣骨・魚貝類について早稲田大学助手である樋泉岳二氏に依頼し、これ以外を木對和紀が行なった。

5．本書に使用した方位は、座標北である。

6．本書に使用した国土地理院発行の地図は、１：５０，０００千葉・姉崎である。

7．発掘調査から整理作業の過程で、千葉ホーム株式会社、千葉県教育庁文化課、市原市教育委員会社会教育部文化課の諸機関から御指導・御協力を賜った。
このほか獣骨・魚貝類については早稲田大学助手である樋泉岳二氏の御教示・御協力を賜った。
厚く御礼申し上げます。

凡　　例

1．挿図における遺構・遺物の縮尺は竪穴住居跡が1/60、土器が1/4、土器片・土製品・石器等が1/3を基準とした。

2．挿図における方位は、座標北である。

3．挿図における数値は海抜高度を示し、遺構内における Pit 等もこれに準じている。

4．竪穴住居跡平面図における床面破線内については、硬化範囲を表す。

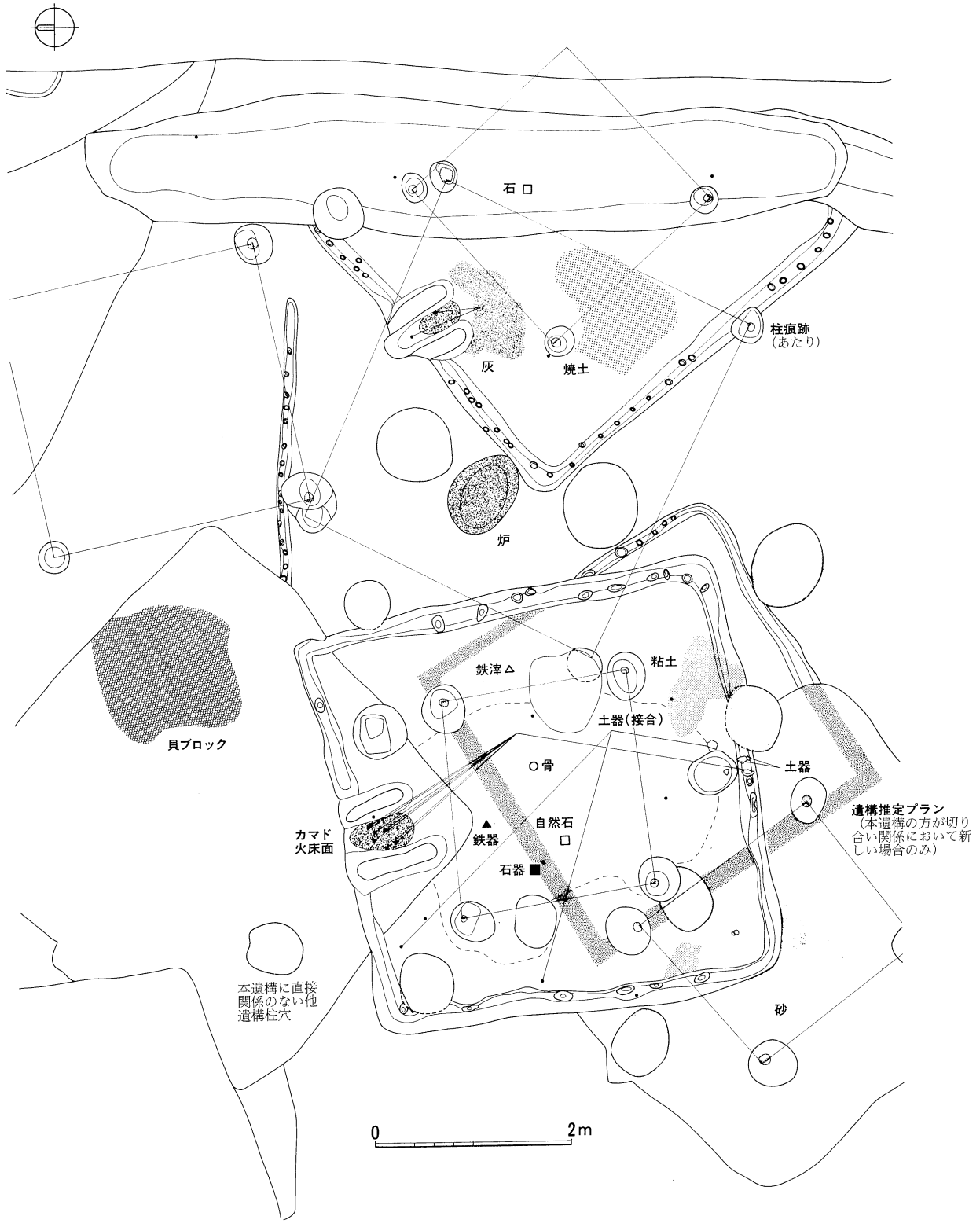
5．玉類・鉄器等の比較的軽量品における重量測定に際しては、島津理化器械株式会社製電子分析天秤ＡＥＬ－200を使用した。

6．遺構・遺物におけるスクリントーン等は、凡例図に対応している。

7．住居跡一覧表の規模における（　）数字は、壁あるいは周溝等の測定可能値を示しており、Ｐ５～Ｐ６等の数値は柱穴内における柱痕跡間を表している。また遺物に関しては、挿図掲載を割愛させていただいたものでも、事実記載として掲載している。

8．土器観察表等の出土位置における数値は、遺物接地面と周囲床面等の差異を表している。

凡例図



遺構
- 炉・カマド火床
- その他の焼土
- 灰
- 遺構推定ライン
- 柱痕跡
- 粘　土
- 繊維質
- 砂
- 貝ブロック
- 土層断面等

土器
- 黒色処理
- 灰付着
- 鉄断面等
- 赤　彩
- 土器断面
- 2次加熱痕
- 煤付着

- ● 土器
- ○ 骨
- ■ 石器
- □ 石
- ▲ 鉄器
- △ 鉄・スラグ

財団法人　市原市文化財センター組織表

平成元年度

役　員

理事長	星野　一郎	（教育委員会教育長）
副理事長	大野　義規	（教育委員会社会教育部長）
常務理事	須田　昇三	（専任）
理　事	滝口　　宏	（早稲田大学名誉教授）
理　事	寺村　光晴	（和洋女子大学教授）
理　事	海上　信久	（姉埼神社宮司）
理　事	根本　正夫	（市企画部長）
理　事	宮崎　芳雄	（市総務部長）
理　事	地引　希壹	（市都市部長）
理　事	安藤　隆一	（市財務部財政課長）
監　事	佐久間　章	（市会計課長）
監　事	小宮　　仁	（教育委員会総務課長）

職　員

庶務課

課　長	田丸　萬富
主　事	大鐘　光江
事務員(嘱託)	秋田　晴美（９月30日まで）
事務員(嘱託)	石渡あゆみ

調査課

課　長	矢戸　三男
係　長	宮本　敬一
主任調査研究員	田中　清美
主任調査研究員	浅利　幸一
調査研究員	大村　　直
調査研究員	近藤　　敏
調査研究員	高橋　康男
調査研究員	木對　和紀
調査研究員	忍澤　成視
調査研究員	田中　茂良
調査研究員(嘱託)	田中　新史
調査研究員(嘱託)	半田　堅三
事務員(嘱託)	高浦　貞子

平成２年度

役　員

理事長	星野　一郎	（教育委員会教育長）
副理事長	栗林　　繁	（教育委員会社会教育部長）
常務理事	淵本　献司	（専任）
理　事	滝口　　宏	（早稲田大学名誉教授）
理　事	寺村　光晴	（和洋女子大学教授）
理　事	海上　信久	（姉埼神社宮司）
理　事	根本　正夫	（市企画部長）
理　事	露崎　　繁	（市総務部長）
理　事	石井　作二	（市財務部長）
理　事	坂本　忠夫	（市都市計画部長）
監　事	佐久間　章	（市会計課長）
監　事	小宮　　仁	（教育委員会総務課長）

職　員

庶務課

課　長	田丸　萬富
主　事	大鐘　光江
主　事	永野　健一

調査課

課　長	矢戸　三男
主任調査研究員	田中　清美
主任調査研究員	浅利　幸一
調査研究員	大村　　直
調査研究員	近藤　　敏
調査研究員	高橋　康男
調査研究員	木對　和紀
調査研究員	忍澤　成視
調査研究員	田中　茂良
調査研究員(嘱託)	田中　新史
調査研究員(嘱託)	半田　堅三
主　事	高浦　貞子

平成３年度

役　員

理事長	星野　一郎	（教育委員会教育長）
副理事長	斎藤　崇雄	（教育委員会社会教育部長）
常務理事	淵本　献司	（専任）
理　事	滝口　　宏	（早稲田大学名誉教授）（１月31日まで）
理　事	寺村　光晴	（和洋女子大学教授）
理　事	海上　信久	（姉埼神社宮司）
理　事	根本　正夫	（市企画部長）（10月10日まで）
理　事	佐野　年男	（市企画部長）（10月11日より）
理　事	露崎　　繁	（市総務部長）
理　事	石井　作二	（市財務部長）
理　事	佐野　年男	（市都市計画部長）（10月10日まで）
理　事	田中　俊夫	（市都市計画部長）（10月11日より）
監　事	佐久間　章	（市会計課長）
監　事	小宮　　仁	（教育委員会総務課長）

職　員

庶務課

課　長	田丸　萬富
主　事	大鐘　光江
主　事	永野　健一

調査課

課　長	矢戸　三男
主任調査研究員	田中　清美
主任調査研究員	浅利　幸一
調査研究員	大村　　直
調査研究員	近藤　　敏
調査研究員	高橋　康男
調査研究員	木對　和紀
調査研究員	忍澤　成視
調査研究員	田中　茂良
調査研究員(嘱託)	半田　堅三
主　事	高浦　貞子

目　次（本　文）

序　文
例　言
凡　例
財団法人市原市文化財センター組織表
Ⅰ　序説
(1)　調査に至る経緯と経過 …… 1
(2)　遺跡の位置と歴史的環境 …… 1
(3)　調査の方法 ……10
Ⅱ　遺構と遺物
(1)　遺跡の概要 ……14
Ⅲ　出土遺物の検討
(1)　セット関係認定の方法 ……118
(2)　分類 ……126
(3)　変遷 ……138
Ⅳ　集落の変遷
(1)　時期区分 ……155
(2)　竪穴住居の耐久年数と変遷 ……155
Ⅴ　まとめ ……162

付編　椎津茶ノ木遺跡出土の動物遺体について ……286

挿　図　目　次

第 1 図　遺跡の位置と市内主要遺跡群 …… 2
第 2 図　遺跡の位置と周辺遺跡 …… 3
第 3 図　椎津茶ノ木遺跡周辺の調査遺跡と大型古墳 …… 5
第 4 図　調査範囲と周囲の遺跡 …… 7
第 5 図　椎津茶ノ木遺跡グリッド配置図 ……11
第 6 図　椎津茶ノ木遺跡遺構配置図 ……12
第 7 図　1～13号遺構実測図、1・2号遺構出土遺物実測図 ……15～16
第 8 図　14～32号遺構実測図 ……17～18
第 9 図　2～13号遺構出土遺物実測図 ……19
第10図　14・16・20・22・24・25・27・28号遺構出土遺物実測図 ……20
第11図　28・29号遺構出土遺物実測図 ……21
第12図　29・31・32号遺構出土遺物実測図 ……22
第13図　33～42号遺構実測図、33～36号遺構出土遺物実測図 ……23～24
第14図　43～46号遺構実測図、出土遺物実測図 ……25
第15図　47号遺構実測図、出土遺物実測図 ……26
第16図　48～50号遺構実測図、47～49号遺構出土遺物実測図 ……27
第17図　50～52号遺構出土遺物実測図 ……28
第18図　51～55号遺構実測図、53号遺構出土遺物実測図 ……29
第19図　56～64号遺構実測図、56・61・54・58・62・68号遺構土層断面図 ……30
第20図　56～62号遺構出土遺物実測図 ……31
第21図　69号遺構実測図、出土遺物実測図 ……32
第22図　66～68号遺構実測図、66号遺構出土遺物実測図 ……33～34
第23図　70～75号遺構実測図 ……35
第24図　70・71号遺構出土遺物実測図 ……36
第25図　76号遺構実測図、出土遺物実測図 ……37
第26図　78～81号遺構出土遺物実測図 ……38
第27図　77～86号遺構実測図、77号遺構出土遺物実測図 ……39～40
第28図　81～85号遺構出土遺物実測図 ……41
第29図　87号遺構実測図、出土遺物実測図 ……42
第30図　87・88号遺構出土遺物実測図、88号遺構実測図 ……43
第31図　89・90号遺構実測図、89号遺構出土遺物実測図 ……44
第32図　90号遺構出土遺物実測図 ……45
第33図　91号遺構実測図、出土遺物実測図 ……46
第34図　91号遺構出土遺物実測図 ……47
第35図　92～102号遺構実測図、94号遺構出土遺物実測図 ……48

第 36 図　94・98号遺構出土遺物実測図 ……49
第 37 図　99号遺構出土遺物実測図 ……50
第 38 図　103号遺構実測図、出土遺物実測図 ……51
第 39 図　103号遺構出土遺物実測図 ……52
第 40 図　104号遺構実測図、出土遺物実測図 ……53
第 41 図　105～107号遺構実測図、105号遺構出土遺物実測図 ……54
第 42 図　105～108号遺構出土遺物実測図 ……55
第 43 図　109号遺構実測図、出土遺物実測図 ……56
第 44 図　110号遺構実測図、出土遺物実測図 ……57
第 45 図　110～114号遺構出土遺物実測図 ……58
第 46 図　111号遺構実測図 ……59
第 47 図　115～117号遺構出土遺物実測図 ……60
第 48 図　112～121号遺構実測図 ……61～62
第 49 図　118・119号遺構出土遺物実測図 ……63
第 50 図　112・123号遺構出土遺物実測図 ……64
第 51 図　112～125号遺構実測図 ……65～66
第 52 図　123号遺構出土遺物実測図 ……67
第 53 図　123号遺構出土遺物実測図 ……68
第 54 図　126～130号遺構実測図、126号遺構出土遺物実測図 ……69
第 55 図　127～129号遺構出土遺物実測図 ……70
第 56 図　130号遺構出土遺物実測図 ……71
第 57 図　130号遺構出土遺物実測図 ……72
第 58 図　130号遺構出土遺物実測図 ……73
第 59 図　131～134号遺構実測図 ……74
第 60 図　131～134号遺構出土遺物実測図 ……75
第 61 図　136～138号遺構実測図 ……76
第 62 図　136号遺構出土遺物実測図 ……77
第 63 図　136号遺構出土遺物実測図 ……78
第 64 図　137・138号遺構出土遺物実測図 ……79
第 65 図　139号遺構出土遺物実測図 ……80
第 66 図　139～155号遺構実測図 ……81～82
第 67 図　139号遺構出土遺物実測図 ……83
第 68 図　139号遺構出土遺物実測図 ……84
第 69 図　139号遺構出土遺物実測図 ……85
第 70 図　139・140号遺構出土遺物実測図 ……86
第 71 図　140号遺構出土遺物実測図 ……87
第 72 図　140・141号遺構出土遺物実測図 ……88

第 73 図　142・143号遺構出土遺物実測図 ……89
第 74 図　144号遺構出土遺物実測図 ……90
第 75 図　145号遺構出土遺物実測図 ……91
第 76 図　146号遺構出土遺物実測図 ……92
第 77 図　146～151号遺構出土遺物実測図 ……93
第 78 図　152・153号遺構出土遺物実測図 ……94
第 79 図　157～163号遺構実測図 ……95～96
第 80 図　157～159号遺構出土遺物実測図 ……97
第 81 図　159～161号遺構出土遺物実測図 ……98
第 82 図　162・163号遺構出土遺物実測図 ……99
第 83 図　164号遺構実測図、出土遺物実測図 ……100
第 84 図　164号遺構出土遺物実測図 ……101
第 85 図　164号遺構出土遺物実測図 ……102
第 86 図　165Ａ・Ｂ・166・167・168Ａ・Ｂ号遺構実測図 ……103
第 87 図　165Ａ号遺構実測図、出土遺物実測図 ……104
第 88 図　166号遺構出土遺物実測図 ……105
第 89 図　167・168Ａ号遺構出土遺物実測図 ……106
第 90 図　169号遺構実測図 ……107
第 91 図　169号遺構出土遺物実測図 ……108
第 92 図　170～172号遺構実測図 ……109
第 93 図　170・171号遺構出土遺物実測図 ……110
第 94 図　172号遺構出土遺物実測図 ……111
第 95 図　椎津茶ノ木遺跡全体図 ……112
第 96 図　173～180号遺構実測図 ……113
第 97 図　174号遺構出土遺物実測図 ……114
第 98 図　174号遺構出土遺物実測図 ……115
第 99 図　174号遺構出土遺物実測図及ぶ175・176号貝ブロック出土遺物実測図 ……116
第100図　181～188号遺構実測図、183号遺構出土遺物実測図 ……117
第101図　標式遺構出土遺物 1 ……119
第102図　標式遺構出土遺物 2 ……120
第103図　標式遺構出土遺物 3 ……121
第104図　標式遺構出土遺物 4 ……122
第105図　標式遺構出土遺物 5 ……123
第106図　標式遺構出土遺物 6 ……124
第107図　標式遺構出土遺物 7 ……125
第108図　土器分類図 1 ……135
第109図　土器分類図 2 ……136

第110図　土器分類図３ ……137
第111図　椎津茶ノ木遺跡出土土器変遷図１ ……140・141
第112図　椎津茶ノ木遺跡出土土器変遷図２ ……142・143
第113図　椎津茶ノ木遺跡出土土器変遷図３ ……146・147
第114図　椎津茶ノ木遺跡出土土器変遷図４ ……148・149
第115図　椎津茶ノ木遺跡出土土器変遷図５ ……152・153
第116図　各期における遺構分布図１ ……159
第117図　各期における遺構分布図２ ……160
第118図　各期における遺構分布図３ ……161

表　目　次

第１表　周辺遺跡一覧表 …… 4
第２表　椎津茶ノ木遺跡新旧遺構番号一覧表 ……13
第３表　椎津茶ノ木遺跡検出遺構時期別一覧表 ……156
第４表　椎津茶ノ木遺跡住居跡一覧表 ……165
第５表　椎津茶ノ木遺跡掘立柱建物跡・柵列一覧表 ……185
第６表　椎津茶ノ木遺跡一覧表 ……185
第７表　椎津茶ノ木遺跡土坑一覧表 ……185
第８表　椎津茶ノ木遺跡古墳・方形周溝墓一覧表 ……186
第９表　椎津茶ノ木遺跡出土土器観察表 ……187
第10表　椎津茶ノ木遺跡出土土製品一覧表 ……256
第11表　椎津茶ノ木遺跡出土金属器一覧表 ……278
第12表　椎津茶ノ木遺跡出土種子・石器・玉類等一覧表 ……281

付　編

表１　椎津茶ノ木遺跡から検出された貝ブロックおよびサンプル一覧 ……295
表２　椎津茶ノ木遺跡分析用貝層サンプル一覧および貝層内容物組成 ……296
表３　椎津茶ノ木遺跡出土の動物遺体種名一覧 ……297
表４　椎津茶ノ木遺跡出土の貝類遺体一覧 ……299
表５　椎津茶ノ木遺跡出土主要貝類計測値(幼貝をのぞく) ……300
表６　椎津茶ノ木遺跡出土の魚類遺体一覧(1)　水洗資料（主要魚類） ……301
表７　椎津茶ノ木遺跡出土の魚類遺体一覧(2)　水洗資料（その他の魚類） ……302
表８　椎津茶ノ木遺跡出土の魚類遺体一覧(3)　現場採集資料 ……302
表９　椎津茶ノ木遺跡出土の両生類・爬虫類・鳥類・哺乳類遺体一覧 ……303

写真図版目次

巻頭図版１　123号遺構付近、123号遺構出土　琥珀玉

巻頭図版２　椎津茶ノ木遺跡と姉崎主要古墳群

図版表紙　姉崎二子塚古墳

図版　１　調査前（前方が椎津稲荷山古墳）

調査前（西側より）

図版　２　椎津稲荷山古墳

椎津茶ノ木遺跡より姉埼神社方面を望む

図版　３　遺構群１

遺構群２

図版　４　遺構群３

遺構群４

図版　５　調査風景１（44号周辺）

調査風景２（90号周辺）

図版　６　調査風景３（114号周辺）

調査風景４（139号周辺西側より）

図版　７　調査風景５（139号周辺北側より）

56号付近、123号周辺

157号周辺、調査終了直前

図版　８　１～13号、１～13号近景

２号遺物出土状況、３号遺物出土状況

４号遺物出土状況、14号付近遺構重複状況

25号、25号遺物出土状況

図版　９　27号、25・28号

31号、32号

33号周辺（中央が33号）

図版 10　33号カマド付近、33号刀子出土状況

40号（掘立柱建物跡）、41号

44号周辺（土抗は188号）、44号周辺近景（中央カマド住居は47号）

44号周辺（中央が44号）、43号遺物出土状況

図版 11　44・47号、44号カマド

47号カマド付近遺物出土状況１、47号カマド付近遺物出土状況２

47号遺物出土状況３、50号周辺（中央カマド付住居）

50号カマド、51号周辺

図版 12　51号カマド、52号遺物出土状況

53号（中央炉住居跡）、53号炉

53号周溝内遺物出土状況、56号
56号遺物出土状況、58号
図版 13　59号、59号遺物出土状況
69号（溝）、69号（土坑は181号、手前は59号）
70号周辺、70・71号（手前は71号）
70号遺物出土状況１、70号遺物出土状況２
図版 14　85号周辺
83号（粘土盤状炉）周辺、85号遺物出土状況
81号周辺、80号
図版 15　88号周辺（北から）
88号、89号（手前に91号カマド粘土が散布する）
89号カマド、53号周辺（カマド未調査住居は90Ａ号）
図版 16　90Ａ号カマド検出状況１、90Ａ号カマド検出状況２
90Ａ号完掘状況、91号周辺
91号カマド、91号遺物出土状況１
91号遺物出土状況２、91号遺物出土状況３
図版 17　98号（下層に103号が存在）、98号カマド
99号カマド検出状況、99号カマド周辺遺物出土状況
99号全景、103号遺物出土状況１
103号遺物出土状況２、103号遺物出土状況３
図版 18　91号下層遺構検出状況とその周辺
103号（中央）周辺
図版 19　104号（中央）周辺、調査中は161号
105号周辺（中央カマド住居）、109号（南から）
109号（西から）、109号カマド
図版 20　109号貯蔵穴遺物出土状況、110号
110号遺物出土状況１、110号遺物出土状況２
111号検出状況
図版 21　114号周辺、114号カマド（白く乾いた範囲のみ、火床面は12号に伴うか？）
118号（手前）周辺、115号（中央カマド）
115号カマド周辺、103号（中央カマド）及び123号（大型住居）
116号周辺、116号カマド
図版 22　118号、118号カマド
118号遺物出土状況１、118号遺物出土状況２
123号
図版 23　122号遺物出土状況、123号遺物出土状況１
123号遺物出土状況２、123号遺物出土状況３

123号遺物出土状況４、124号？鉄滓・鍛造剝片検出状況
123号Ｐ１周辺遺物出土状況、123号Ｐ１完掘状況
図版 24　123号Ｐ２検出状況、123号Ｐ３検出状況
123号炉検出状況１、123号炉検出状況２
123号完掘状況
図版 25　130号（奥カマド）144号（ほぼ中央カマド）周辺
130号貯蔵穴遺物出土状況１、130号カマド検出状況
130号カマド調査前、130号貯蔵穴遺物出土状況２
図版 26　130号カマド周辺（カマド内に支脚）、130号周辺（南端に135号溝）
131号遺物出土状況（手前溝は135号）、132・133・134号検出状況１
134号（貝ブロック）検出状況、132号カマド（溝は135号）
133・134号（中央貝ブロック）検出状況、134号断面１
図版 27　134号断面２（手前は136号Ｐ７）、136号遺物出土状況１
136号遺物出土状況２、136号遺物出土状況３
136号遺物出土状況４、136号遺物出土状況５
136号遺物出土状況６（調査済カマドは137号）、136号遺物出土状況７（手前甕はカマド内に存在）
図版 28　136号カマド内支脚検出状況、136号完掘状況
137号遺物出土状況１、137号コーナ部遺物出土状況
137号完掘状況、139号周辺調査状況１
139号周辺調査状況２、139号調査状況
図版 29　140号遺物出土状況と周辺の調査状況
139号遺物出土状況１、139号遺物出土状況２
139号遺物出土状況３、139号Ｐ５付近遺物出土状況１
図版 30　139号Ｐ５付近遺物出土状況２、139号Ｐ５付近遺物出土状況３
139号Ｐ５付近遺物出土状況４、139号Ｐ５付近遺物出土状況５
139号完掘状況
図版 31　140号周辺の遺物出土状況
140号焼土検出状況、140号焼土下検出状況
140号焼土下遺物出土状況、140号完掘状況
図版 32　144号遺物出土状況及び130号調査状況
144号周辺調査状況、144号完掘状況
145号検出状況と周辺の調査状況、145号遺物出土状況１
図版 33　145号遺物出土状況２（同壺形土器内より炭化米検出）、145号遺物出土状況３
146号、169号遺物出土状況
169号、158号周辺
163号周辺（後163号は主柱穴を検出し、プラン南側にのびる）、164号
図版 34　164号（中央）とその周辺

172号（中央小型住居）とその周辺
図版 35　166号カマド、166号カマド脇遺物出土状況
166号遺物出土状況、167号貯蔵穴遺物出土状況
167号貯蔵穴完掘状況、170号
170号遺物出土状況１、170号遺物出土状況２
図版 36　171号、173号（北側より）
174号（古墳周溝）西側より、174号（古墳周溝）東側より
174号遺物出土状況（手前は馬骨）、174号底面付近紡錘車出土状況
174号Ｕ字型鍬検出状況、174号須恵器大甕検出状況
図版 37　175号（貝ブロック）検出状況１、175号（貝ブロック）検出状況２
176号（貝ブロック）検出状況、176号断面
181号、182号
186号、188号
図版 38　174・175号調査状況
調査終了（埋め戻し）状況
図版 39　２－１・３～８
３－２・３
４－１
８－１
12－１
14－１・２
16－１
20－１
図版 40　20－２・３
22－１
25－１・２・４
27－１～３
28－２・４・６・８～10・12・14
29－６・７
図版 41　29－８～10
31－１・３
33－１～３・５～８・15
34－４
36－２
43－１～３
44－１・３・５・６
47－１・２

図版 42　47－5・6・8～12・14・16・19～21
48－1
50－1・3・5～8
図版 43　50－9・10・12
51－2～4
52－1
56－3・5・6
58－3
59－1
69－1～3・6・10・11・16・18
図版 44　70－1～3・5・7・8
71－3・4
77－1・4
78－1・5
79－1・2・4
80－1
81－1・5
図版 45　81－6～11
82－1・4
85－2
87－1～4・7
89－3～6
図版 46　90－1～5・8・15
91－1～6・9～11
図版 47　91－12～14・16～18・20・25・27
98－1～4・6
99－1・2・4～6
図版 48　99－7～12・17～20
103－1・4～8
図版 49　103－10・15・18・19・25～27
104－2・3・6・14・15
105－1～3・6・7
106－2・3
図版 50　107－1・2
109－1・2・5・6・8～11・20
110－1～4・7
図版 51　110－8・14

111－7・8
113－1
114－3
115－1～3
116－1～6・8・9・11
118－1
図版 52　118－2～5・8～15
122－1・2
123－1～3・5・7
図版 53　123－10・12～14・16～19・55
127－1・2
129－1・2・4～7
130－1・2
図版 54　130－3～13・16～23
図版 55　130－24～26・29・31～33・37
131－1
132－1～4
133－7
134－2
136－1
図版 56　136－2～18
図版 57　136－19・20・24
137－1～3・8・10
139－1～7
図版 58　139－9～11・13～15・22・23・25・28・35～37・39・41～46
図版 59　139－47・48・52・53・57～67・69～73
140－1・3
図版 60　140－5・8～11・16・17・19・20・22・24・36・37
141－1～5
図版 61　141－6
142－1・3・8・12
143－1・2・5・6
144－1・2・4～6・8・10・12
図版 62　145－1・2・4～14
146－1～3・5
図版 63　146－6・10～12
147－1・2

148－1

157－2・6

158－1～5

159－4

160－2・3

161－2・3

図版 64　161－4～6

162－1・3～6・8

163－3・4・6

164－1・2・6・8・10・15・19・23

図版 65　164－24～27・31～37・40

165－2～4・6・11

166－1・2・5

図版 66　166－6・8～11

167－1・2・4・6～13

168－1・2

169－1・2

図版 67　169－5

170－1～3

172－1

174－2～4・11・12・14～18・20～23

図版 68　174－24～34・36・37・39～44

175－1・2

176－1

図版 69　176－2・3

3－4・5

6－1・2

27－5

28－13・15～17・21

29－1～4

31－4～8

32－1～8

33－18

図版 70　33－16・17・19

36－3

47－30

48－2～6

50－19～21
53－ 1
54－ 1
57－ 1
59－ 2～7・9
60－ 3・4・6
61－ 1・2
62－ 2～5
66－ 3～6
69－17・24・25
78－ 7
79－ 6・7
81－ 4
84－ 1～4
図版 71　84－ 5～8
85－ 1・3～7
87－ 8～13
88－ 1
90－13・16～18
91－22～24
94－ 1・2・4・5・7
98－10
103－32・33
105－ 8
108－ 2～5
109－18・19
図版 72　110－10
111－ 1～6・9・10
112－10
114－ 5
117－ 1・3～5
118－22～24・32
123－11・20～36
図版 73　123－37～41・43～52
126－ 2～5
128－ 1
130－34～36・40～70

133－5

137－12・19～21

138－1

図版 74　137－74

139－75～103

140－38～57

141－7

142－22

143－7

144－11

145－16

146－14・17・20～33

150－4

152－6～9

153－1～13

図版 75　153－14～25

161－7

162－7

164－4・38・41・43～67

165－16

166－11・24

167－15

169－7～11・13～16・20・23

170－6・9～11

図版 76　171－1・3～7

172－14～17

174－5～10

66鉄滓

図版 77　98・120・164

123号遺構（炉内）出土レンガ状遺物1

123号遺構（炉内）出土レンガ状遺物2

145号壺形土器内出土炭化米1

145号壺形土器内出土炭化米2

図版 78　貝層出土動物遺体1

図版 79　貝層出土動物遺体2

図版 80　貝層出土動物遺体3

図版 81　貝層出土動物遺体4

Ⅰ　序　　説

(1)　調査に至る経緯と経過

今回の調査は、市原市椎津地先において、宅地造成工事に先行して実施されたものである。工事に先立ち昭和63年８月に千葉ホーム株式会社より同地区内にある埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについての照会があり、千葉県教育委員会より遺跡の所在する旨の回答があった。これを受け千葉ホーム株式会社及び千葉県教育庁文化課、市原市教育委員会文化課の三者によりその取扱いについての協議を行い、当該地区については次の方針が決定された。

１．国庫・県費の補助を受けて市原市教育委員会が主体となり、遺構確認調査を実施する。

２．遺構確認調査の結果に基づき再度協議を行い、本調査の範囲を決定し記録保存とする。

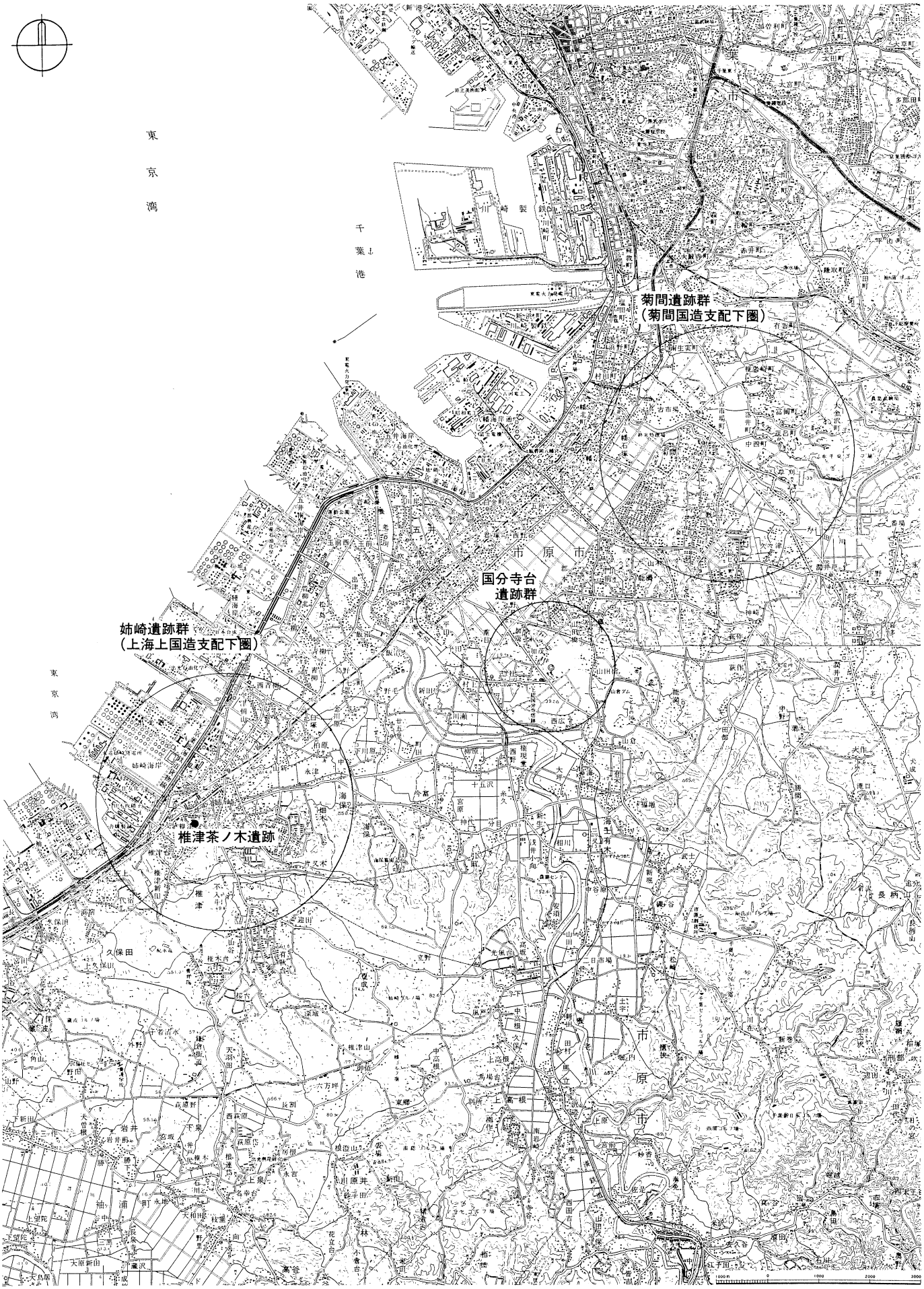
発掘調査は、財団法人市原市文化財センターの受託事業として調査対象区2,639㎡に対して実施した。確認調査は平成元年７月18日から同29日まで実施し、その結果に基づく全対象区に対して平成２年２月１日より本調査を開始し、同年８月末日をもって終了した。（市原市教育委員会文化課）

(2)　遺跡の位置と歴史的環境

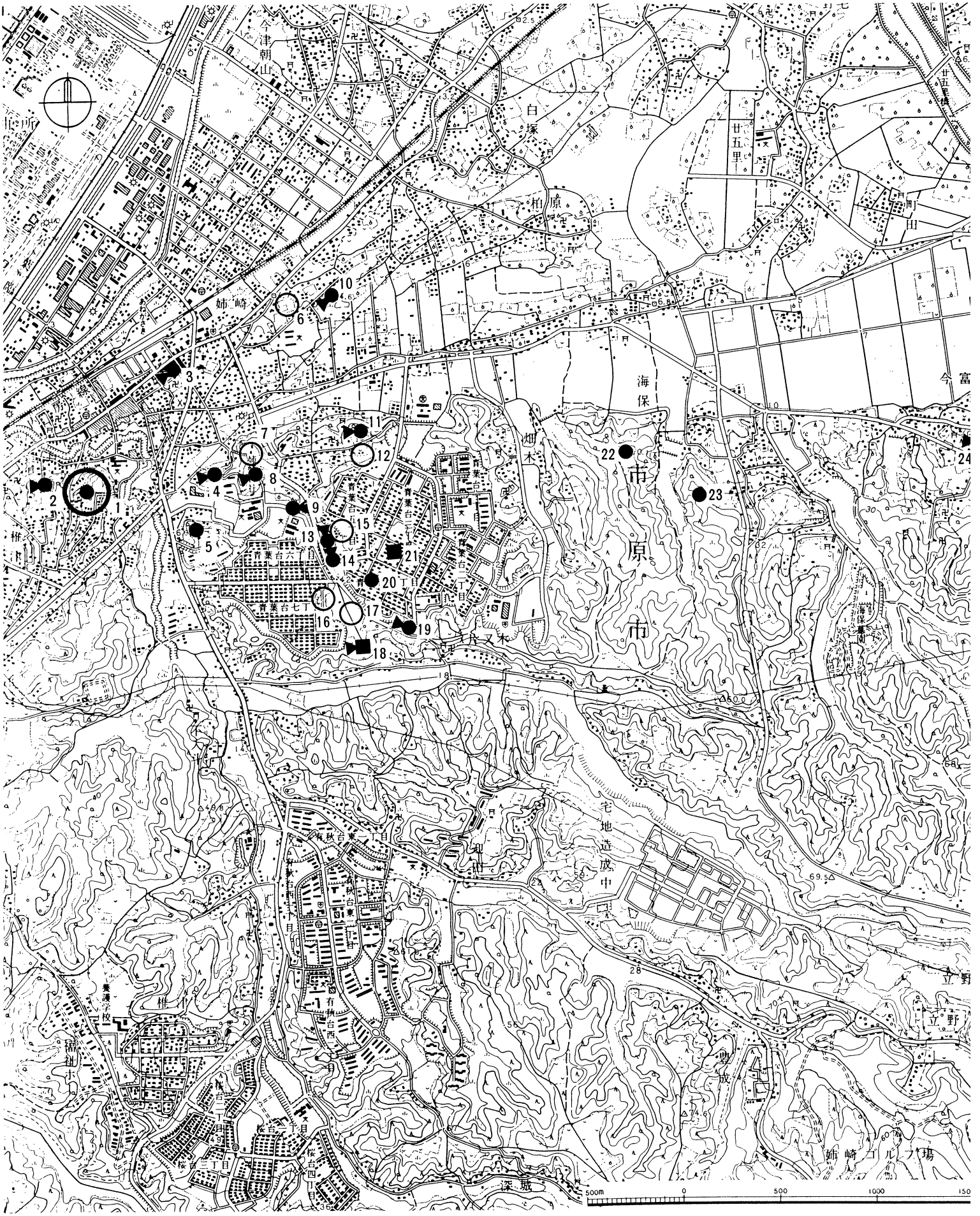
椎津茶ノ木遺跡は標高およそ29m、東に東京湾を眼下とし、西に椎津川を挟んで姉埼神社の杜を望む舌状台地突端部に位置している。遺跡は椎津城跡の一画を占めており、また石枕出土伝承の存在する椎津稲荷山古墳が現存している。

今回の調査対象地は、椎津茶ノ木遺跡のうちでも南側を主体とする約2,600㎡程の範囲であり、結果として前述椎津稲荷山古墳の周溝の極一部と、幾重にも重複する竪穴住居跡をはじめとする各種遺構が検出された。ここでは椎津茶ノ木遺跡の存在する姉崎地域を中心として、周辺の歴史的環境を捉えることにしたい。

第１図は市原市における主要遺跡群の位置を示したものである。もちろんこの他にも多数の遺跡が周辺に存在しているわけではあるが、とりわけこの３者は周囲を圧倒する内容を保持していると言っても過言ではない。菊間遺跡群は『和名類聚抄』における市原郡菊麻郷をほぼ中心とする地域で、大型前方後円墳の集中度から『国造本記』における菊麻国造およびその前身豪族の奥津城として捉えられる菊間古墳群を始めとして、隣接する菊間廃寺や光善寺廃寺を含めた村田川中・下流域一帯に濃密に分布する古墳群及び集落跡を主体とする。このうち村田川南岸に所在する大型古墳では、粘土槨２基が接合して検出され、内行花文鏡・珠文鏡・石釧・大刀・剣・鉄斧・鉇・水晶製勾玉・管玉・ガラス玉などを検出し、全長60m前後の前方後方墳と推定される新皇塚古墳や、長軸11mを測る割竹形木棺内より珠文鏡・石釧・刀子・瑪瑙勾玉・琥珀棗玉・琥珀小玉・管玉・ガラス勾玉、ガラス小玉を検出した径44mの円墳である大厩浅間様古墳などが調査されている。また周辺には未調査であるものの権現山古墳（75m）・東関山古墳（61m）・姫宮古墳（51m）・大厩二子塚古墳（63m）などの古くから著名な前方後円墳や、径44m前後の円墳と考えられる菊間天神山古墳などの大型古墳が集中的に分布している。また集落跡としては、菊間・菊間手永・大厩遺跡などの極めて重複率の高い複合遺跡などが調査されていることや、近年和泉式期の豪族居館跡として想定し得る西山・草刈尾梨遺跡の存在や、



第1図　遺跡の位置と市内主要遺跡群（1/100,000）



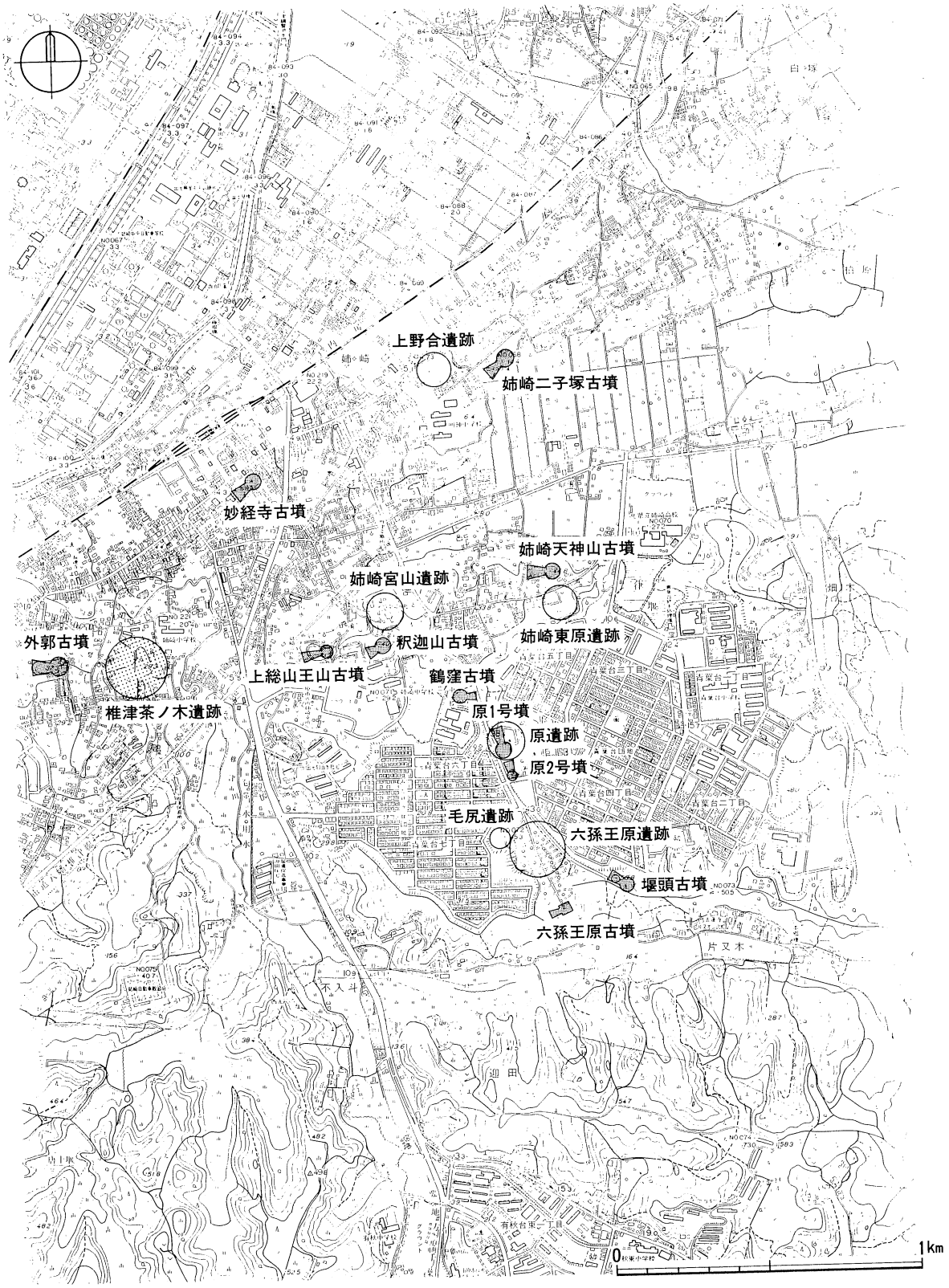
第2図　遺跡の位置と周辺遺跡（1/25,000）

第1表　周辺遺跡一覧表

No.	遺跡名	遺跡の内容	備考
1	椎津茶ノ木	本報告書。遺跡内に椎津稲荷山古墳が存在する。	平成元年度一部確認調査を実施 文献1
2	外郭古墳	前方後円墳、全長80～85m？	平成元年度一部調査、椎津城築城により大半は削平？ 文献2
3	妙経寺古墳	前方後円墳、全長推定55m？	未調査、削平
4	姉崎山王山古墳	前方後円墳、全長69m、粘土槨、金銅製天冠、銀装単竜式環頭大刀、胡籙他	昭和38年度調査、消滅 文献3
5	富士見塚古墳	円墳、径25m、木棺直葬、直刀、鉄鏃、胡籙、小型仿製鏡、鹿角装刀子他	昭和38年度調査、消滅 文献4
6	姉崎上野台	円墳、住居跡ほか、住居跡4、古墳中期主体	平成元年度調査 文献5
7	姉崎宮山	集落、遺跡内に御社古墳群（円墳3基）存在	昭和61年度調査 文献6
8	釈迦山古墳	前方後円墳、全長79～91m	未調査
9	鶴窪古墳	前方後円墳、全長60m、埴輪	昭和56年度一部調査
10	姉崎二子塚古墳	前方後円墳、全長110m、石枕、立花他	明治以来数度調査 文献7
11	姉崎天神山古墳	前方後円墳、全長125m前後	昭和49年度測量調査実施 文献8
12	姉崎東原	古墳、集落ほか、弥生住居が主体	昭和62年度、平成2年度調査文献9
13	原1号墳	前方後円墳、全長70m、直刀、鉄鏃、埴輪	昭和48年調査、消滅 文献10
14	原2号墳	前方後円墳、規模不明	未調査、消滅
15	原	墳墓、集落、住居跡28、弥生住居が主体	昭和56年度調査、消滅 文献11
16	毛尻	墳墓、集落、住居跡18、弥生後期主体	昭和56年度調査、消滅 文献12
17	六孫王原	墳墓、集落、住居跡99、弥生後期～古墳前期主体	昭和63年度、平成2、3年度調査 文献13
18	六孫王原古墳	前方後方墳、全長45m	昭和45年度、平成2、3年度調査 文献14
19	堰頭古墳	前方後円墳？、全長45m	未調査
20	木戸窪古墳	円墳、規模不明、粘土槨、直刀、刀子、銅環小玉	昭和44年度調査、消滅 文献3、15
21	徳部台古墳	方墳、規模不明、両袖式横穴式石室	昭和44年度調査、消滅 文献3、15
22	海保大塚古墳	円墳？、径60m、現状は六角形	平成元年度調査 文献16
23	海保吉谷前古墳群	円墳6基、内径12・18・30mの3基調査、木棺直葬、鉄剣、鉄鏃、勾玉、管玉、ガラス小玉他	昭和43年度調査 文献17
24	今富塚山古墳	前方後円墳、全長110m前後	平成3年度一部調査

対岸における千原台遺跡群の内容が次第に明らかにされるに及び、周囲一帯が一つの文化の中心的存在であったことが垣間見られる。(註1) これらのことから、少なくとも村田川南岸一帯は菊麻国造及びその前身豪族の勢力基盤として捉えることは可能であろう。(註2)

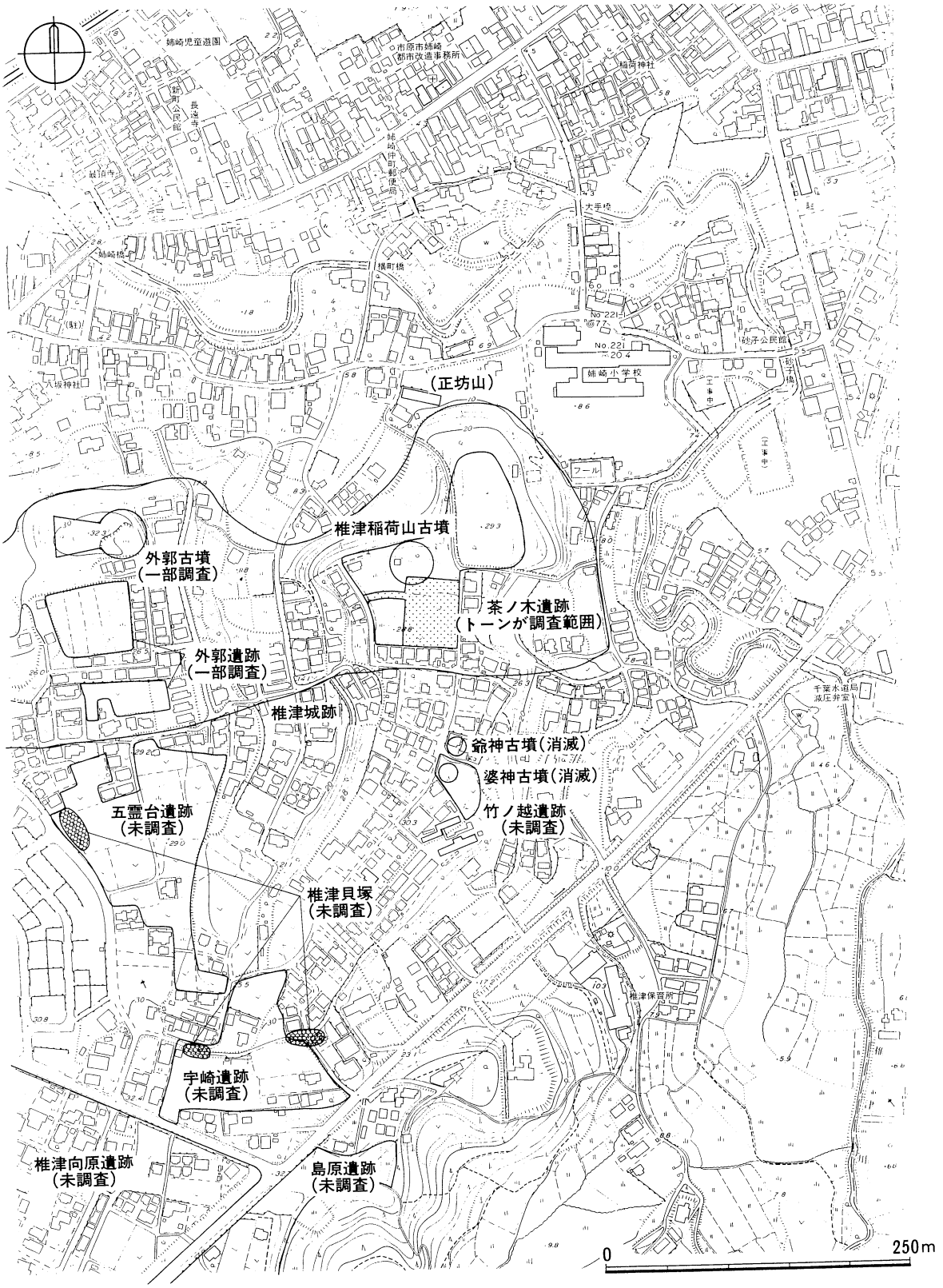
次に村田川南岸～養老川下流間における通称国分寺台の台地上に集中する国分寺台遺跡群の内容を窺ってみよう。この地域は『和名類聚抄』における市原郡市原郷をほぼ中心とし、全国的にみても著名遺跡が集中する地域でもある。ここには出現期古墳とされる神門古墳群や王賜銘鉄剣を出土した稲荷台1号墳などの考古学研究にとって欠かすことのできない第一級資料をはじめとして、後期方形周溝墓2基の内部施設より、計10点の銅釧を検出した根田遺跡、弥生時代後期以降を中心として綿綿と続く集落跡や墳墓群を形成する天神台・諏訪台遺跡、人物埴輪を検出した山倉1号墳をはじめとする山倉古墳群や、古墳時代後期の集落跡を中心とする台・郡本大宮・千草山遺跡などが存在する。さらに律令制施行後の奈良時代を中心とする時期には、古代上総を代表とする国分僧寺・尼寺の建立や、古代官道と推定される幅6mの道路跡を検出した山田橋表通遺跡、及び官道に沿って掘立柱建物群や多量の緑釉・灰釉陶器等を検出し、通常の集落遺跡とは種を異にする稲荷台遺跡などが特筆されよう。しかしながら古墳時代に目を転じた時、神門古墳群に連続する前期大型前方後円墳、あるいは菊麻・



第3図　椎津茶ノ木遺跡周辺の調査遺跡と大型古墳（茶ノ木遺跡内に椎津稲荷山古墳が所在する）

上海上両国造及びその前身豪族の奥津城と考えられる周辺地域のごとく、大型前方後円墳群の存在しない地域でもあるとは十分な留意が必要であろう。(註3)

最後に茶ノ木遺跡が存在する椎津川下流域、姉崎周辺の遺跡群についてふれておきたい。この地域は県下でも有数な大型前方後円墳が築かれ、先の村田川流域のごとく、上海上国造及びその前身豪族の奥津城として捉えられる姉崎古墳群、及び延喜式内社姉埼神社が存在し、『和名類聚抄』における海上郡馬野郷に比定される地域をほぼ中心とする。しかしながらやや範囲を広げ、前期大型前方後円墳に比定される今富塚山古墳（110m）及び大型古墳改変の塚として捉えられ得る海保大塚（60m）、その中間に位置する海保吉谷前古墳群の中でも、４Ｃ末～５Ｃ初頭前後に比定される海保３号墳や、海上郡家及び白鳳期の郡名寺院跡に推定される今富廃寺等を含めることによって、養老川下流域南岸地帯一帯がかつての上海上国造及びその前身豪族の勢力基盤として捉えることが可能な地域でもある。また極めて限られた範囲ながら調査が実施された大型古墳も存在し、その変遷と内容の一部を知ることができる。まず内部施設に木炭床（槨？）を使用していたものと考えられ、その墳形が古式の様相を残し、４世紀代の築造と考えられる今富塚山古墳（110m前後）、墳丘測量のみ実施され、墳形から推定して今富塚山古墳とほぼ同時期か、あるいは若干後出する時期として捉えられる姉崎天神山古墳（125m前後）、未調査ながら前方部が未発達で、古式の様相を残す釈迦山古墳(79～91m)、前方部と後方部に内部施設が存在し、前方部より直弧文付石枕・立花・銀製垂飾付耳飾・瑪瑙勾玉・直刀・鉾・鏃・轡・短甲片・桂甲片・頸鎧・肩鎧・蟠虺文鏡・変形文鏡・勾玉・管玉・琥珀棗玉、後円部よりガラス小玉・石製模造品・立花・伝石枕・金銅製金具・直刀片・鉾・金銅製小札鋲留衝角付冑片・短甲片・桂甲片等を検出し、墳丘部の円筒埴輪列（Ｂ種横ハケが表採されている）中より検出された土師器高坏が和泉式として捉えられ、５Ｃ中葉以前に位置付けられる姉崎二子塚古墳（110m）、百済武寧王陵出土単竜式環頭大刀の系譜に連り、蕨手風の鞘紋様を施す銀装単竜式環頭大刀・木製大刀・胡籙・鉄鏃・金銅製天冠・櫛・銅地銀覆耳環・変形四獣鏡・埴輪等を検出し、副葬品の年代観から６Ｃ前半代に比定し得る山王山古墳（69m消滅）、長軸長およそ70m、円筒・形象埴輪を有し３段築成工法を採用？しながら、粘土床と推定される内部施設からは直刀１本と刀子片などのわずかな遺物しか検出されなかった原１号墳（６Ｃ中葉？消滅）、長軸長60m前後を測り円筒・形象埴輪を有するものの後円部が大幅な削平を受けたものと推定される鶴窪古墳（６Ｃ後葉？）長軸長45m前後、７Ｃ前葉前後に比定されるものの未調査で詳細不明な堰頭古墳、乱掘著しい横穴式石室中より金銅製馬具片、直刀片・刀子片・鉄鏃片を、前方部墳頂部から須恵器大甕を検出し、長軸長45mを測る７Ｃ中葉前後に比定される前方後方墳である六孫王原古墳（近年後方部主軸上に掘り残しによる方形ブリッジ状突出部が検出されている）として捉えられている。この他にも姉埼神社北方に存在したと言う姉埼神社北方古墳、妙経寺境内にその残骸を留める推定全長55m前後の妙経寺古墳、原１号墳の南に存在し、未調査のまま消滅した原２号墳、径25m程の円墳で木棺直葬の内部施設より直刀、鉄鏃、胡籙、小型仿製鏡、鹿角装刀子、鉄斧などの検出した富士見塚古墳。その南側に存在し、円墳３基と伴に存在したという平右衛門作４号墳などの前方後円墳が存在していたらしいが、いずれも未調査のまま消滅している。また椎津川を挟んだ対岸にも全長85m前後と推定される外槨古墳（椎津城築城によって大半は削平か？付近では６Ｃ代に比定できる円筒埴輪片が表採されており、県文化財センターの確認調査時にも埴輪片を検出）や、椎津茶ノ木遺跡内にも径40m強の円墳？と推定される伝石枕出土の椎津稲荷山古墳が



第4図　調査範囲と周囲の遺跡（1/5,000）

存在しているなど、狭義の姉崎古墳群以外にも周囲には大形古墳が存在していることが判明している。

集落跡としては、毛尻・六孫王原、原・東原・宮山・上野合遺跡が調査されている。このうち低地に位置する上野合遺跡は、姉崎二子塚古墳西側100m程の地点に存在し、墳丘を削平された円墳や古墳時代中期和泉式期の竪穴住居跡等が検出されており、姉崎二子塚古墳との関係関連が注目されよう。また上野合以外の遺跡はいずれも姉崎天神山古墳～六孫王原古墳に至る台地上に隣接しており、宮ノ台式期からいわゆる鬼高式古段階までの竪穴住居が住体となす。このうち、毛尻・六孫王原遺跡においては総数117軒の竪穴住居跡と23基の方形周溝墓を検出し、居住空間の北側と墓域空間の南側という明瞭な分布色を示しており、玉・剣等の特殊遺物は、周溝を伴なわない木棺墓系の墳墓から検出されるという極めて特徴的な現象が認められている。この他六孫王原古墳の封土内に五領式土器片が、山王山古墳の封土及び墳丘下からは後期の弥生土器片が検出される例と考え合わせれば、少なくとも周囲一帯が、弥生時代後期～古墳時代前期にかけての拠点的集落跡であったことが垣間見られるのである。また前述した大型古墳のうち、二子塚古墳前方部出土とされる直弧文付石枕、銀製垂飾付耳飾り、舶載蟠虺文鏡や、山王山古墳出土の金銅製天冠、45本以上の矢を納めた胡籙、銀装単竜式環頭大刀などは秀品であるとともに、被葬者の生前の権力を知る上で極めて重要な遺物でもあり、周辺地域における弥生時代～古墳時代にかけての時期においては、１つの文化の中心的存在であったことが窺われる。

以上市原市域における主要遺跡群における古墳時代以降を中心とする概略を述べてきた。これらのことから椎津茶ノ木遺跡が存在する地点は、古墳時代後期の段階には上海上国造との関係関連の中で捉えられるべきであり、姉崎古墳群の終焉とほぼ時を同じくして竪穴住居跡が激減する傾向が認められることなどは、注目に値するであろう。さらに魚貝類・土玉・管状土錘の他にも軽石、穿孔貝巣穴跡泥岩（図示に至っていない）等の遺物が大量に検出されることから、椎津茶ノ木遺跡を、少なくとも古墳時代における漁撈関係を中心とする拠点的集落跡と捉えることは可能であろう。

註１．　ここでは草刈遺跡・草刈六之台遺跡・川焼台遺跡の他、千原台ニュータウン造成工事に伴う広範囲にわたる村田川北岸遺跡群の総称として使用。

註２．　狭義の説明を加えれば、村田川南岸地域における古墳群でも、村田川を挟んで西側に展開する大厩浅間様古墳・新皇塚古墳等を主体とする大厩・菊間地域と、潤井戸杉山古墳・６Ｃ末～７Ｃ初頭に比定され、円筒埴輪列をもつ小谷１号墳等を主体とする東側の潤井戸地域に大型古墳が集中しているのが現状であり、両者は地点を大きく変えて存在してる。なお和泉式期の豪族居館に比定される西山遺跡は、大厩浅間様古墳と潤井戸杉山古墳のちょうど中間点に位置している。

対岸における草刈古墳群中では、草刈１号・３号墳がともに35m前後の円墳であり、他に40m級の前方後円墳として32・33号墳や、椎名崎古墳群中に人形塚古墳などが認められるが、いずれも南岸の大型古墳に比べやや規模が劣っていると言えよう。これらの墳墓とはやや地点を変えて村田川北岸下流域に63mの前方後円墳である大覚寺山古墳、54mの円墳七廻塚古墳、やや規模が劣るが31mの上赤塚１号墳なども存在し、第１図における円内には首長墓クラスに匹敵する大型古墳が少なくとも４グループ存在していることが認められる。村田川南岸の地は、最終的には菊間廃寺や光善寺廃寺を擁する菊麻国造が盟主的存在になりえたとしても、北岸における大覚寺山古墳や七廻塚古墳、上赤塚１号墳の様な少なくとも５Ｃ前半代に比定しうる一群を、存在地点や出土遺物の共通性から、後世千葉国造との関連性の中で捉える見解も存在する一方、南岸における比較的近似した時期の大型古墳の調査例として新皇塚古墳が存在しているのも事実である。これら４グループの関係を考える時、この時期なお継続的首長墓を形成しえない各勢力が、互いに抵抗しあう関係下にあった状況として捉えることも可能であろう。

なお、終末期古墳については、30m級以下の中・小方墳群が千原台地区を中心として多量に検出されているが、大型方墳は南岸地域においても今だ検出されていない。

註３．　神門古墳群に後出する時期の比較的大型古墳としては、底部穿孔土器や素環頭大刀を検出し、現状では30m級の円墳として捉えられる根田６号墳の他、東間部多２号墳や諏訪台11号墳などの前方後方墳が存在するが、いずれも全長40m以下の規模である。

この他B種横ハケ埴輪や変形神獣鏡、直刀、鉄鏃等を検出し、５Ｃ中葉前後に比定される陵塚１号墳が35m、横穴式石室を採用し、時期が下る郡本向原１号墳が33m、周溝範囲のみ調査の諏訪台10号墳が径45m程の円墳として捉えられており、前方後円墳では横穴式石室を採用し、人物埴輪等を検出し、６Ｃ後半代に位置づけられる山倉１号墳が、全長45mで最大という現状である。

終末期古墳については、30m級以下の中・小方墳が多量に検出されているが、大型方墳は存在せず、この時期再び前方後方墳が採用されはじめる。諏訪台Ｋ－15号墳は全長39m前後を測る当期当域最大の前方後方墳で、上海上国造関連の六孫王原古墳との類似性が指摘できる。

註４．狭義の姉崎古墳群は、姉崎二子塚古墳～六孫王原古墳に至る範囲を中心とするものであるが、ここでは今富塚山古墳や外郭古墳を含めた広範囲にわたる地域で捉えている。尚狭義の姉崎古墳群の内容について以下に詳しい。

沼沢　豊　「姉崎古墳群主要古墳一覧」『古墳時代研究Ⅱ』古墳時代研究会1975

甘粕　健　「養老川の古墳の分布と山王山古墳の歴史的性格」『上総山王山古墳』市原市教育委員会1980

今富塚山古墳については、昭和41年の後円部削平時に鈴木仲秋氏によって写真撮影されており、内部施設に木炭を使用していることがほぼ確実である。また墳丘規模や年代観については田中氏の文献がある。

田中新史　「出現期古墳の理解と展望－東国神門五号墳の調査と関連して－」『古代』77　1984

〃　「市原台地の特性（養老川流域の主要古墳の分布と規模）」『「王賜」銘鉄剣概報』吉川弘文館1988（外郭古墳墳丘規模も85mとして捉えている）

この他、上海上・菊麻両国造、及び養老川・村田川流域古墳群については以下のもの等がある。

前之園亮一「関東国造の性格と諸類型」『市原地方史研究』13　1984

〃　「房総の国造と中総首長連合」『千葉県の歴史』28　1984

〃　「上海上と下海上」『市原地方史研究』17　1992

沼沢　豊　「２　千葉」『古墳時代の研究』９　雄山閣出版　1990

第１表関連文献等

1　木對和紀　「椎津茶ノ木遺跡」『平成元年度市原市内遺跡群発掘調査報告』　市原市教育委員会1990

〃　「椎津茶ノ木遺跡」『第６回市原市文化財センター遺跡発表会要旨』㈶市原市文化財センター1991

2　笹生　衛　「椎津城跡」『千葉県中近世城跡研究調査報告書第10集』　千葉県教育委員会1990

3　上総山王山古墳発掘調査団　『上総山王山古墳』　市原市教育委員会1980

4　中村恵次　「千葉県市原市富士見塚古墳」『日本考古学年報16』　日本考古学協会1968

5　木對和紀　「姉崎上野合遺跡」『平成元年度市原市内遺跡群発掘調査報告』　市原市教育委員会1990

6　大村　直　「姉崎宮山遺跡」『不特定遺跡発掘調査報告２』　市原市教育委員会1991

7　大場磐雄他「上総国姉ケ崎二子塚発掘調査概報」『考古学雑誌』37－３　日本考古学会1952

杉山晋作　「あらたに発見された姉ケ崎二子塚の鏡」『史館』第４号　市川ジャーナル社1974

8　千葉県教育庁文化課　「姉崎天神山古墳」『千葉県記念物実態調査報告書Ⅰ』1980

9　高橋康男　「姉崎東原遺跡」『㈶市原市文化財センター調査報告書第37集』株式会社新昭和住宅1990

10　石井則孝他『千葉県市原市姉ケ崎原一号墳発掘調査概報』　千葉県教育委員会1971

11　越川敏夫他『原遺跡』　原遺跡調査会1984

12　山武考古学研究所『毛尻遺跡発掘調査報告書』　市原市毛尻遺跡調査会1983

13　木對和紀　「六孫王原遺跡」『第４回・第７回市原市文化財センター遺跡発表会要旨』1989・1992

14　中村恵次他「前方後方墳の一考察－千葉県市原市六孫王原古墳調査」『古代』第55号1973

〃　「市原市六孫王原古墳の調査」『古墳時代研究Ⅱ』　古墳時代研究会1975

15　丸子　亘　『姉崎台遺跡』　千葉県教育委員会1970
16　杉山晋作他「海保大塚遺跡の測量調査」『関東地方における終末期古墳の研究』　国立歴史民俗博物館考古研究部1990
17　中村恵次他「海保古墳群」『市原市埋蔵文化財調査報告書』4　市原市教育委員会1968

(3)　調査の方法

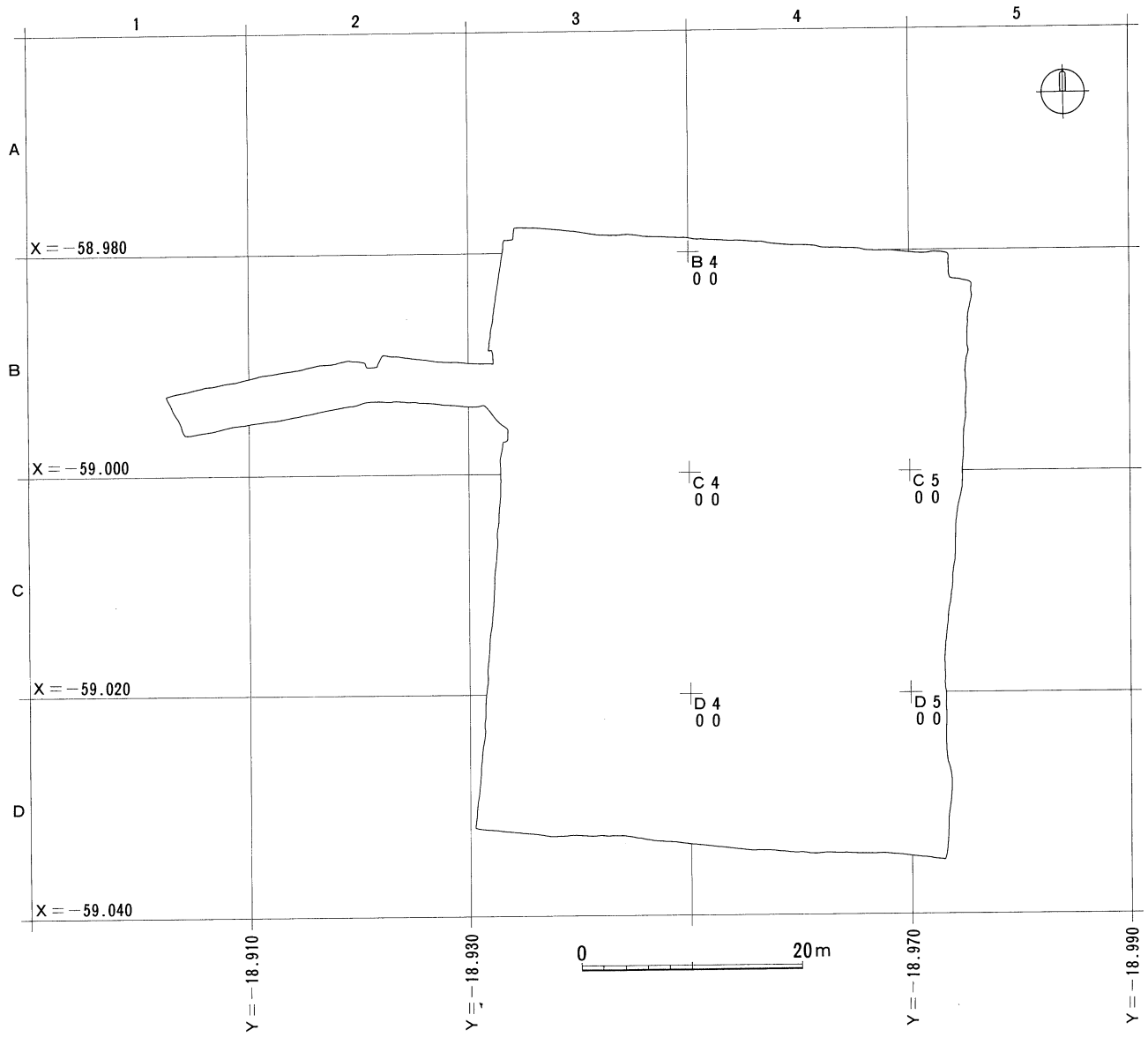
椎津茶ノ木遺跡における調査区域には公共座標を使用し、20×20mの大グリッドを設定した。各大グリッドは北から南にA・B・C・D、西から東に向かって1・2・3・4のNo.を付した。大グリッドの下には、2×2mの小グリッドを設定し、それぞれ00～99までのNo.を与した。

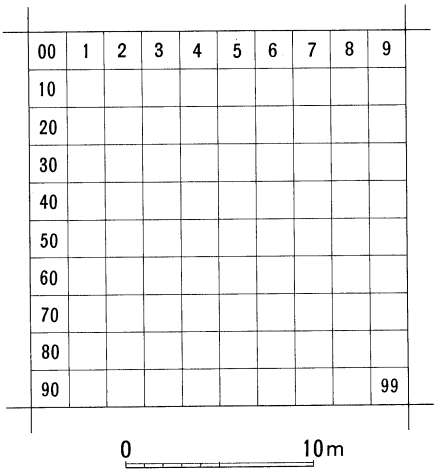
確認調査の段階で、遺構密度は極めて高いと判断していたが、調査範囲内の表土を全面除去してみたところ、墳丘を削平された方墳と推定される111号遺構周溝内面及び68号溝の西側の一部を除けば、ほぼ遺構覆土と考えられる有機質土を主体としており、明瞭な平面プランを有する単独の遺構は皆無に等しいものであった。

調査は両断面の観察できる西端部から始め、調査区域内を時計廻りの方向に進んだ。この間、時によっては土層観察用ベルトを残しながら調査を進めたが、遺構重複の激しい所では、遺構プランや新旧関係の把握は、床面の切り合い関係や検出遺物等を主体として決定した。したがってカマドが残存する住居跡は、カマドを中心として、その床面と確定できる範囲を捉え、柱穴を検出し、壁あるいは周溝を検出するという調査方法を採用している。

また遺物取り上げに関しては、一まず土柱状にして残し、範囲が確定した遺構に直接伴わないと判断できるものはすみやかに取り上げ、床面上、あるいはカマド周辺に残る遺存状況の比較的良好なものについて、全点ドット法を採用してしている。また範囲が確定できず、数軒の重複の可能性が考えられる遺構については、前述小グリッド内検出遺物を全点ドット法を採用して取り上げた。また各遺構の一括遺物については、随時指示を与え、最終取り上げ段階にもう一度チェックしなおしている。

尚、各住居跡間における最終残存遺構の貼床部以下の調査は、十分な調査が出来なかったことを申し加えておく。





第5図　椎津茶ノ木遺跡グリッド配置図

第6図　椎津茶ノ木遺跡遺構配置図

第2表　椎津茶ノ木遺跡新旧遺構番号一覧表

新	旧	性格	新	旧	性格	新	旧	性格
1	2	住居跡	65	44B	住居跡	128	117	住居跡
2	1	住居跡	66	30	溝	129	109	住居跡
3	3	住居跡	67	26	溝	130	74	住居跡
4	4	住居跡	68	45B	溝	131	103	住居跡
5	5	住居跡	69	25A	溝	132	97	住居跡
6	6	住居跡	70	41	住居跡	133	105	貝ブロック
7	7	住居跡	71	49	住居跡	134	104	貝ブロック
8	8	住居跡	72	45C	住居跡	135	98	溝
9	10	住居跡	73	45D	住居跡	136	95	住居跡
10	9	住居跡	74	45E	住居跡	137	94	住居跡
11	11	住居跡	75	45F	住居跡	138A	118	住居跡
12	2	住居跡	76	80	掘立柱	138B	118	住居跡
13	13	住居跡	77	126A	住居跡	139	116	住居跡
14	162	住居跡	78	89	住居跡	140	96	住居跡
15	163C	住居跡	79	88	住居跡	141	106	住居跡
16	163A	住居跡	80	137	住居跡	142	141A	住居跡
17	164	住居跡	81	75	住居跡	143	140	住居跡
18	168B	住居跡	82	126B	住居跡	144	102	住居跡
19	163B	住居跡	83	119	住居跡	145	99	住居跡
20	160A	住居跡	84	60	住居跡	146	125	住居跡
21	160B	住居跡	85	121	住居跡	147	107	住居跡
22	160C	住居跡	86	120	住居跡	148	134	住居跡
23	160D	住居跡	87	56	住居跡	149	111	住居跡
24	161	住居跡	88	55	住居跡	150	159	住居跡
25	146	住居跡	89	85	住居跡	151	127B	住居跡
26	150	住居跡	90A	42A	住居跡	152	113	住居跡
27	149	住居跡	90B	42B	住居跡	153	127	住居跡
28	144	住居跡	91	76A/B	住居跡	154	131	住居跡
29	145	住居跡	92	91A	住居跡	155	110	住居跡
30	147	住居跡	93	91B	住居跡	156	141B	住居跡
31	153	方形周溝墓	94	101A	住居跡	157	115	住居跡
32	154	住居跡	95	101B	住居跡	158	139	住居跡
33	14	住居跡	96	101C	住居跡	159	132	住居跡
34	16	住居跡	97	ナシ	柵列	160	133	住居跡
35	18	住居跡	98	65	住居跡	161	158	住居跡
36	15	住居跡	99	70	住居跡	162	100	住居跡
37	17	住居跡	100	77	住居跡	163	123	住居跡
38	19	住居跡	101	90	住居跡	164	114	住居跡
39	20	住居跡	102	72B	溝	165A	143A	住居跡
40	167	掘立柱	103	86	住居跡	165B	143B	住居跡
41	46	掘立柱	104	79	住居跡	166	135	住居跡
42	ナシ	土坑	105	72	住居跡	167A	136A	住居跡
43	27	住居跡	106	71	住居跡	168B	136C	住居跡
44	28	住居跡	107	64A	住居跡	169	142	住居跡
45	35	住居跡	108	64B	住居跡	170	138	住居跡
46	52	住居跡	109	62	住居跡	171	151	住居跡
47	29	住居跡	110	61	住居跡	172	148	住居跡
48	57	住居跡	111	51	方墳	173	168A	溝
49	53	住居跡	112	74KB	貝ブロック	174	156	円墳？
50	31	住居跡	113	73	住居跡	175	156KB2	貝ブロック
51	48	住居跡	114	87	住居跡	176	156KB1	貝ブロック
52	40	住居跡	115	68	住居跡	177	156KB3	貝ブロック
53	43	住居跡	116	67	住居跡	178	156KB4	貝ブロック
54	47	掘立柱	117	92	住居跡	179	156KB5	貝ブロック
55	58	住居跡	118	78	住居跡	180	156KB6	貝ブロック
56	38	住居跡	119	69	住居跡	181	25B	土坑
57	44A	住居跡	120	66	住居跡	182	166	土坑
58	37	住居跡	121	82	住居跡	183	124	土坑
59	36	住居跡	122	122	住居跡	184	31B	土坑
60	50	住居跡	123	63	住居跡	185	70B	土坑
61	39	住居跡	124	84	住居跡	186	128	土坑
62	45A	方形周溝墓	125	81	貝ブロック	187	152	土坑
63	32	住居跡	126	112	住居跡	188	54	土坑
64	44B	住居跡	127	108	住居跡			

II　遺構と遺物

(1)　遺跡の概要

椎津茶ノ木遺跡における今回の調査の結果、わずか2,600㎡ほどの調査範囲内より、幾重にも重複する極めて多量の各種遺構が検出された。このうち最も多く検出されたのが157軒の検出をみた竪穴住居跡であり（建替を含めると193軒。ただし144号遺構は検討結果、建替ではなく柱抜き取り痕跡として捉えている。）この他に古墳２基（１基は径40m以上の円墳か前方後円墳の後円部と推定される椎津稲荷山古墳）、方形周溝墓２基、掘立柱建物跡４棟、柵列１基、溝６条、土坑９基、貝ブロック10ヶ所、Pit 50基以上が検出されており、建替住居を含めると総数280基程の遺構が検出されている。

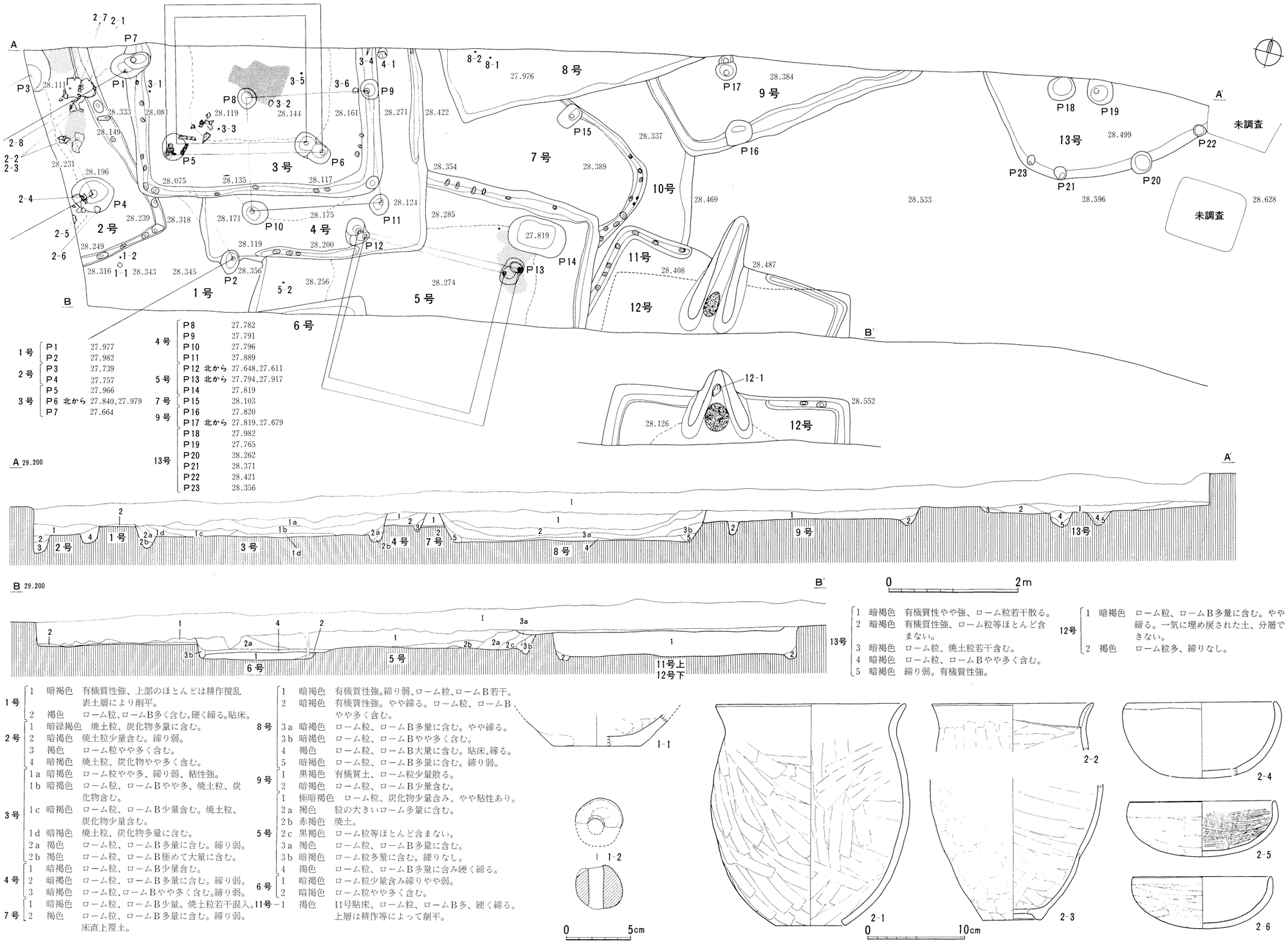
これらの遺構は、他の遺構と切り合い関係を持たない単独Pit18基以外は、何らかの形で重複しており、四辺とも明瞭に検出されている竪穴住居跡の検出などは皆無に等しい状況であった。特に時期の遡る縄文・弥生時代は言うに及ばず、いわゆる鬼高式と呼ばれる古墳時代後期の段階間での重複関係も多く、比較的遺構数が希有になる奈良・平安時代に至ってもなお前段階の遺構の重複関係の上に存在し、遺構間における破壊は著しい。

この様な状況下の中で、比較的遺構密度の低い東側の範囲は、本来の地形が東から西側に向かって緩やかに傾斜していたのだろう。墳丘を削平された方墳111号遺構から柱穴のみしか検出されなかった竪穴住居跡である55号遺構に至る間は、現状においてほぼ平坦であるのに対し、現表土を除去しただけでハードローム層が露呈するといった状況であった。また105号遺構床面以下数mに達する攪乱穴からは、木製の電信柱等が検出されるなど、現代においても相当の削平が行われていたことを、遺跡内のいたる所から検出された攪乱が物語っている。

このため、時期や明瞭なプランを把握しきれなかった遺構も多く、また、住居跡貼床以下の十分な調査に至ることができなかったことから、本来ならばさらに多数の遺構が存在したであろうと推測することはむずかしくない。

遺跡の立地する舌状台地の平坦面は南北に約500mを測る。面積にして約30,000㎡程であろうか。この間未調査のまま小規模な宅地開発によってすでに消滅してしまった遺構も多数存在するとしてもなを、わずかに残された畑地には、相当量の遺物が散乱している。かかる近辺状況を踏まえると、椎津川対岸における遺跡群中と対比してもなお当地域における１・２を争う密集度を誇る、弥生～古墳時代にかけての拠点的集落跡と断言しても過言ではないであろう。

また、満載状態における整理箱にして約800箱程に及ぶ出土遺物について言及すると、宮ノ台式期終末に比定できる大型竪穴住居跡123号遺構から検出された総数６点の琥珀玉や、和泉式終末に比定できる竪穴住居跡145号遺構から検出された壺形土器内より、約２合分ほどの炭化米が検出されたことなどが特筆される。特に123号遺構検出２点の琥珀勾玉例は、銚子市佐野原遺跡８号住居跡出土の２点例と合わせても、弥生時代中期に限定すれば全国的にみても２例４点の存在でしかなく、極めて数少ない検出例の一つと言えるであろう。

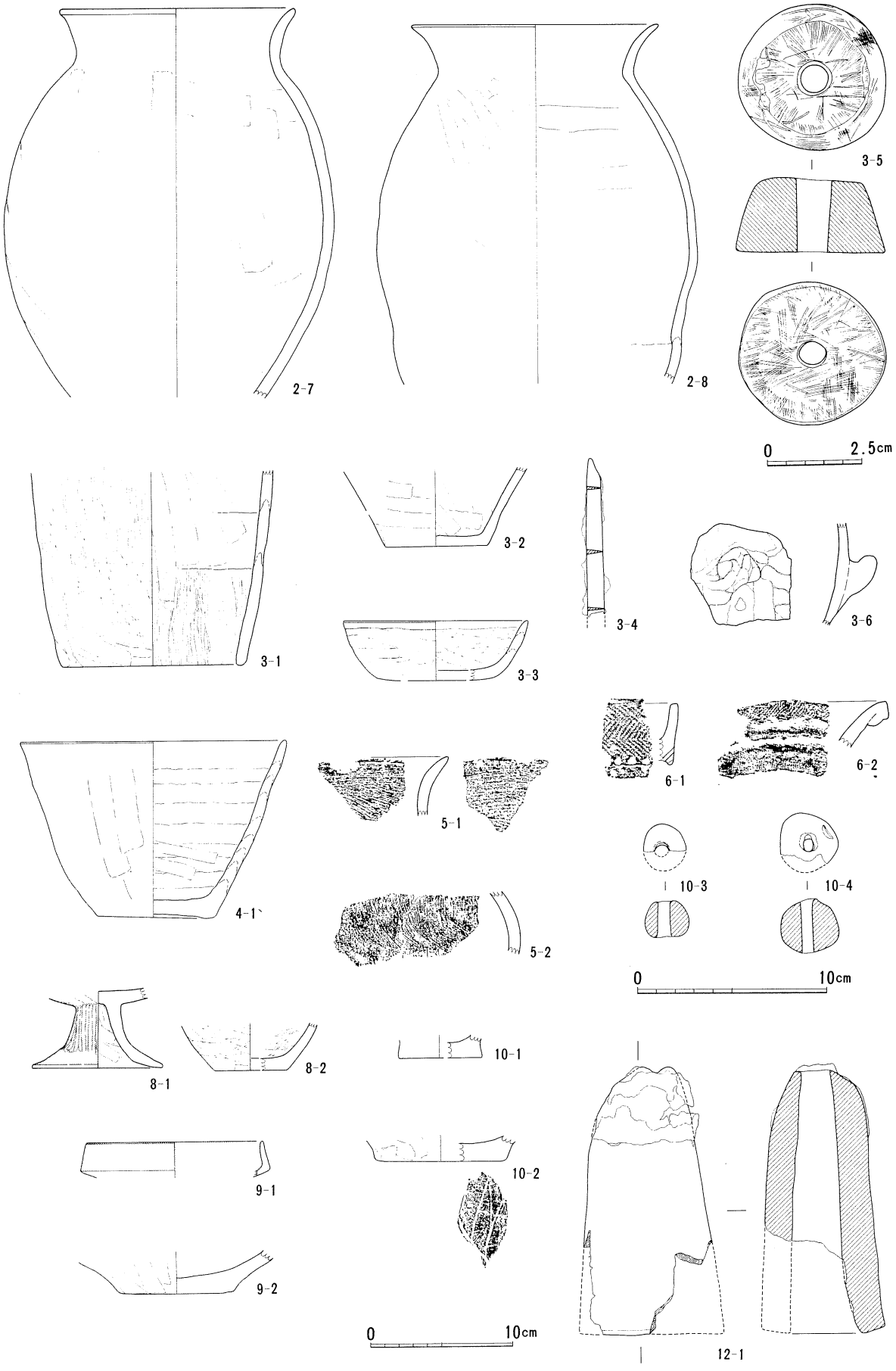


1号	P1	27.977
	P2	27.982
2号	P3	27.739
	P4	27.757
3号	P5	27.966
	P6 北から	27.840、27.979
	P7	27.664
4号	P8	27.782
	P9	27.791
	P10	27.796
	P11	27.889
5号	P12 北から	27.648、27.611
	P13 北から	27.794、27.917
	P14	27.819
7号	P15	28.103
9号	P16	27.820
	P17 北から	27.819、27.679
13号	P18	27.982
	P19	27.765
	P20	28.262
	P21	28.371
	P22	28.421
	P23	28.356

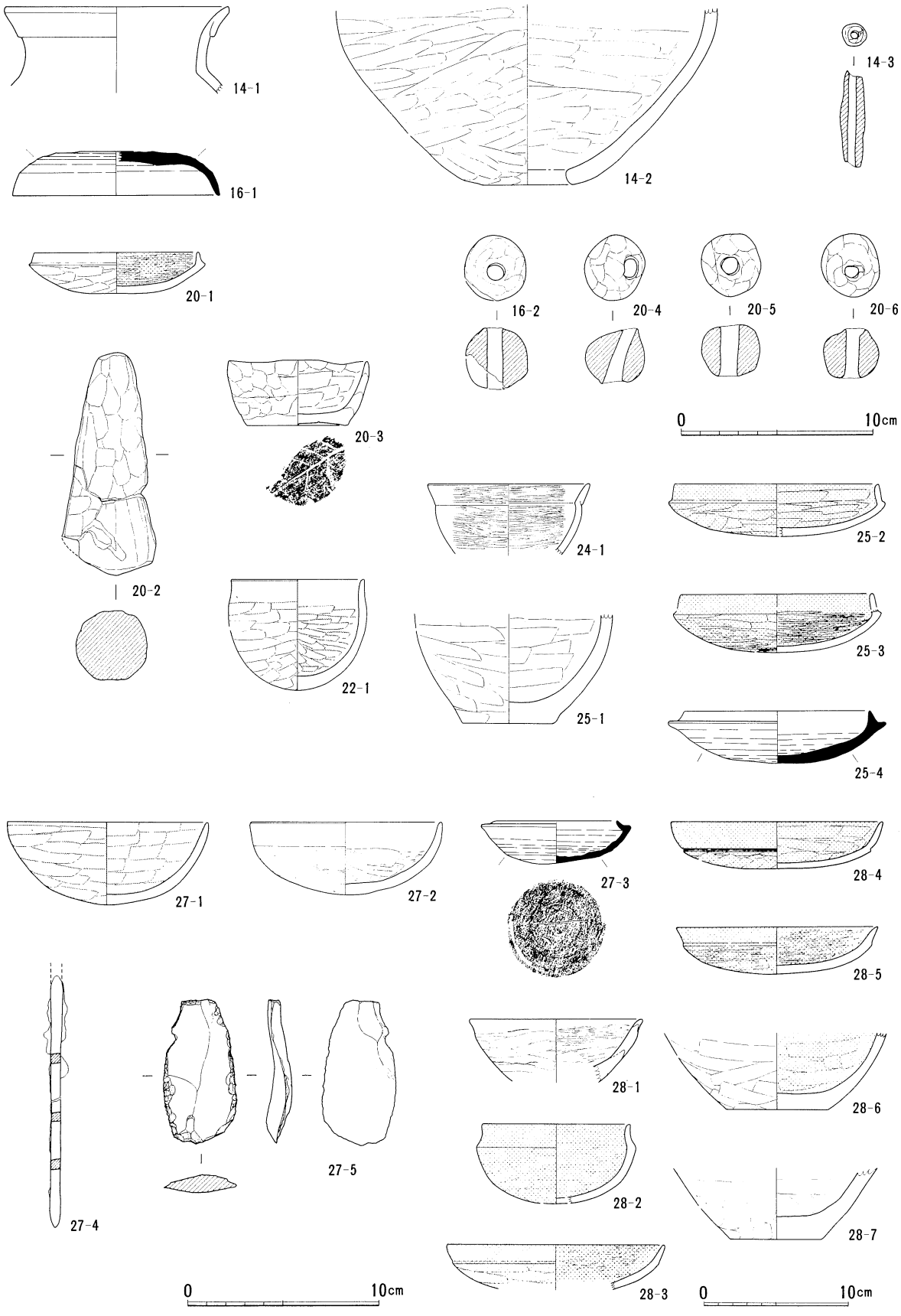
1号	1	暗褐色　有機質性強、上部のほとんどは耕作撹乱表土層により削平。
	2	褐色　ローム粒、ロームB多く含む。硬く締る。貼床。
2号	1	暗緑褐色　焼土粒、炭化物多量に含む。
	2	暗褐色　焼土粒少量含む。締り弱。
	3	褐色　ローム粒やや多く含む。
	4	暗褐色　焼土粒、炭化物やや多く含む。
3号	1a	暗褐色　ローム粒やや多、締り弱、粘性強。
	1b	暗褐色　ローム粒、ロームBやや多、焼土粒、炭化物含む。
	1c	暗褐色　ローム粒、ロームB少量含む。焼土粒、炭化物少量含む。
	1d	暗褐色　焼土粒、炭化物多量に含む。
	2a	褐色　ローム粒、ロームB多量に含む。締り弱。
	2b	褐色　ローム粒、ロームB極めて大量に含む。
4号	1	暗褐色　ローム粒、ロームB少量含む。
	2	暗褐色　ローム粒、ロームB多量に含む。締り弱。
	3	暗褐色　ローム粒、ロームBやや多く含む。締り弱。
7号	1	暗褐色　ローム粒、ロームB少量。焼土粒若干混入。
	2	褐色　ローム粒、ロームB多量に含む。締り弱。床直上覆土。
8号	1	暗褐色　有機質性強。締り弱、ローム粒、ロームB若干。
	2	暗褐色　有機質性強。やや締る。ローム粒、ロームBやや多く含む。
	3a	暗褐色　ローム粒、ロームB多量に含む。やや締る。
	3b	暗褐色　ローム粒、ロームBやや多く含む。
	4	褐色　ローム粒、ロームB大量に含む。貼床、締る。
	5	暗褐色　ローム粒、ロームB多量に含む。締り弱。
9号	1	黒褐色　有機質土、ローム粒少量散る。
	2	暗褐色　ローム粒、ロームB少量含む。
5号	1	極暗褐色　ローム粒、炭化物少量含み、やや粘性あり。
	2a	褐色　粒の大きいローム多量に含む。
	2b	赤褐色　焼土。
	2c	黒褐色　ローム粒等ほとんど含まない。
	3a	褐色　ローム粒、ロームB多量に含む。
	3b	暗褐色　ローム粒多量に含む。締りなし。
	4	褐色　ローム粒、ロームB多量に含み硬く締る。
6号	1	暗褐色　ローム粒少量含み締りやや弱。
	2	暗褐色　ローム粒やや多く含む。
11号－1		褐色　11号貼床、ローム粒、ロームB多、硬く締る。上層は耕作等によって削平。

13号	1	暗褐色　有機質性やや強、ローム粒若干散る。
	2	暗褐色　有機質性強、ローム粒等ほとんど含まない。
	3	暗褐色　ローム粒、焼土粒若干含む。
	4	暗褐色　ローム粒、ロームBやや多く含む。
	5	暗褐色　締り弱。有機質性強。
12号	1	暗褐色　ローム粒、ロームB多量に含む。やや締る。一気に埋め戻された土、分層できない。
	2	褐色　ローム粒多、締りなし。

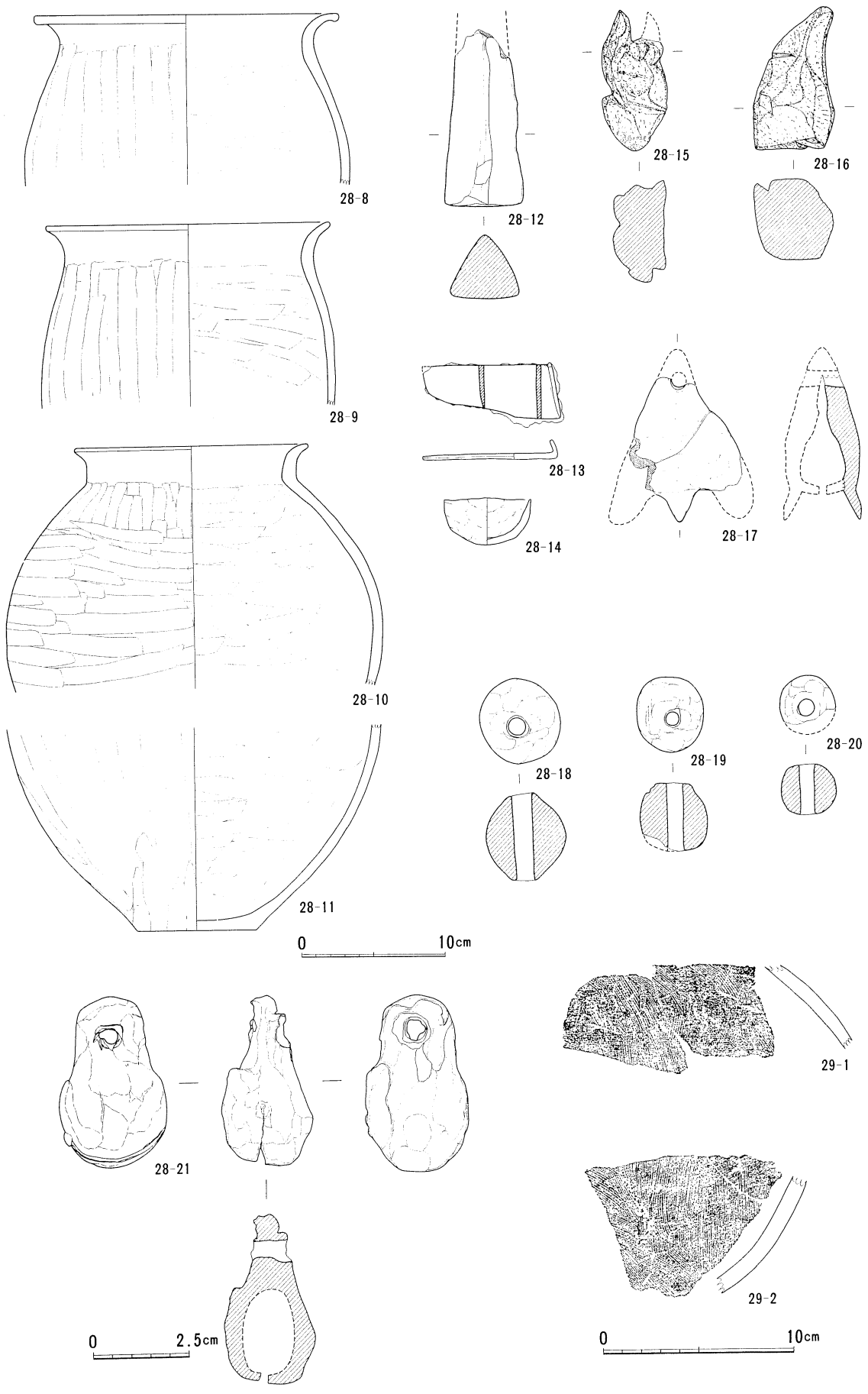
第７図　１～13号遺構実測図、１・２号遺構出土遺物実測図



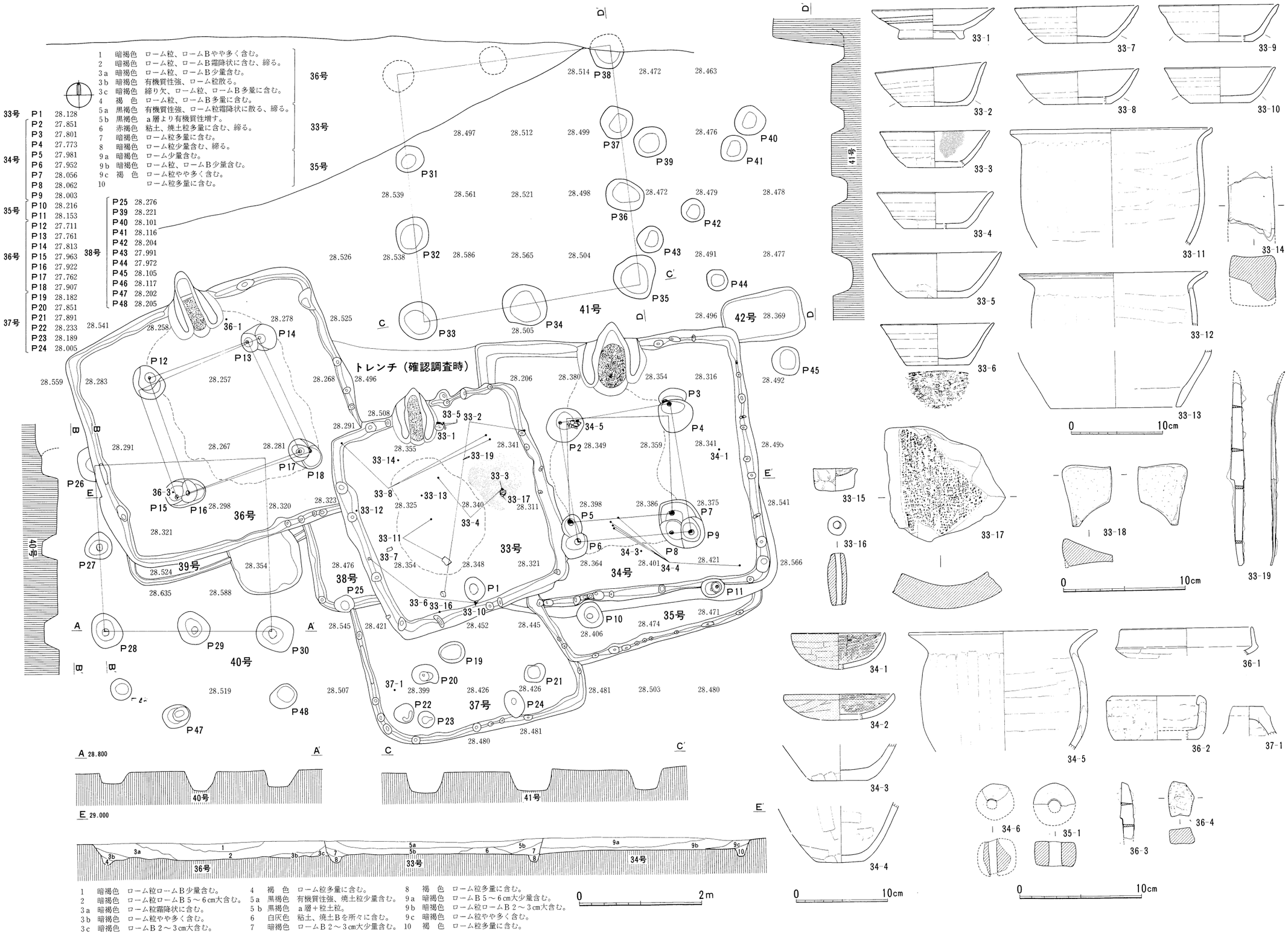
第９図　２～13号遺構出土遺物実測図



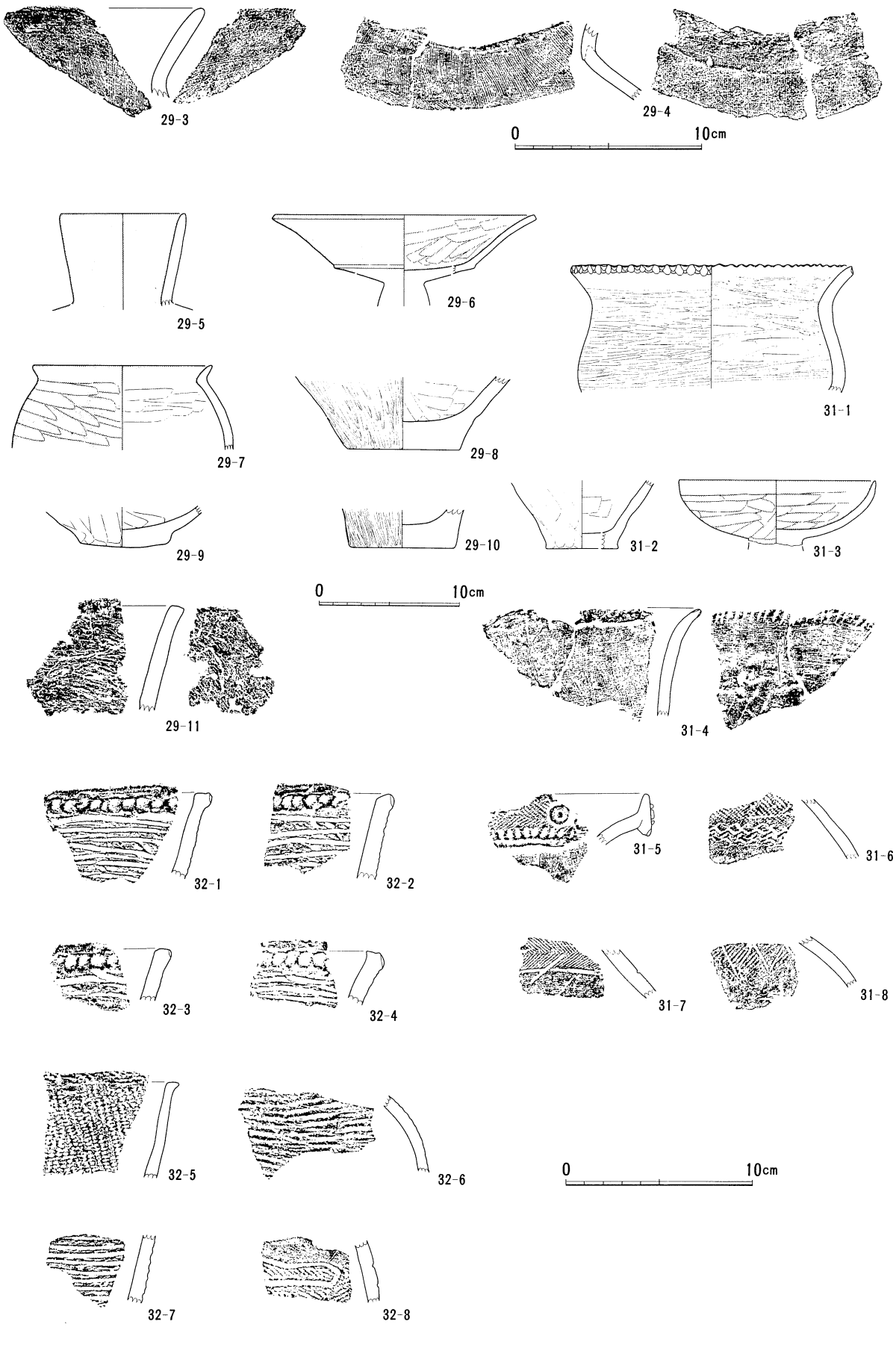
第10図　14・16・20・22・24・25・27・28号遺構出土遺物実測図



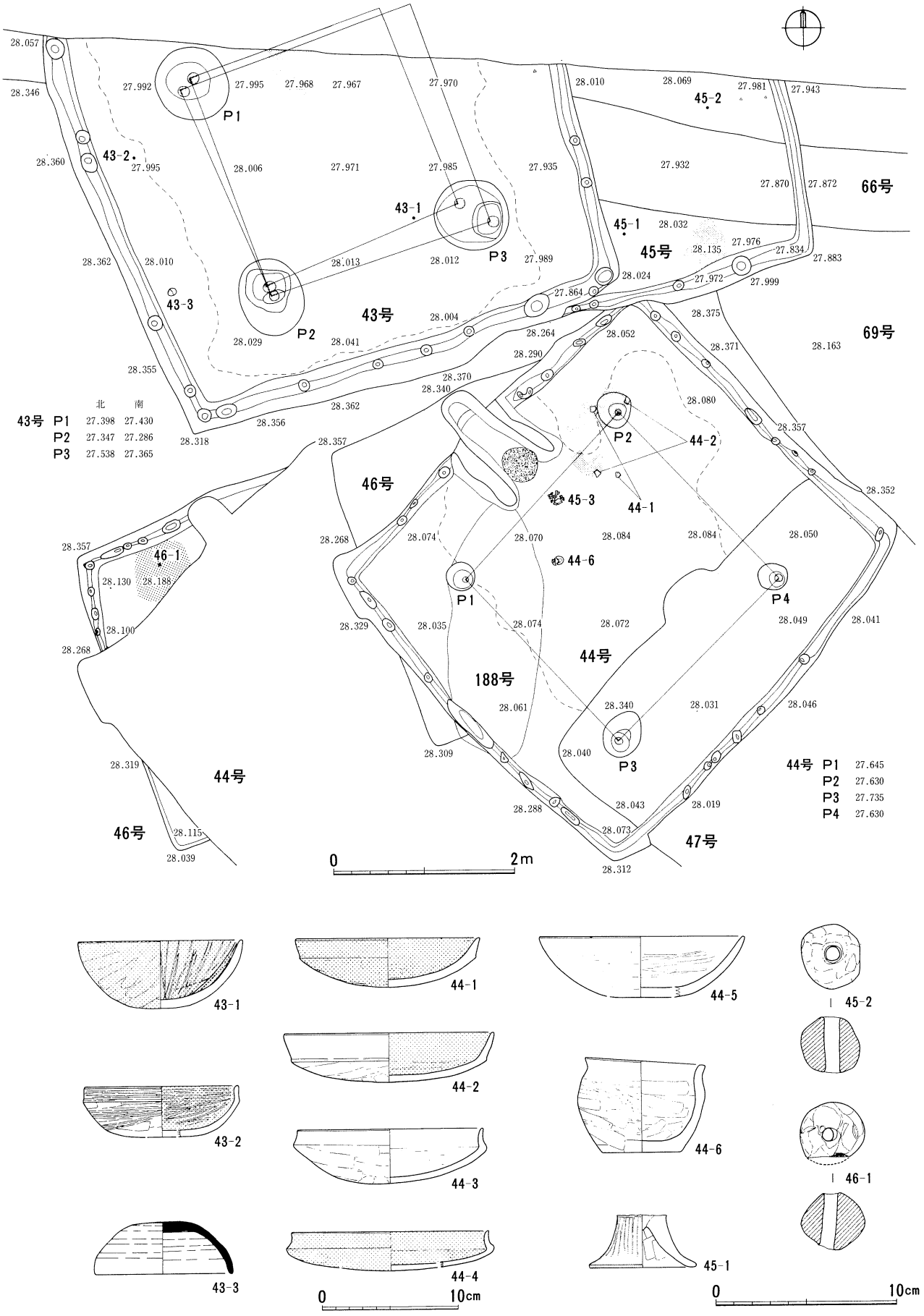
第11図　28・29号遺構出土遺物実測図



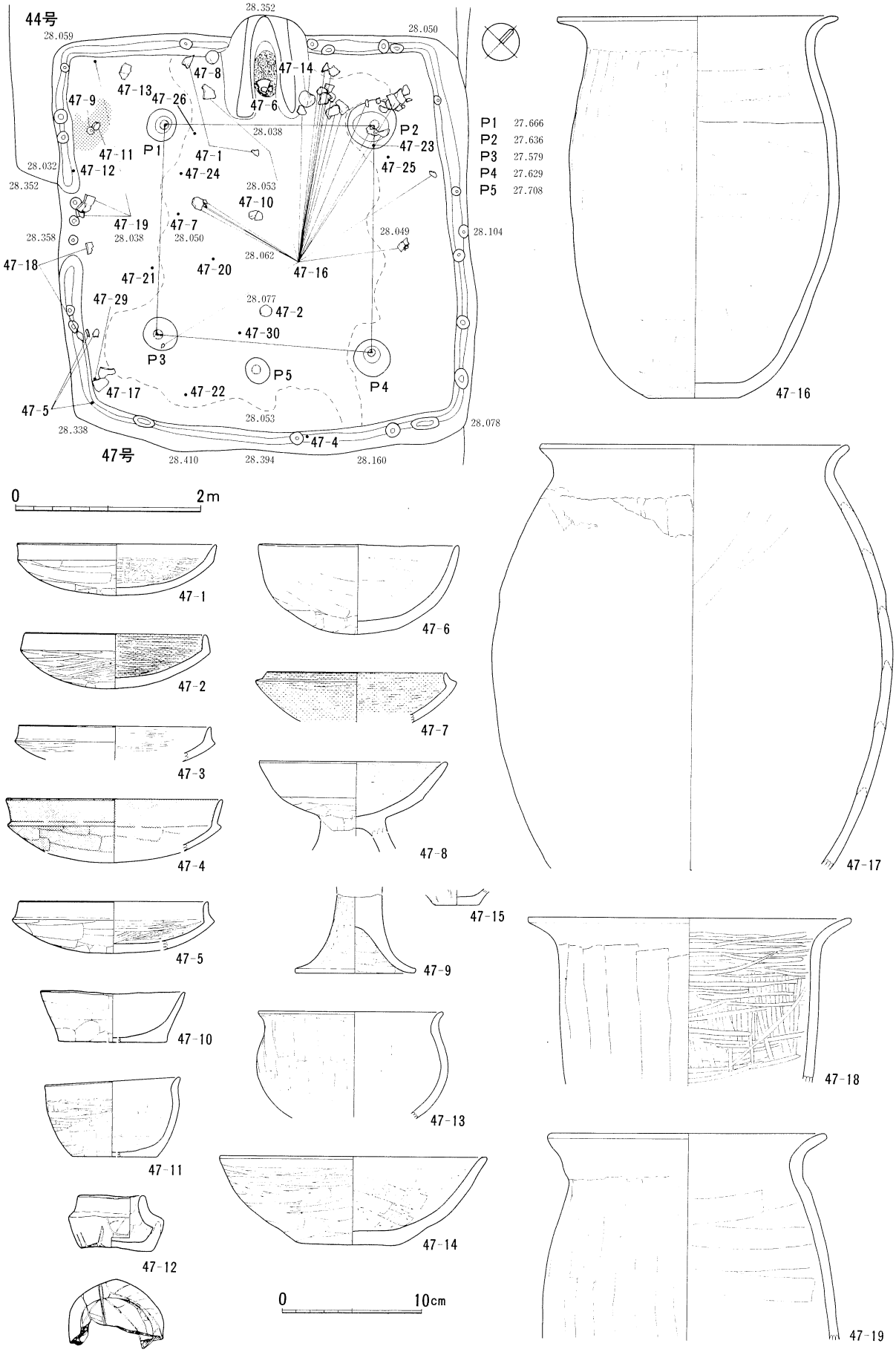
第13図　33号～42号遺構実測図、33号～36号遺構出土遺物実測図



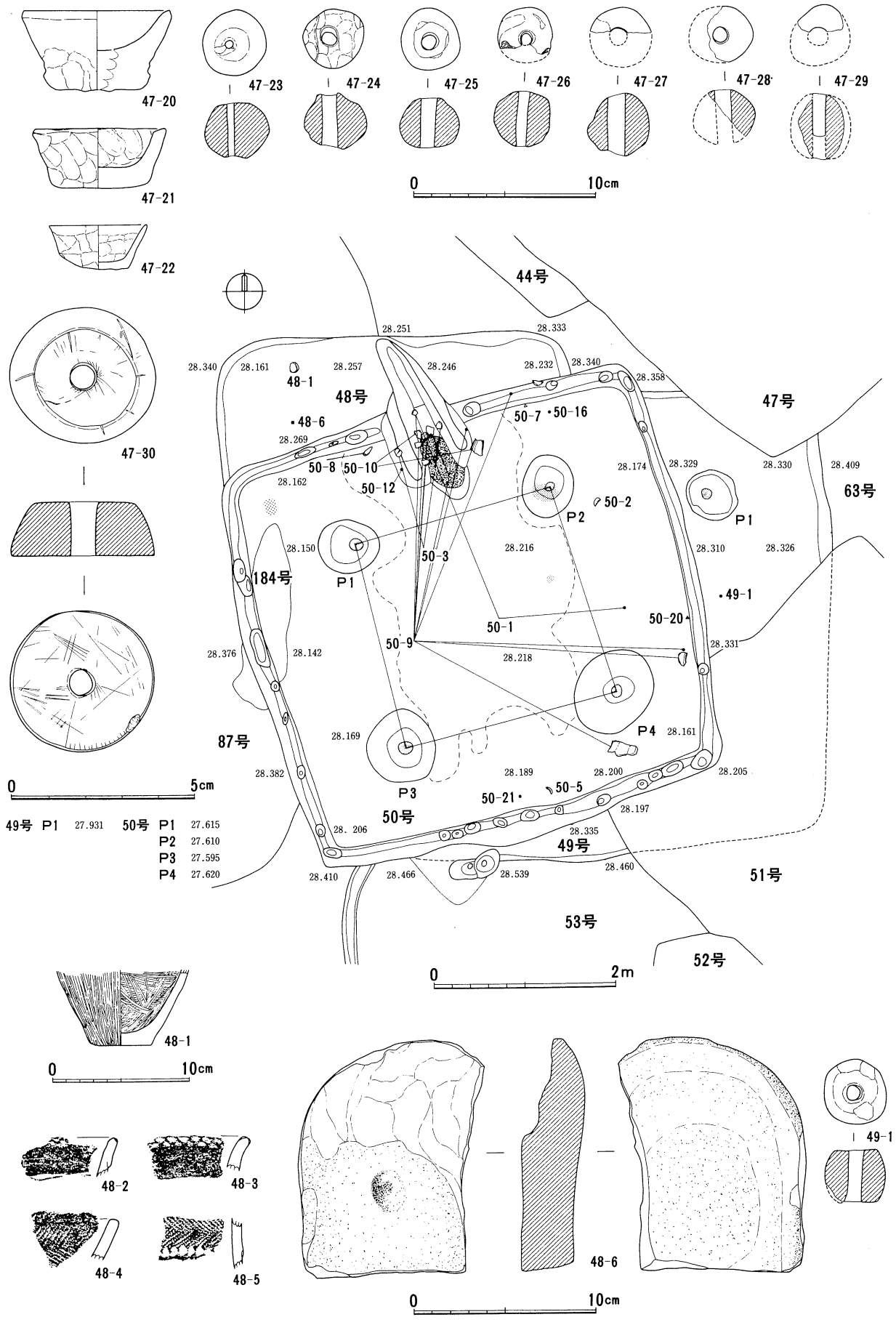
第12図　29・31・32号遺構出土遺物実測図



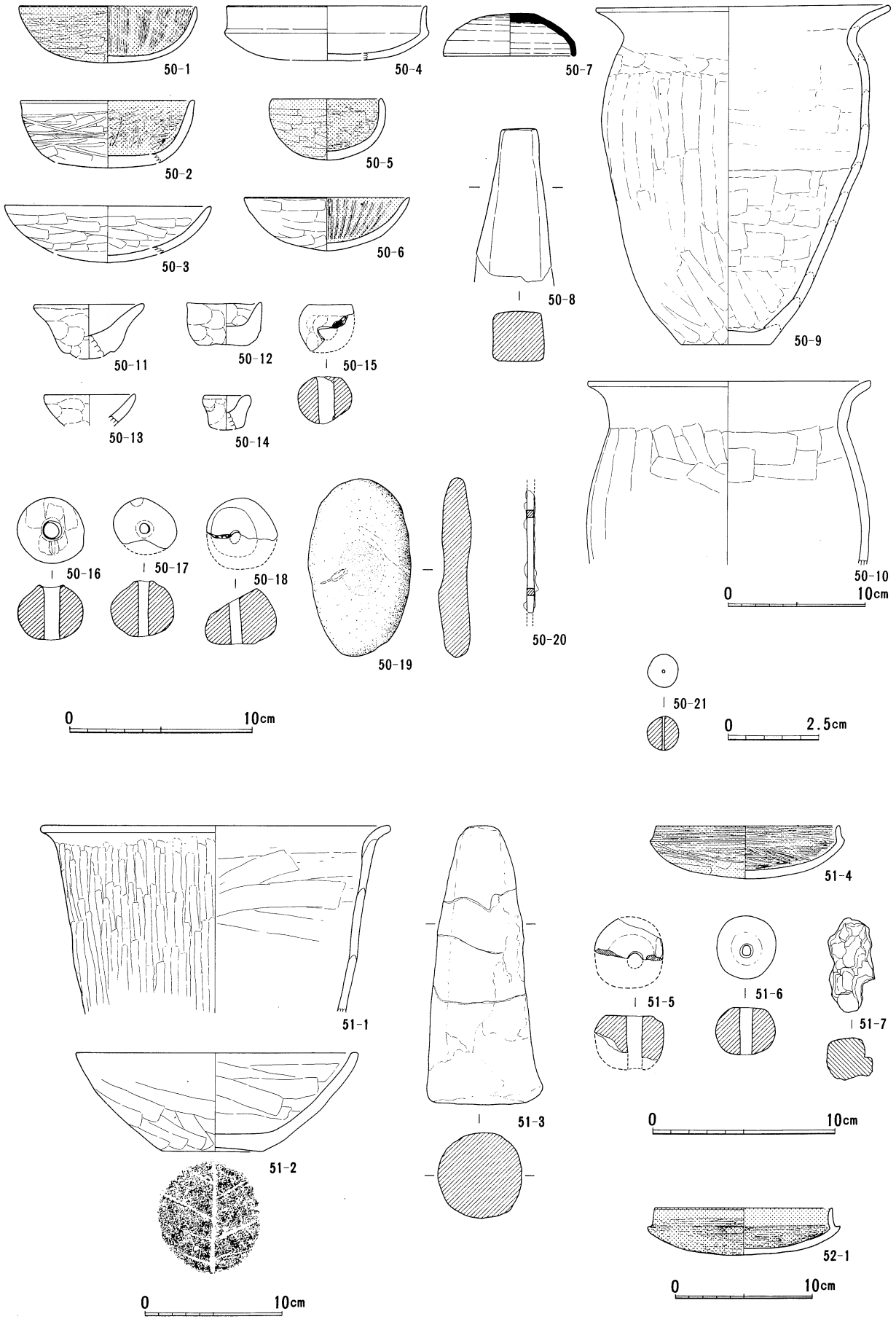
第14図　43～46号遺構実測図、出土遺物実測図



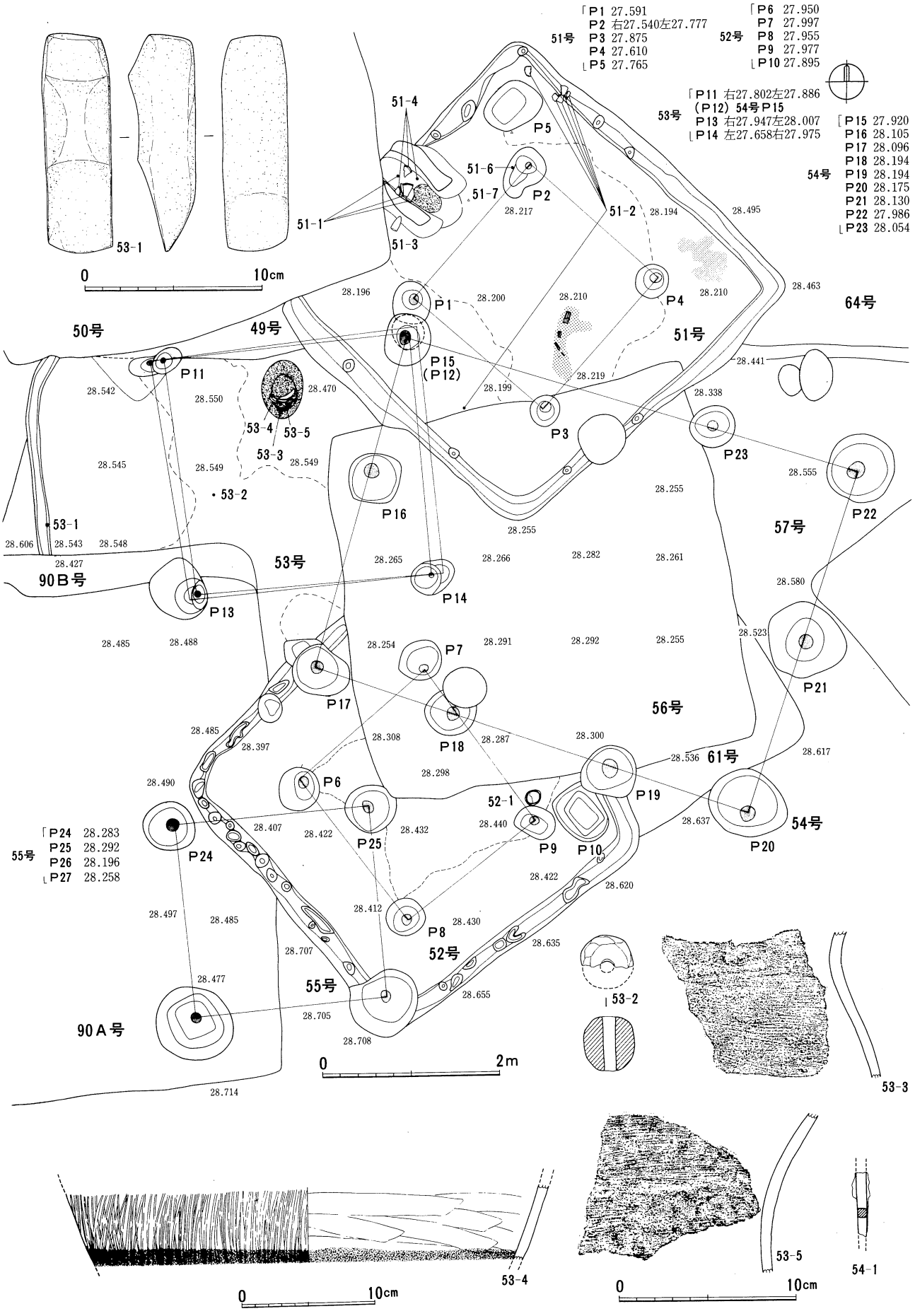
第15図　47号遺構実測図、出土遺物実測図



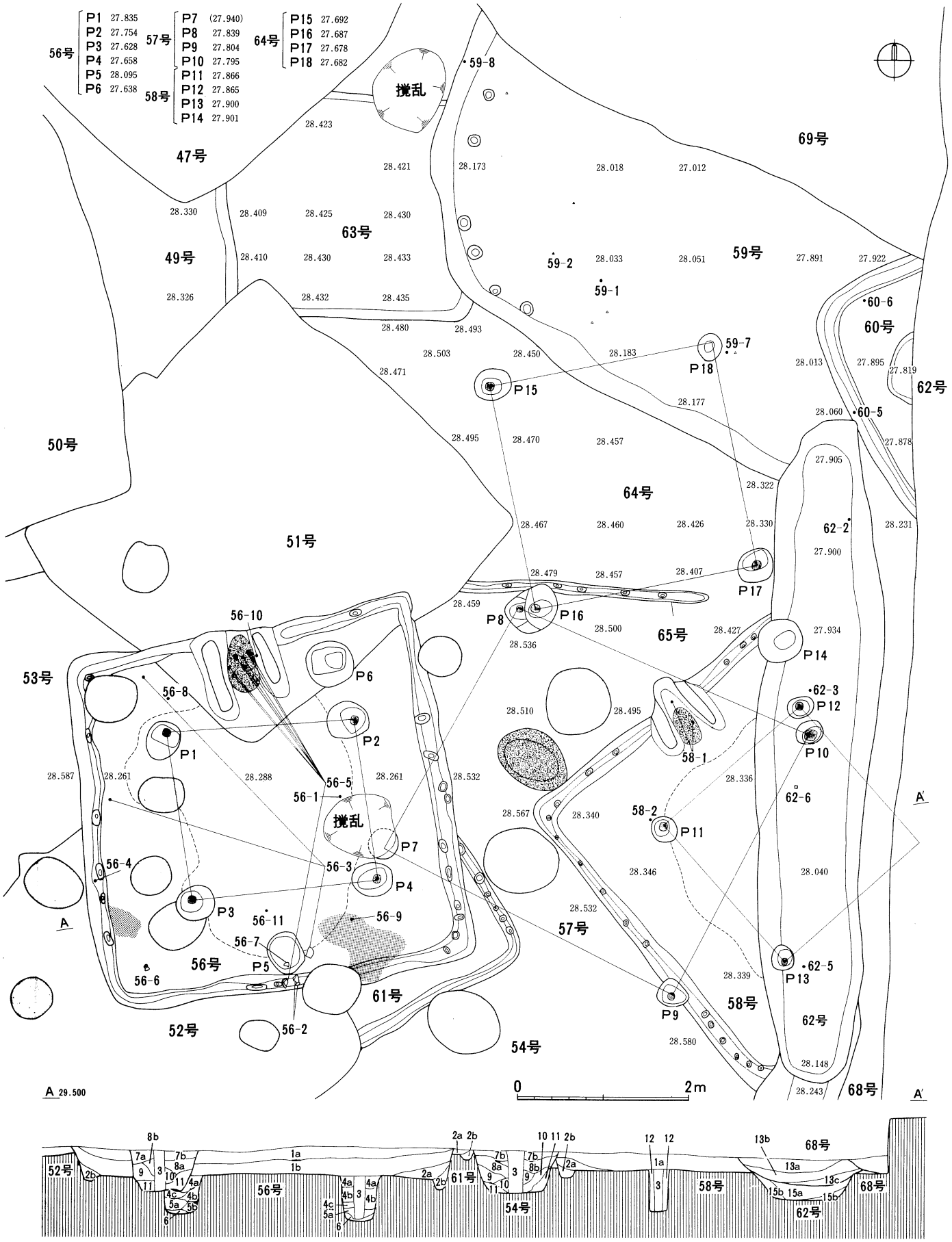
第16図　48～50号遺構実測図、47～49号遺構出土遺物実測図



第17図　50～52号遺構出土遺物実測図

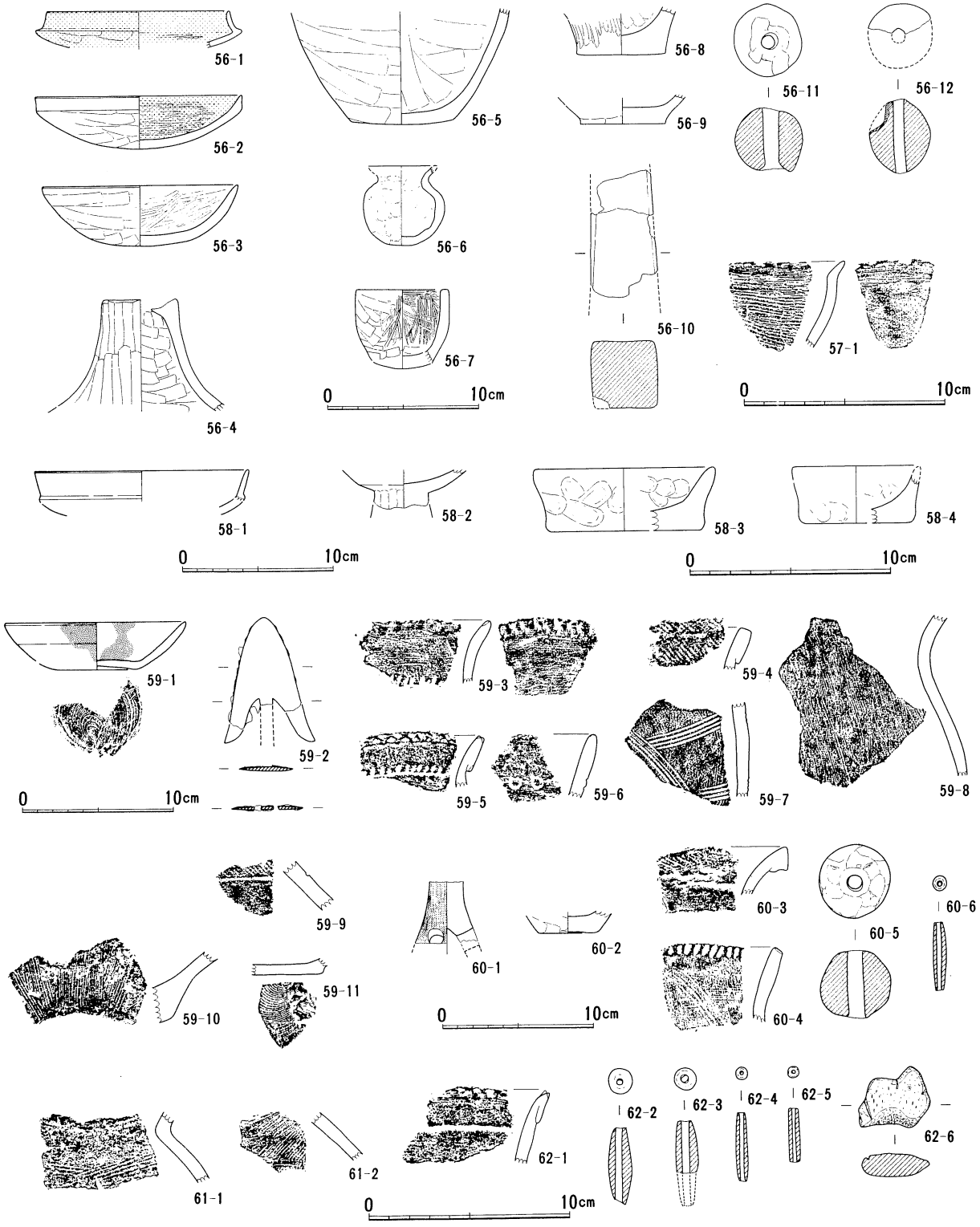


第18図　51～55号遺構実測図、53号遺構出土遺物実測図

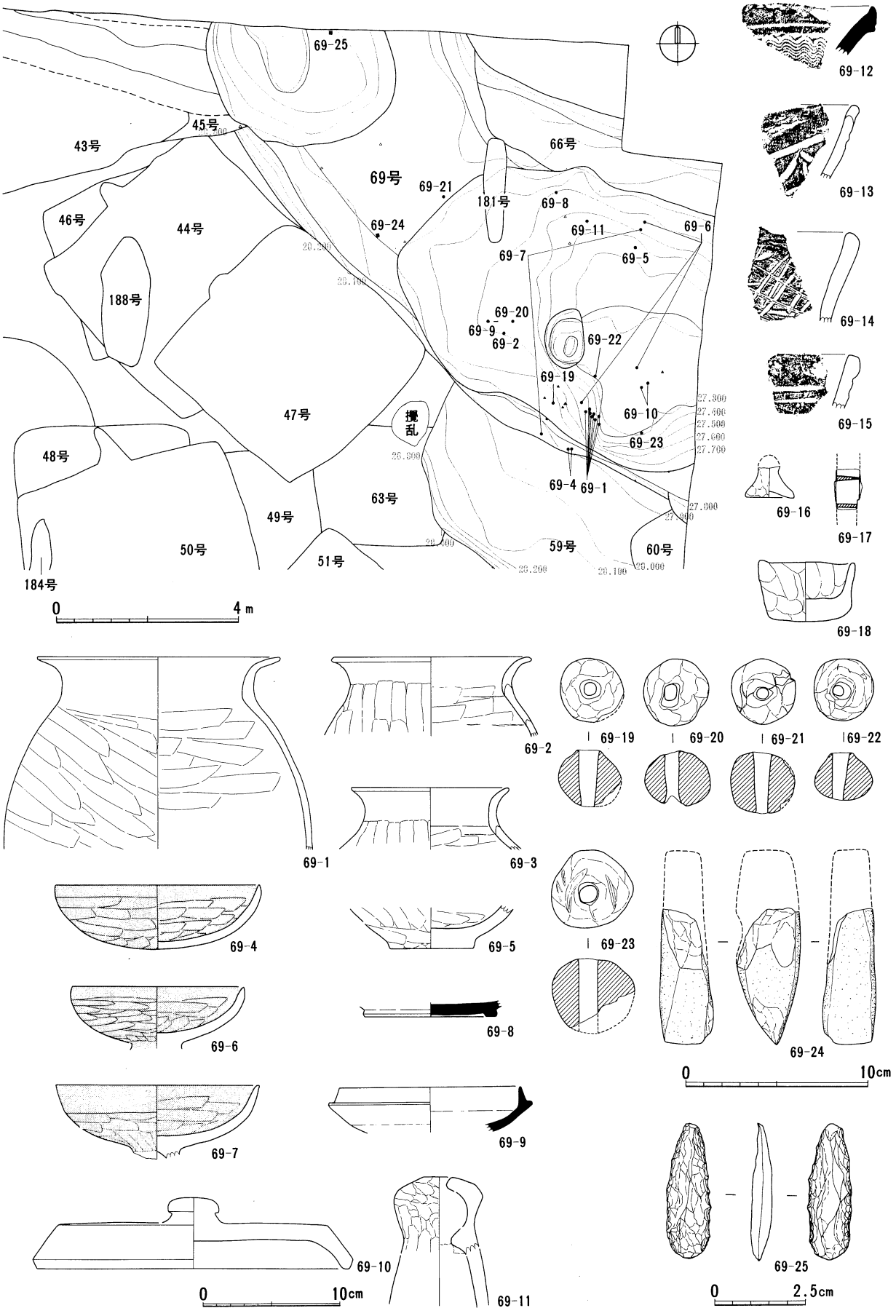


第19図　56～64号遺構実測図、56・61・54・58・62・68号遺構土層断面図

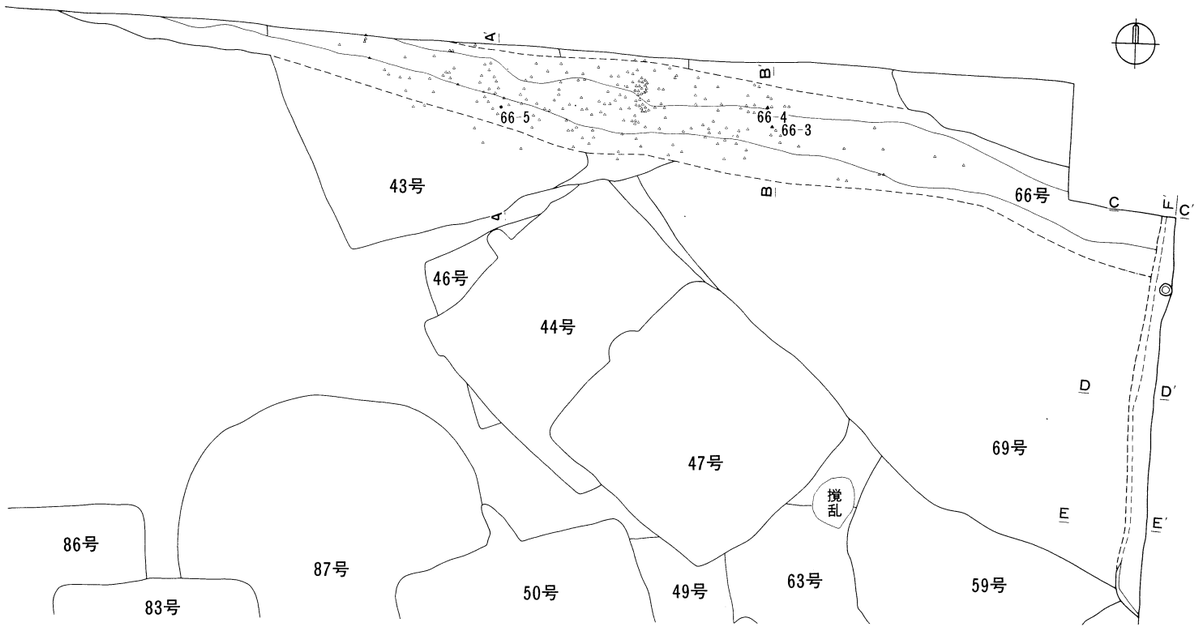
1 a　黒褐色　有機質土中にローム粒、焼土粒、霜降状に含む。
1 b　黒褐色　有機質土中にローム粒、焼土粒、炭化物やや多く含む。
2 a　暗褐色　ローム粒、ロームＢやや多く含む。
2 b　暗褐色　ローム粒、ロームＢやや多量に含む。
3　暗褐色　ローム粒少量含む。締りなし。
4 a　暗褐色　ローム粒少量。若干の焼土粒含む。
4 b　暗褐色　a層より締る。
4 c　暗褐色　ロームＢ多量に含む。締る。
5 a　褐色　ローム粒、ロームＢ主体。締る。
5 b　褐色　ロームＢ主体。締る。
6　暗褐色　ローム粒、ロームＢ少量含む。締る。
7 a　暗褐色　ローム粒まばらに含む。締り弱。有機質性強。
7 b　暗褐色　やや有機質性強。ローム粒若干含む。
8 a　褐色　ローム粒、ロームＢ主体締る。
8 b　褐色　ローム粒主体。締る。
9　暗褐色　有機質土中に粒の大きいロームＢ多量に含む。
10　暗褐色　ローム粒、霜降状に含み締る。
11　暗褐色　粒の大きいロームＢ主体。
12　暗褐色　ローム粒多量に含む。ロームＢ少量。
13 a　茶褐色　粒の粗い茶褐色土主体。締る。
13 b　暗茶褐色　粒粗、やや締り弱い。
13 c　暗茶褐色　粒粗、締る。底面は床面状に硬化している。
14　茶褐色　粒粗、非常に硬く締る。
15 a　黒褐色　有機質性強。ローム粒霜降状に含む。硬く締る。
15 b　暗褐色　有機質土中にローム粒、ロームＢ混入。締る。

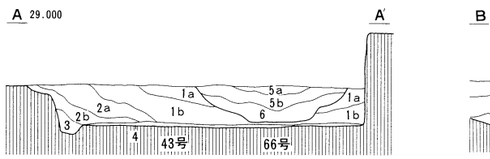


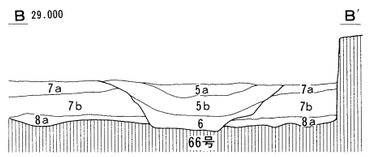
第20図　56～62号遺構出土遺物実測図

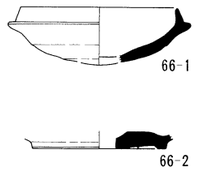


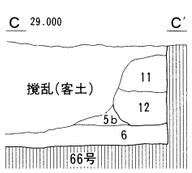
第21図　69号遺構実測図、出土遺物実測図

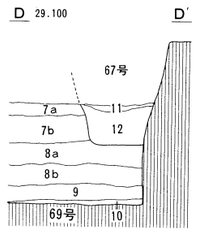


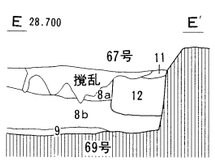


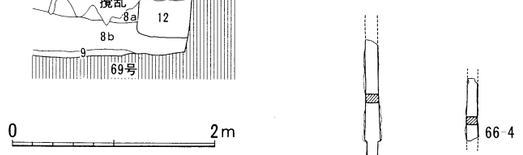


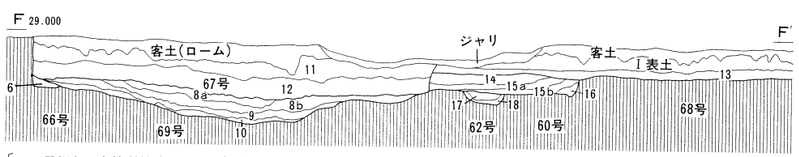


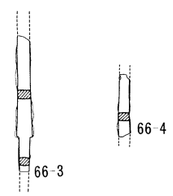


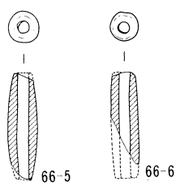


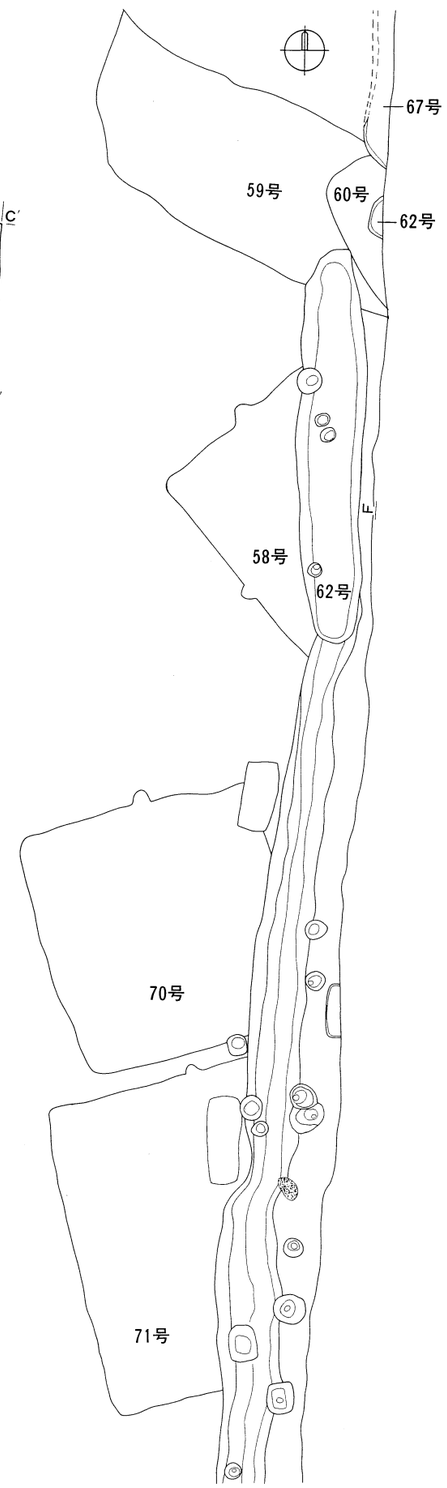


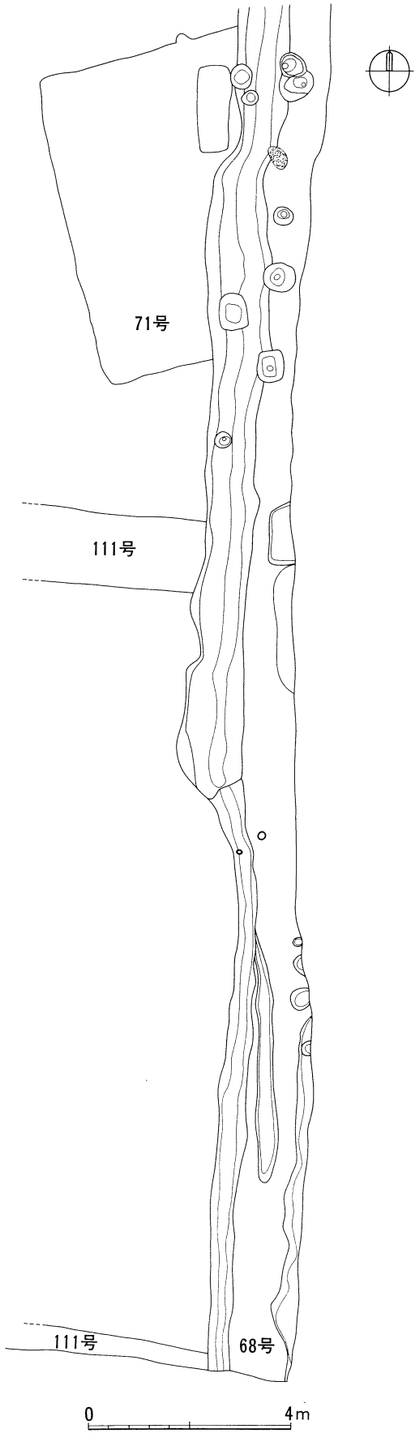












43号
- 1a 黒褐色　有機質性強。ローム粒霜降状に少量含む。
- 1b 黒褐色　有機質性強。ローム粒霜降状にやや多く含む。やや締る。
- 2a 黒褐色　有機質性強。ローム粒霜降状に含む。ローム量は1bより多い。
- 2b 暗褐色　ローム粒、ロームB霜降状に少量含む。
- 3　暗褐色　ローム粒多量に含む。締り弱。
- 4　暗褐色　ローム粒、ロームBやや多く含む。貼床部分締る。

66号
- 5a 黒褐色　有機質性強。ローム等ほとんど含まない。
- 5b 黒褐色　有機質性強。鉄滓多量に含む。
- 6　黒褐色　有機質性強。最下部は住居跡床面状に締る。

69号
- 7a 黒褐色　有機質性強。やや粒子粗。
- 7b 黒褐色　有機質性強。最も黒味がかる。
- 8a 黒褐色　有機質土中にローム粒、ロームB少量含む。
- 8b 暗褐色　有機質土中にローム粒、ロームBやや多く含む。
- 9　暗褐色　よごれたローム混入する。粘性強くやや締る。
- 10　褐色　よごれたローム粒多量に含む。粘性強くベトつく。

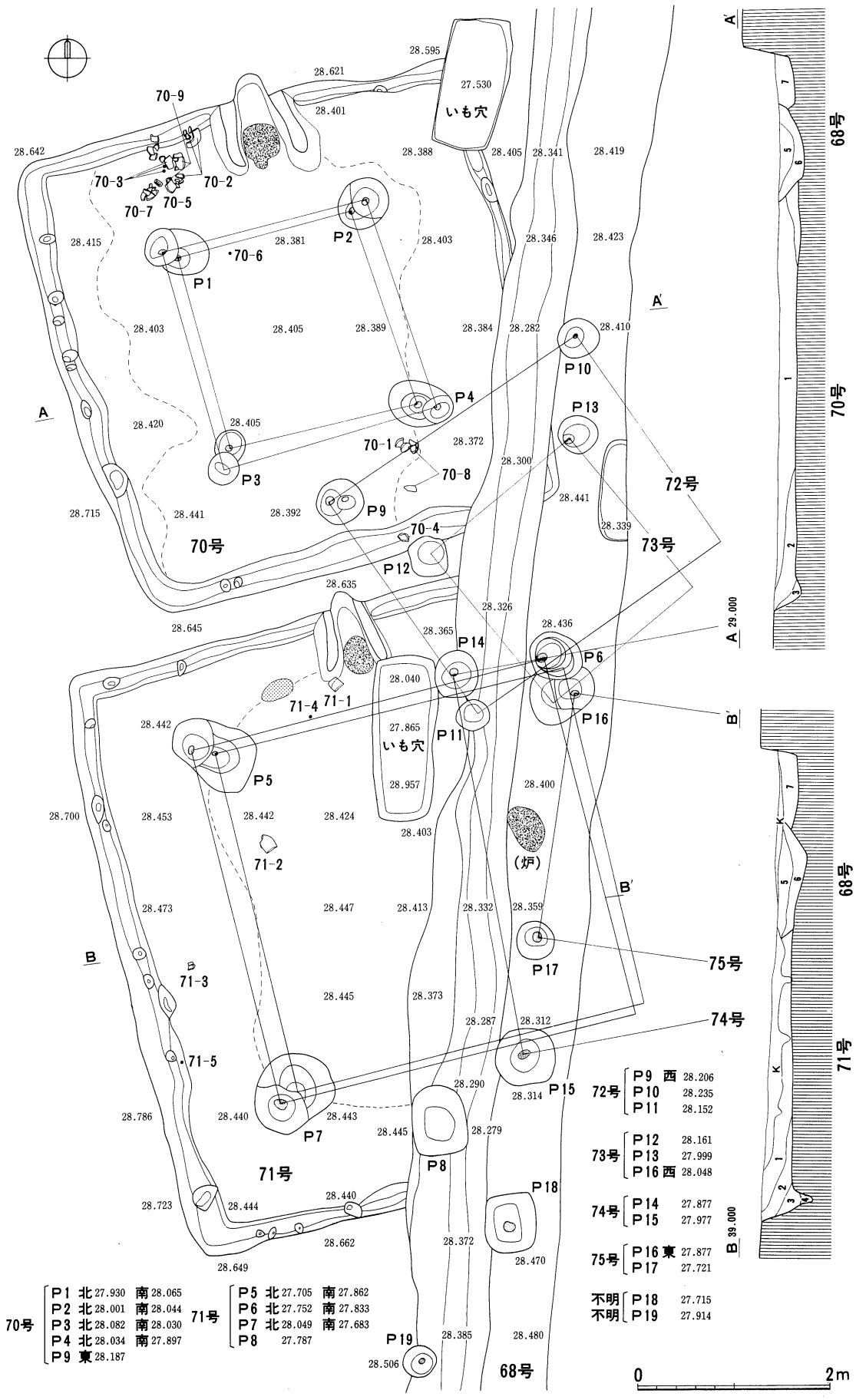
67号
- 11　茶褐色　ローム粒多量に含む。締り欠く。
- 12　暗褐色　ローム粒少量、有機質性増す。締り弱し。11.12共ジャリ下部分のみ硬く締る。

68号
- 13　茶褐色　粒粗。非常に硬く締る。

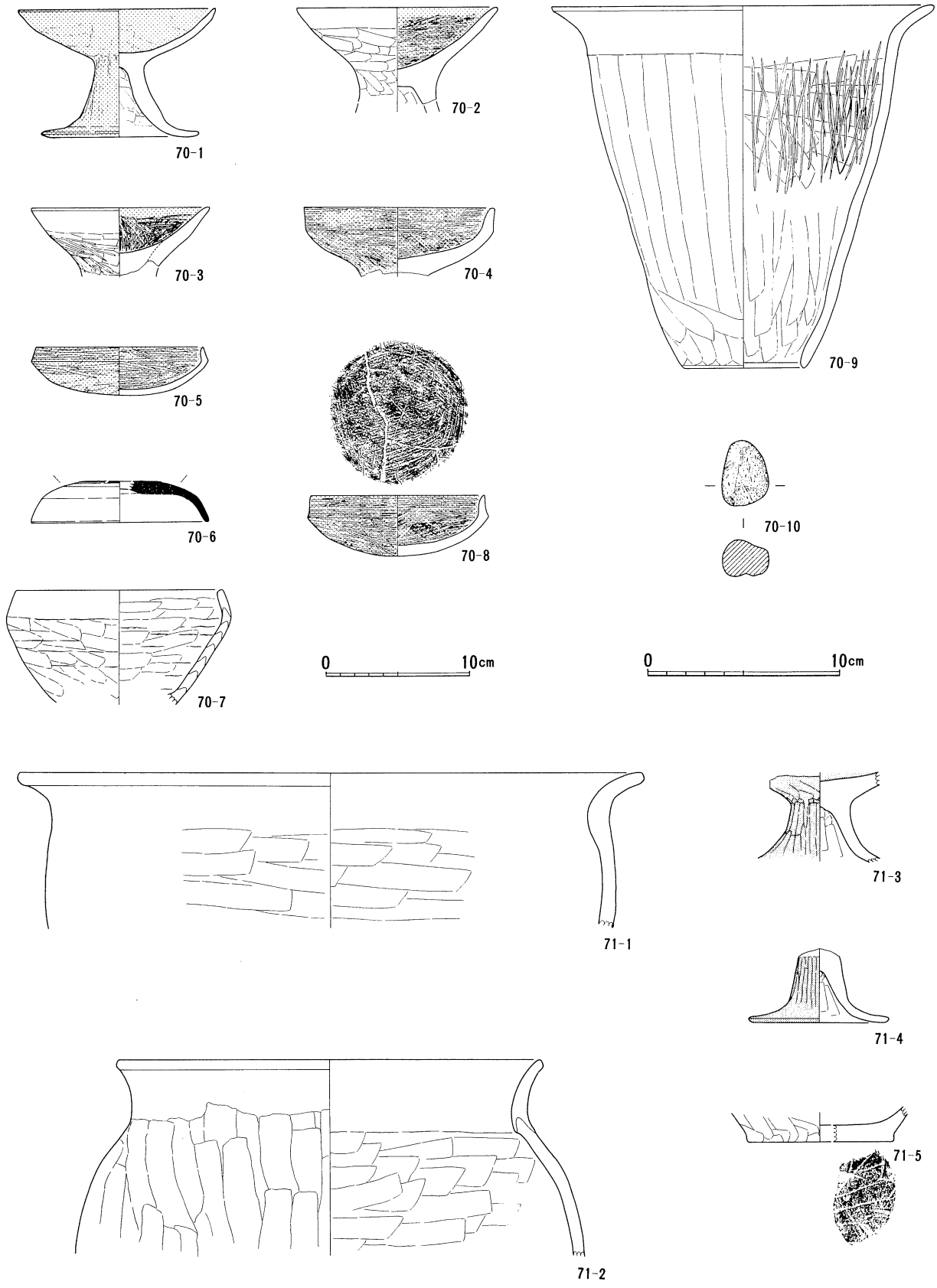
60号
- 14　黒褐色　有機質性強。硬く締る。
- 15a 暗褐色　ローム粒少量含む。硬く締る。
- 15b 暗褐色　ローム粒、ロームBやや多く含む。硬く締る。
- 16　褐色　ローム粒多量に含む。硬く締る。

62号
- 17　黒褐色　有機質性強。ローム粒霜降状に含む。硬く締る。
- 18　暗褐色　有機質土中にローム粒、ロームB混入、締る。

第22図　66～68号遺構実測図、66号遺構出土遺物実測図

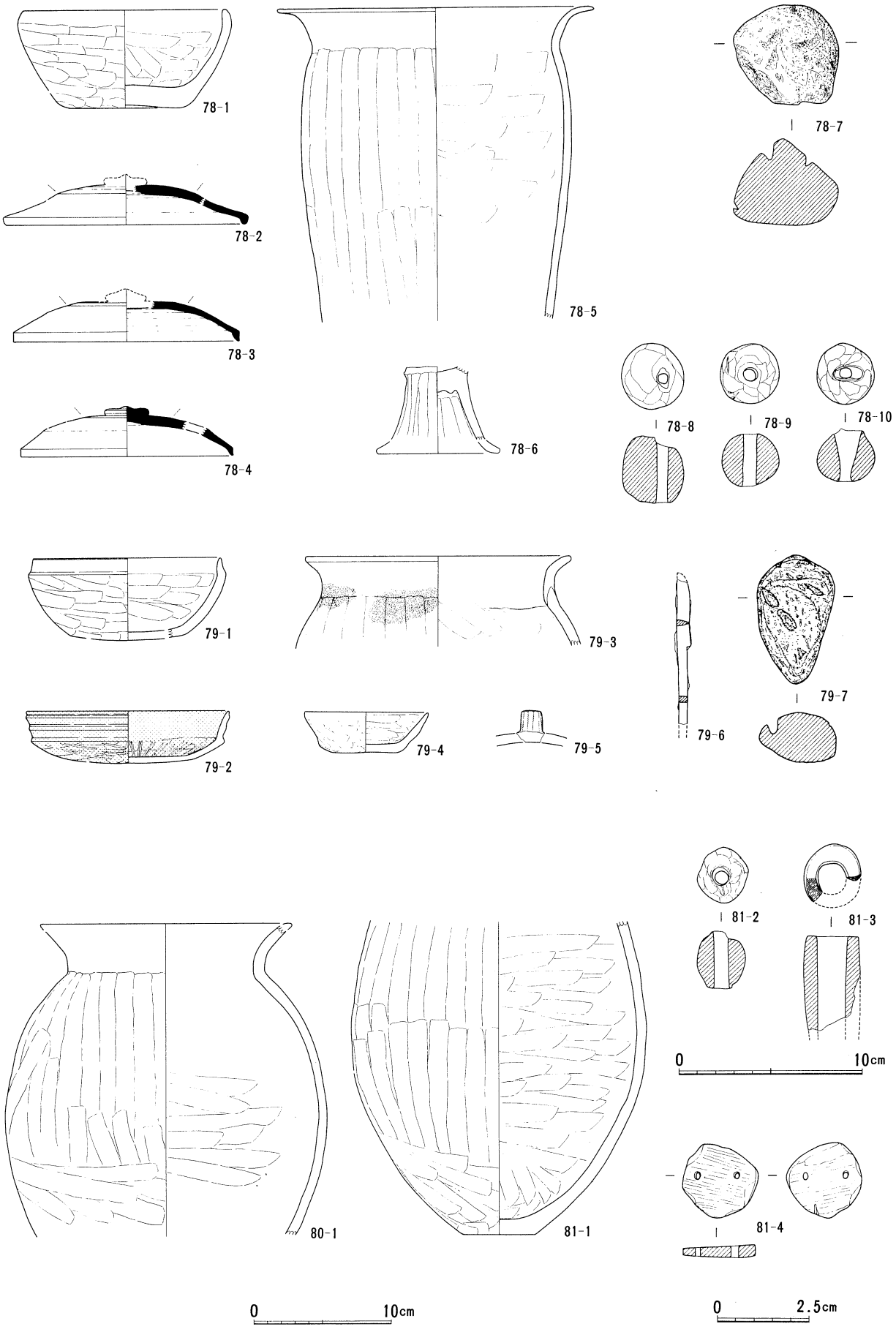


第23図　70～75号遺構実測図



第24図　70・71号遺構出土遺物実測図

第25図　76号遺構実測図、出土遺物実測図



第26図　78～81号遺構出土遺物実測図

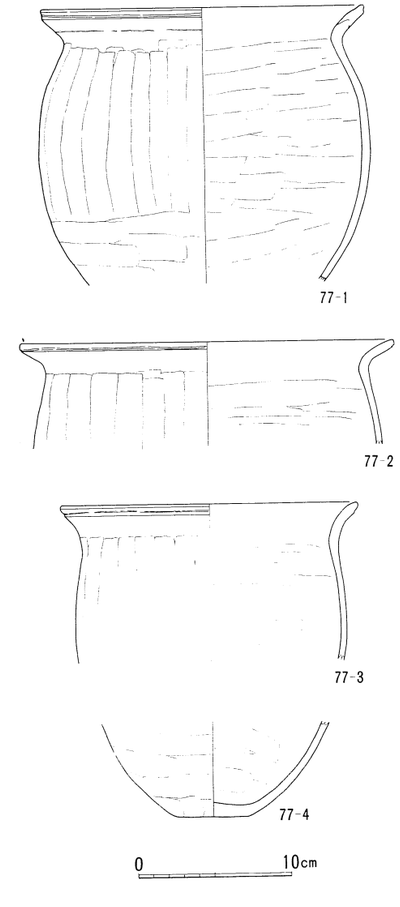
77号粘土ブロック（カマドか？）

1　暗褐色　粘土粒、粘土B混入土(少量)
2　暗褐色　粘土粒、粘土B含むが1層より少ない。
3　暗褐色　粘土粒、粘土B少量、焼土、炭化物若干含む。
4　暗赤褐色　焼土、粘土粒含む。
5　暗褐色　小礫混入粘土粒、粘土B。
6　暗褐色　85号遺構覆土、ローム粒少量含む。
7　褐　色　ローム粒やや多く含む、床上面土。

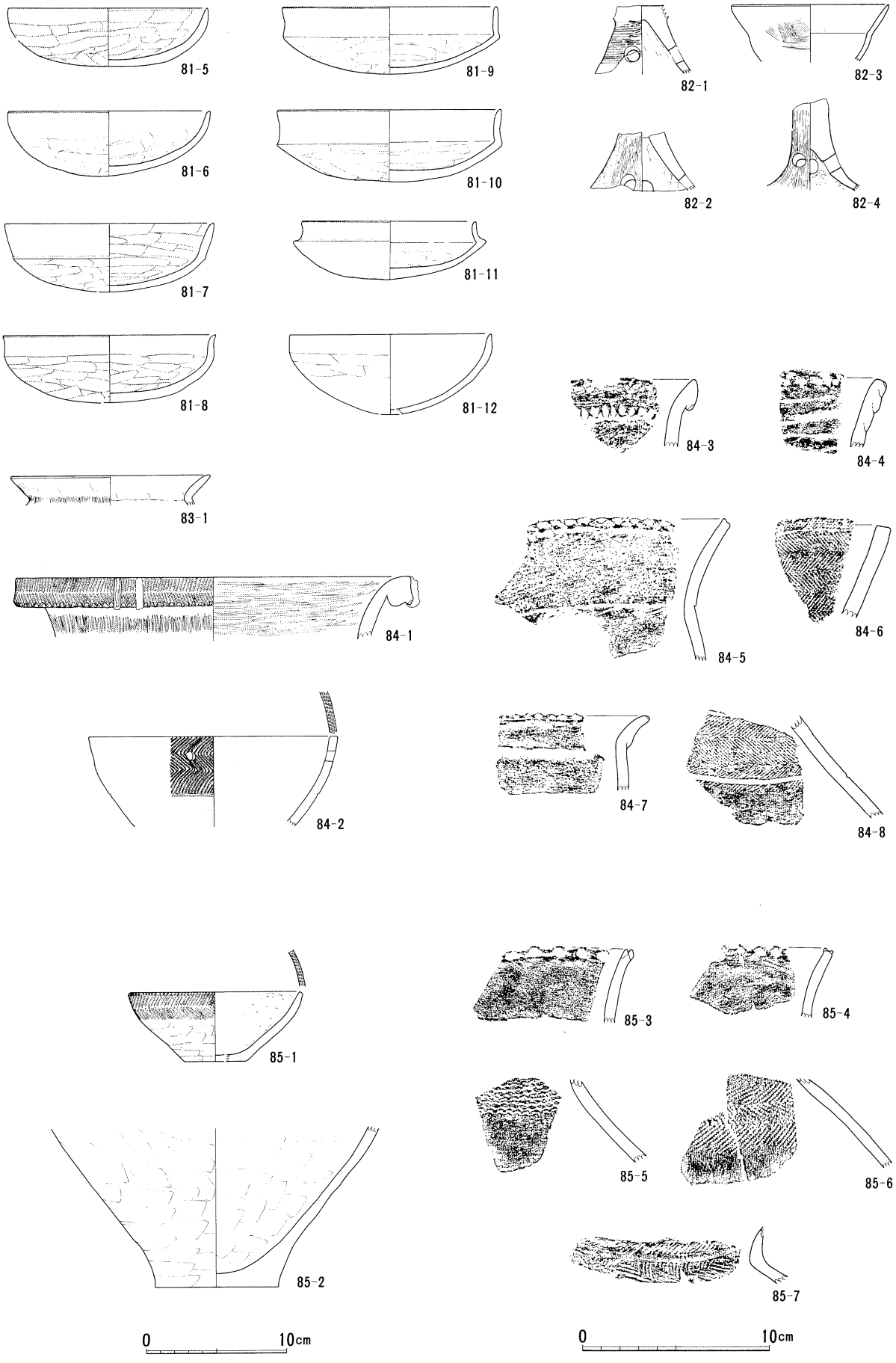
83号粘土坂状部

1　暗褐色　白色粘土混入土。
2　白灰色　粘土。
3　暗褐色　粘土粒少量混入土。

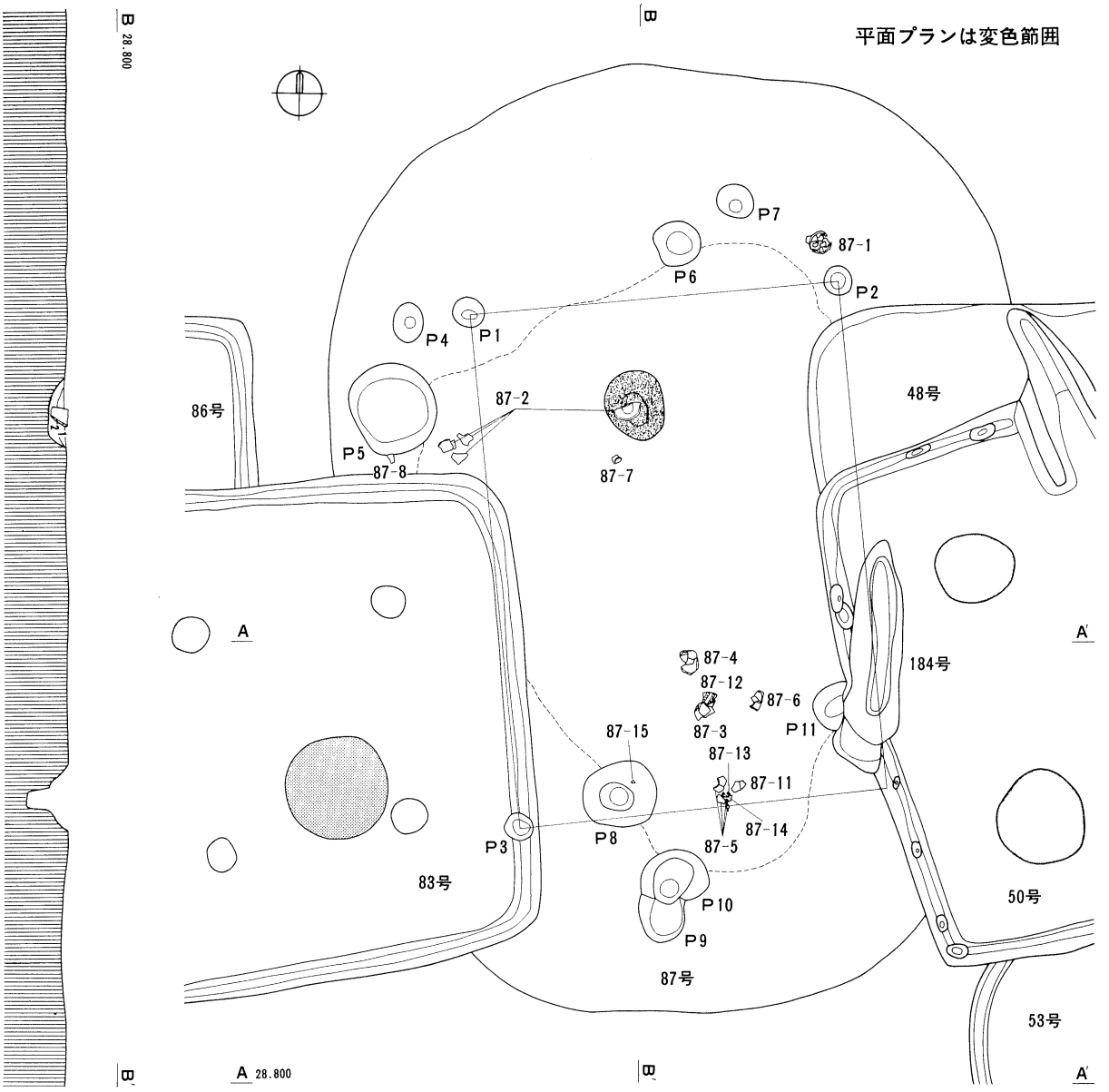
78号	P1	内27.882 外27.956
	P2	内27.711 外27.705
	P3	内27.705 外27.768
	P4	内27.704 外27.605
79号	P5	27.767
	P6	27.595
	P7	27.641
	P8	27.719
	P9	27.688
	P10	27.536
80号	P11	27.725
81号	P12	内27.410 中27.537 外27.745
	P13	内27.645 中27.691 外27.709
	P14	内27.655 外27.778
	P15	(88号P1の外) 27.584
	P16	内27.504 外27.560
	P17	27.436
	P34	
82号	P18	27.991
	P19	27.964
	P20	28.014
	P21	28.022
83号	P22	28.165
	P23	28.134
	P24	28.119
	P25	28.180
84号	P26	27.364
	P27	27.421
	P28	27.462
	P29	27.398
85号	P30	27.409
	P31	27.420
	P32	27.429
	P33	27.506



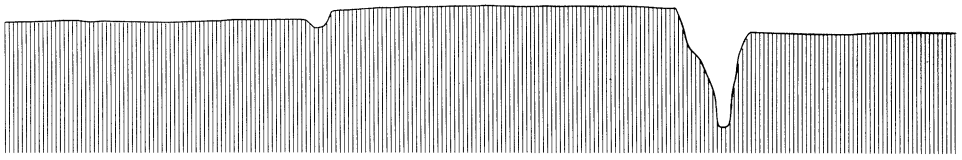
第27図　77～86号遺構実測図、77号遺構出土遺物実測図

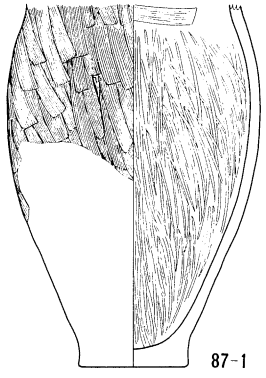


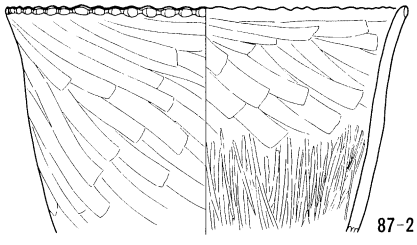
第28図　81～85号遺構出土遺物実測図

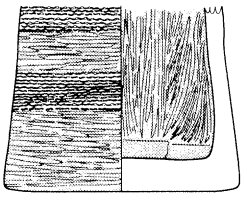


P1	28.225	P7	27.983
P2	28.205	P8	27.970
P3	28.106	P9	27.966
P4	28.205	P10	27.848
P5	28.022	P11	27.991
P6	27.693		





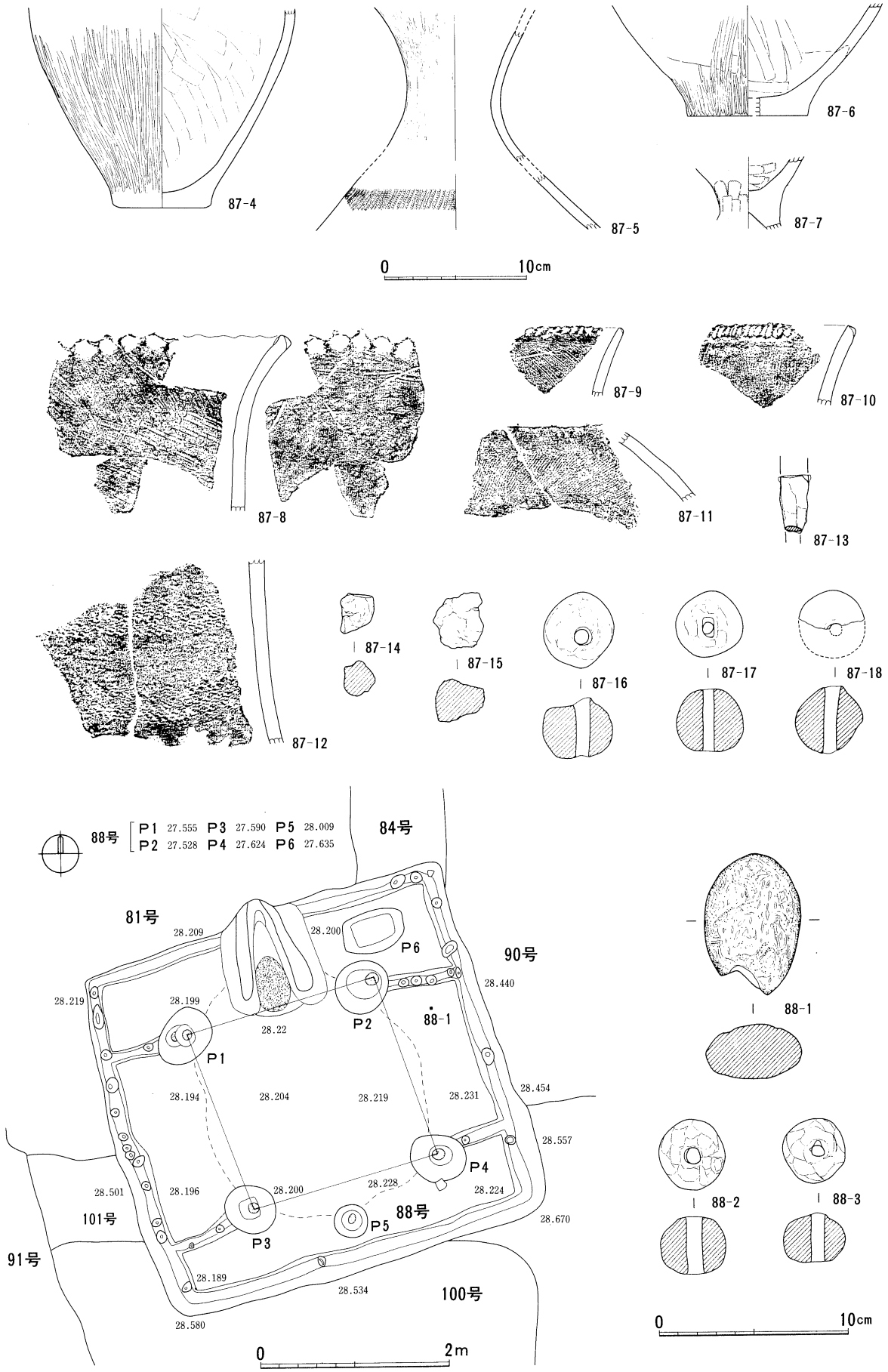




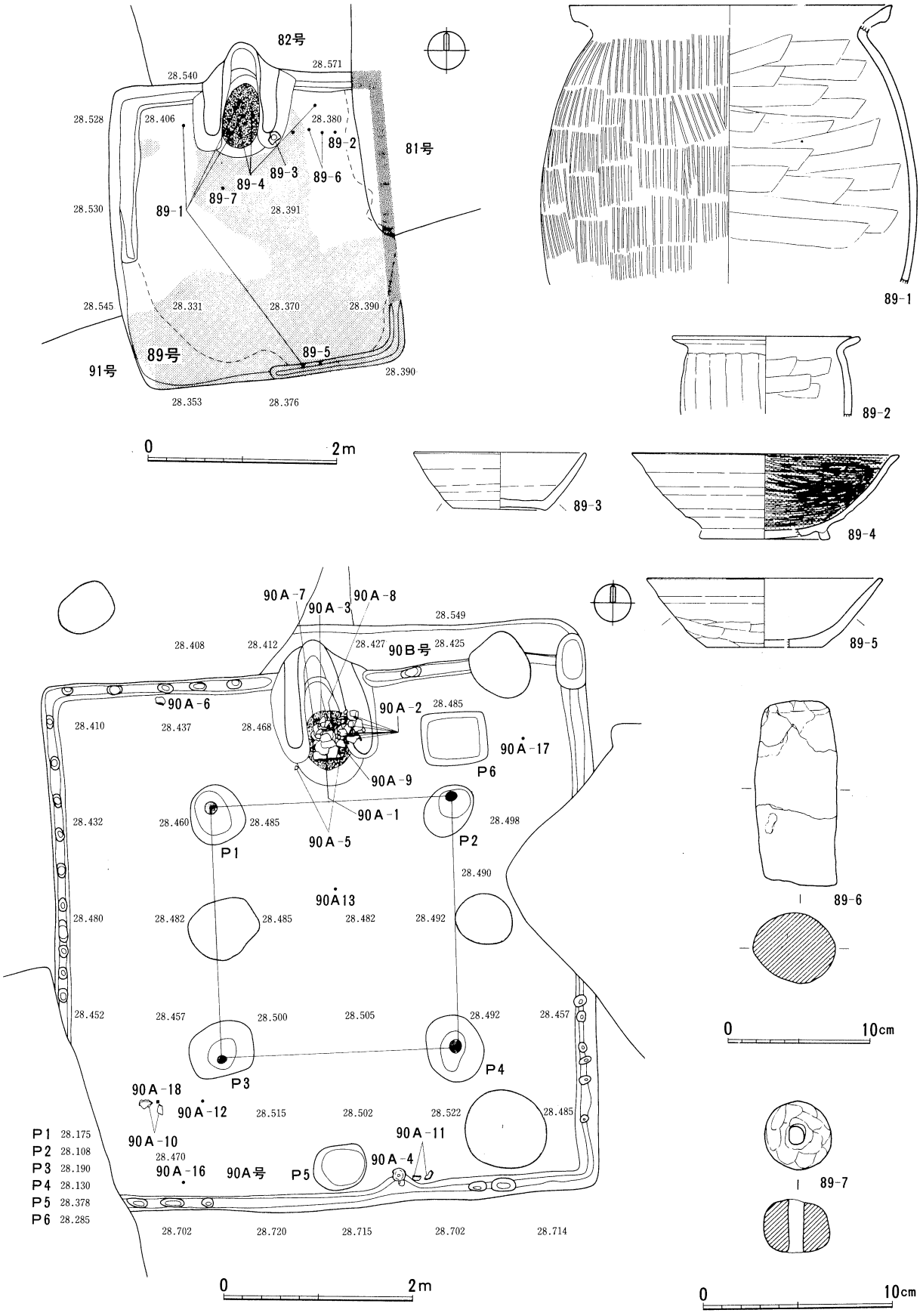
0 2m

0 10cm

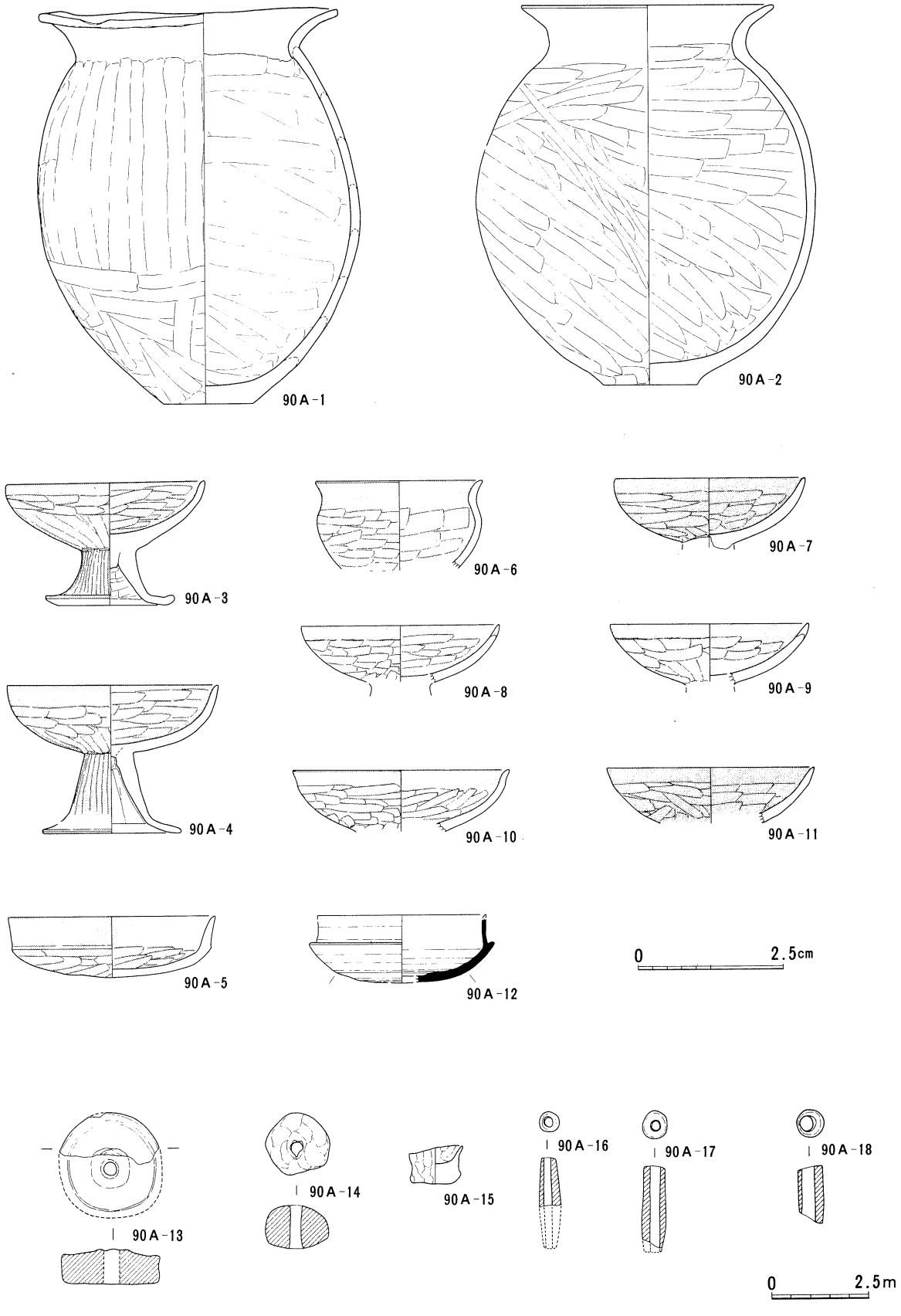
第29図　87号遺構実測図、出土遺物実測図



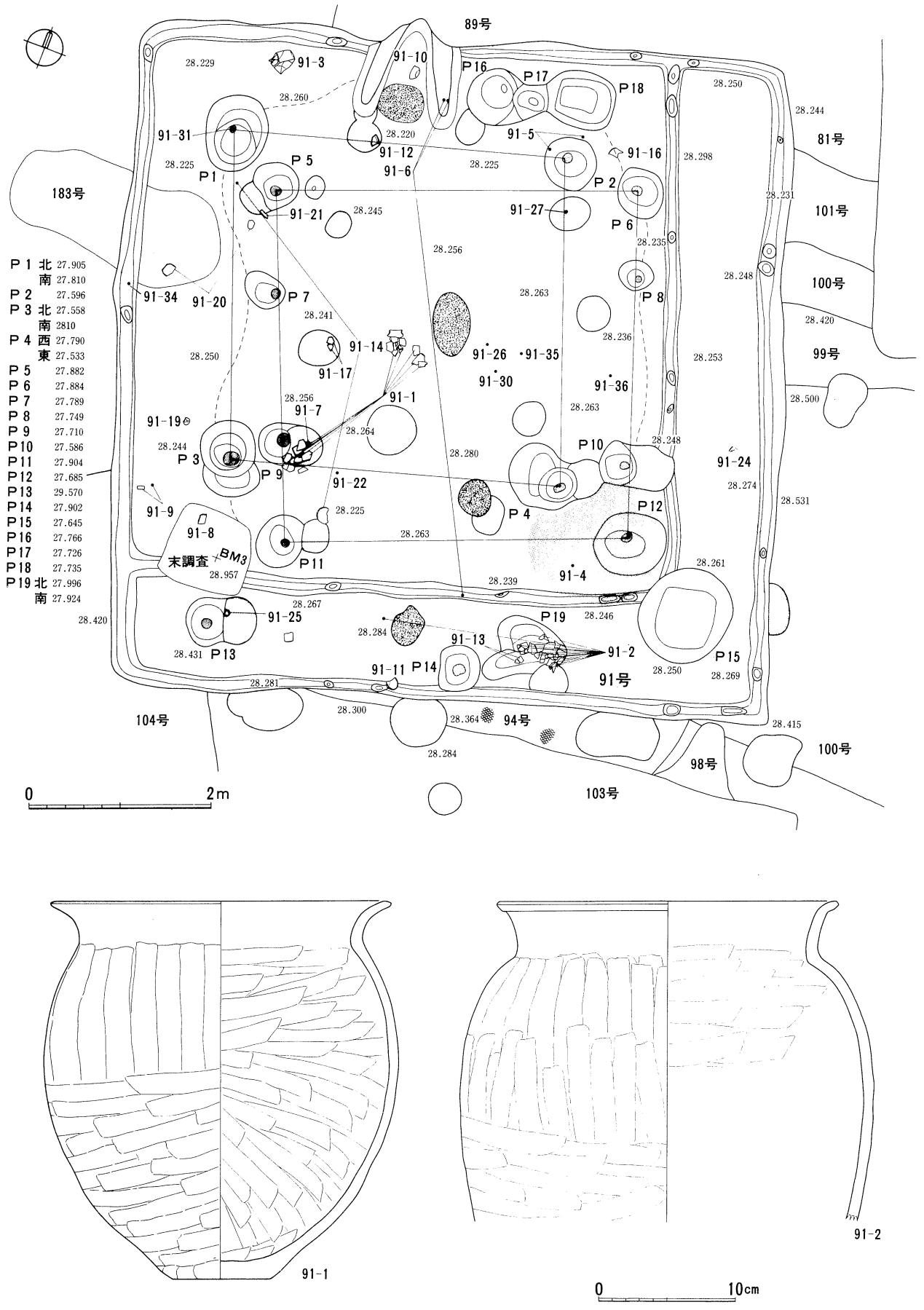
第30図　87・88号遺構出土遺物実測図、88号遺構実測図



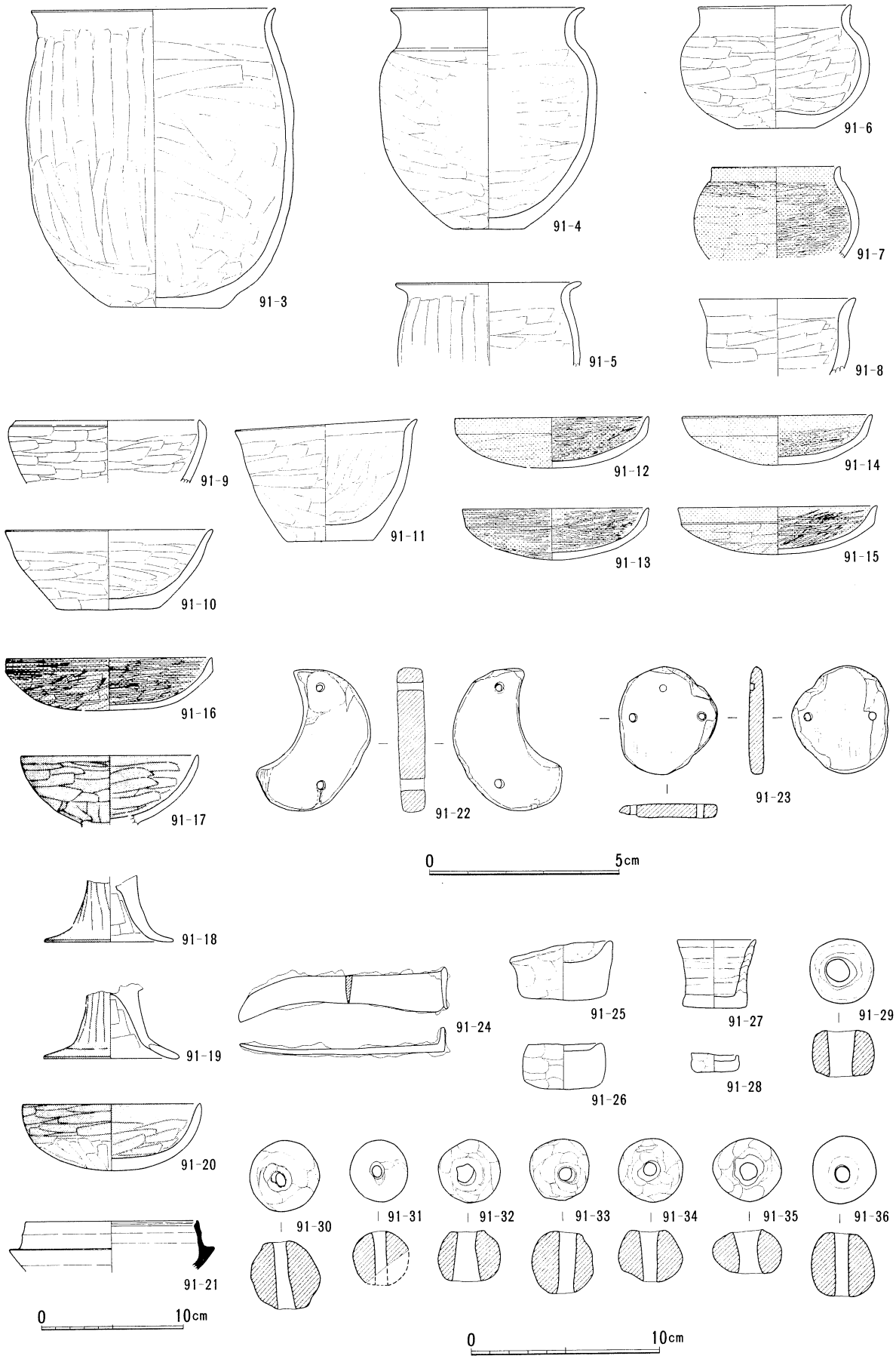
第31図　89・90号遺構実測図、89号遺構出土遺物実測図



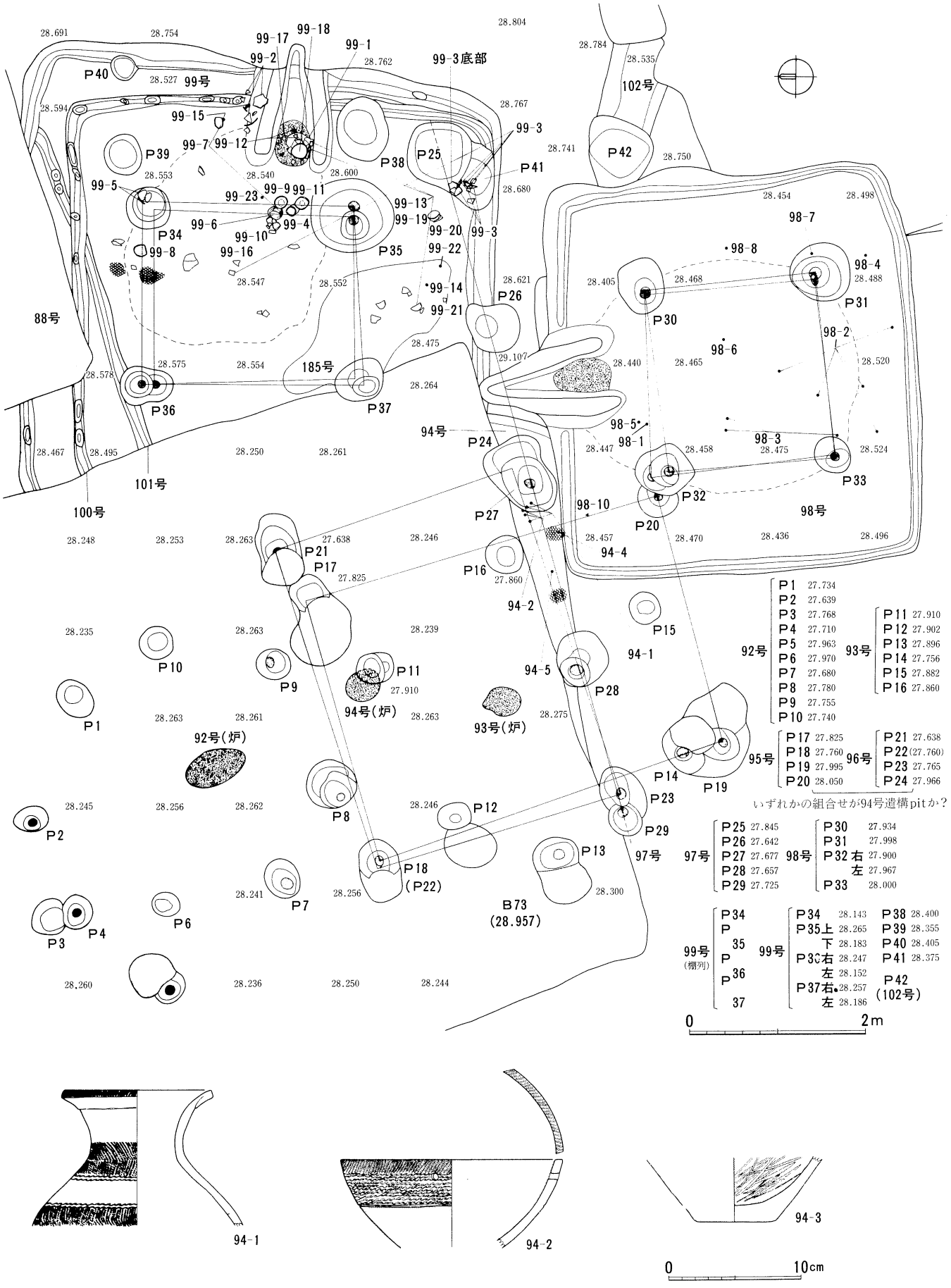
第32図　90号遺構出土遺物実測図



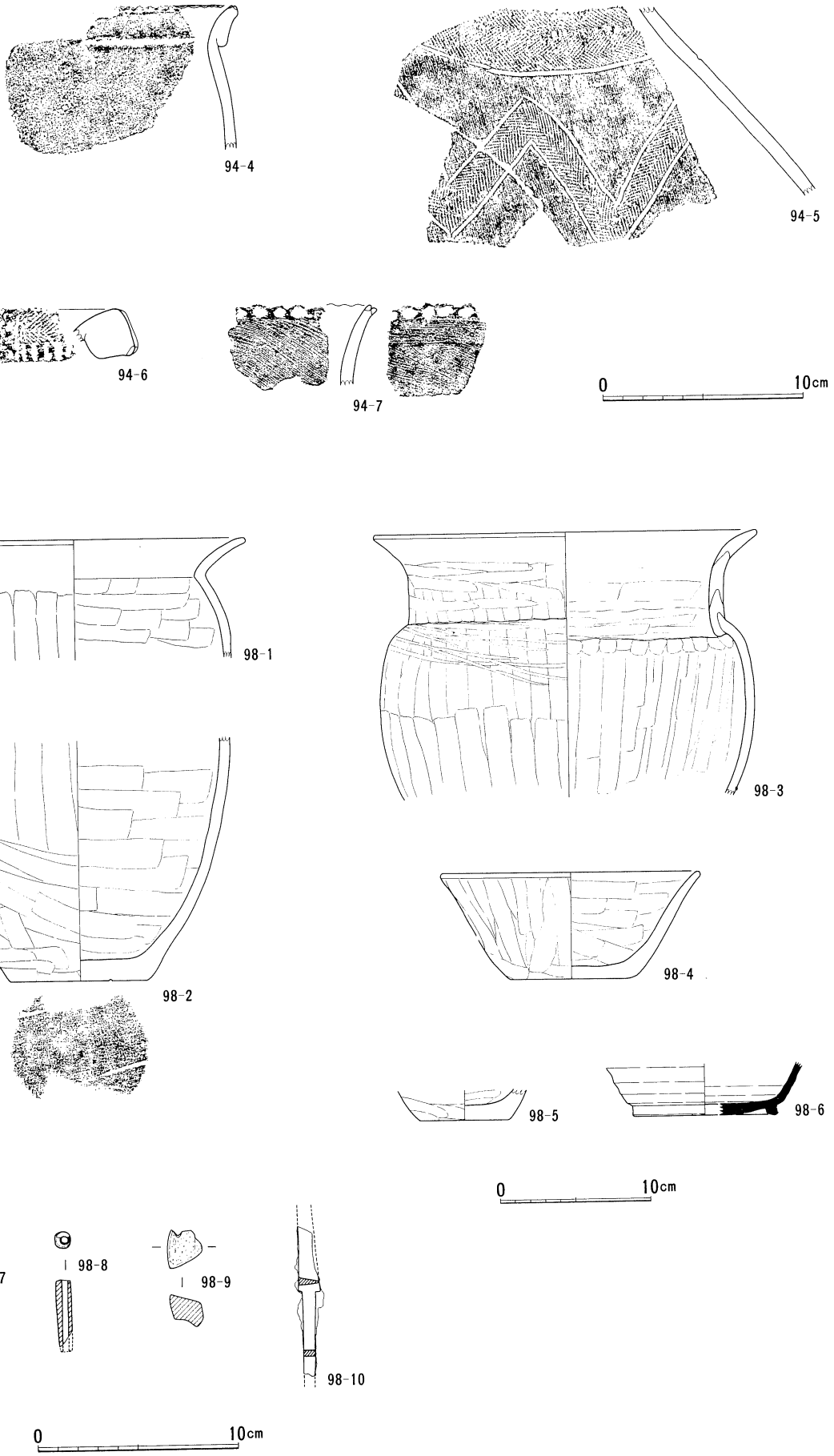
第33図　91号遺構実測図、出土遺物実測図



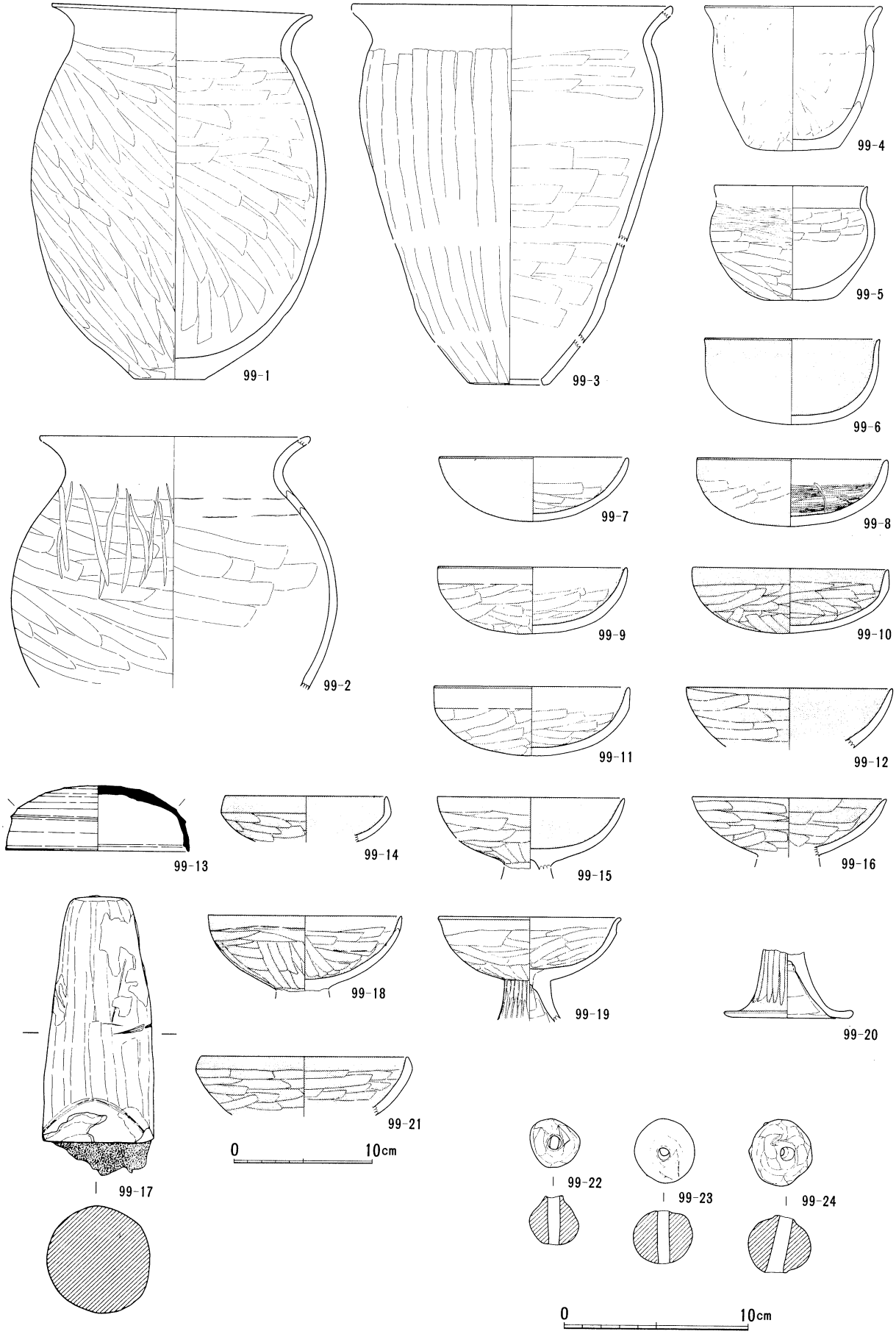
第34図　91号遺構出土遺物実測図



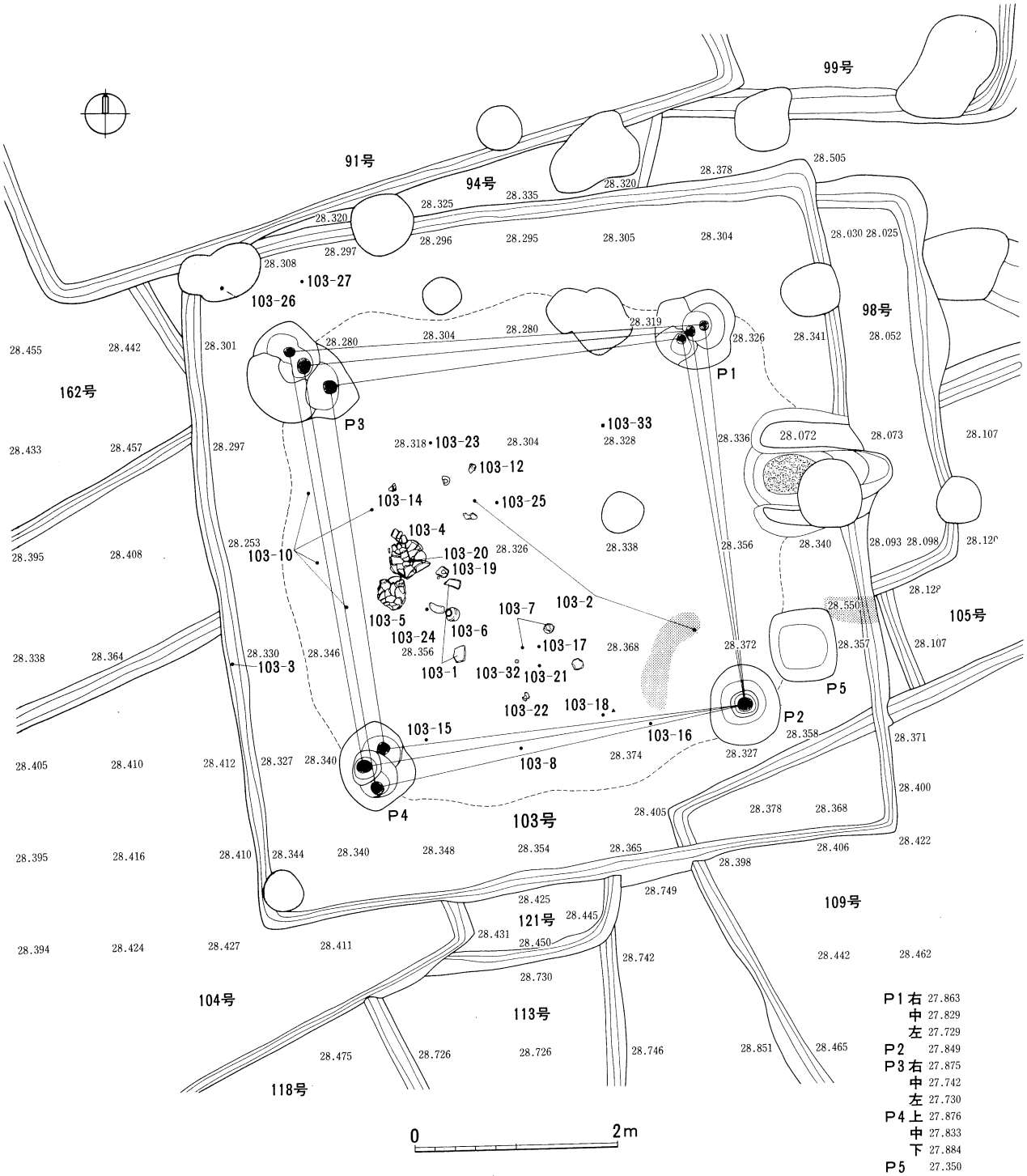
第35図　92～102号遺構実測図、94号遺構出土遺物実測図



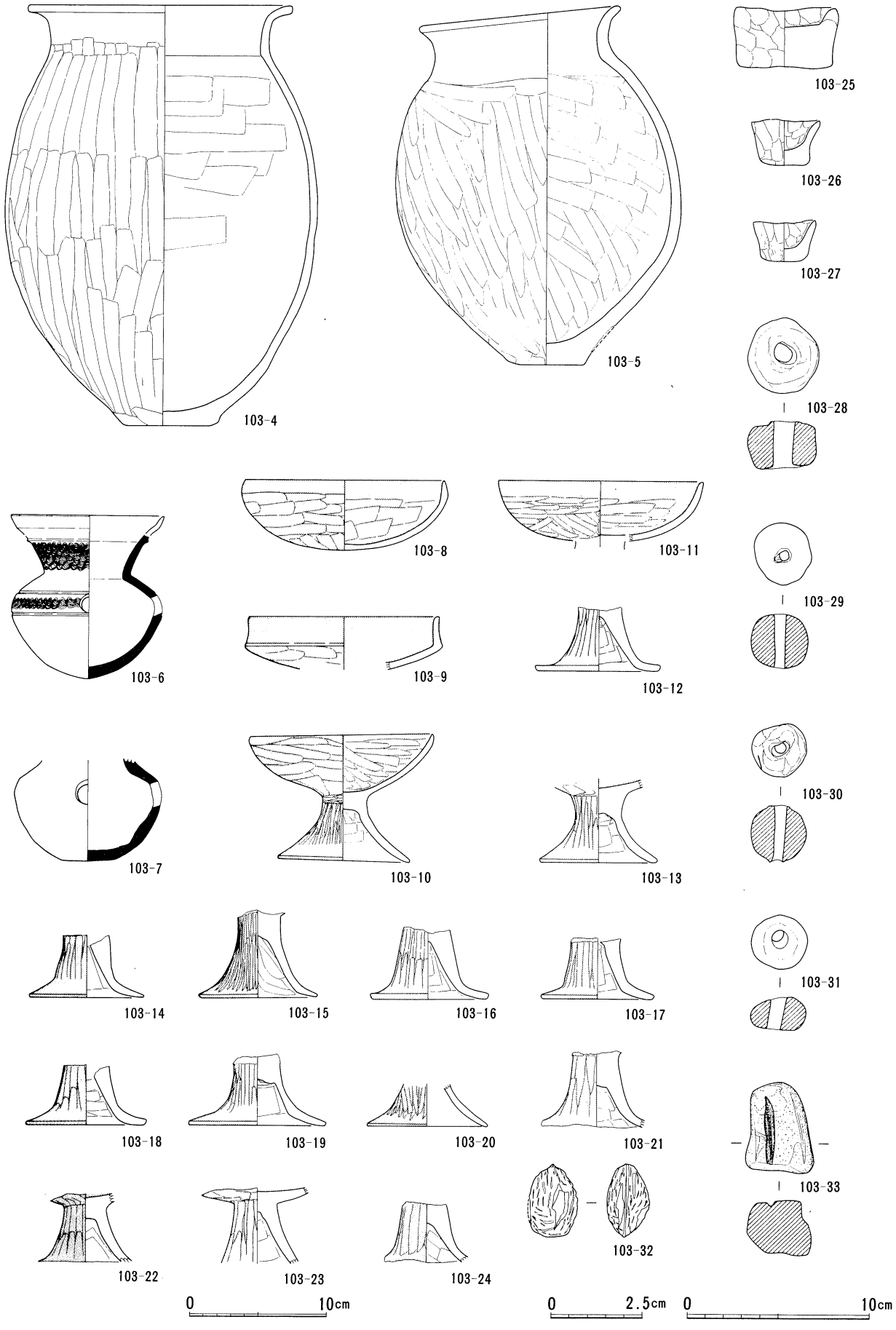
第36図　94・98号遺構出土遺物実測図



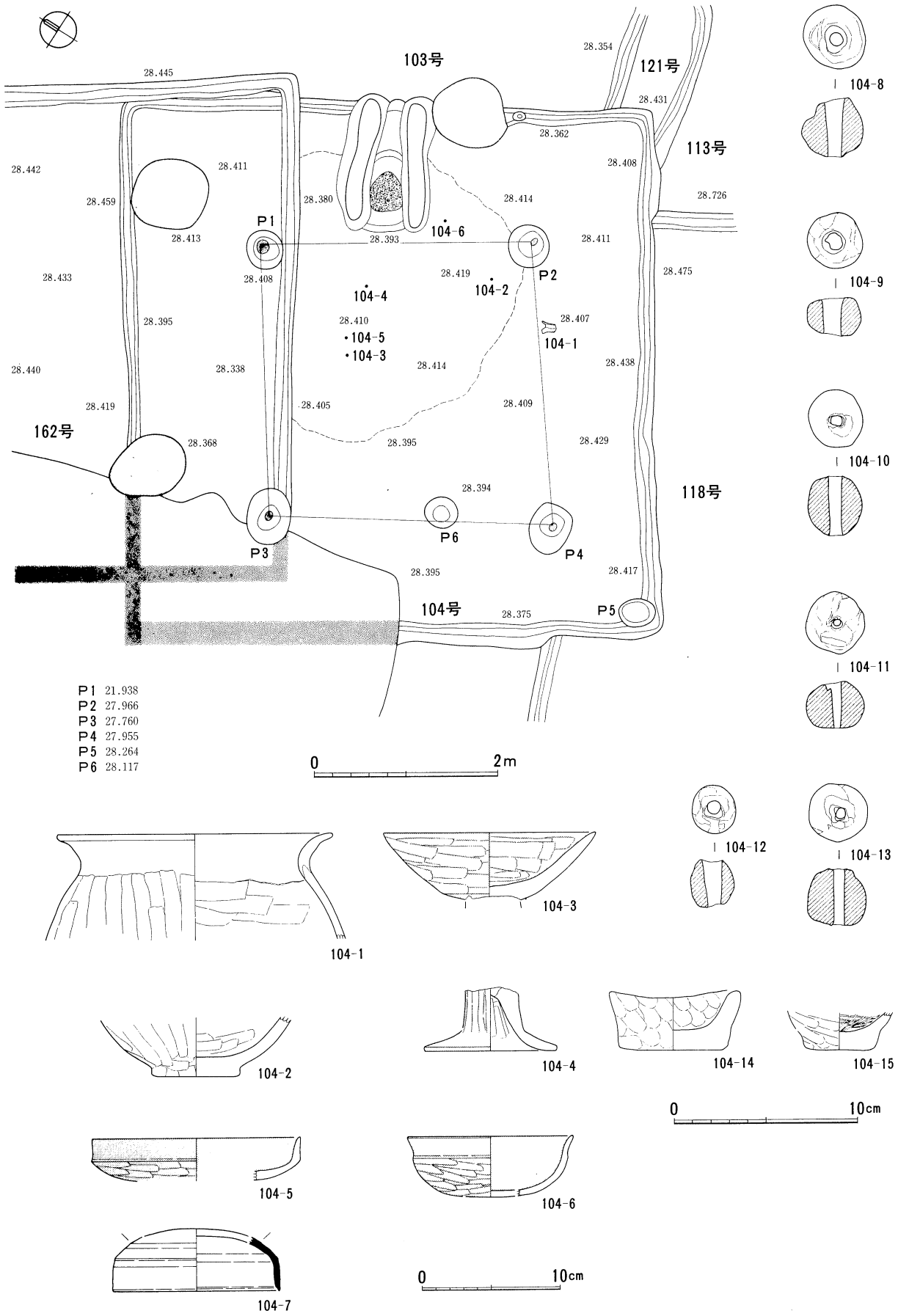
第37図　99号遺構出土遺物実測図



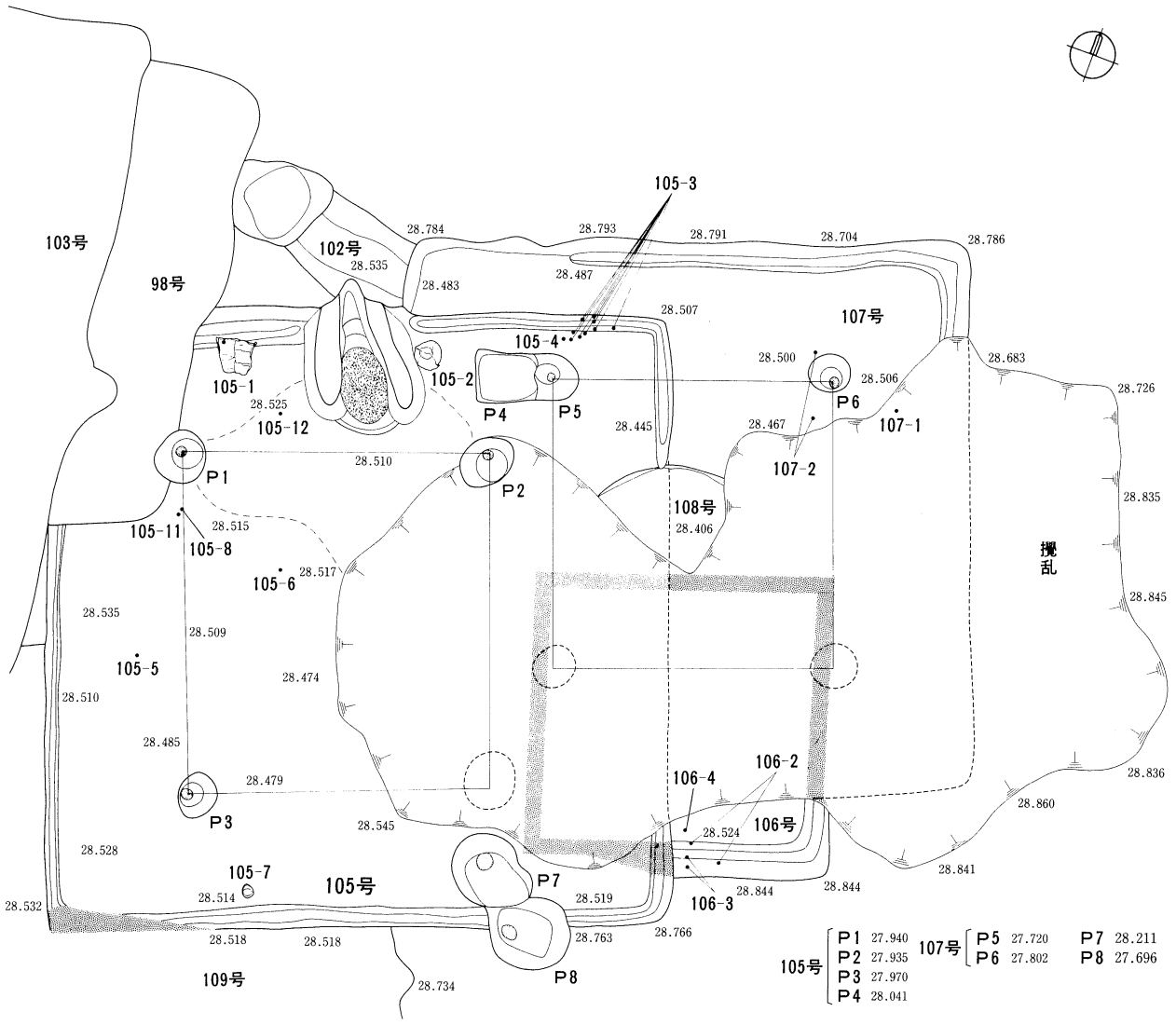
第38図　103号遺構実測図、出土遺物実測図



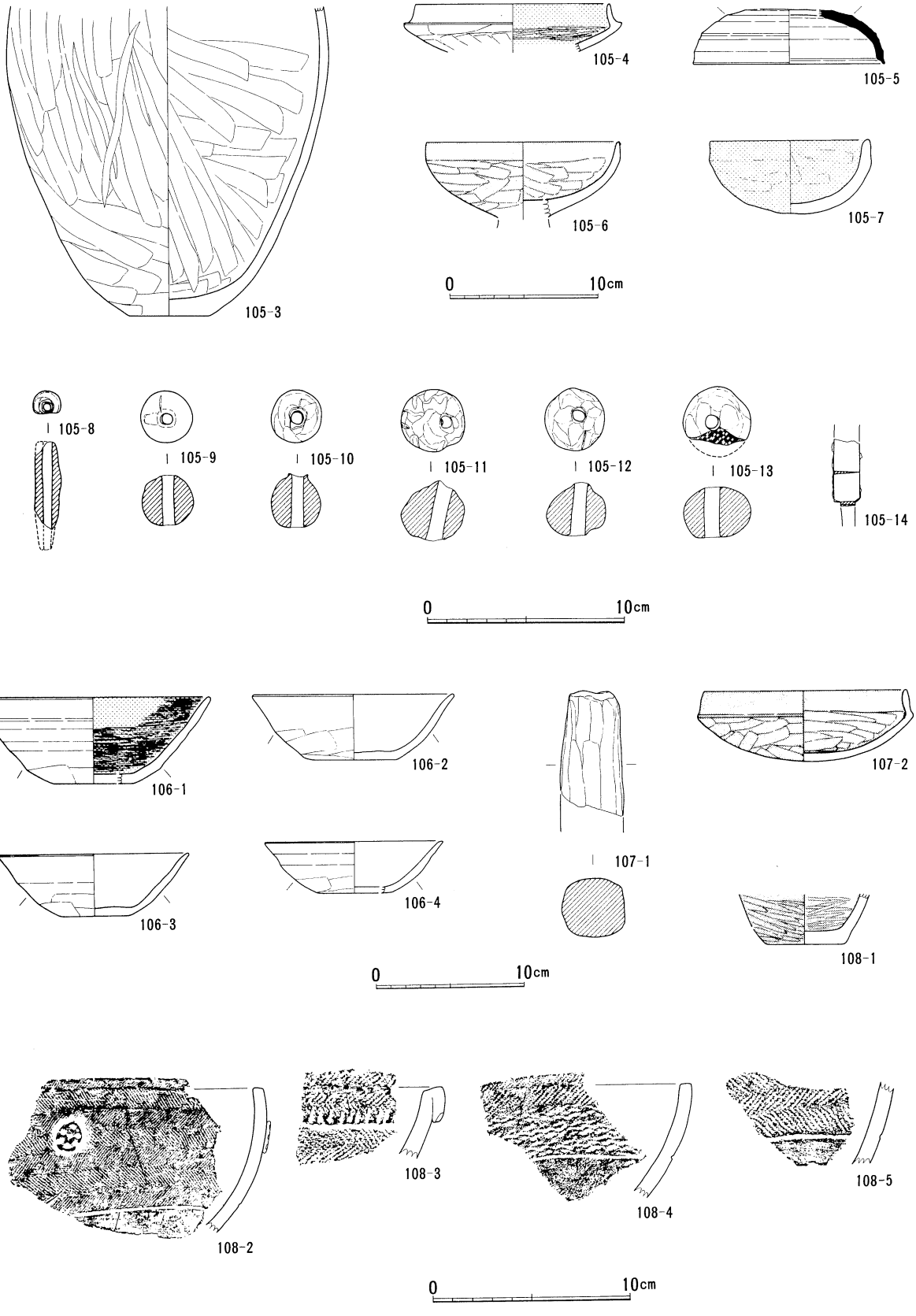
第39図　103号遺構出土遺物実測図



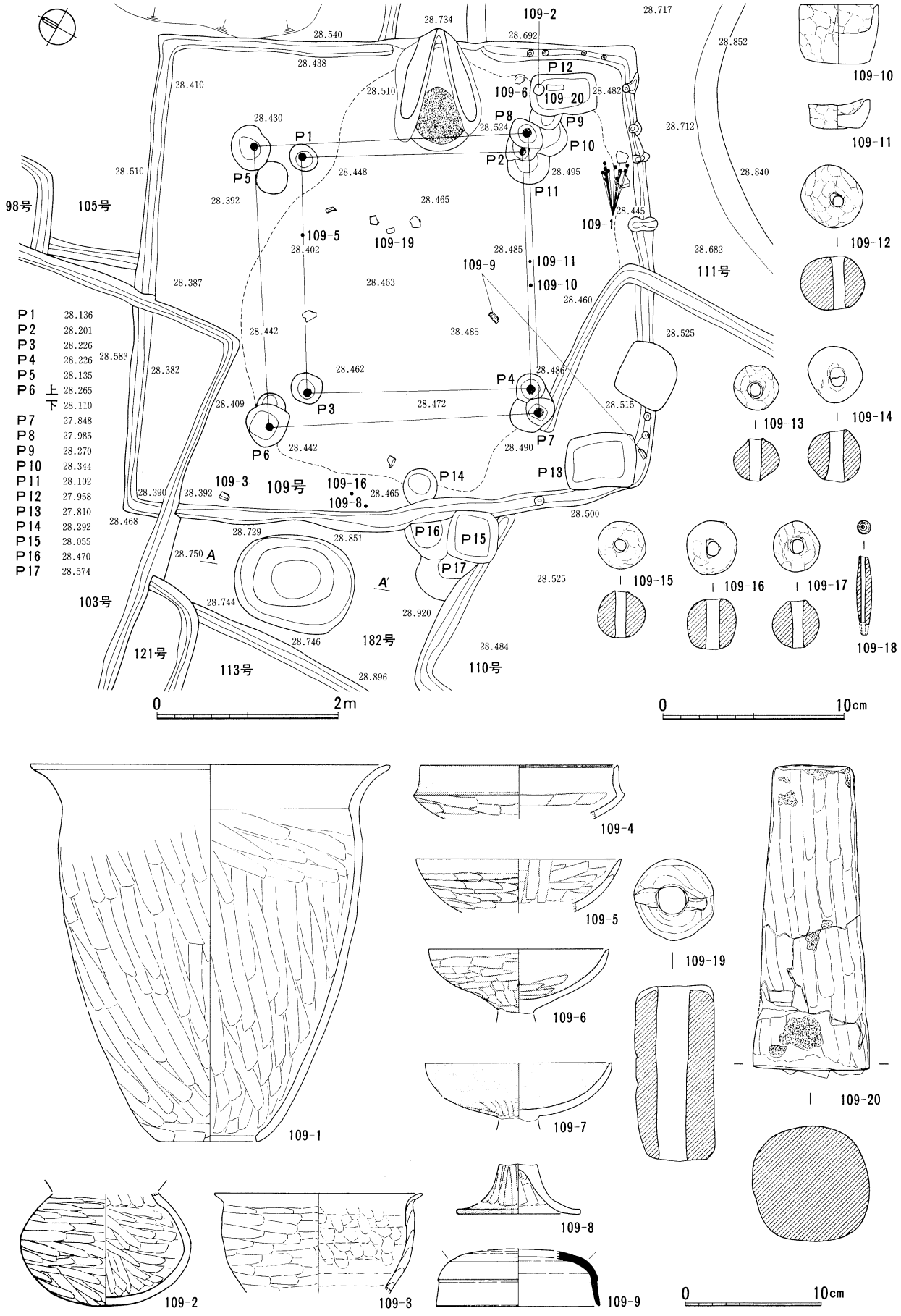
第40図　104号遺構実測図、出土遺物実測図



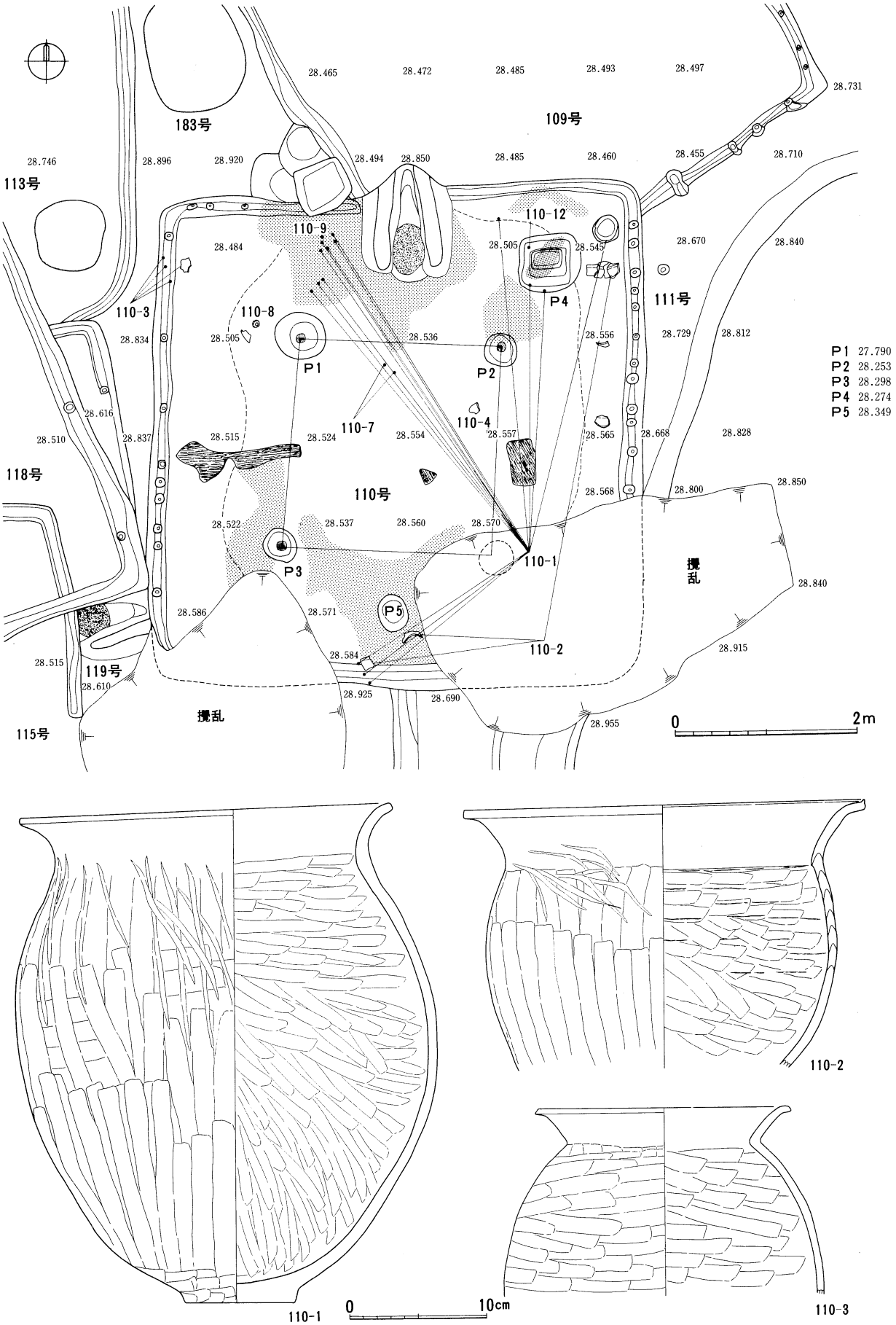
第41図　105～107号遺構実測図、105号遺構出土遺物実測図



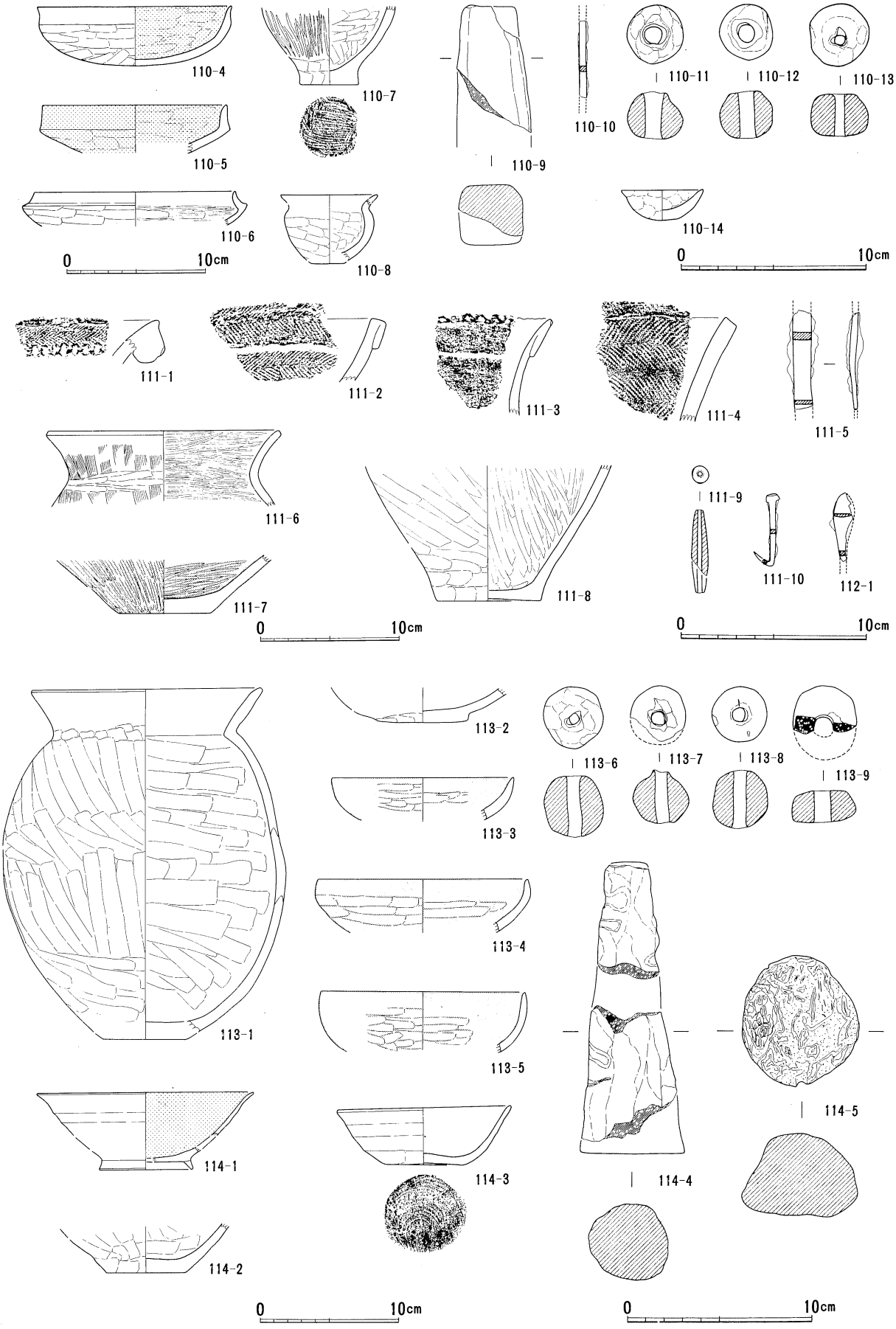
第42図　105～108号遺構出土遺物実測図



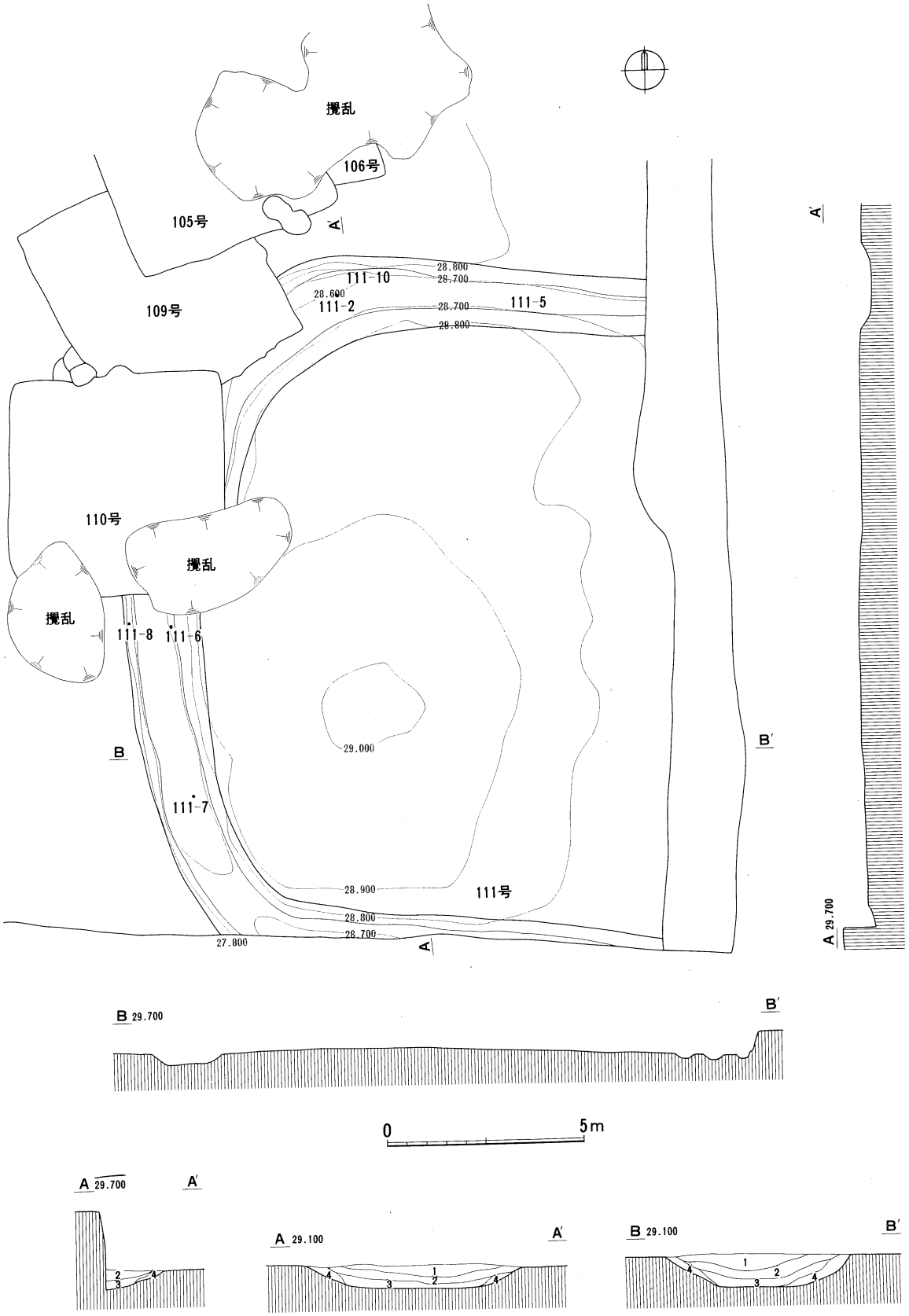
第43図　109号遺構実測図、出土遺物実測図



第44図　110号遺構実測図、出土遺物実測図

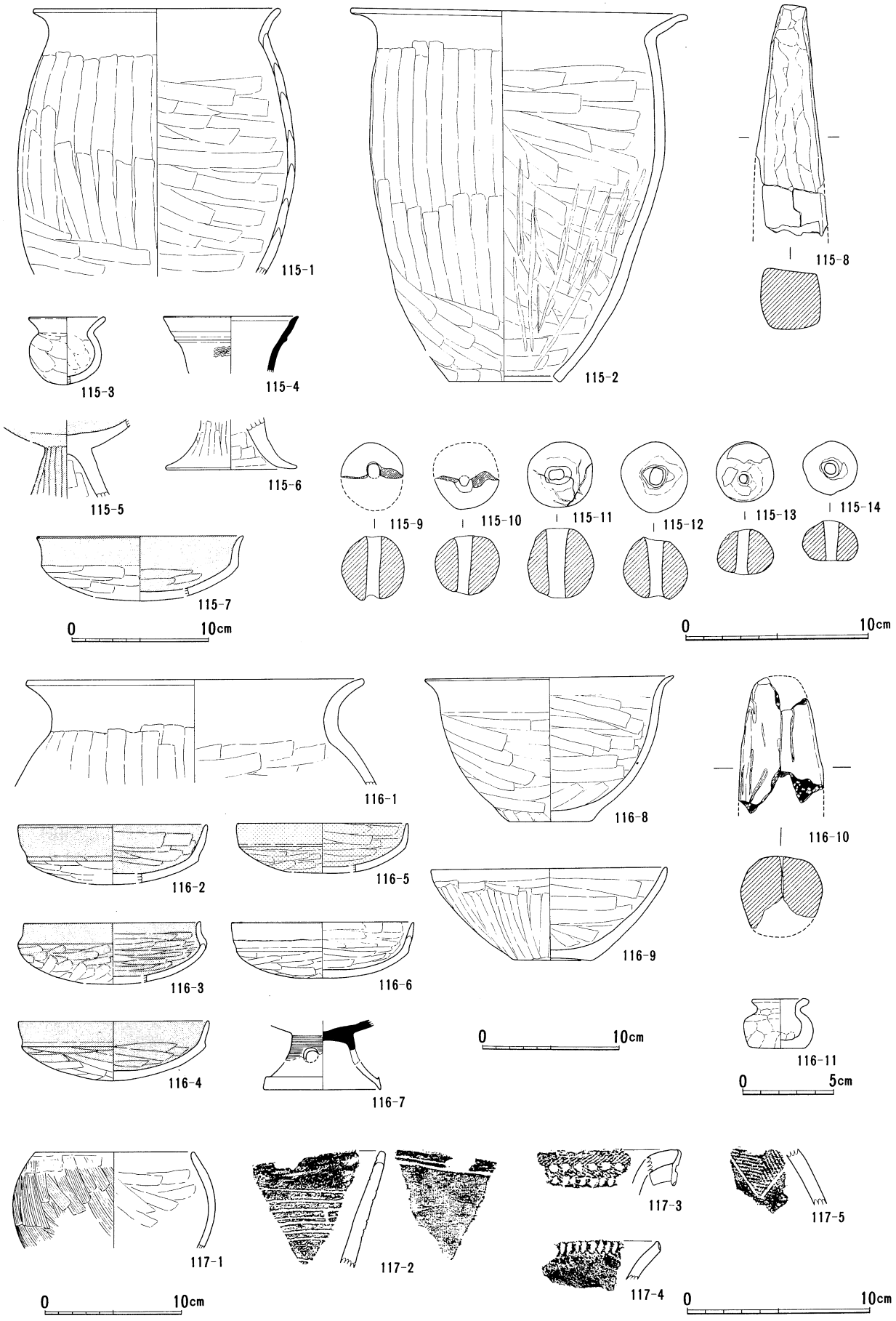


第45図　110～114号遺構出土遺物実測図



1. 暗褐色　やや粒粗の暗褐色土(耕作土？)の影響を受け締り弱い。
2. 暗褐色　ローム粒(粒小さい)をまばらに含む。
3. 暗褐色　ローム粒(少し粒大きい)を霜降状に多量に含む。
4. 褐　色　ローム粒ロームB多量に含む。

第46図　111号遺構実測図



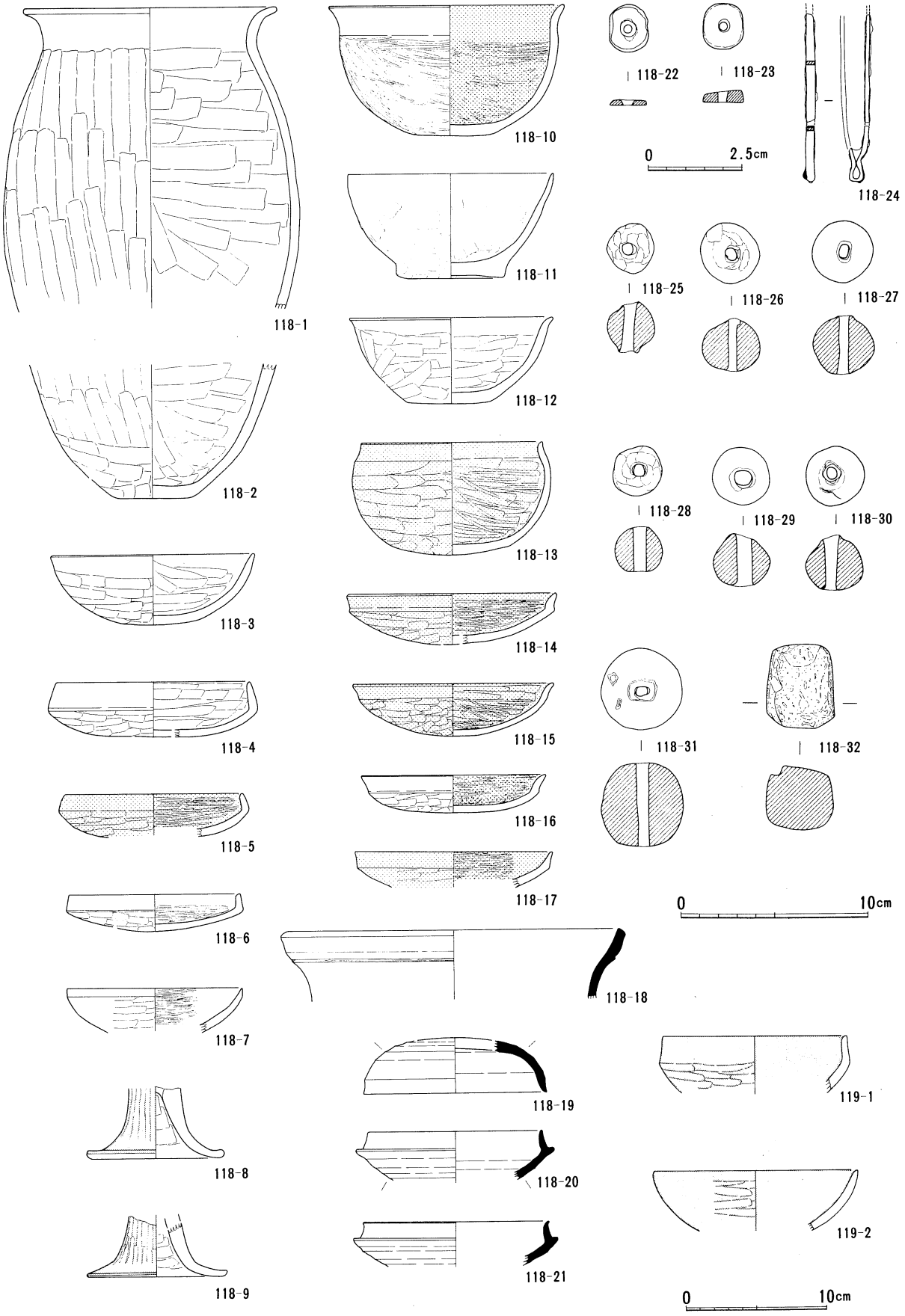
第47図　115～117号遺構出土遺物実測図

113号	P1	28.098	119号	P24 右から	28.214
114号	P2	27.604			27.980
115号	P3 上から	27.959		P25 右から	28.002
		27.911			28.090
		28.152		P26 右から	27.936
		27.957			27.915
		27.993		P27 右から	27.895
	P4 上から	27.962		P	28.140
		27.996	120号	P28	28.216
		28.000		P29	28.219
		27.906			
		28.078			
	P5 下から	28.024			
		27.945			
		28.285			
		28.207			
		28.115			
		28.115			
	P6 下から	27.958			
		28.095			
		28.015			
		27.988			
		27.885			
	P7	28.000			
	P8	28.143			
	P9	28.006			
	P10	28.885			
123号内	P11	27.986			
116号	P12	27.986			
	P13	27.871			
	P14	27.908			
117号	P15	28.454			
118号	P16	27.640			
	P17 上から	27.548			
		27.835			
	P18 右から	27.665			
		27.958			
	P19	27.680			
	P20	28.010			
	P21	28.005			
	P22	28.005			
	P23	27.776			

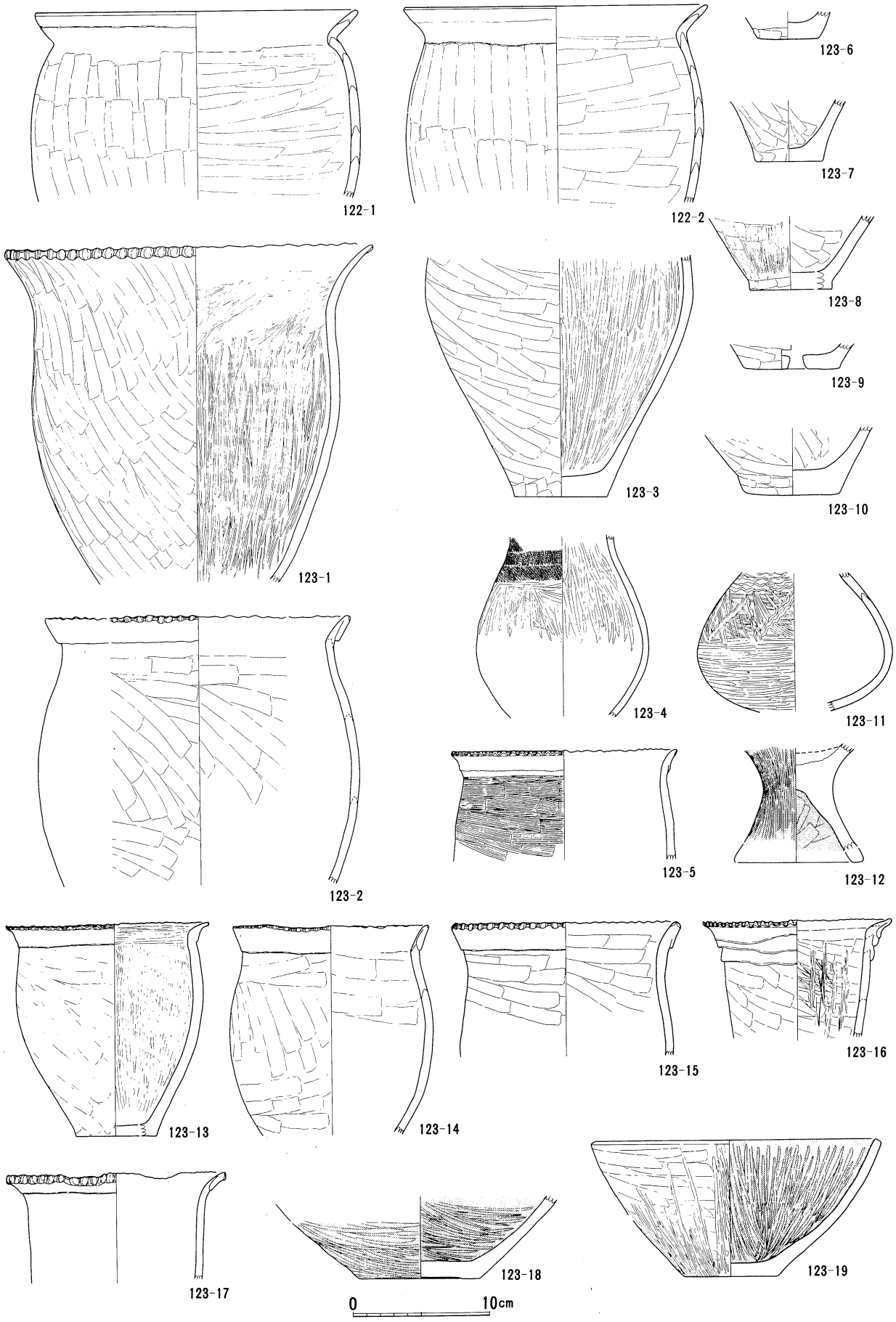
1 暗褐色　耕作撹乱土層の影響を受け、やや粒の粗い暗褐色土を主体とし、やや締りなし。
2 暗褐色　ローム粒、ローム B（3～5㎜大）をやや多く含む粘性あり。
3 暗褐色　ローム粒、ローム B（1～3㎜大）を少量含む。
4 暗褐色　ローム粒やや多く含む、少し締る。
5 暗褐色　ローム粒やや多く含む、締りなし。
6 褐　色　ローム粒多量に含む。
7 暗褐色　ローム粒、ローム B やや多く含む。

114号床面レベルは、この部分以外は不明、範囲内レベルは129号床面のもの。カマド火床面は本遺構に伴なわない、またカマド上端のみ本遺構に伴う。

第48図　112～121号遺構実測図

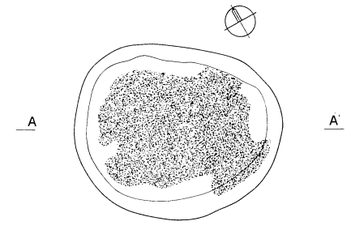


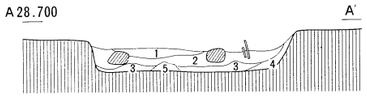
第49図　118・119号遺構出土遺物実測図



第50図　122・123号遺構出土遺物実測図

123号主柱穴
- P1 27.464
- P2 27.402
- P3 27.295
- P4 第47図P11と同じ
- P5 27.980
- P6 27.920
- P7 28.119
- P8 28.085
- P9 28.487
- P10 28.207
- P11 28.320
- P12 131号カマド掘り方か。28.594





0 1m

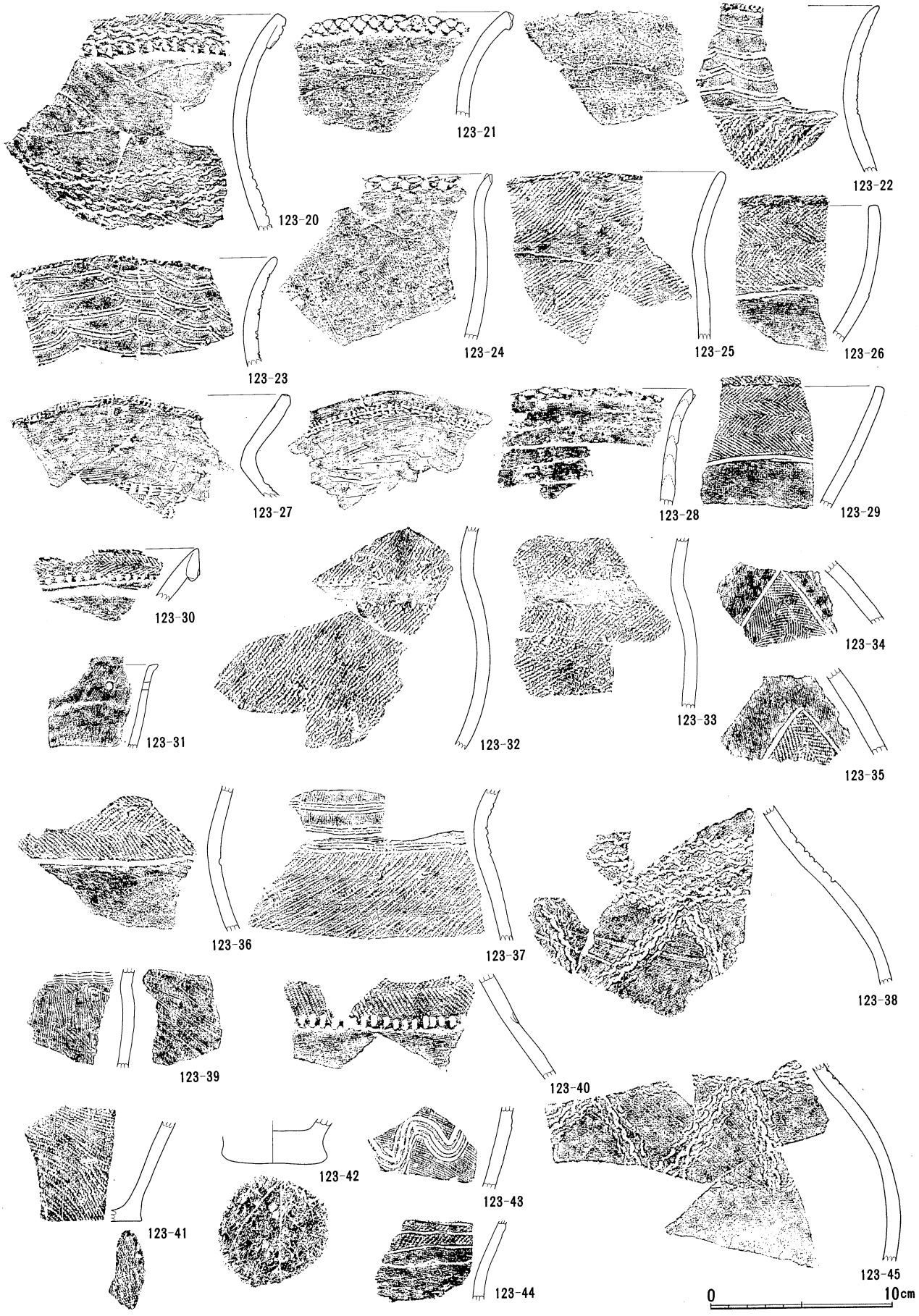
1. 暗褐色　焼土、炭化物、骨片を含む。締りやや欠く。
2. 暗褐色　灰、焼土、粘土少量含む。骨片を少量含む。
3. 赤褐色　焼土。
4. 暗褐色　焼土、炭化物を少量含む。締り欠く。
5. 赤灰色　灰を多量に含む。

トーンは125号A幾構貝ブロック。
下層は123号遺構復土。(暗褐色)
123号遺構内KBは125号貝ブロック7A～Fの遺構Noを付してある。

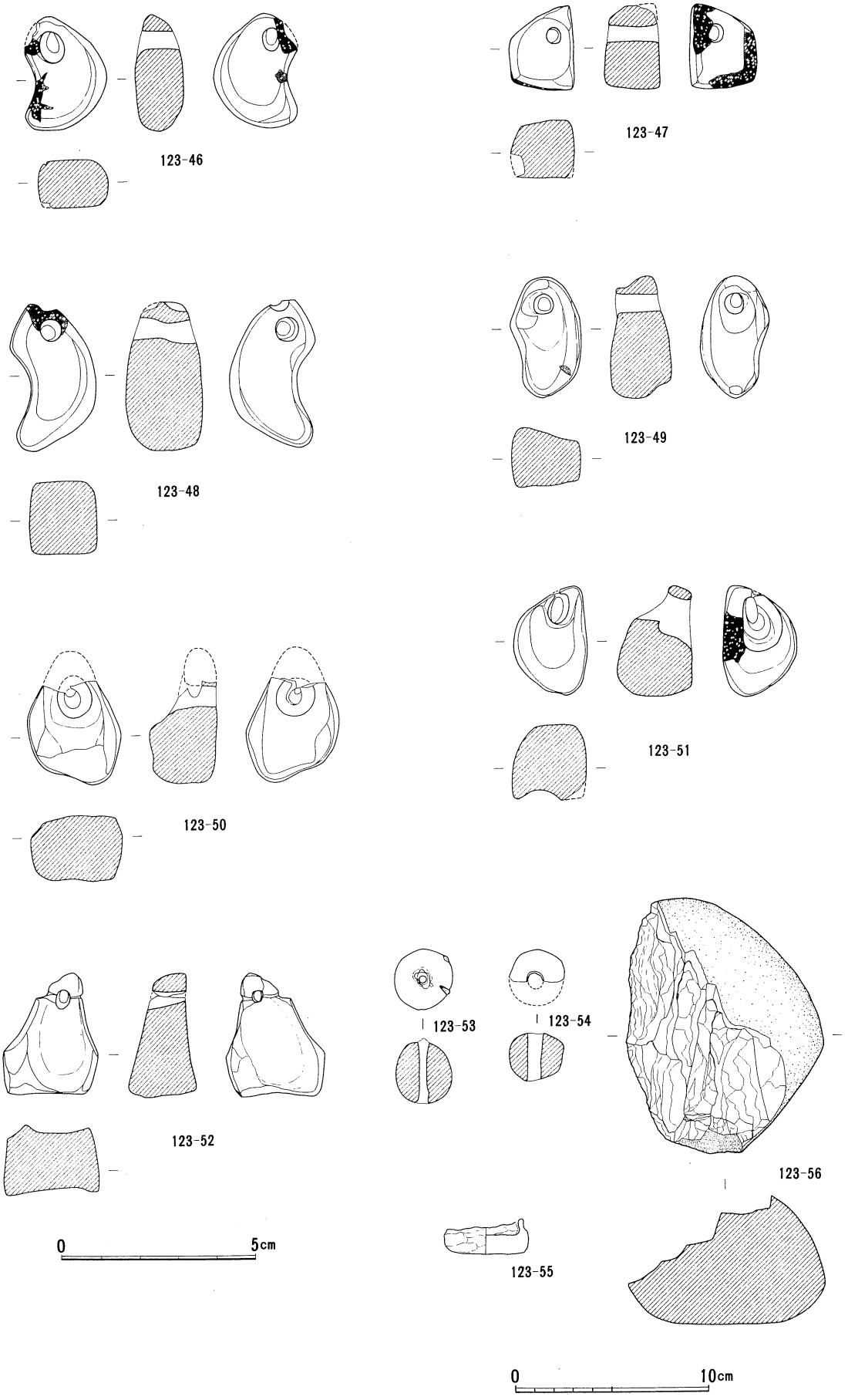
I　暗褐色　耕作撹乱表土層。
1a　暗褐色　粒やや粗い、締り弱い。
1b　暗褐色　粒細かい。
2a　暗褐色　ローム粒、2～3mm大、霜降状に多量に含む。
2b　暗褐色　ローム粒 2～3mm大含む。粘土B(カマドと推定される)周辺のみ粘土粒散る。
2c　褐色　ローム粒少量含む。

0 2m

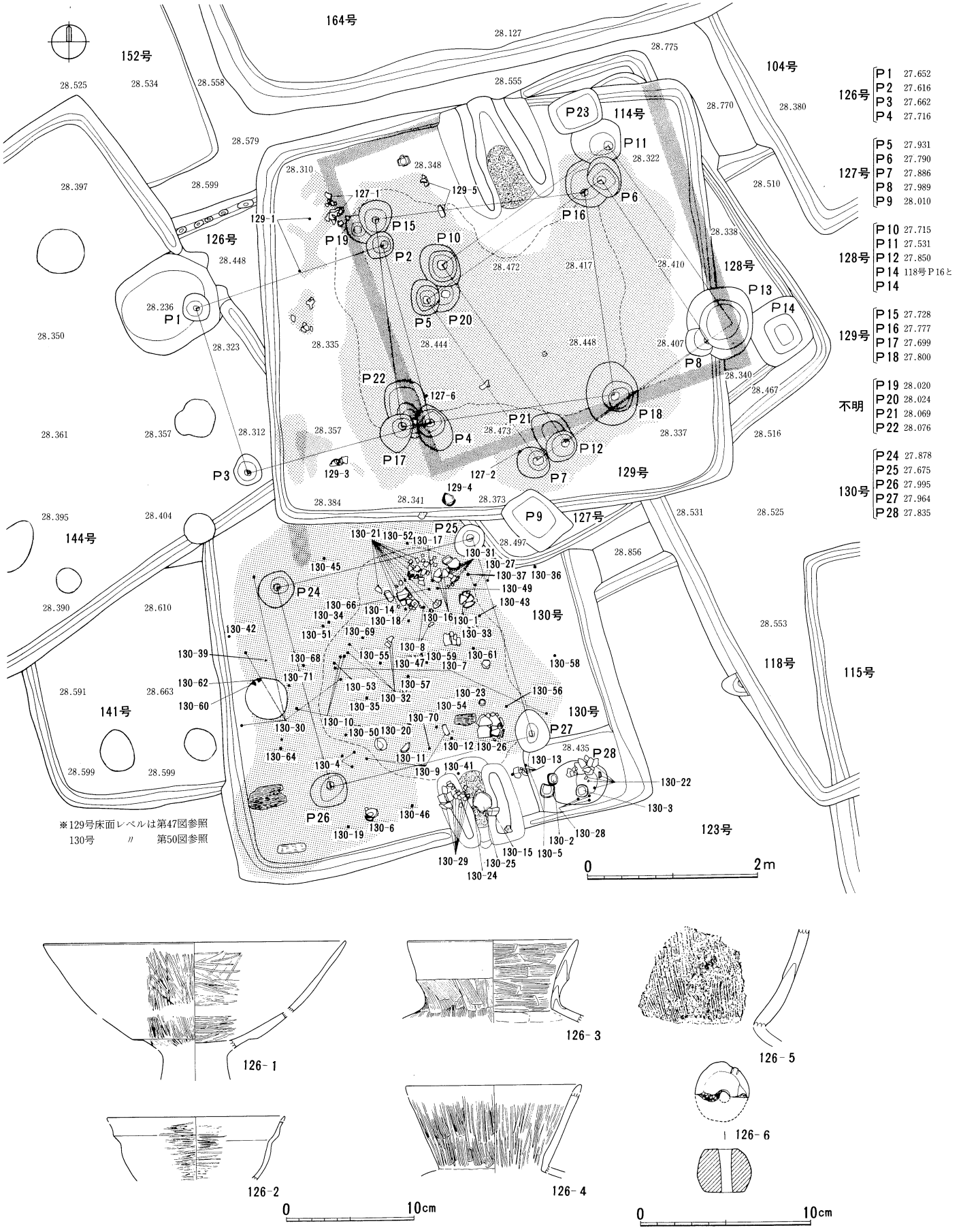
第51図　122～125号遺構実測図



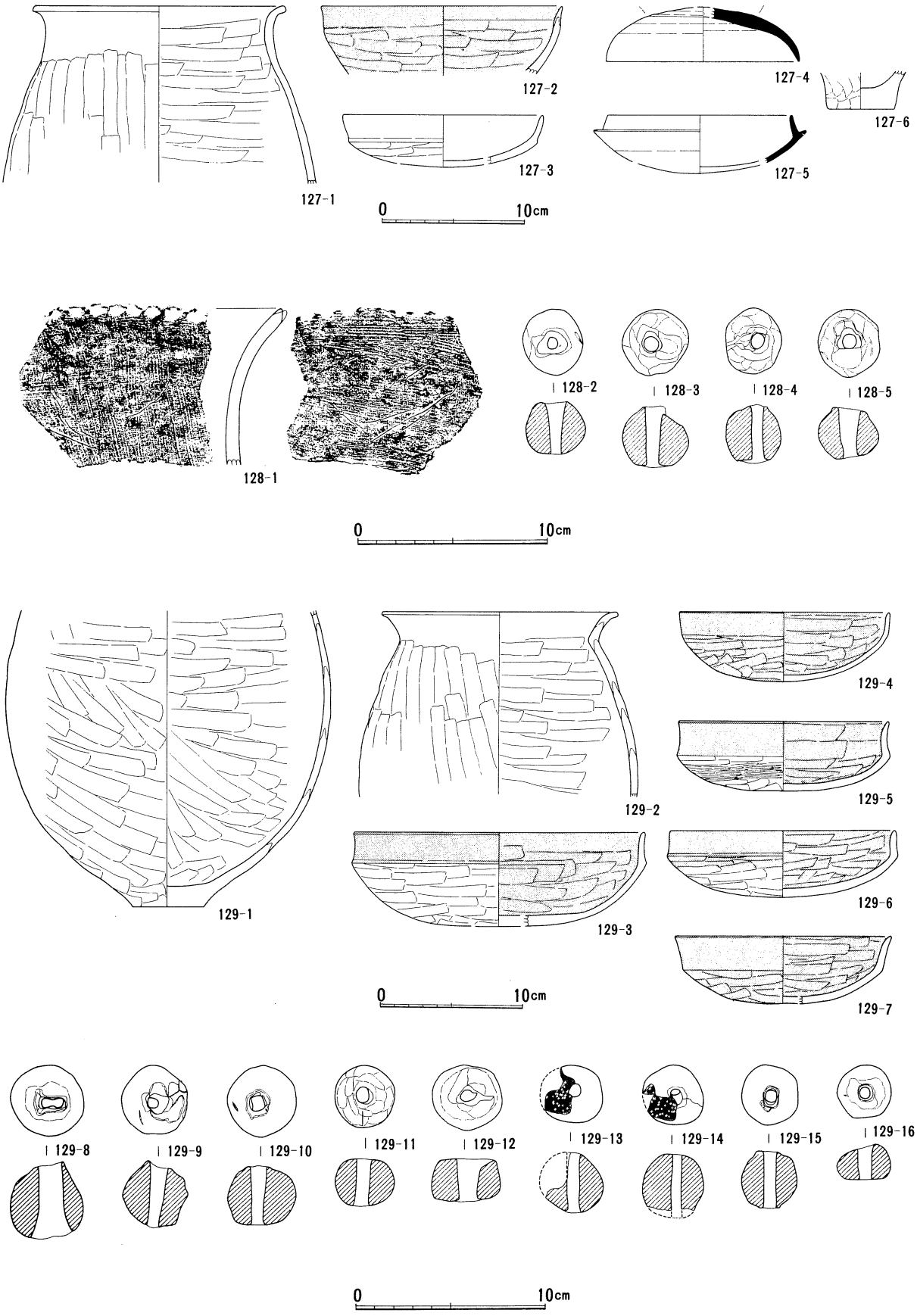
第52図　123号遺構出土遺物実測図



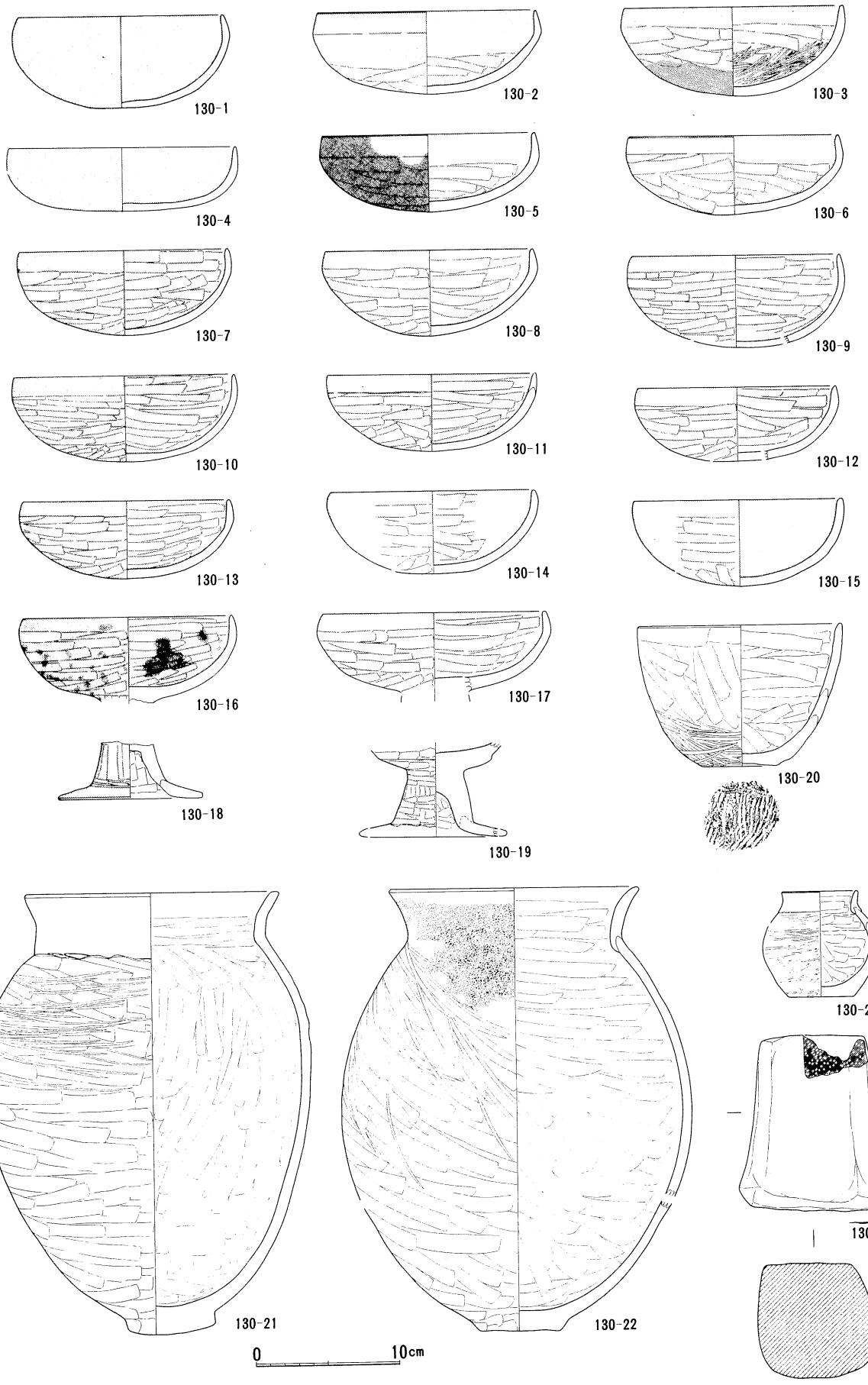
第53図　123号遺構出土遺物実測図



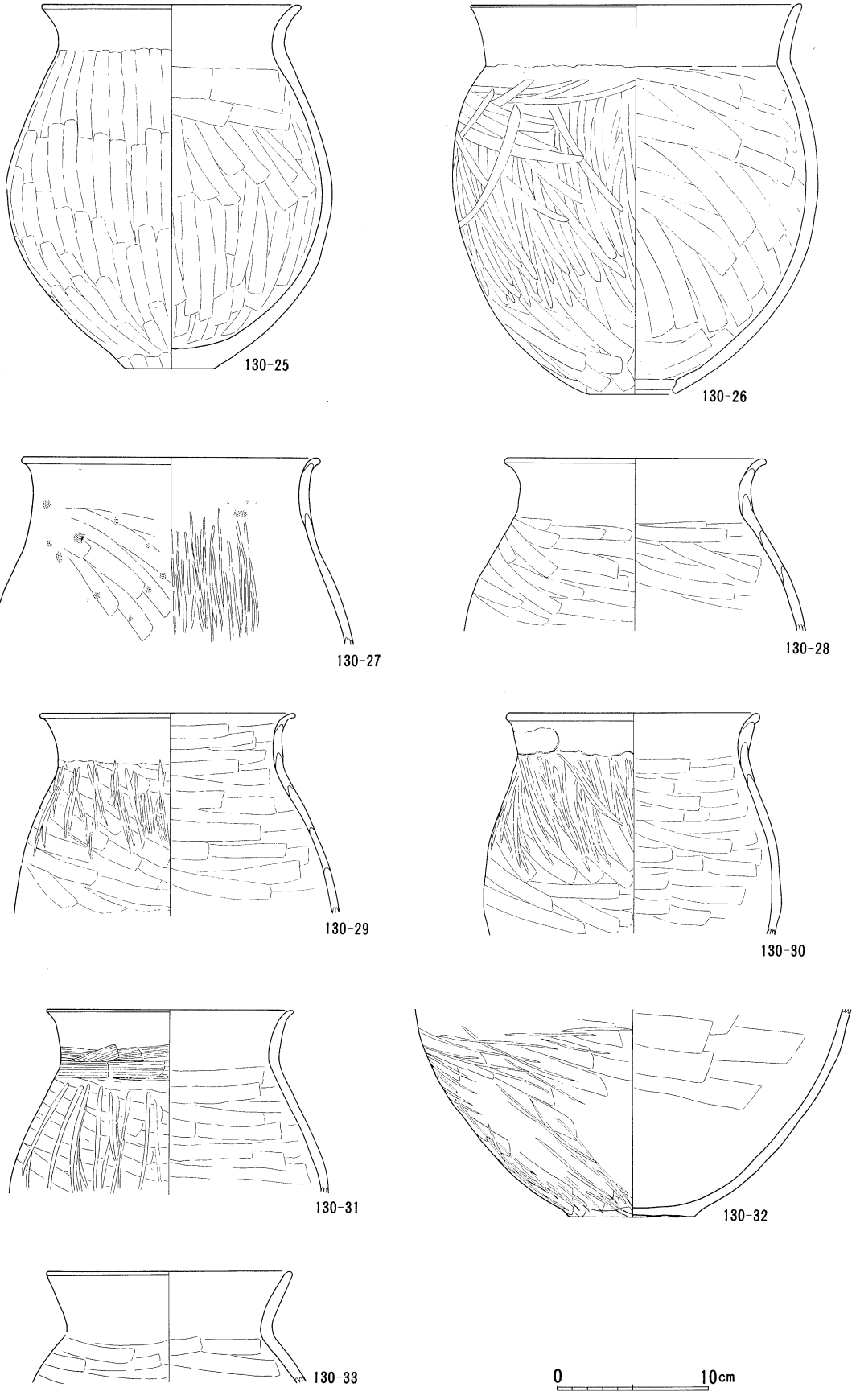
第54図　126～130号遺構実測図、126号遺構出土遺物実測図



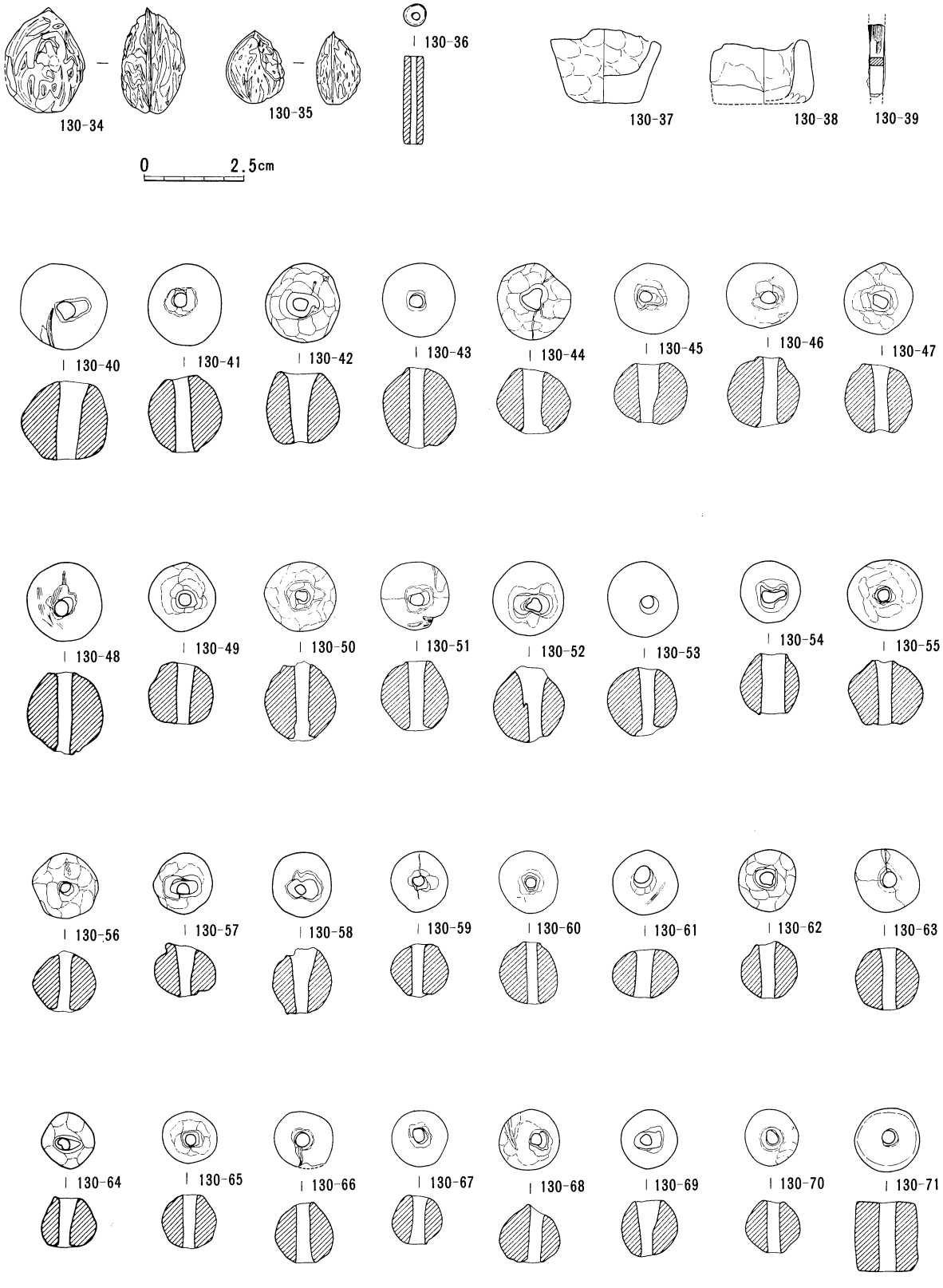
第55図　127～129号遺構出土遺物実測図



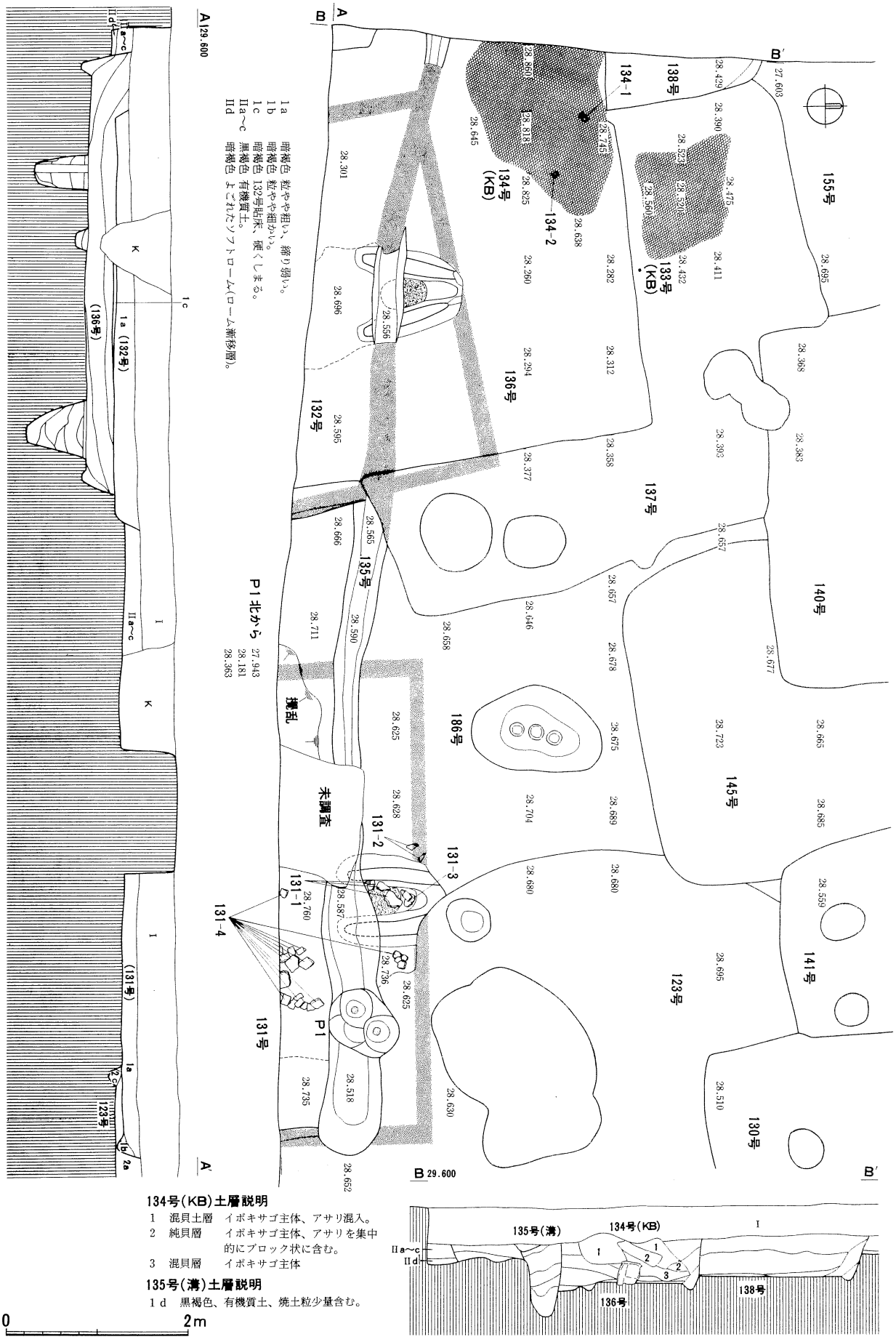
第56図　130号遺構出土遺物実測図



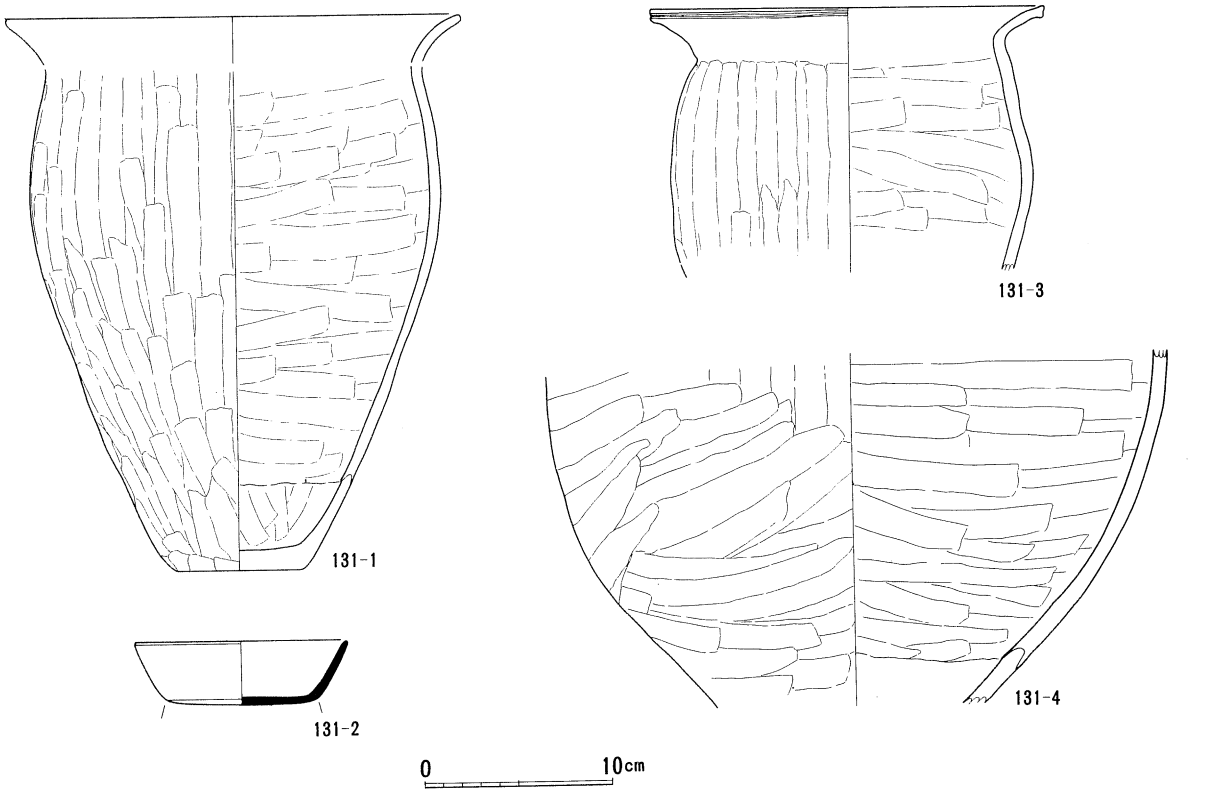
第57図　130号遺構出土遺物実測図

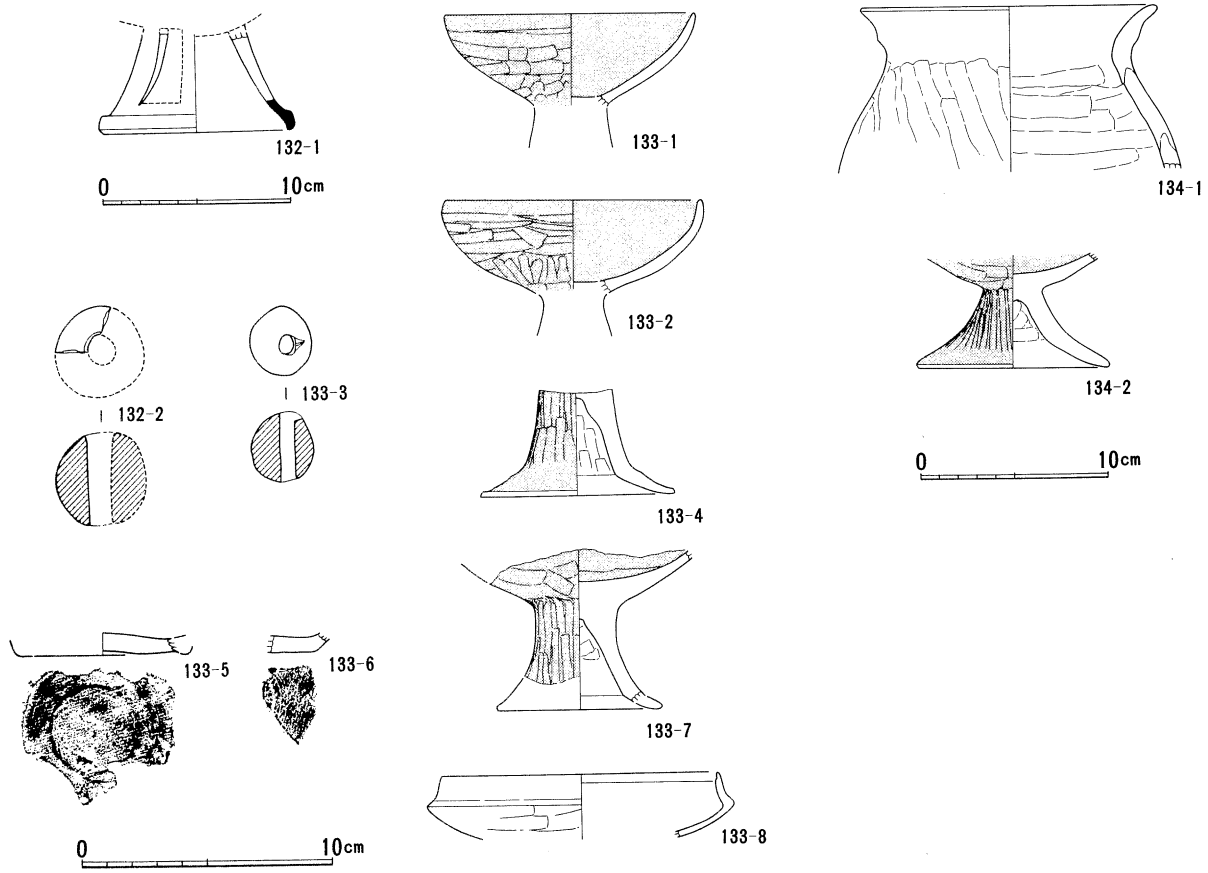


第58図　130号遺構出土遺物実測図



第59図 131～134号遺構実測図





第60図　131～134号遺構出土遺物実測図

136号焼土、炭化物は床面～16cm程の範囲で密着している。

0 2m

138号
- 1 黒褐色 有機質土、粘性強く締る。
- 2 暗褐色 ローム粒、ロームBやや多く含む、粘性強く締る。
- 3 暗褐色 ローム粒やや多く含む。
- 4 暗赤褐色 焼土粒散る。
- 5 褐 色 ローム粒、ロームB多量に含む。

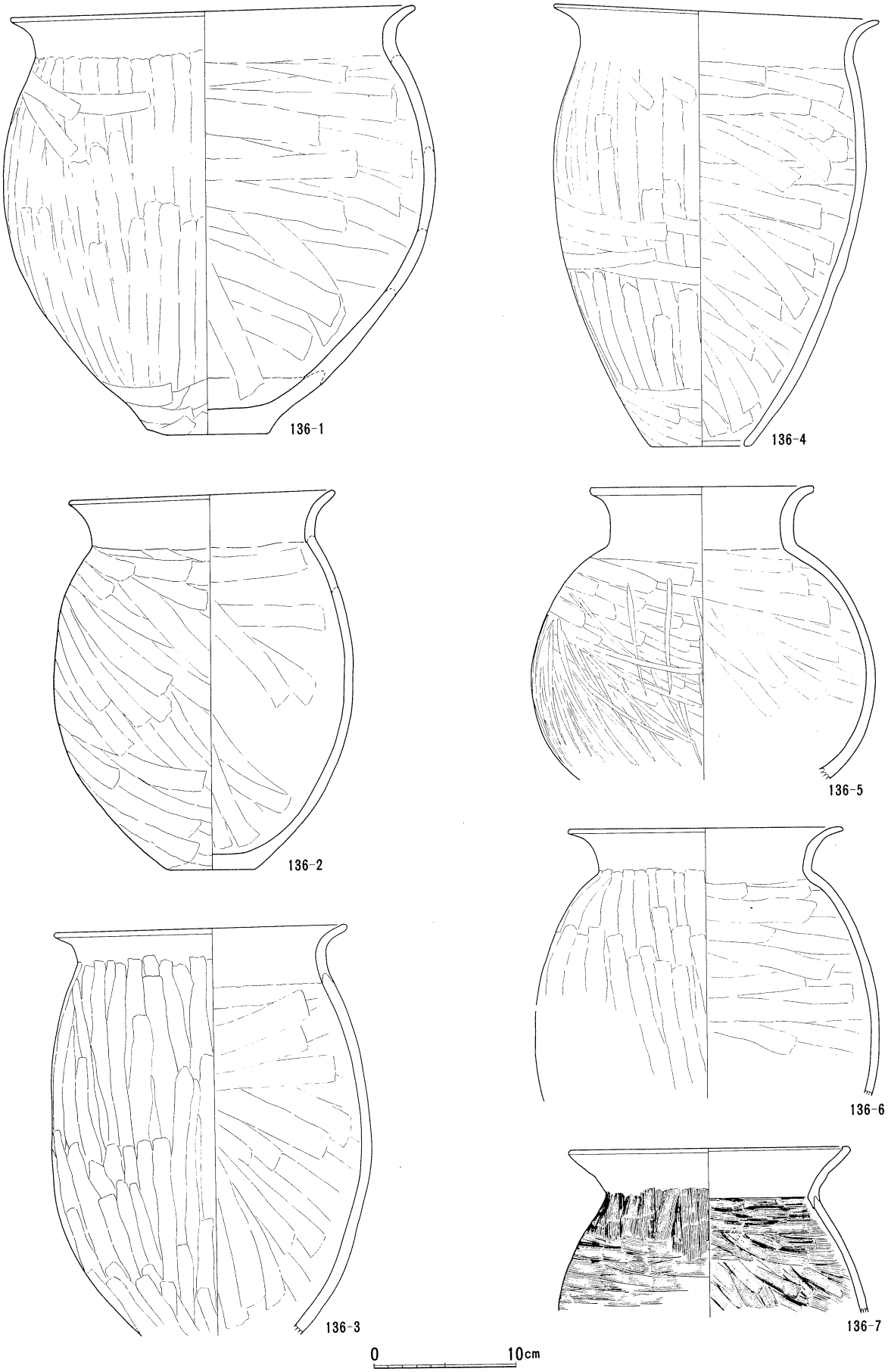
136号
- 6 黒褐色 有機質土、粘性強く締る、138号1層とよく似る。
- 7 暗褐色 ローム粒少量散る。
- 8 褐 色 ローム粒、ロームB(2～3cm大)やや多く含む。
- 9 褐 色 ローム粒多量に含む。
- 10 暗褐色 有機質土中に焼土粒、炭化物、粘土Bを含む。
- 11 褐 色 ローム粒やや多く含み締り弱い。
- 12 褐 色 ローム粒、ロームBやや多く含み、床面状に硬く締る。
- 13 暗灰色 粘土、焼土粒多量に含む。
- 14 白灰色 粘土、136号カマド天井部か？
- 15 褐 色 ローム粒、ロームBやや多く含む。
- 16 暗褐色 貼床、ローム粒、ロームBをやや多く含み、硬く締っている。
- 17 褐 色 ローム粒、ロームB多量に含む。
- 18 暗褐色 ローム粒少量含む、やや締り欠く。
- 19 褐 色 ロームB主体、やや締り欠く。
- 20 暗褐色 ローム粒、ロームB少量含む。
- 21 暗褐色 粒粗、締り欠く、柱痕跡。
- 22 褐 色 ロームB。
- 23 褐 色 ロームB中に有機質土少量混じえる。

他遺構pit(P8)
- a 黒褐色 焼土粒少量含む。
- b 黒褐色 ローム粒、粘土粒少量含む。
- c 暗褐色 ローム粒、焼土粒少量含む。
- d 暗褐色 粘土粒多量に含む、炭化物少量含む。
- e 暗褐色 ローム粒、粘土粒、炭化物含むやや締りなし。

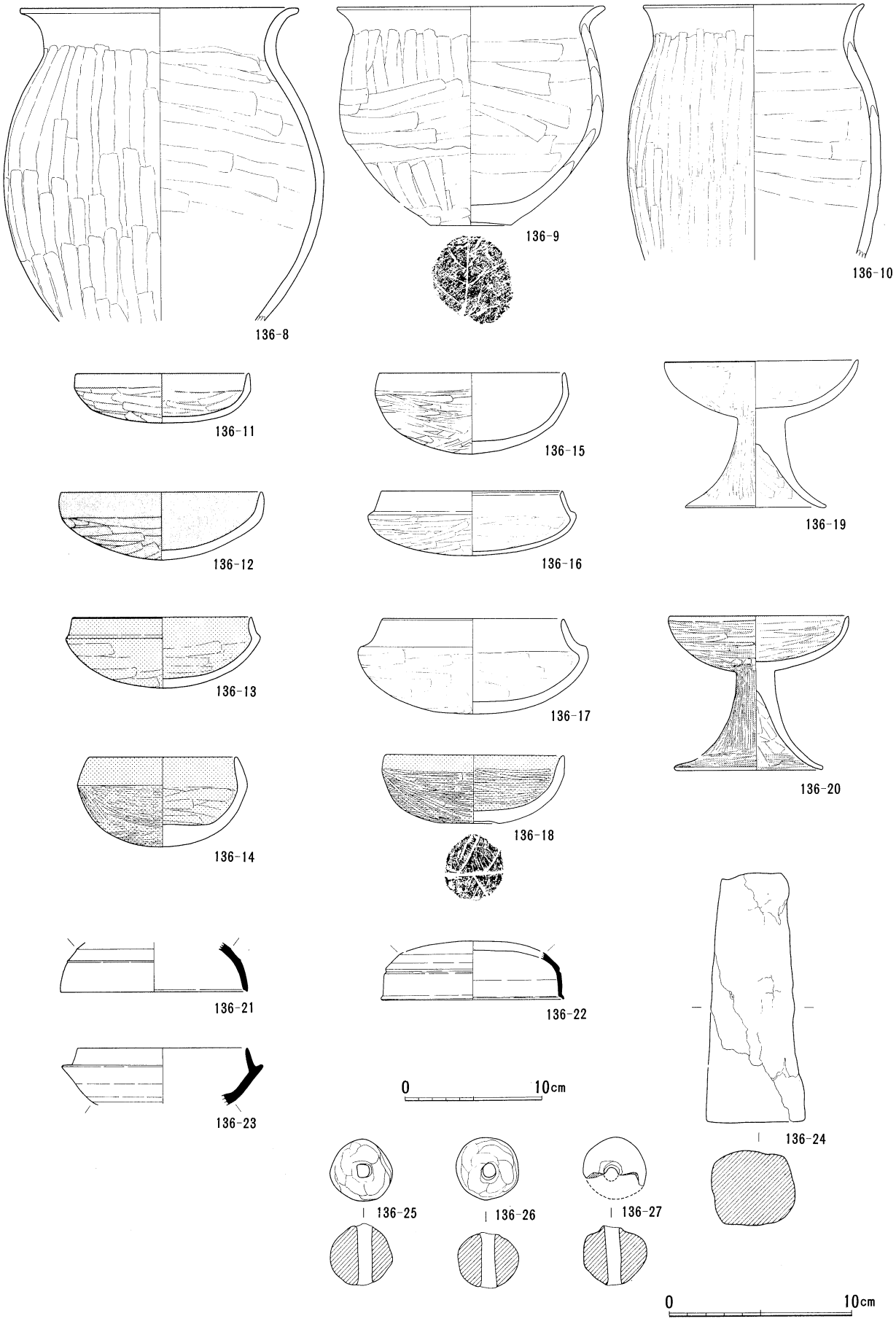
136号

P1	27.777	P9 西	27.895	P13 北から	27.993
P2	27.744	東	27.901		27.892
P3	27.734	P10 北から	27.951		27.692
P4	27.609		27.979	P14 西から	27.896
P5	28.160		27.891		27.694
P6	27.548		27.704		28.044
P7	27.975		27.948	P15	27.904
P8	28.100	P11 西	27.882	P16	27.614
		東	27.912	P17 北から	28.135
		P12 西から	27.888		28.140
			27.730		
			27.796		
			28.084		

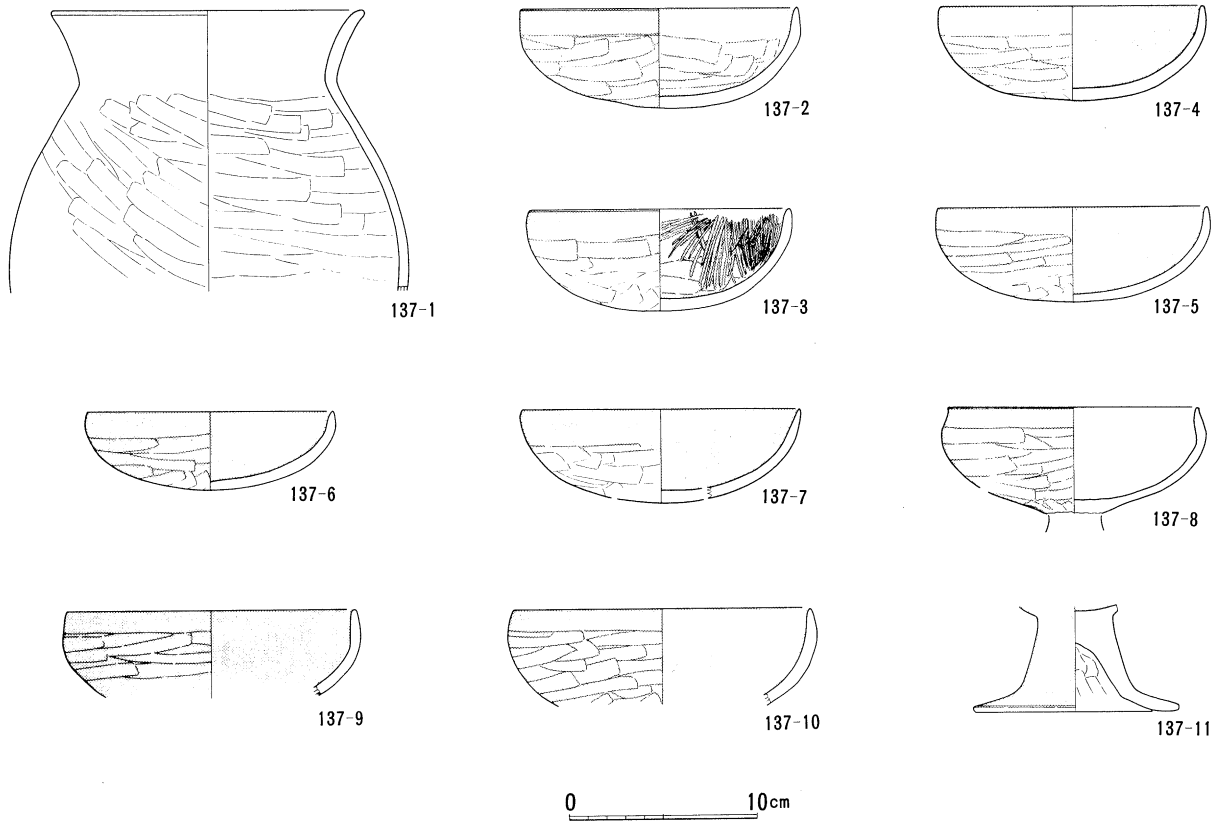
第61図 136～138号遺構実測図



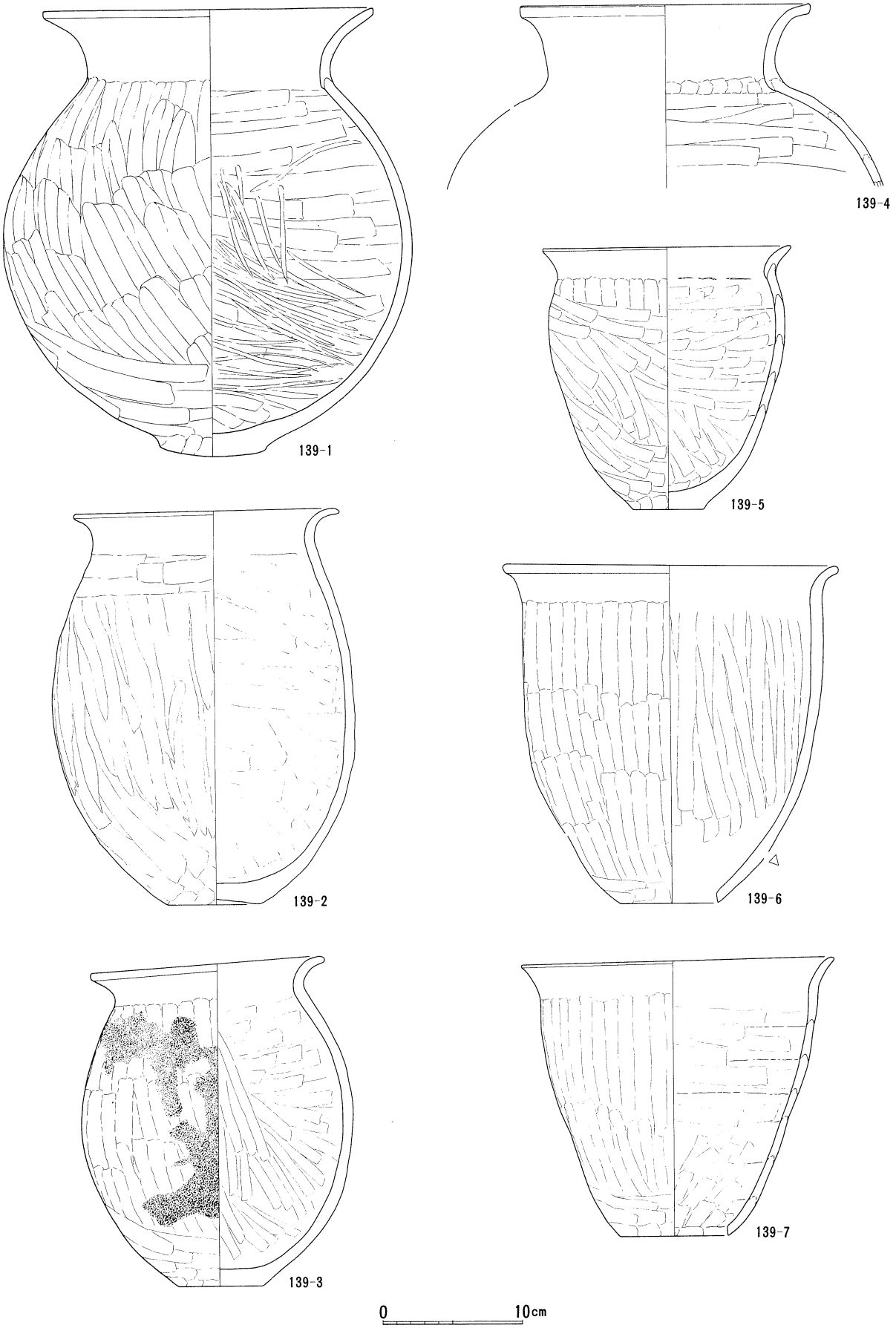
第62図　136号遺構出土遺物実測図



第63図　136号遺構出土遺物実測図

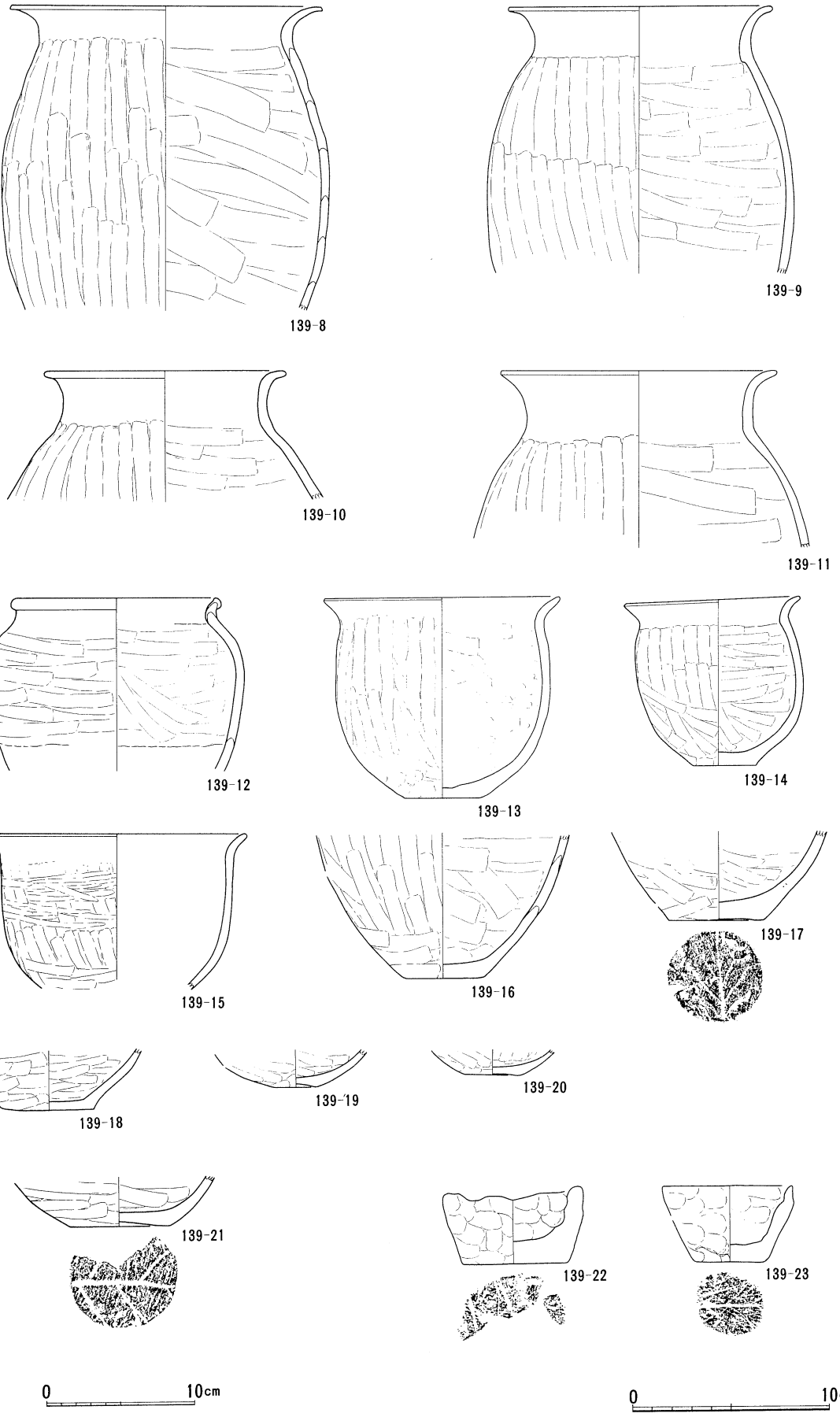


第64図　137・138号遺構出土遺物実測図

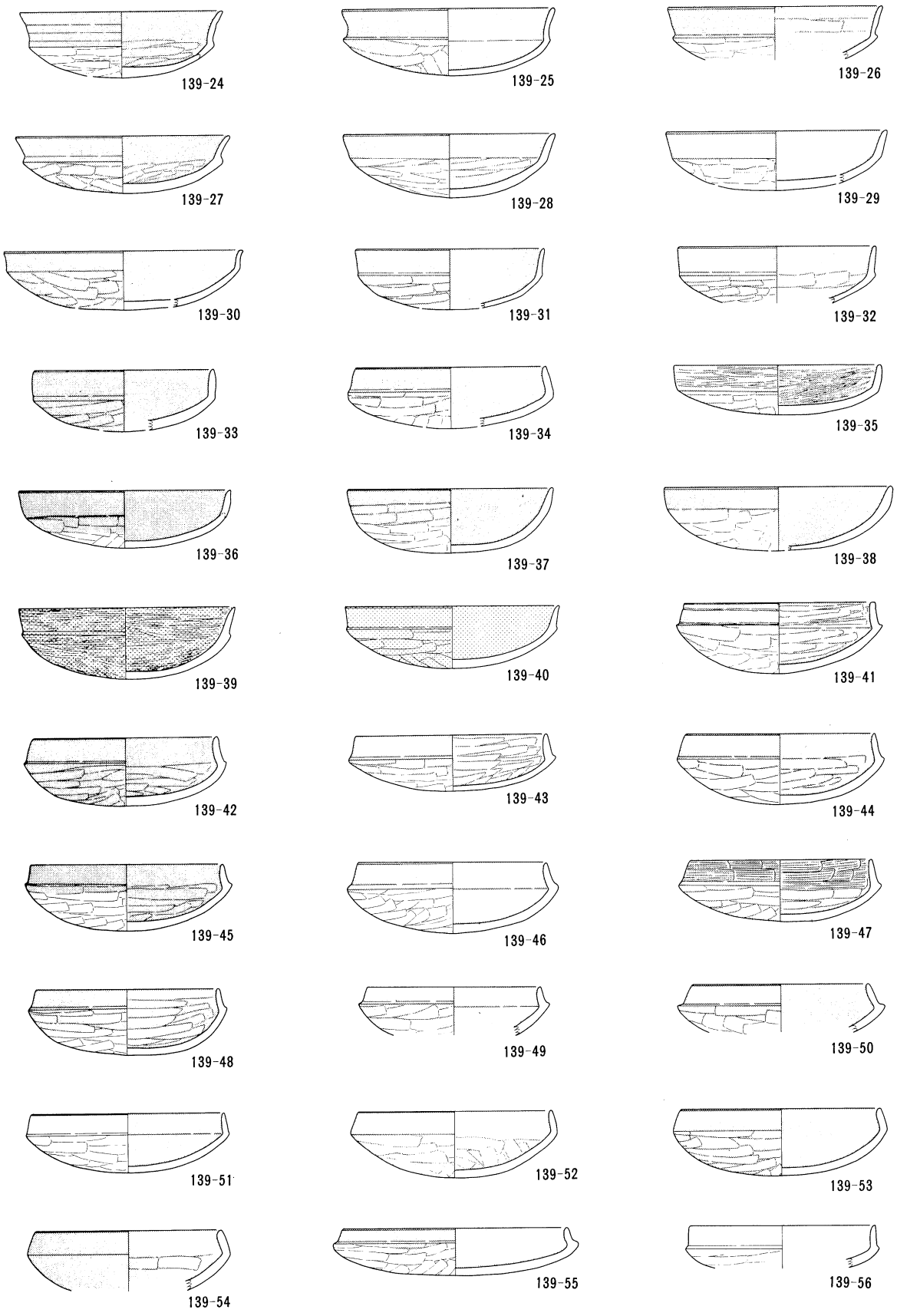


第65図　139号遺構出土遺物実測図

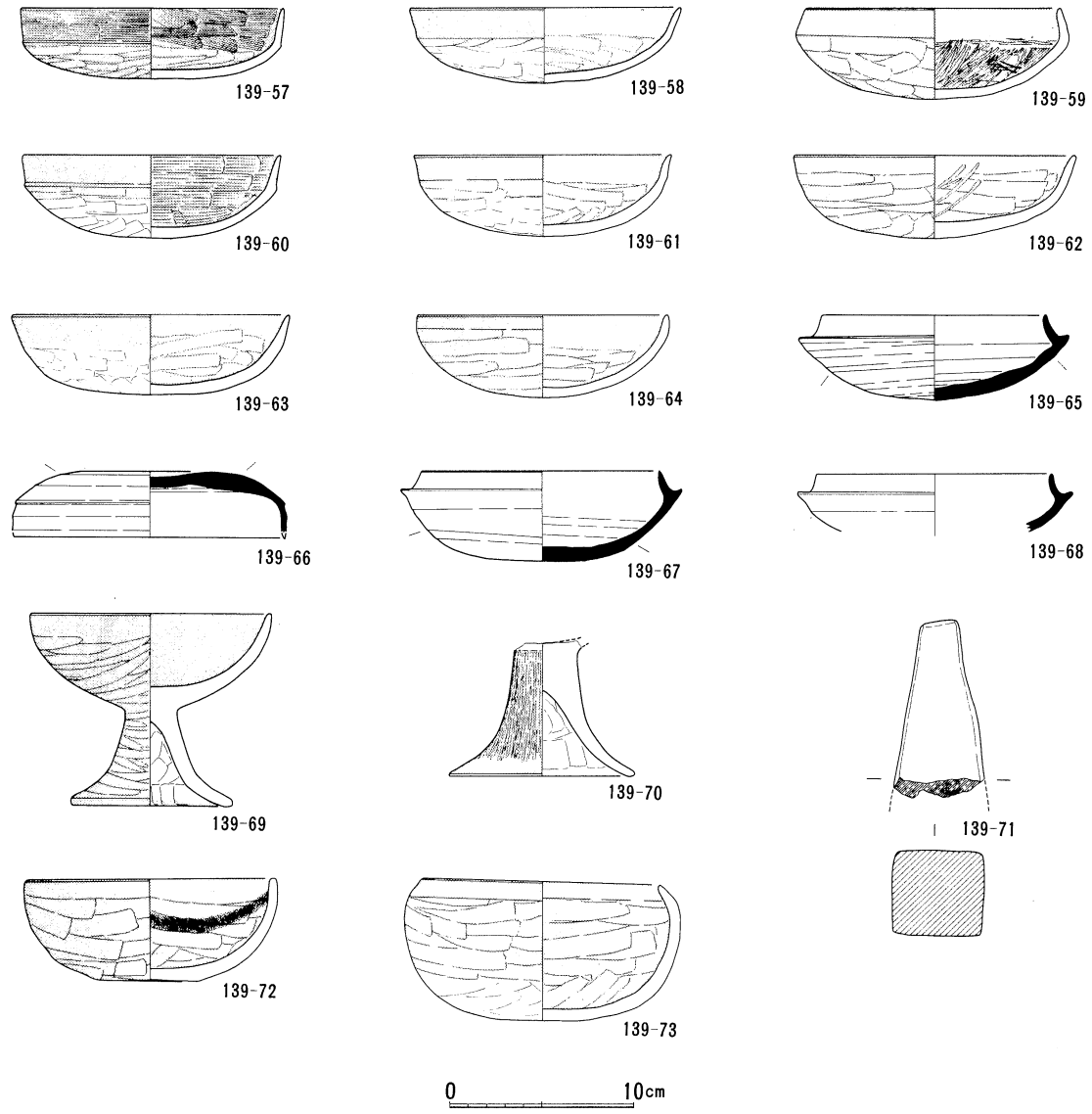
第66図　139～155号遺構実測図

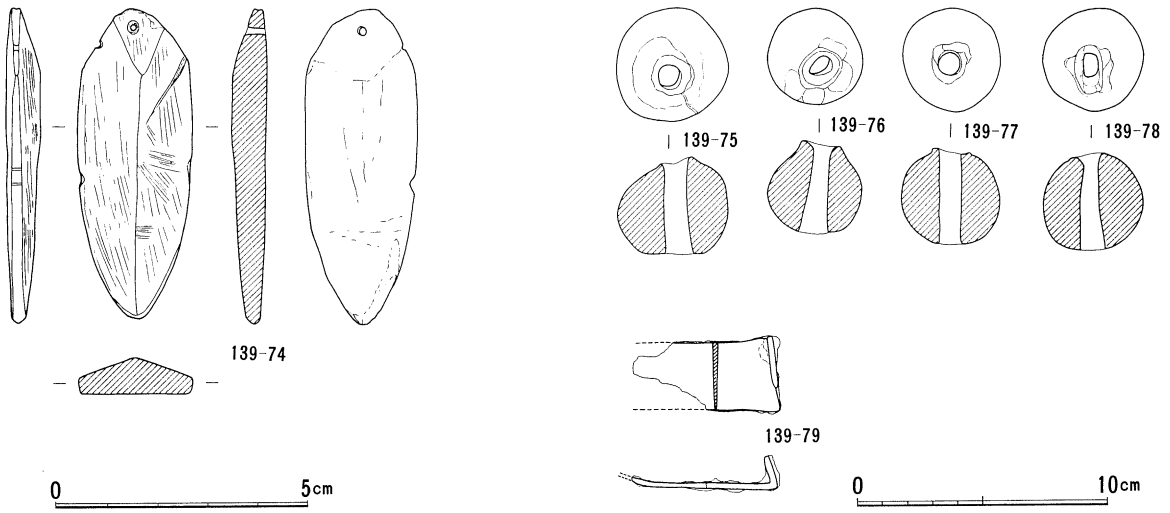


第67図　139号遺構出土遺物実測図

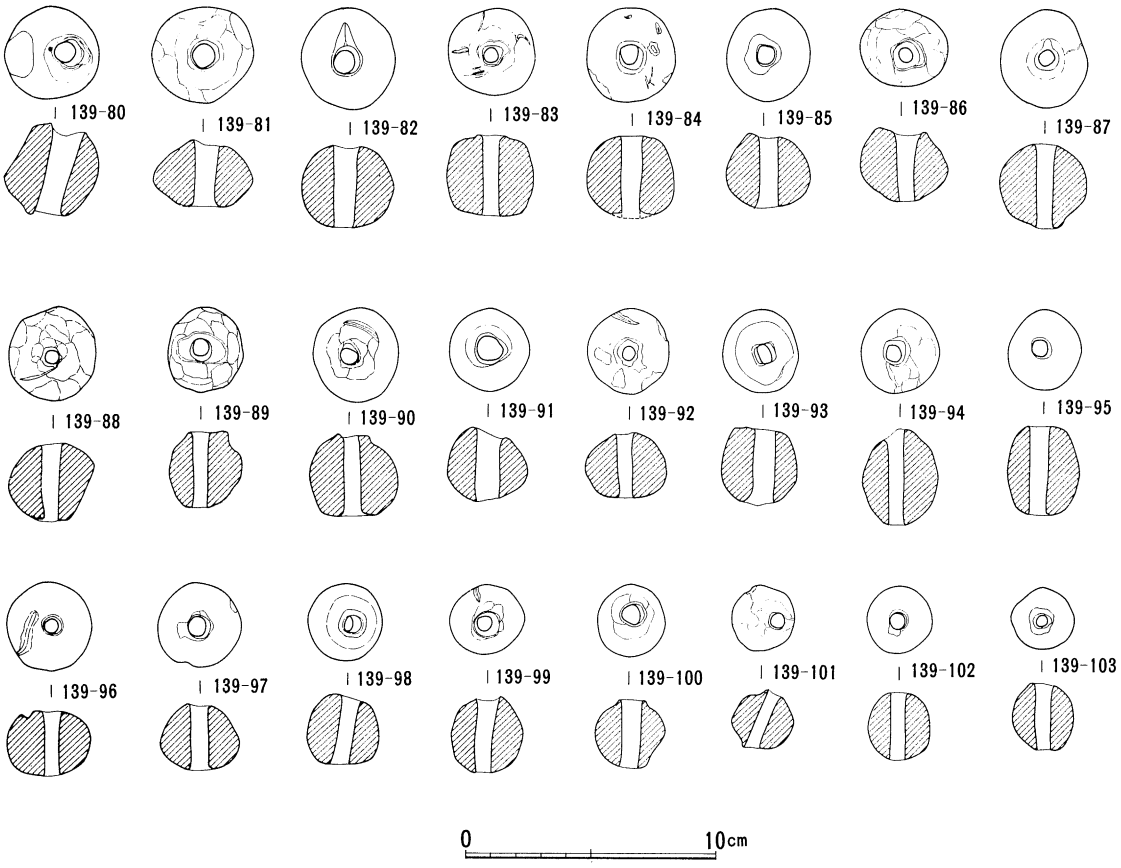


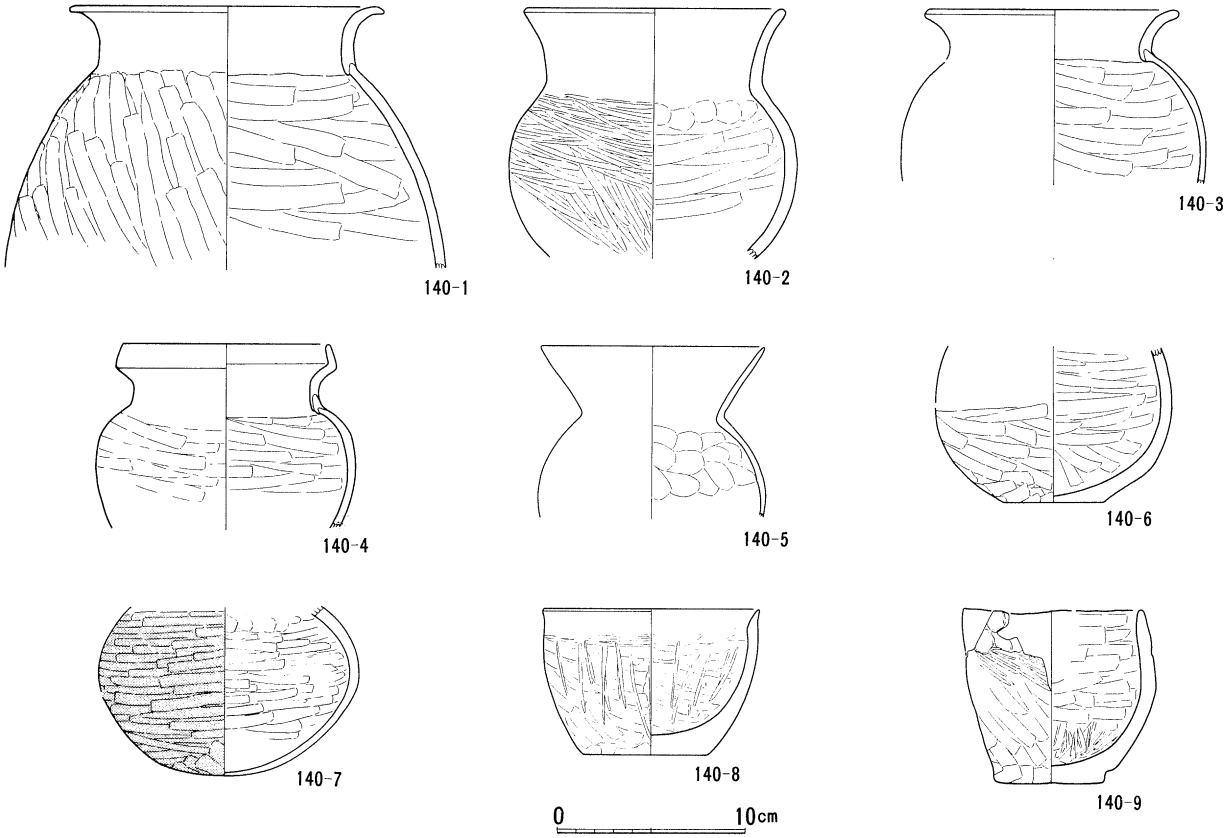
第68図　139号遺構出土遺物実測図



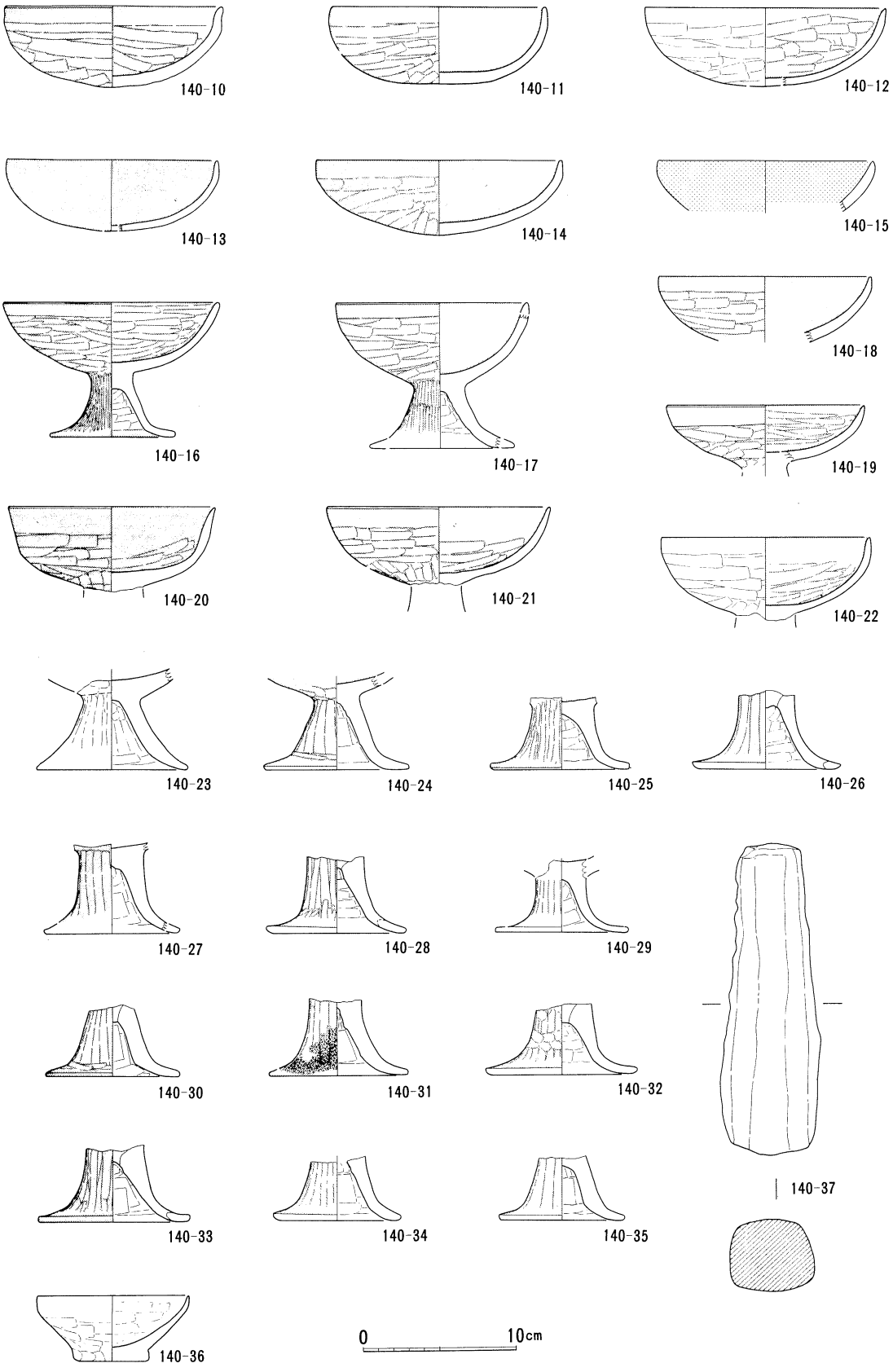


第69図　139号遺構出土遺物実測図

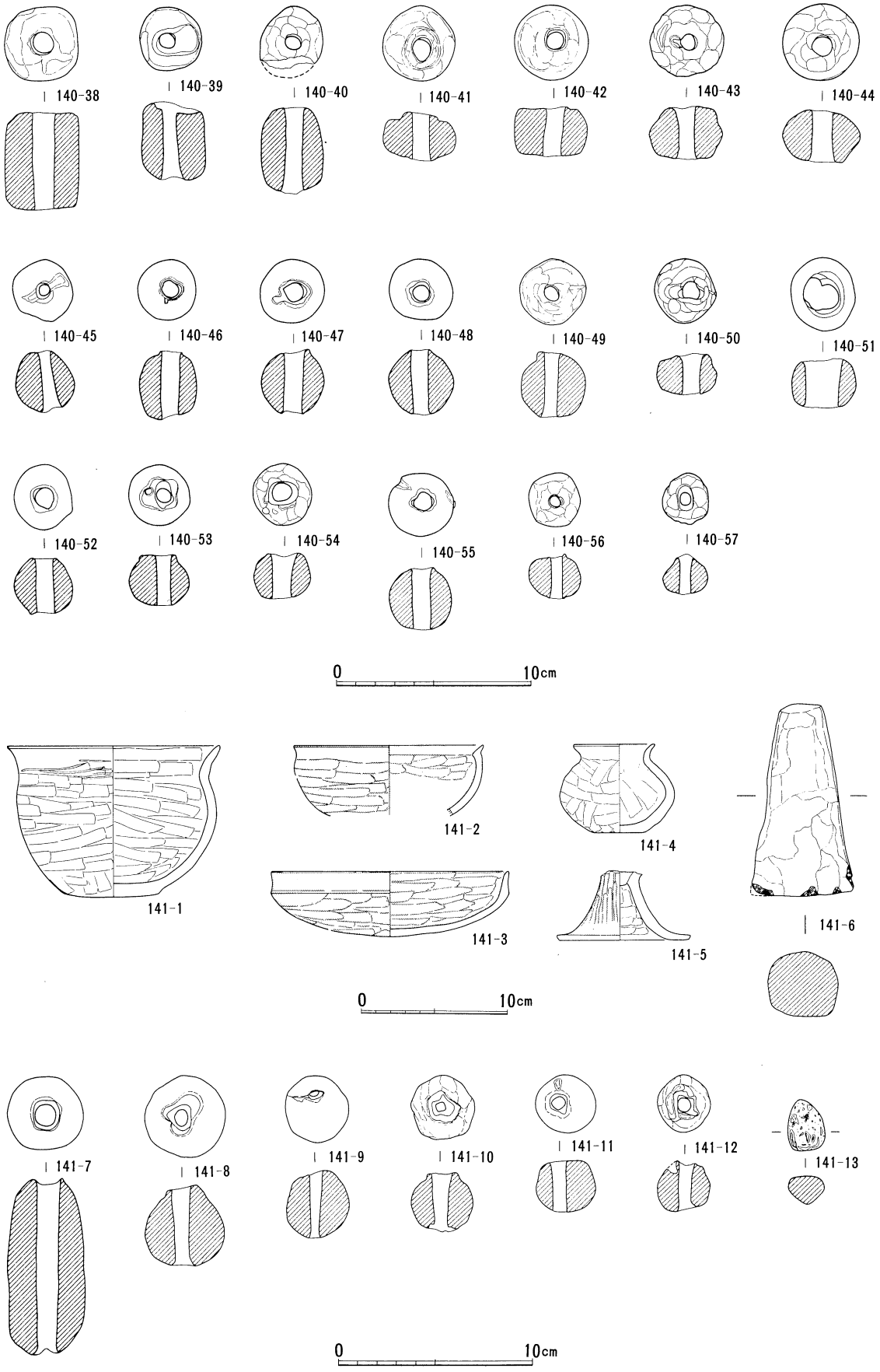




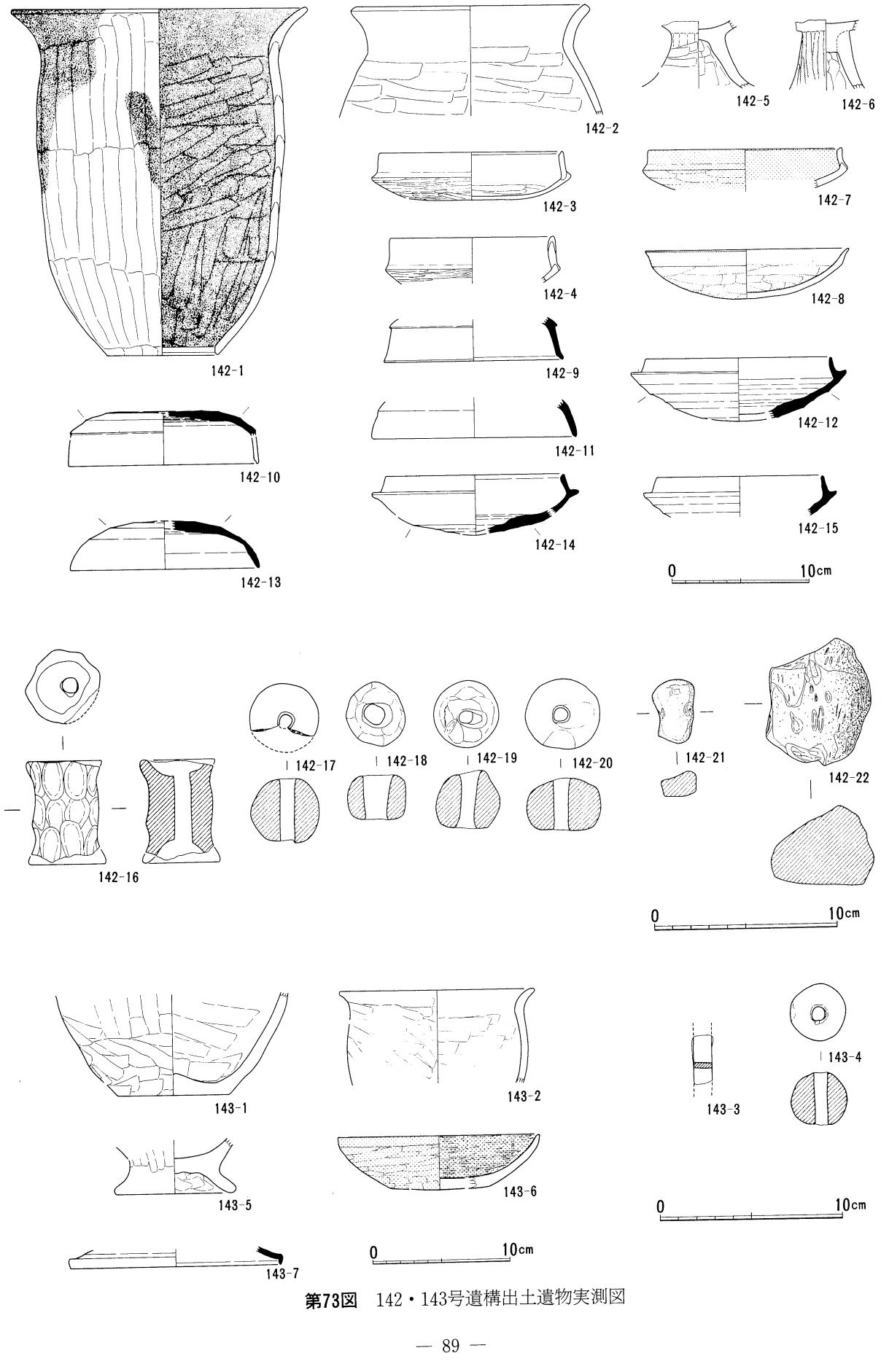
第70図　139・140号遺構出土遺物実測図



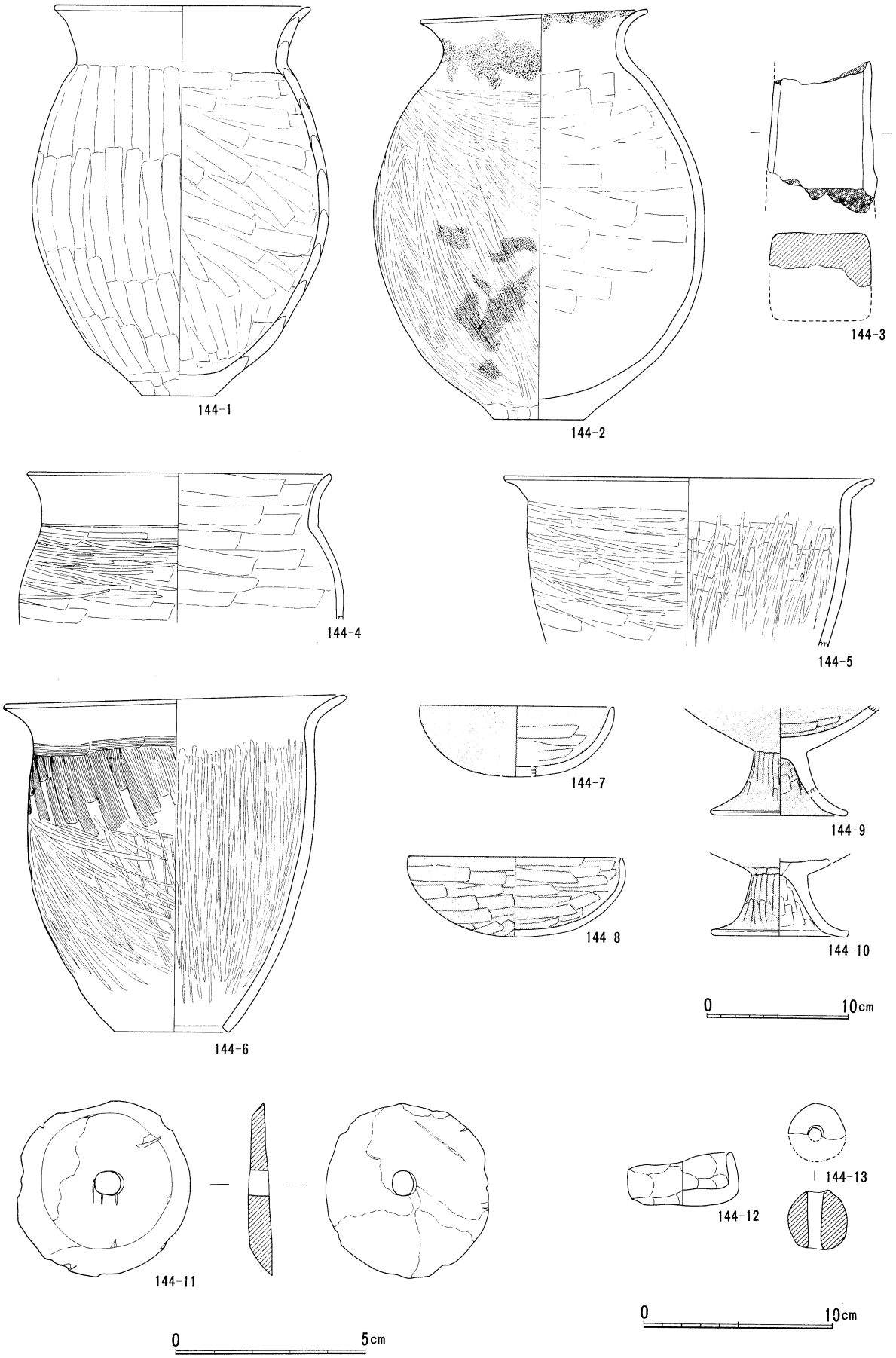
第71図　140号遺構出土遺物実測図



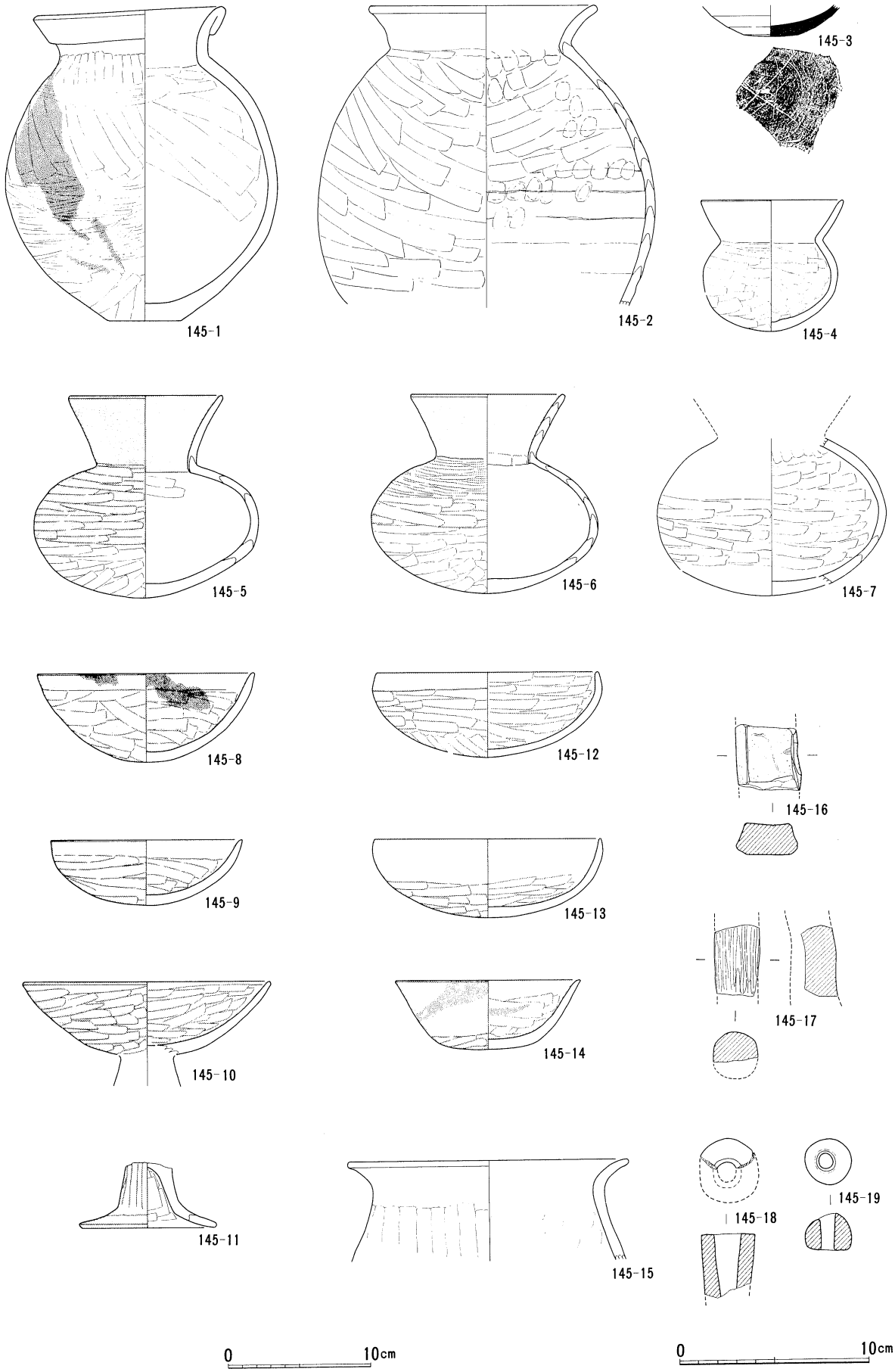
第72図　140・141号遺構出土遺物実測図



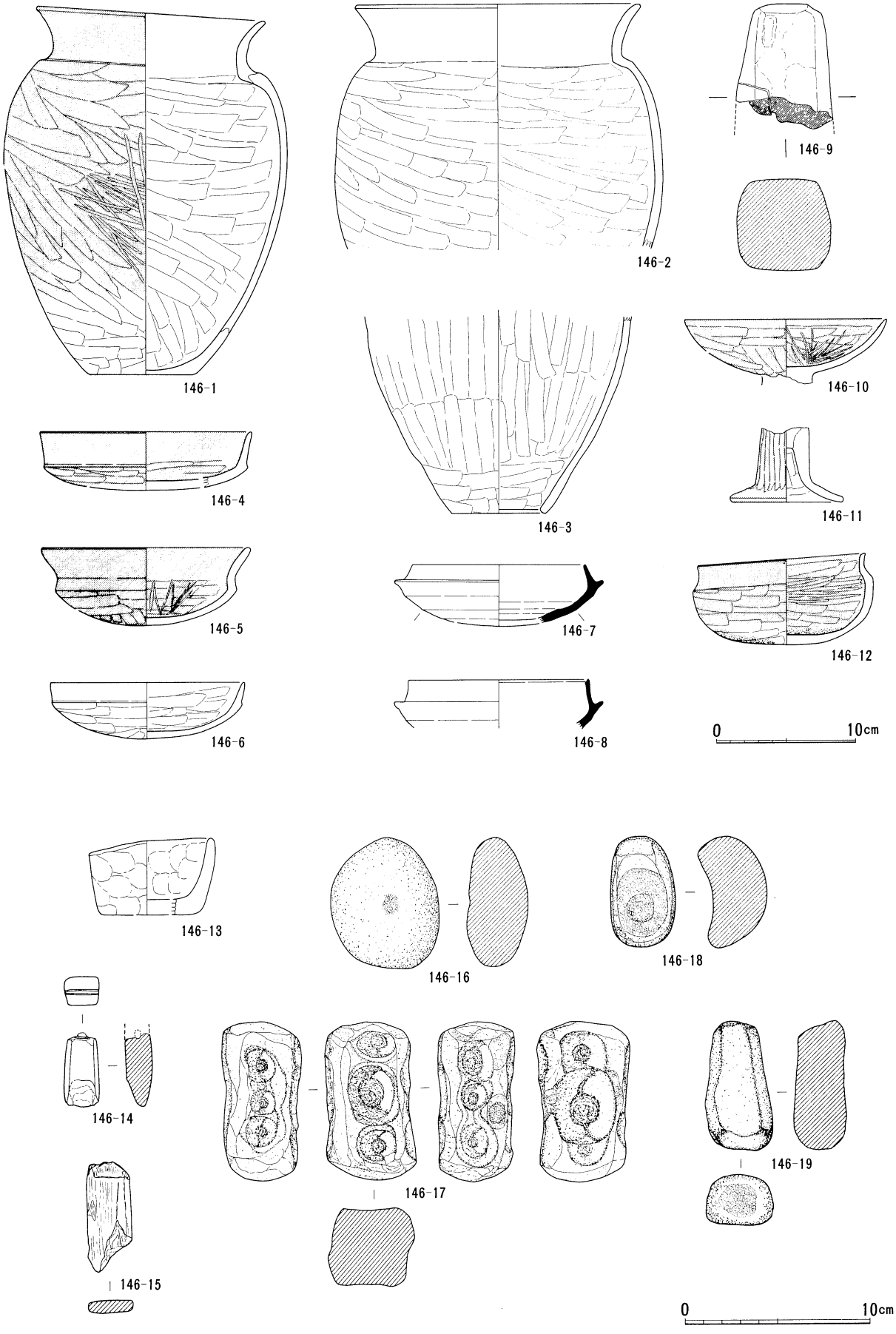
第73図　142・143号遺構出土遺物実測図



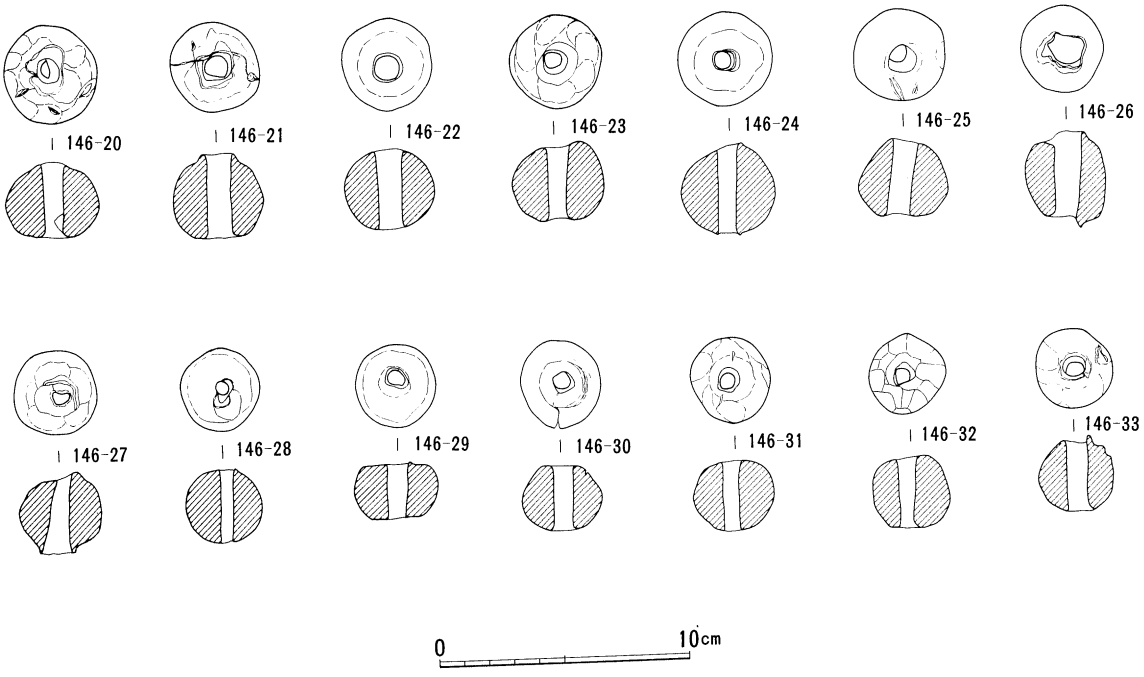
第74図　144号遺構出土遺物実測図

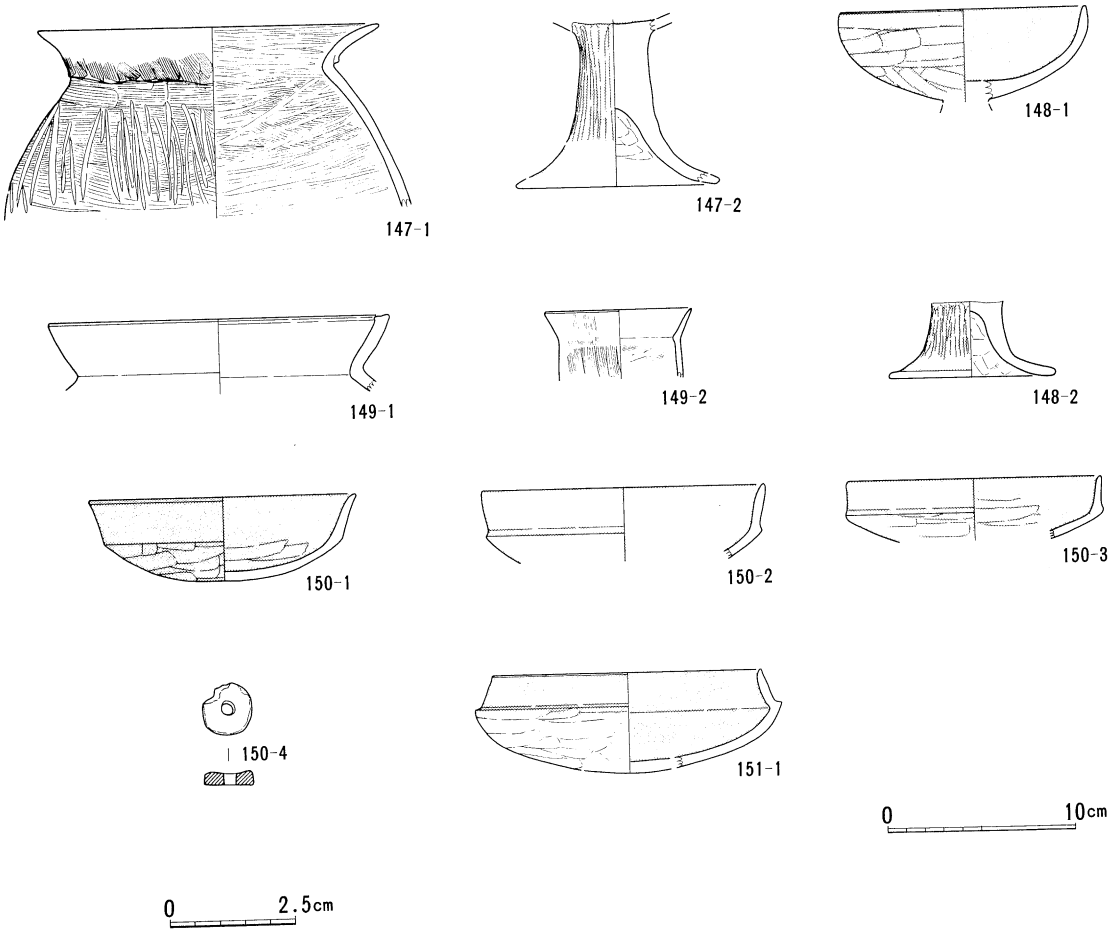


第75図　145号遺構出土遺物実測図

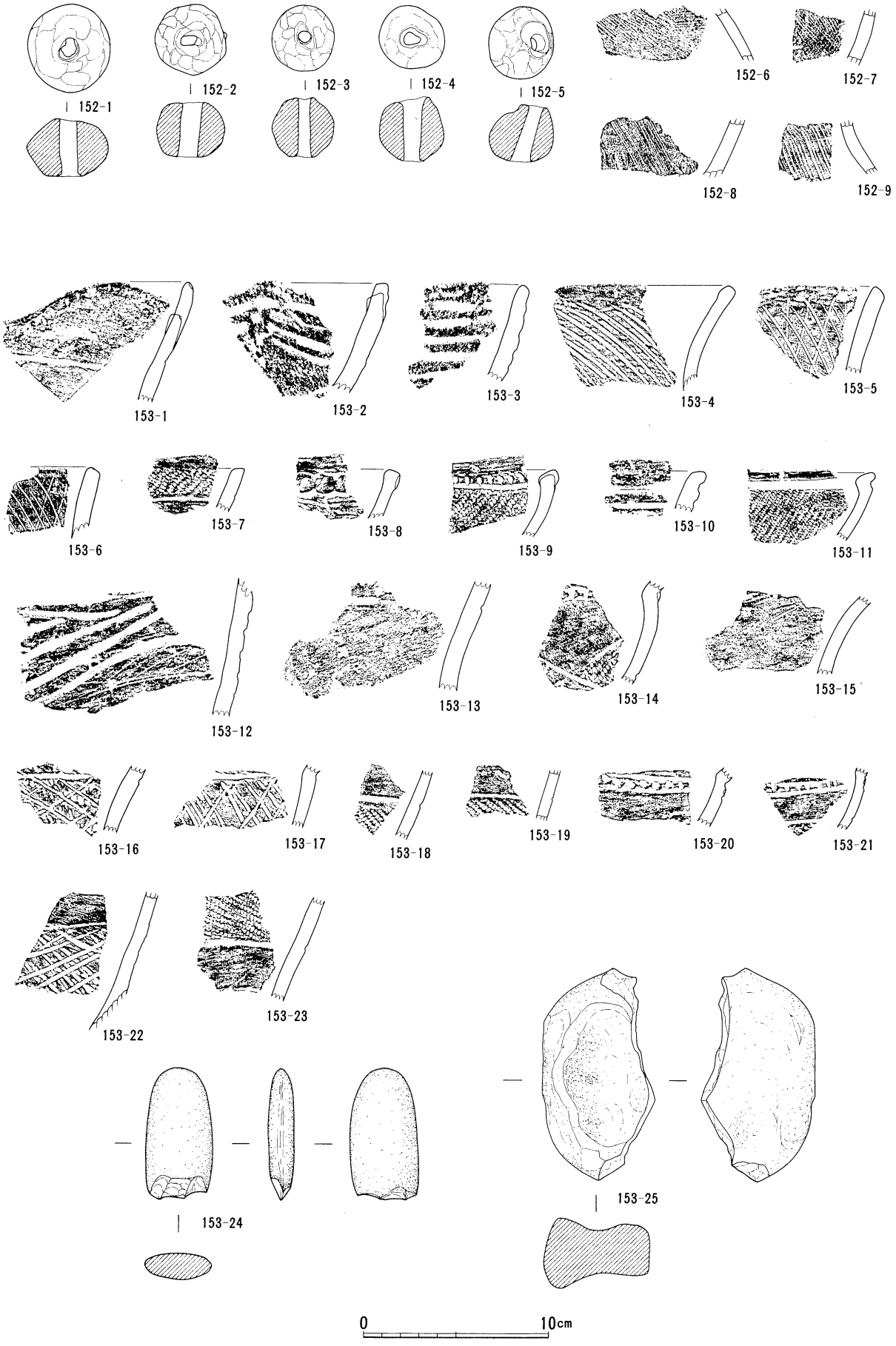


第76図　146号遺構出土遺物実測図





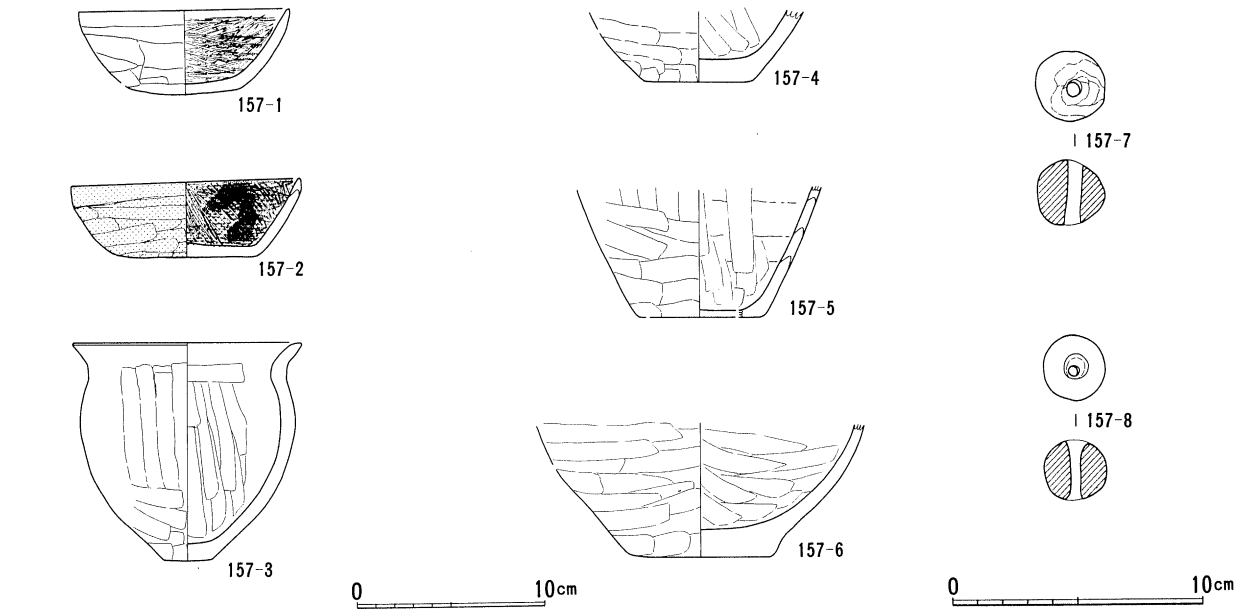
第77図　146～151号遺構出土遺物実測図

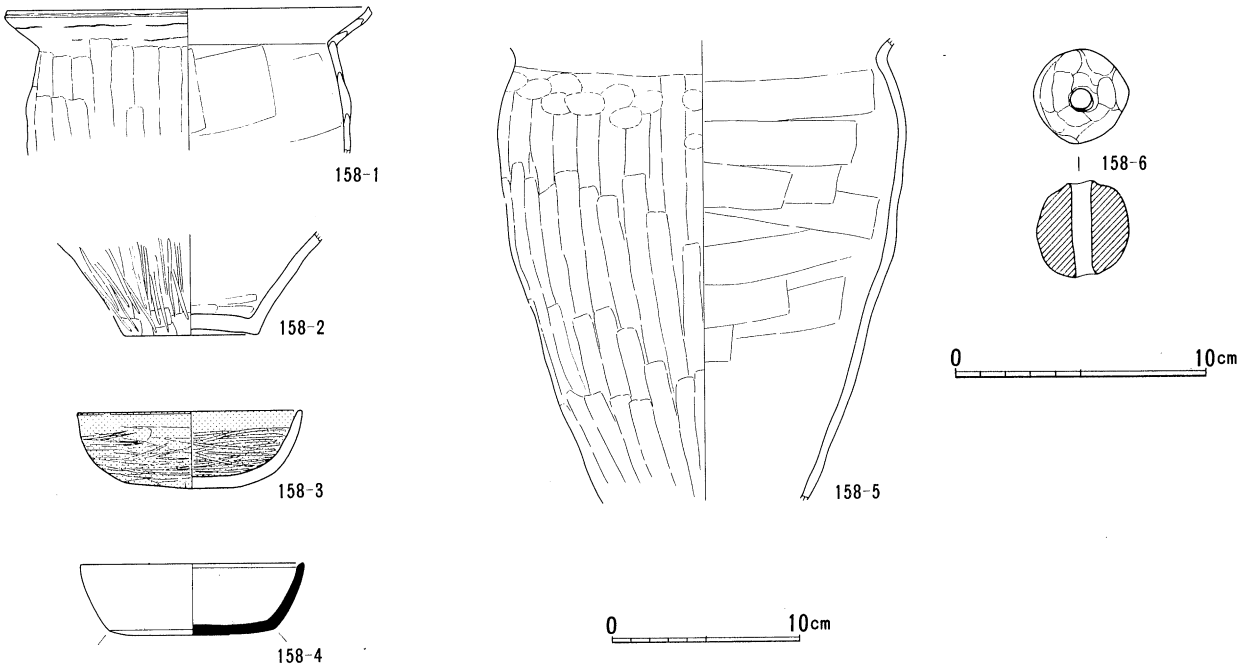


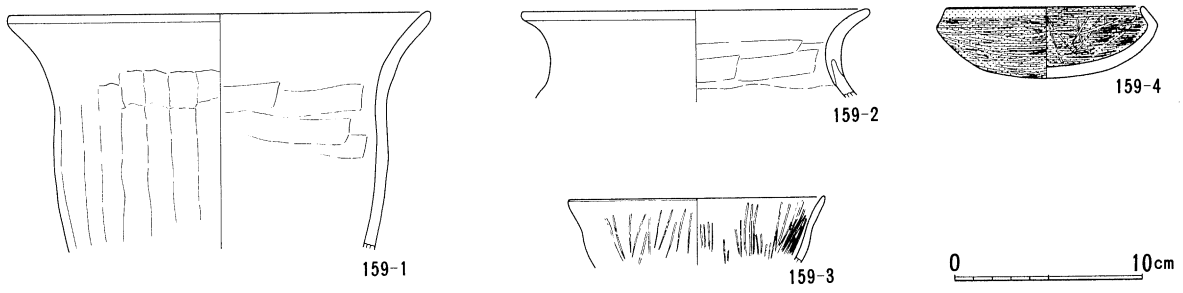
第78図　152・153号遺構出土遺物実測図

157号	P1		27.795
	P2		27.832
	P3		27.840
	P4		27.843
158号	P5		27.705
	P6		27.676
	P7		27.713
	P8		27.697
	P9		27.680
159号	P10		27.560
	P11		27.432
	P12	西	27.566
	P13		27.542
	P14		27.610
160号	P15	北	27.719
		南	27.756
	P16	北	27.955
		南	27.789
	P17	北	27.708
		南	27.705
	P18	東	27.885
		南	27.852
162号	P18	北	27.918
		西	27.787
	P19	北	27.901
		南	27.836
	P20	西	27.994
		東	27.967
	P21	北	27.939
		南	27.885
161号	P22	東	27.616
		西	27.680
	P23		27.638
	P27		27.786
	P24	北	27.842
		東	27.342
		南	27.377
	P25		27.796
	P26		27.718
	P29		27.750
163号	P28		27.600
	P12	東	27.497
	P29	南	27.610
	P30		27.744

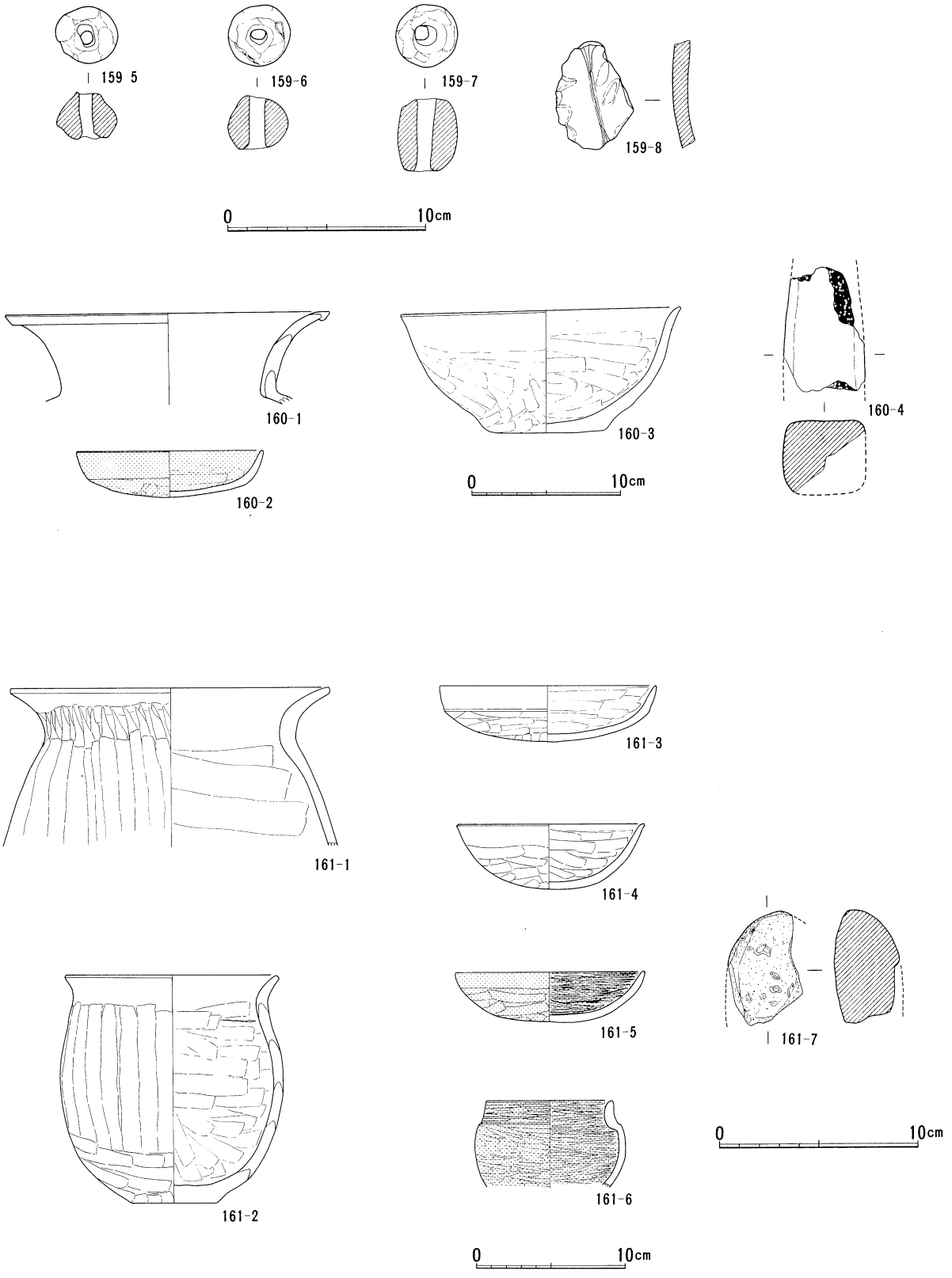
第79図　157～163号遺構実測図



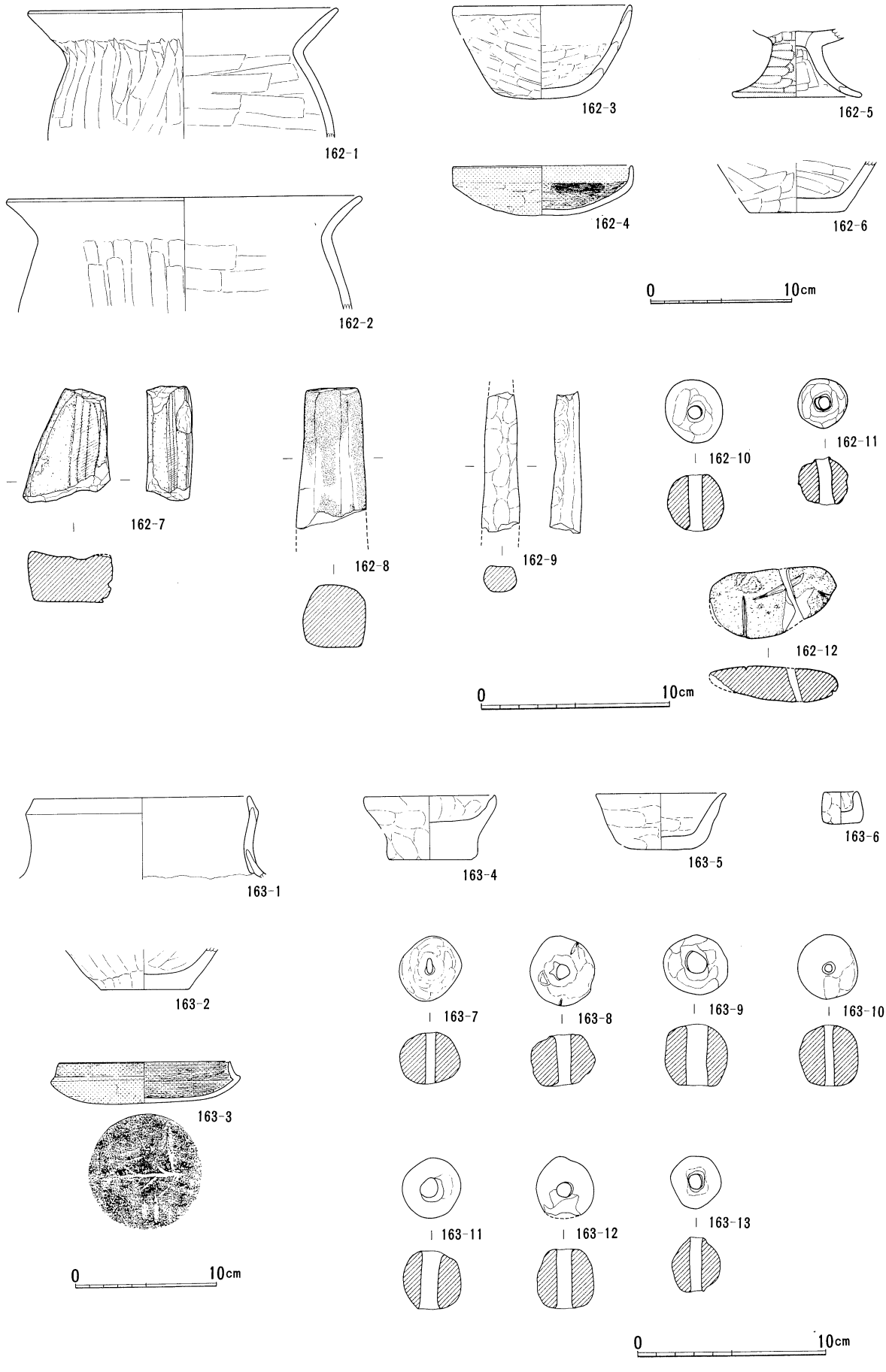




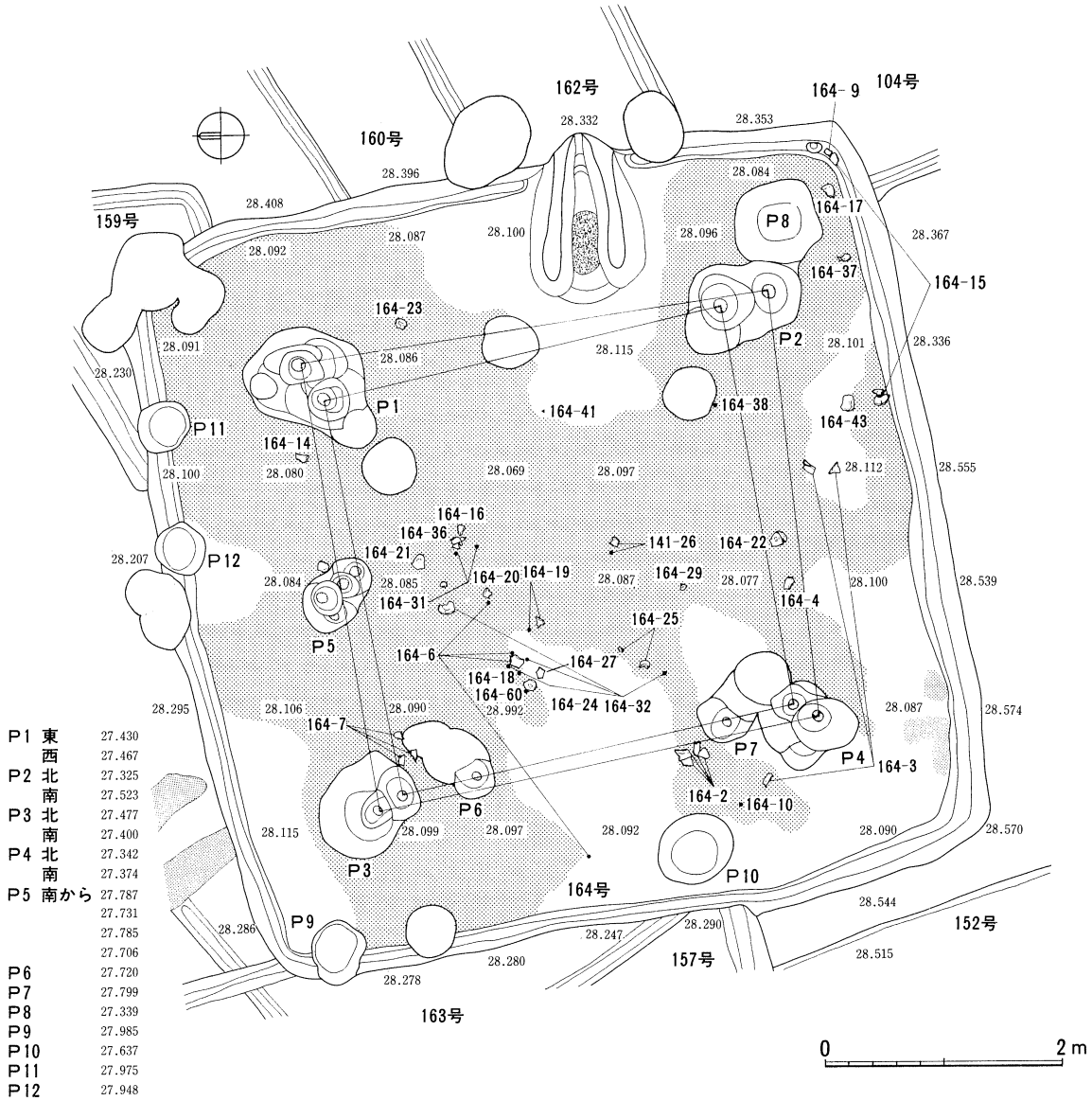
第80図　157～159号遺構出土遺物実測図



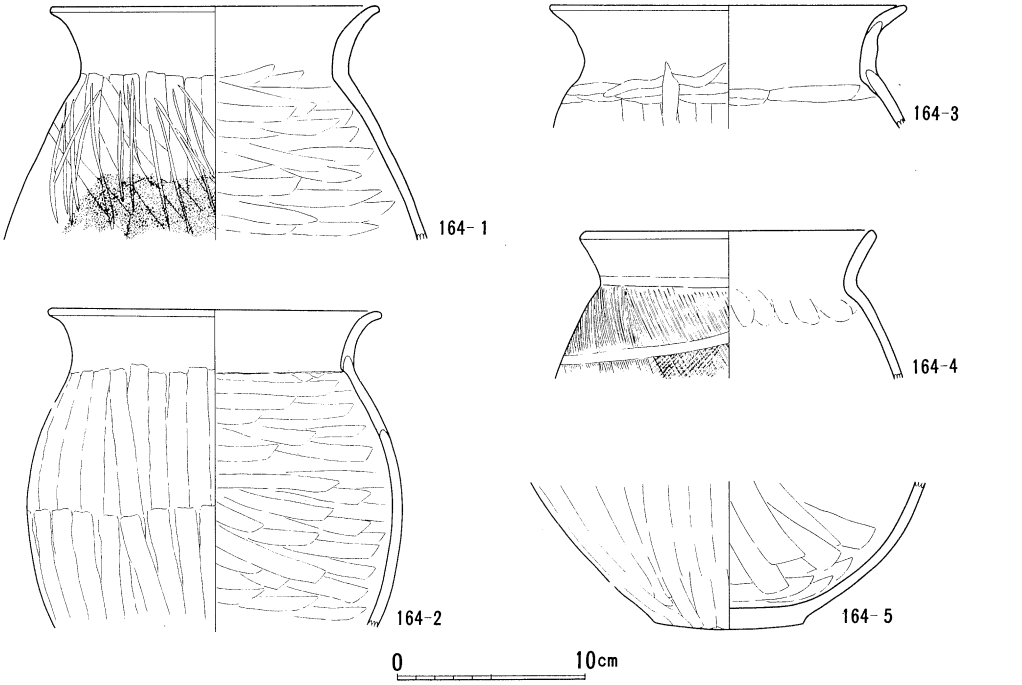
第81図　159～161号遺構出土遺物実測図



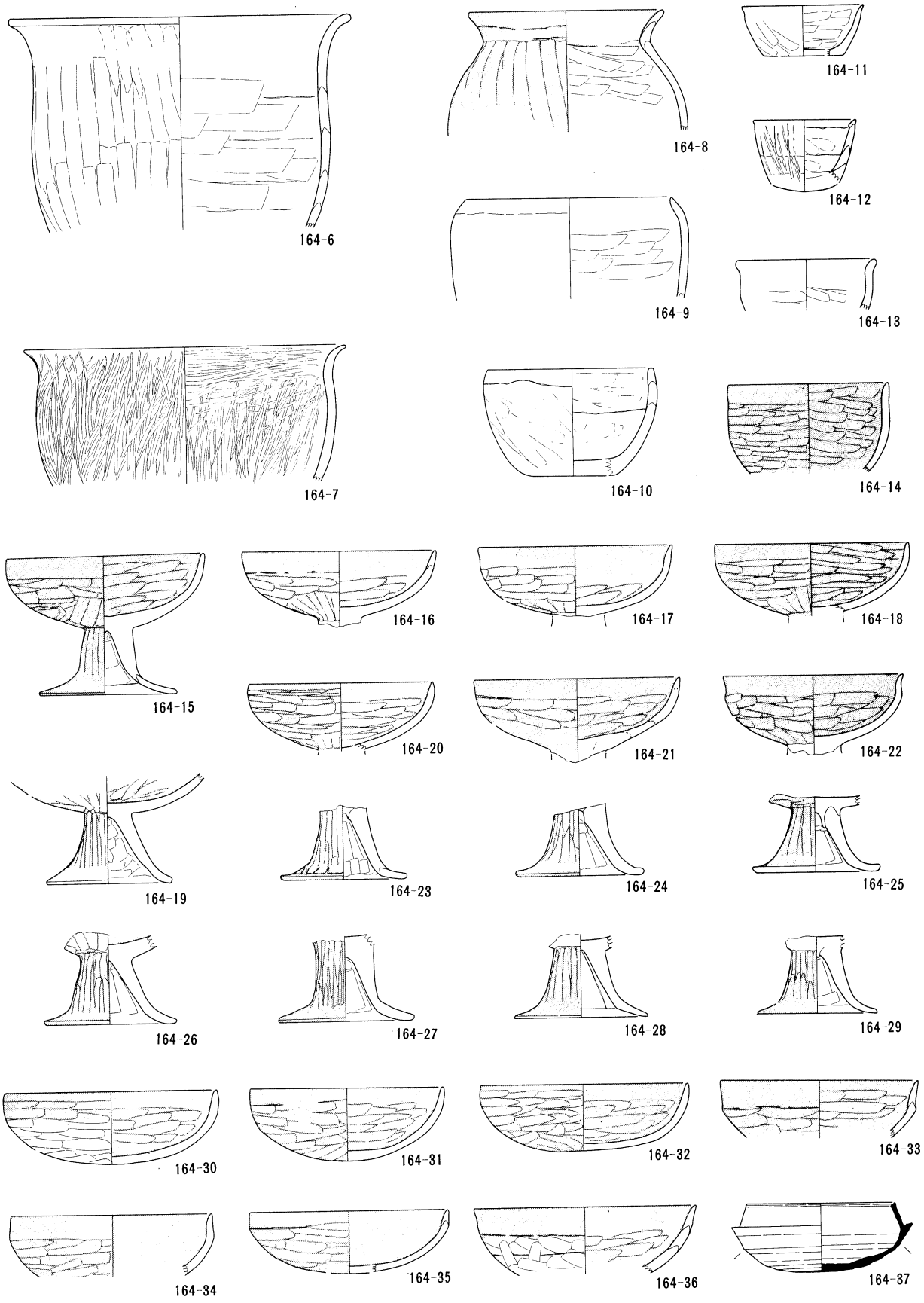
第82図　162・163号遺構出土遺物実測図



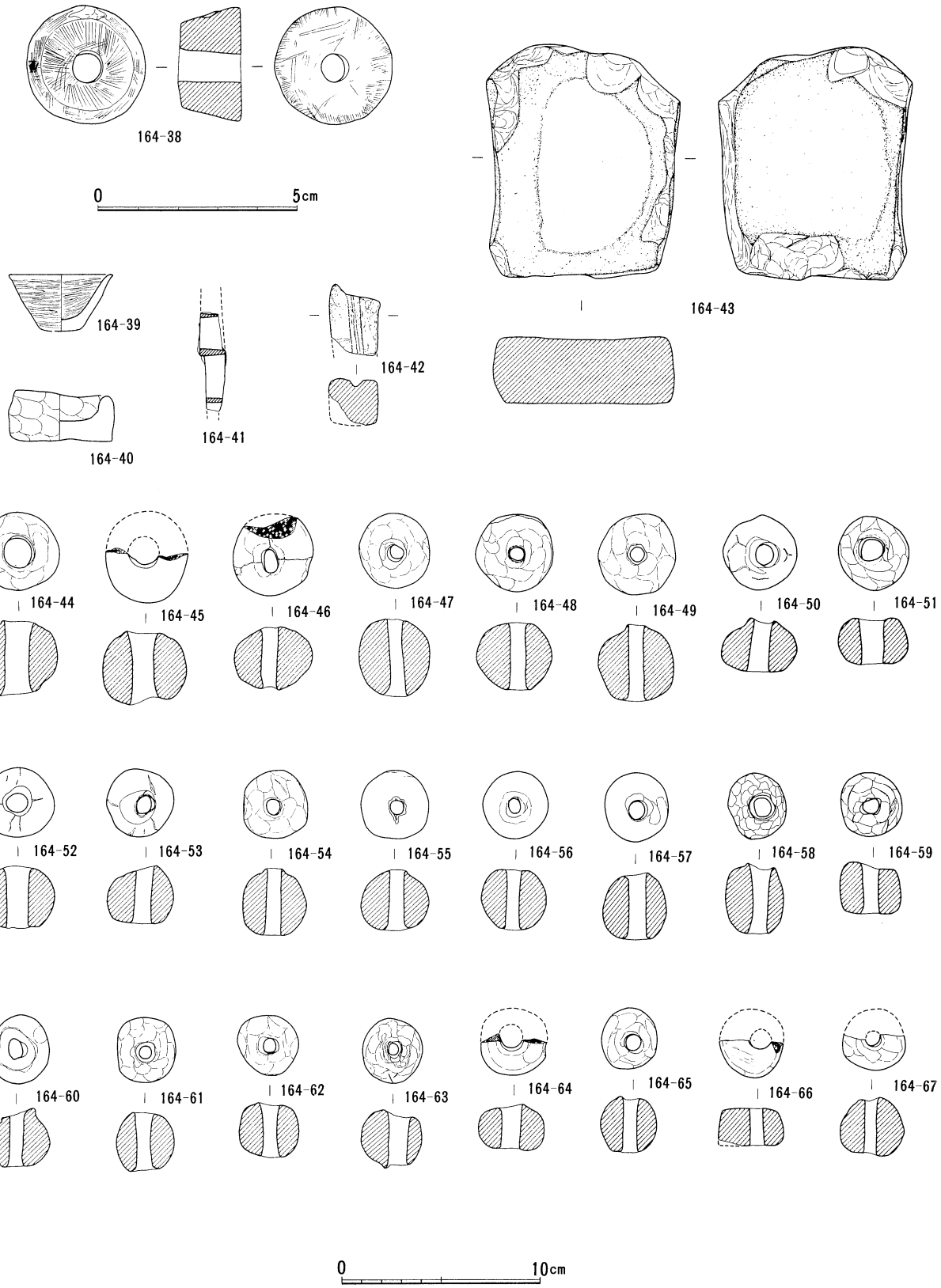
P1	東	27.430
	西	27.467
P2	北	27.325
	南	27.523
P3	北	27.477
	南	27.400
P4	北	27.342
	南	27.374
P5	南から	27.787
		27.731
		27.785
		27.706
P6		27.720
P7		27.799
P8		27.339
P9		27.985
P10		27.637
P11		27.975
P12		27.948



第83図　164号遺構実測図、出土遺物実測図

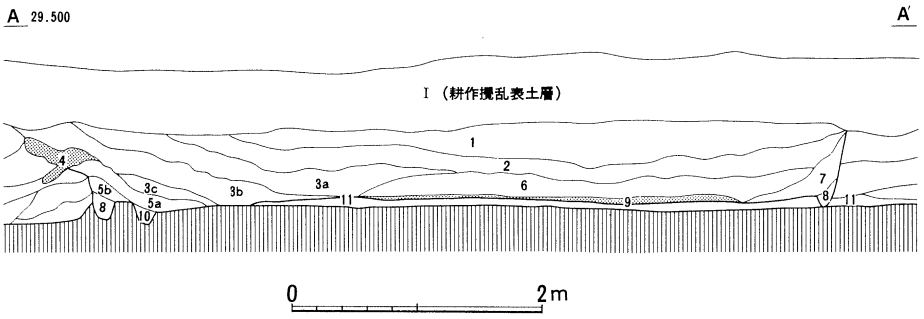


第84図　164号遺構出土遺物実測図

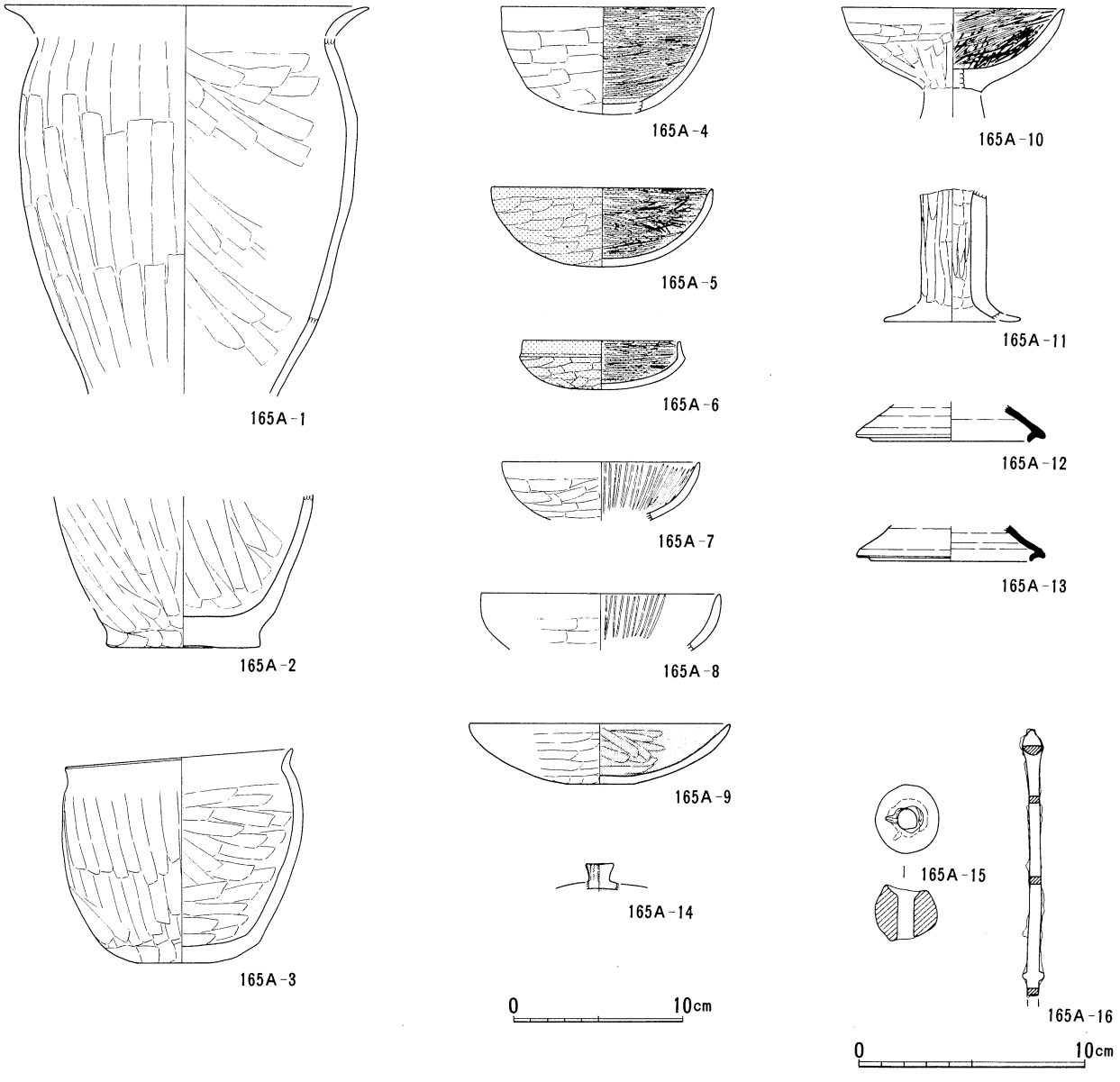


第85図　164号遺構出土遺物実測図

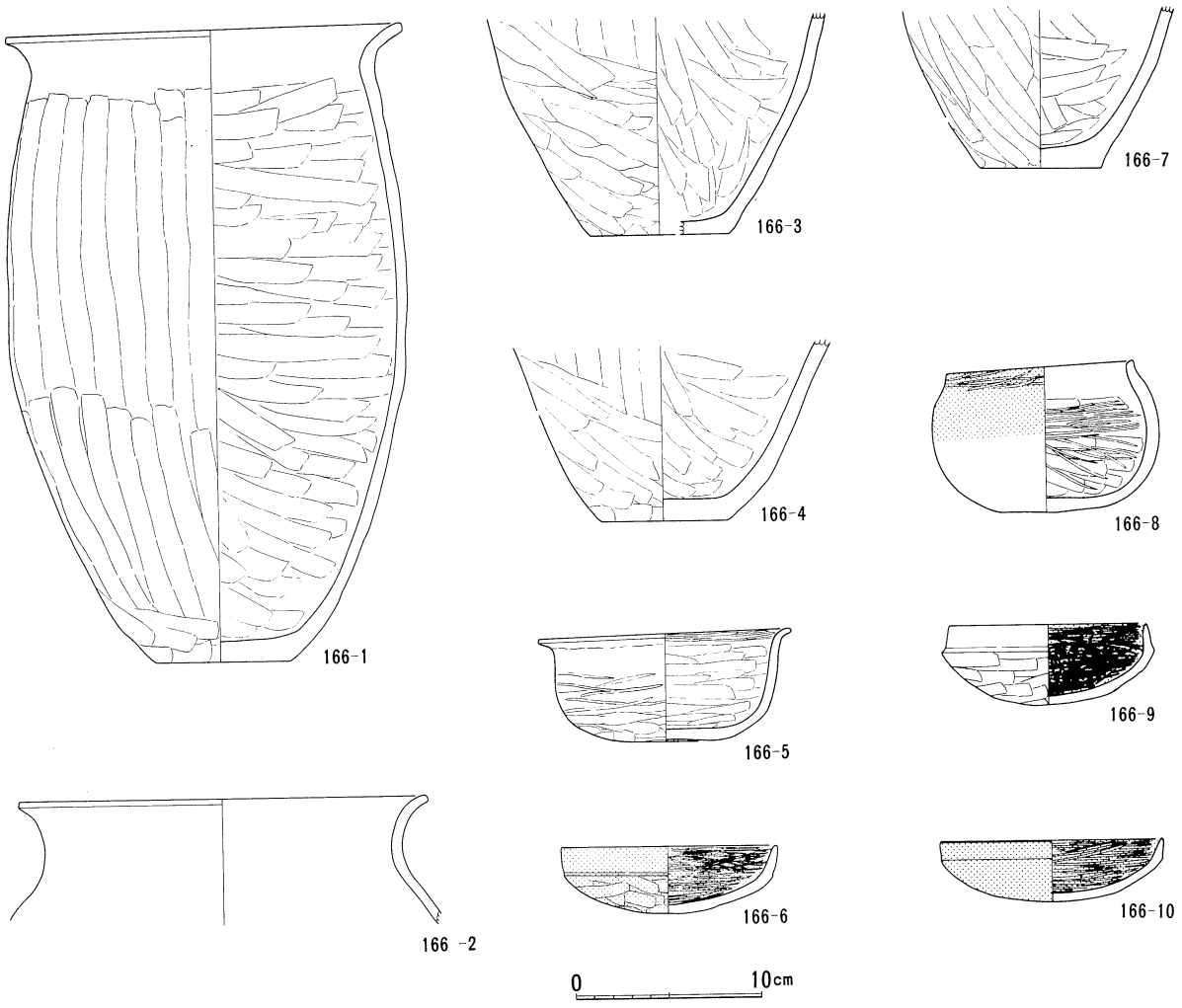
第86図　165A・B・166・167・168A・B号遺構実測図

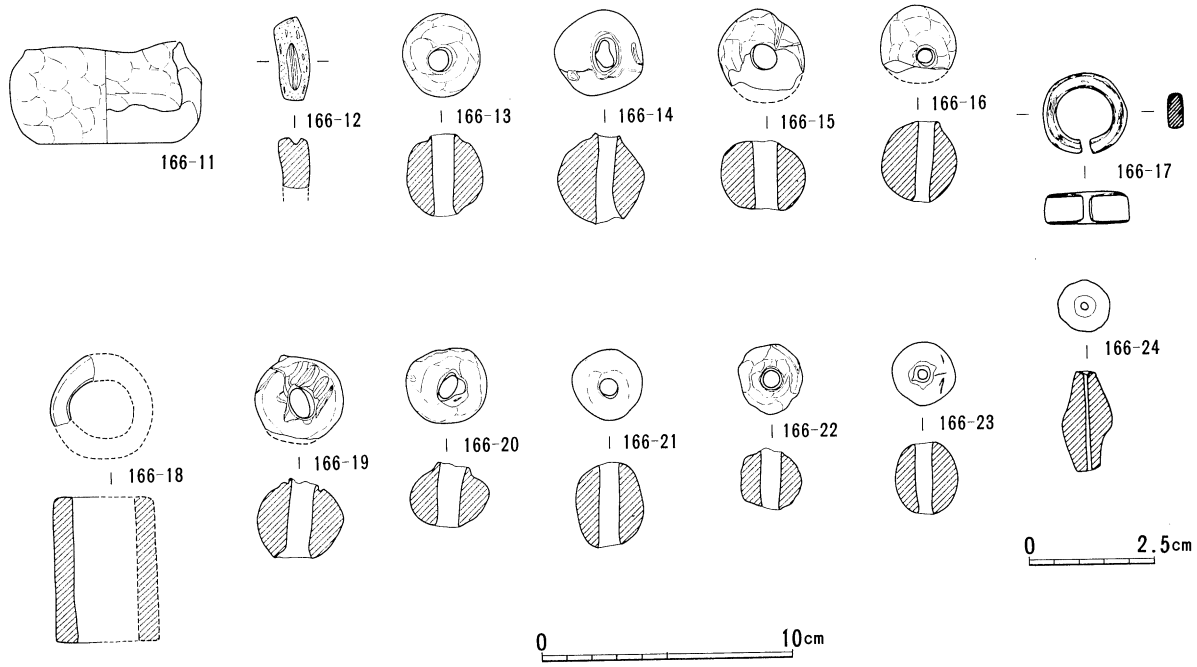


1　黒褐色　上面はⅠ層の影響を受けている。遺物を多量に含んでいる。
2　黒褐色　有機質性強、焼土、炭化物少量含む、遺物多量に含む。
3a　暗褐色　粘土粒、焼土粒多量に含む。
3b　暗灰色　粘土粒多量、焼土粒少量含む。
3c　暗褐色　焼土粒多量、粘土粒少量含む。
4　粘土B。
5a　暗灰色　粘土B、粘土粒、焼土粒多量ひ含む。
5b　白灰色　粘土B多量に含む。
6　暗褐色　焼土粒、粘土粒、炭化物少量含む。
7　暗褐色　ローム粒若干含む。
8　暗褐色　有機質性強、やや締り弱。
9　暗褐色　貼床硬化面、締る。
(10)　褐　色　ローム粒多量に含む。締り弱、169号遺構覆土→169号遺構土層説明 6
(11)　暗褐色　ローム粒、炭化物、焼土粒少量含む、169号遺構覆土→ 〃 〃　4

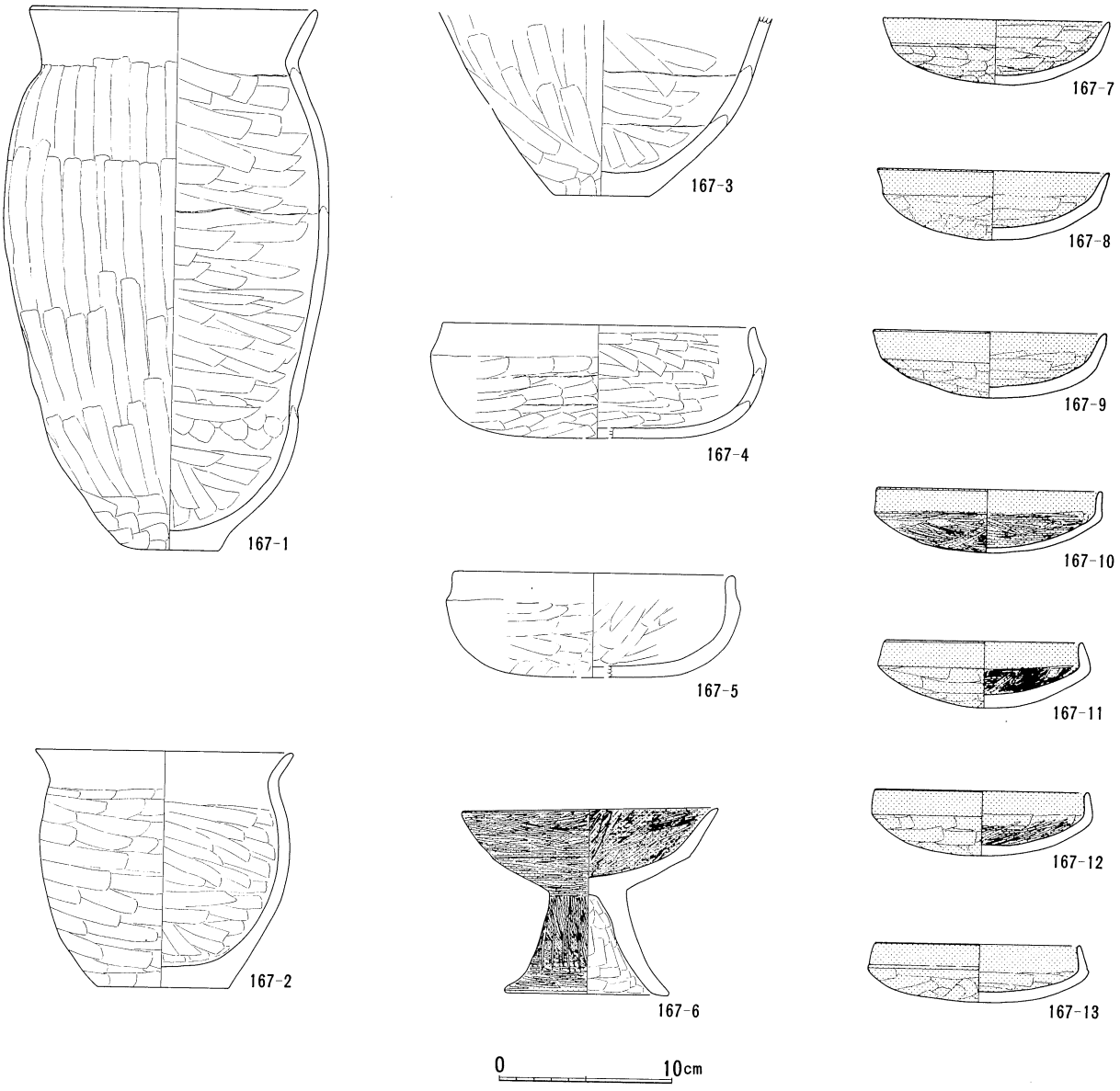


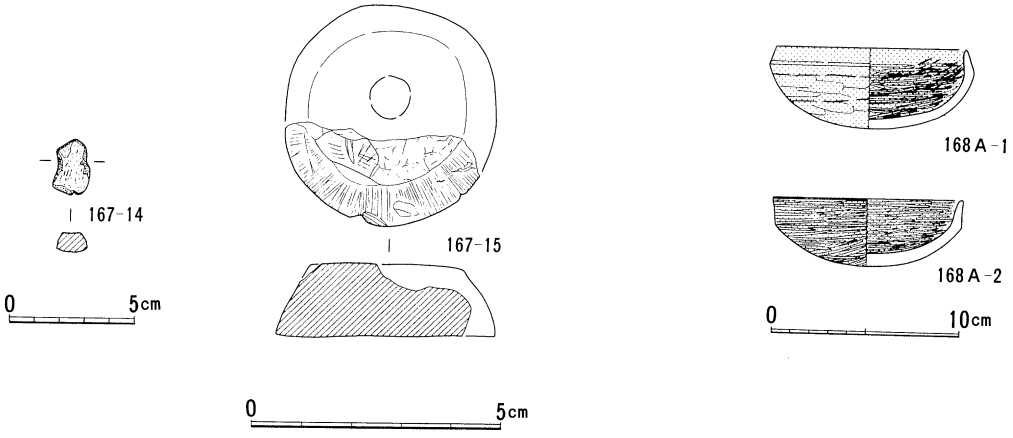
第87図　165Ａ号遺構実測図、出土遺物実測図



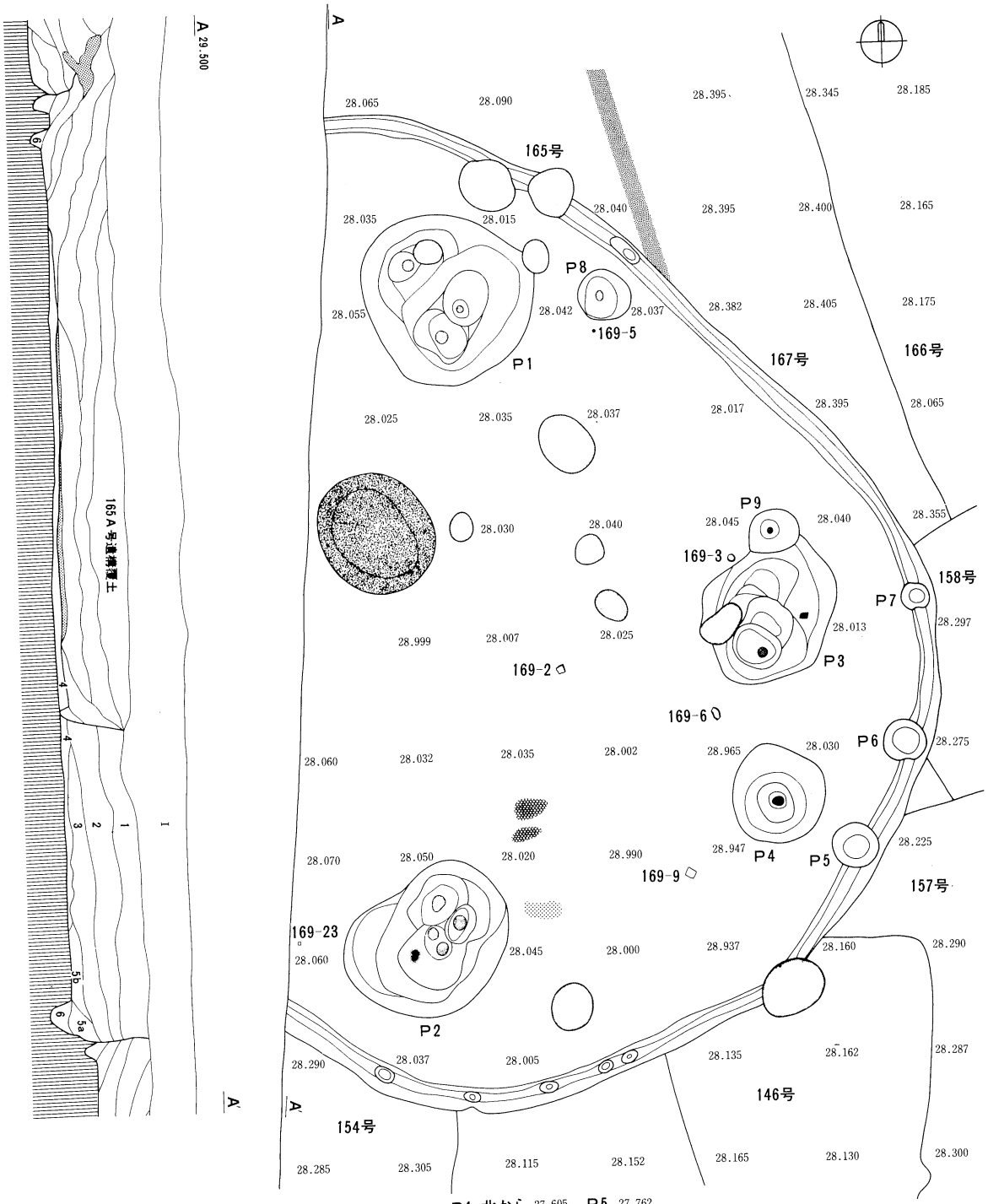


第88図　166号遺構出土遺物実測図





第89図　167・168A号遺構出土遺物実測図



1　黒褐色 有機質性強。
2　暗褐色 ローム粒若干含む、締る。
3　暗褐色 ローム粒少量霜降状に含む、締る。遺物多量に含む。
4　暗褐色 ローム粒、炭化物、焼土粒少量含む。
5a 暗褐色 ローム粒少量含む、やや締り欠く。
5b 黒褐色 有機質性強。
6　褐　色 ローム粒多量に含む、締り弱。

P1 北から 27.605
27.116
27.326

P2 北から 27.285
27.088
27.126
27.088

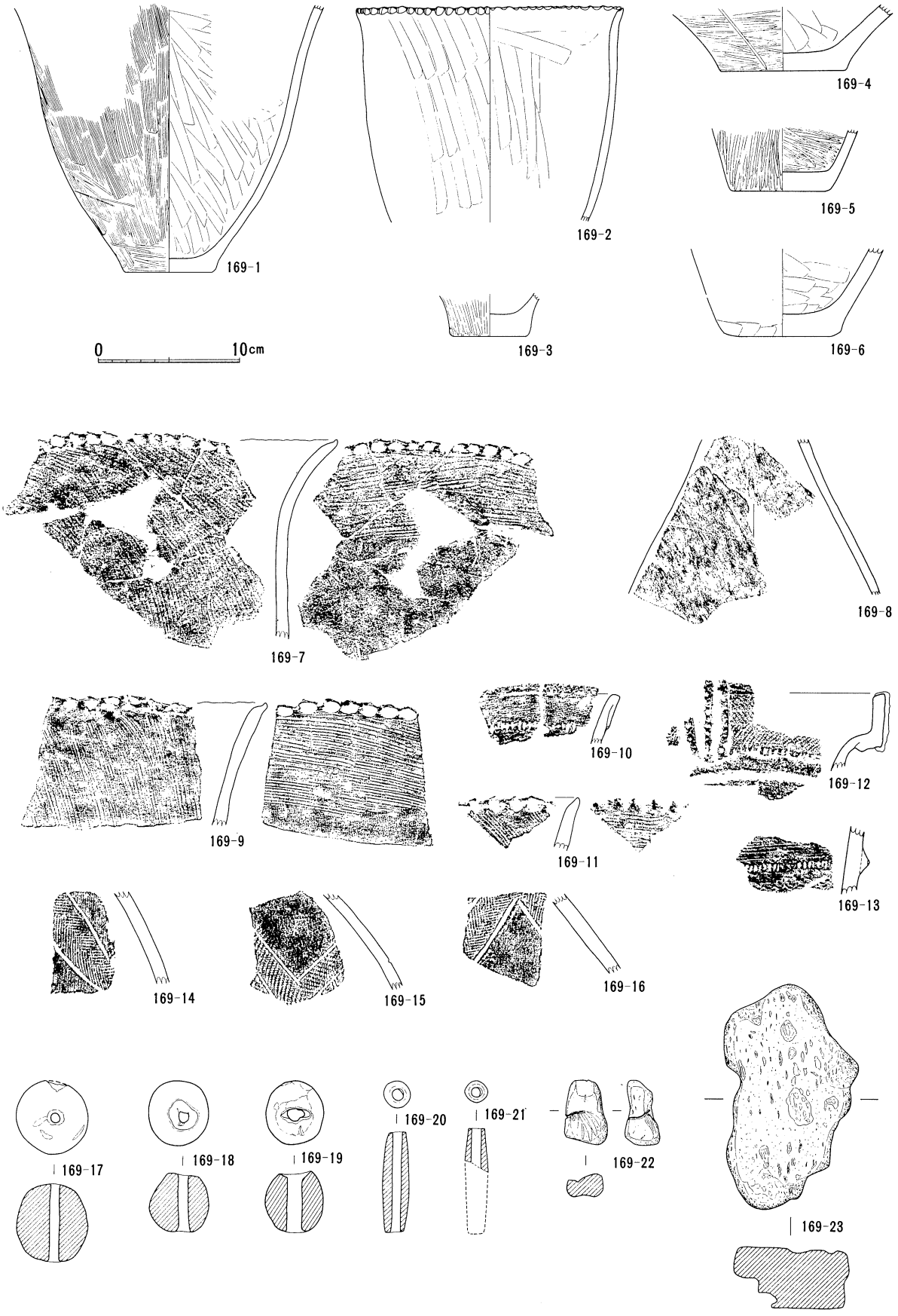
P3 北から 27.520
27.218
27.194
27.114

P4 27.395

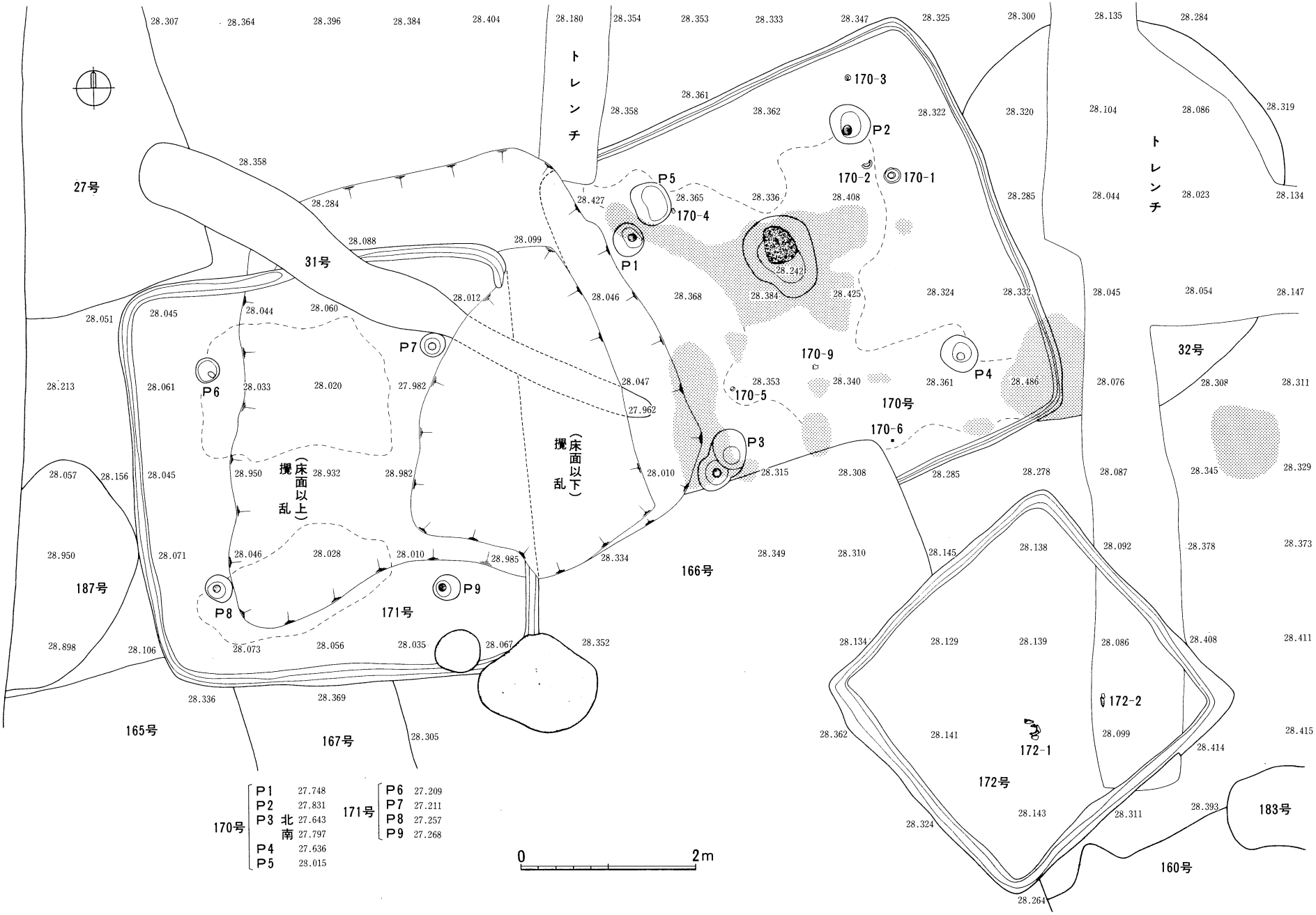
P5 27.762
P6 27.650
P7 27.860
P8 27.580
P9 27.587

165号貼床部を除去してはじめて検出した他住居跡の柱穴。

第90図　169号遺構実測図

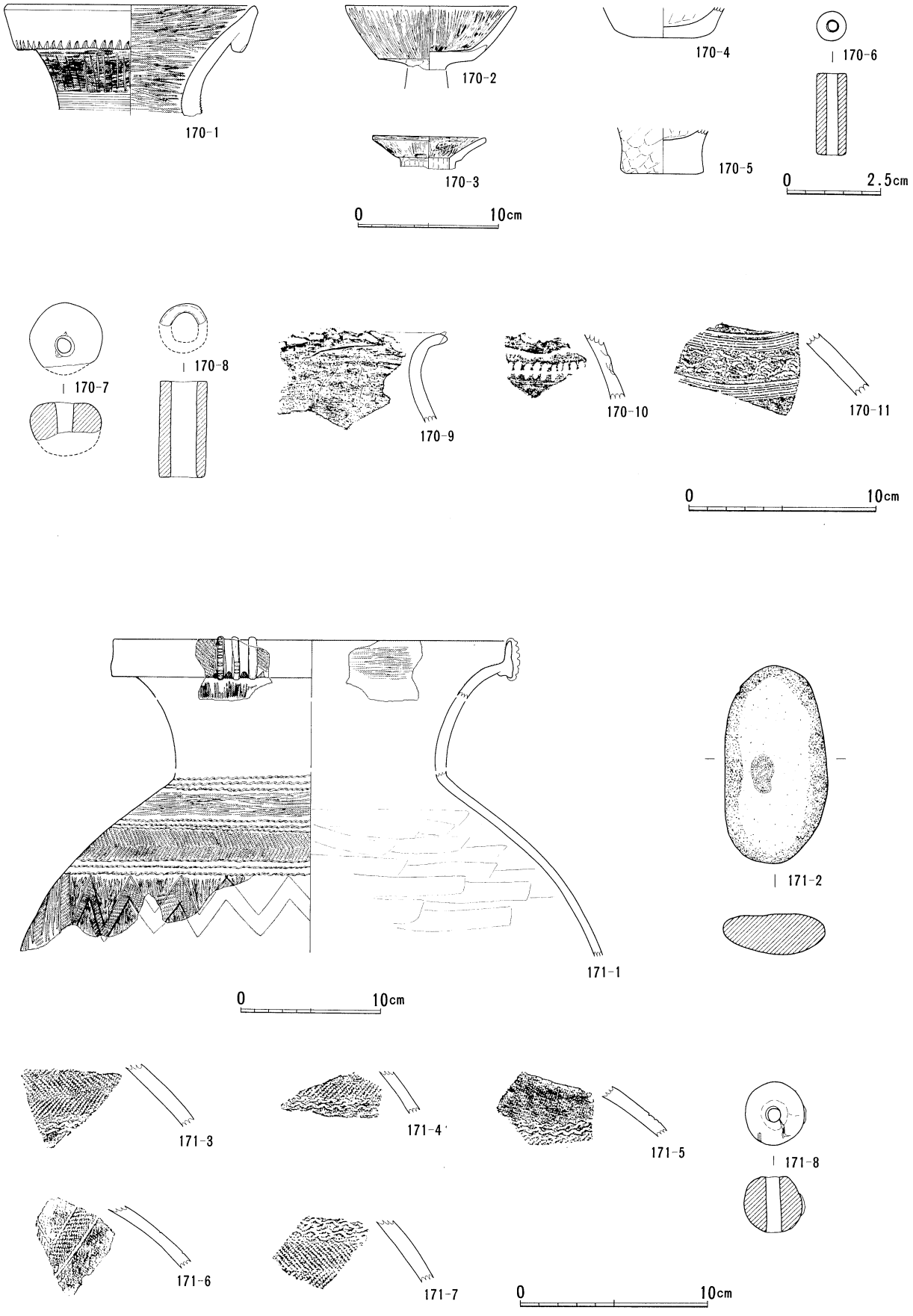


第91図　169号遺構出土遺物実測図

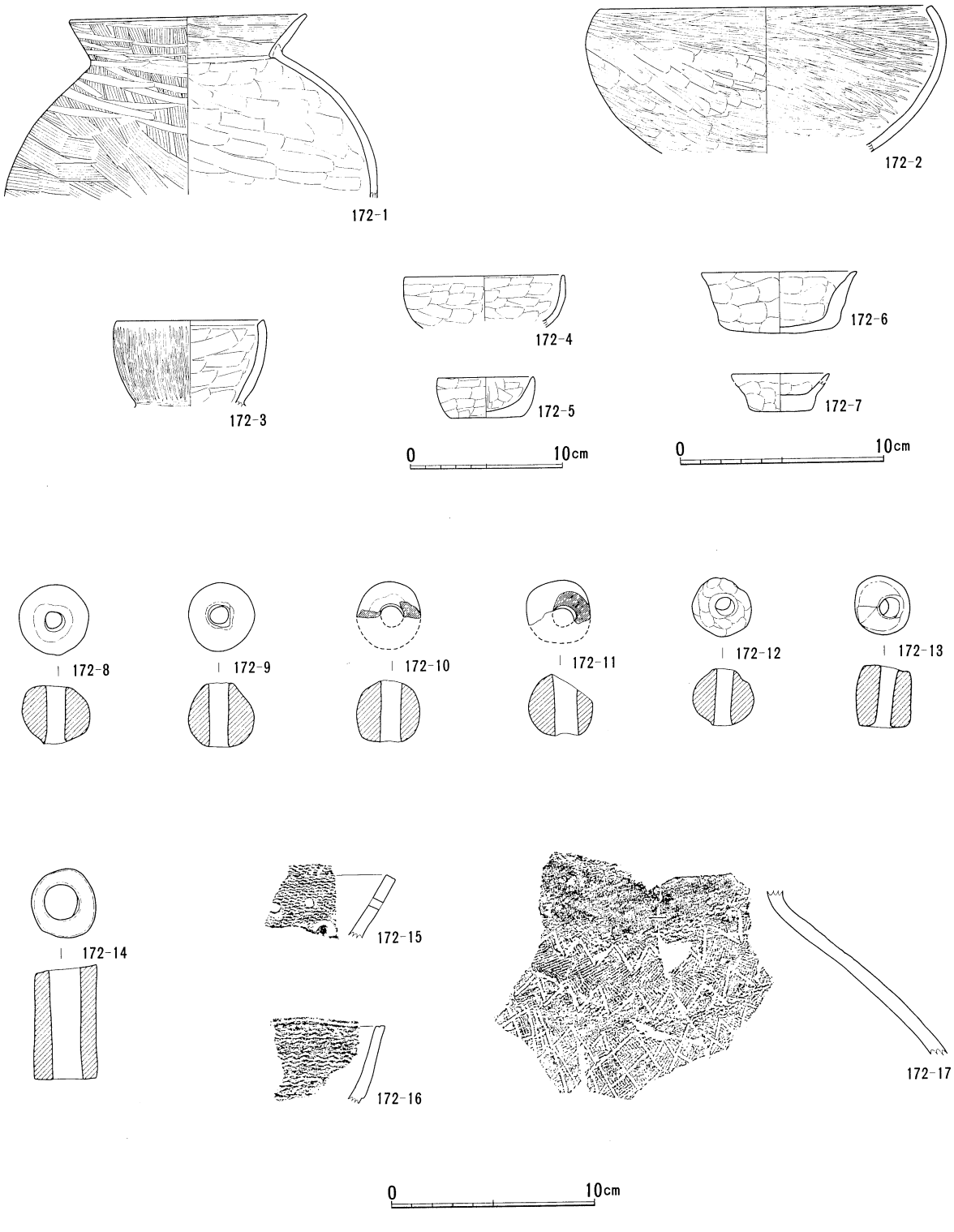


170号			171号		
P1		27.748	P6		27.209
P2		27.831	P7		27.211
P3	北	27.643	P8		27.257
	南	27.797	P9		27.268
P4		27.636			
P5		28.015			

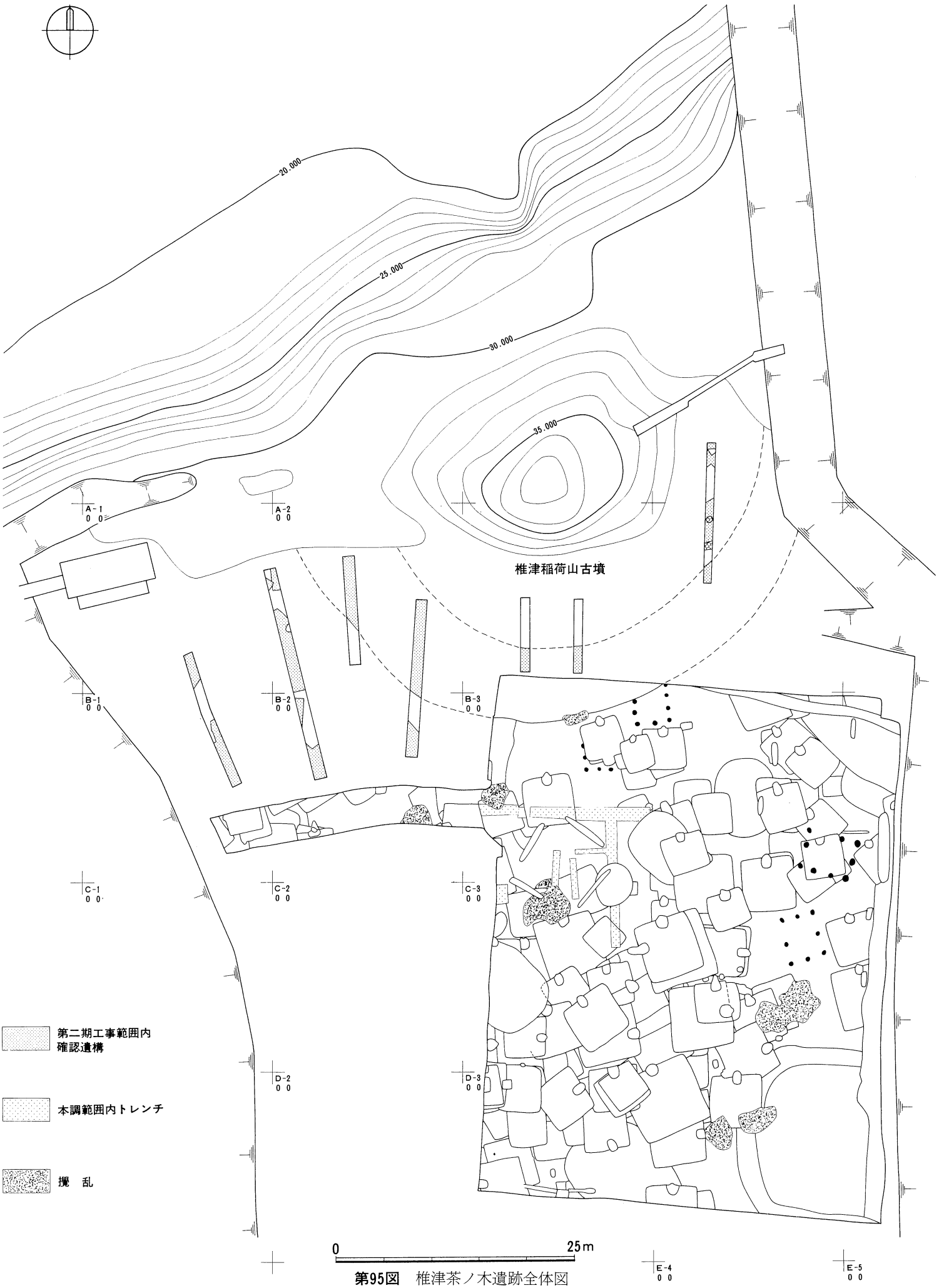
第92図　170～172号遺構実測図



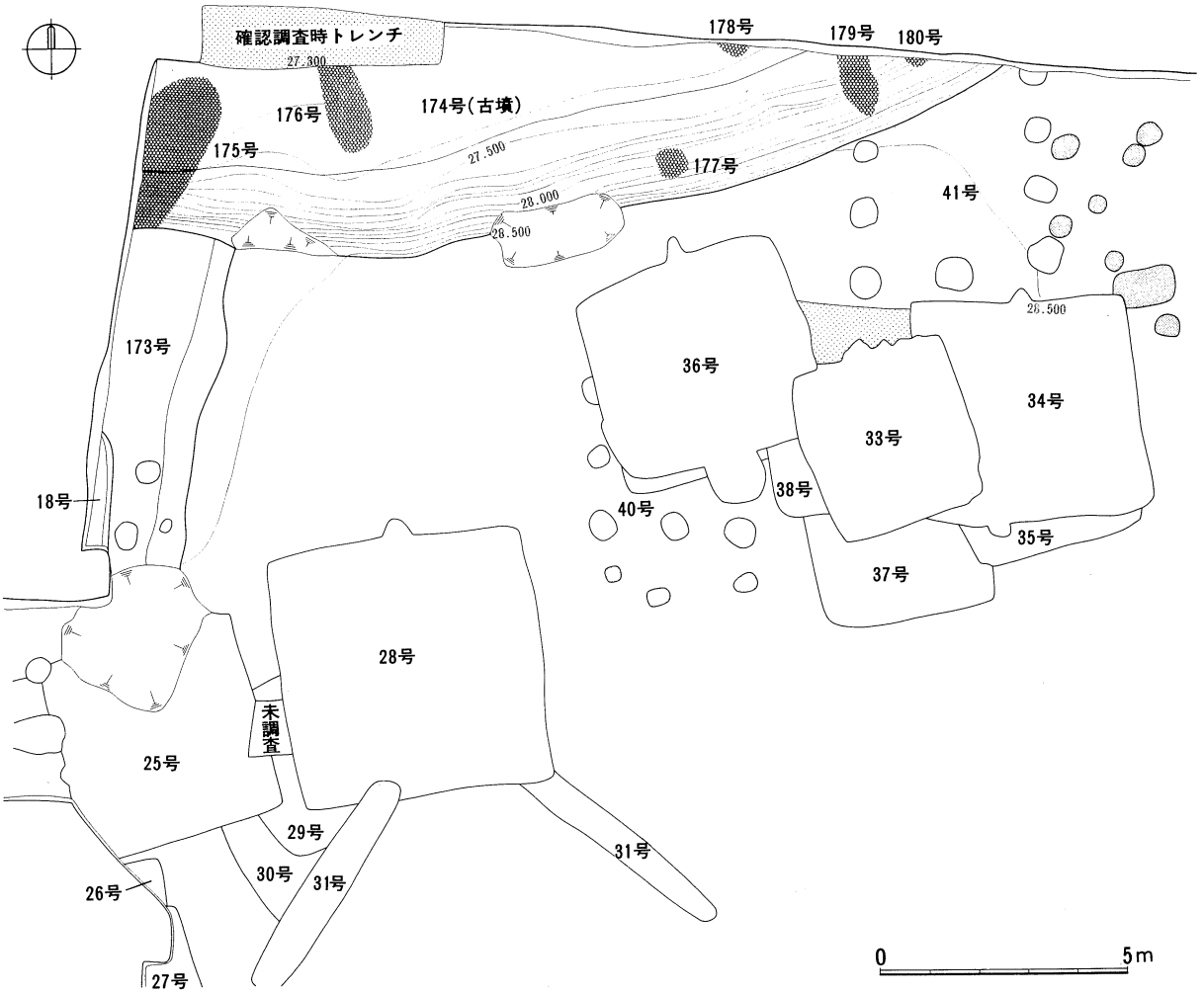
第93図　170・171号遺構出土遺物実測図

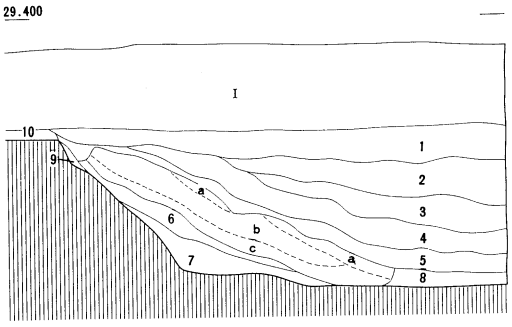


第94図　172号遺構出土遺物実測図



第95図　椎津茶ノ木遺跡全体図

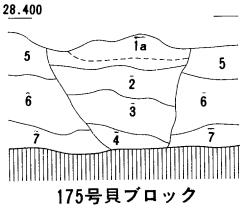




176号貝ブロック

I 黒褐色土 耕作攪乱表土層。
1 暗褐色土 ローム粒、炭化物多く含む。
2 暗褐色土 ローム粒多く含み遺物を多量に含む。
3 暗褐色土 ローム粒多く含み、遺物を多量に含む、2層より暗い。
4 極暗褐色土 有機質性強、1～3層より黒い。
5 暗褐色土 粘性強、締る。
6 暗褐色土 ローム粒混入するが、有機質性強。
7 暗黄褐色土 ローム粒、ロームB多量に含む。
8 暗黄褐色土 ローム粒、ロームB多量に含み粘性強。
9 暗褐色土 ローム崩壊土。
10 暗褐色土 ローム粒多量に含み、締り弱い、173号遺構覆土。

175号
a 混土～純貝層アサリ主体、シオフキ、イボキサゴ混入。
b 純貝層 大型ハマグリ(8cm大)主体。
c 混貝土層 ハマグリ主体。

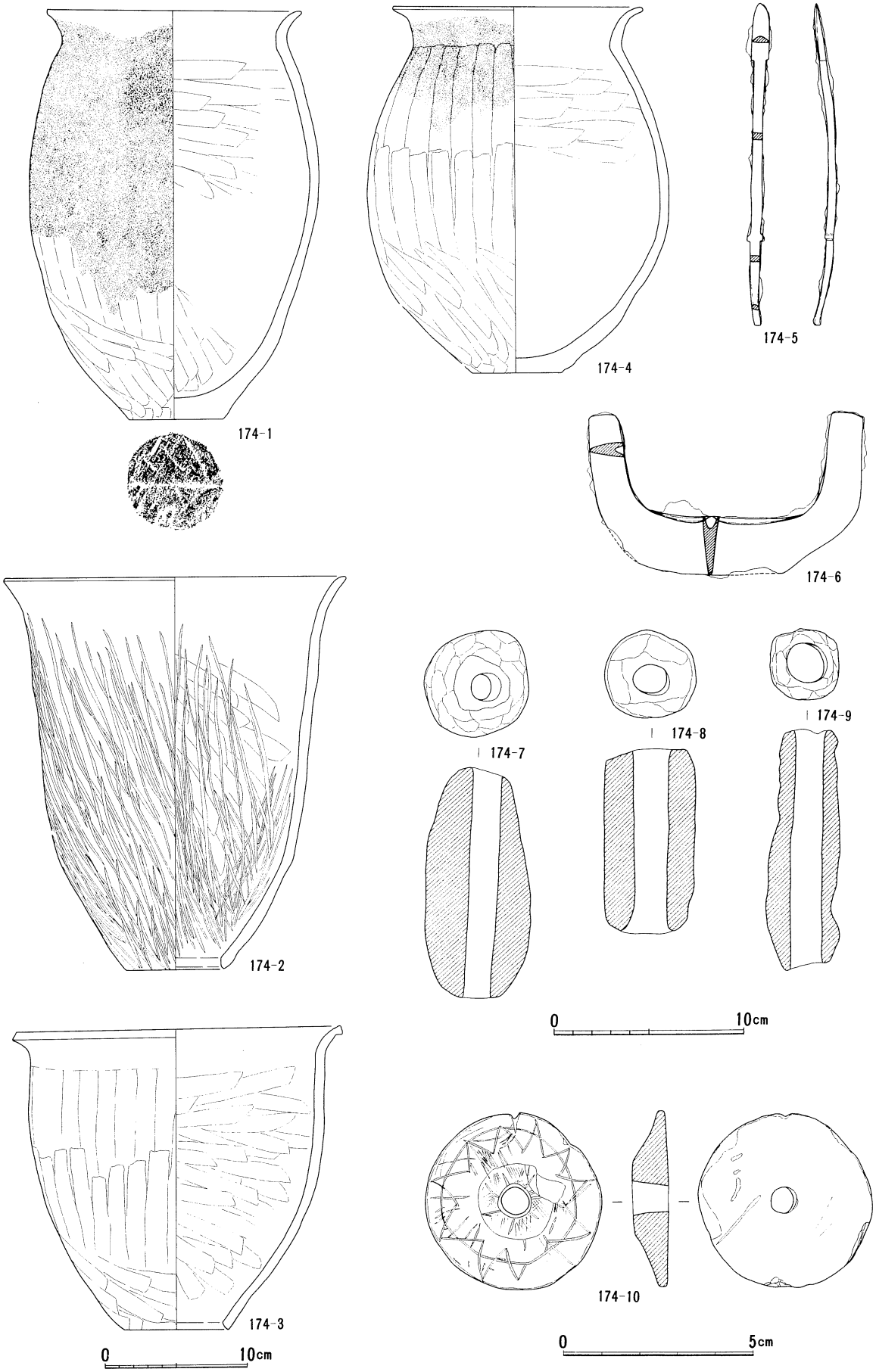


175号貝ブロック

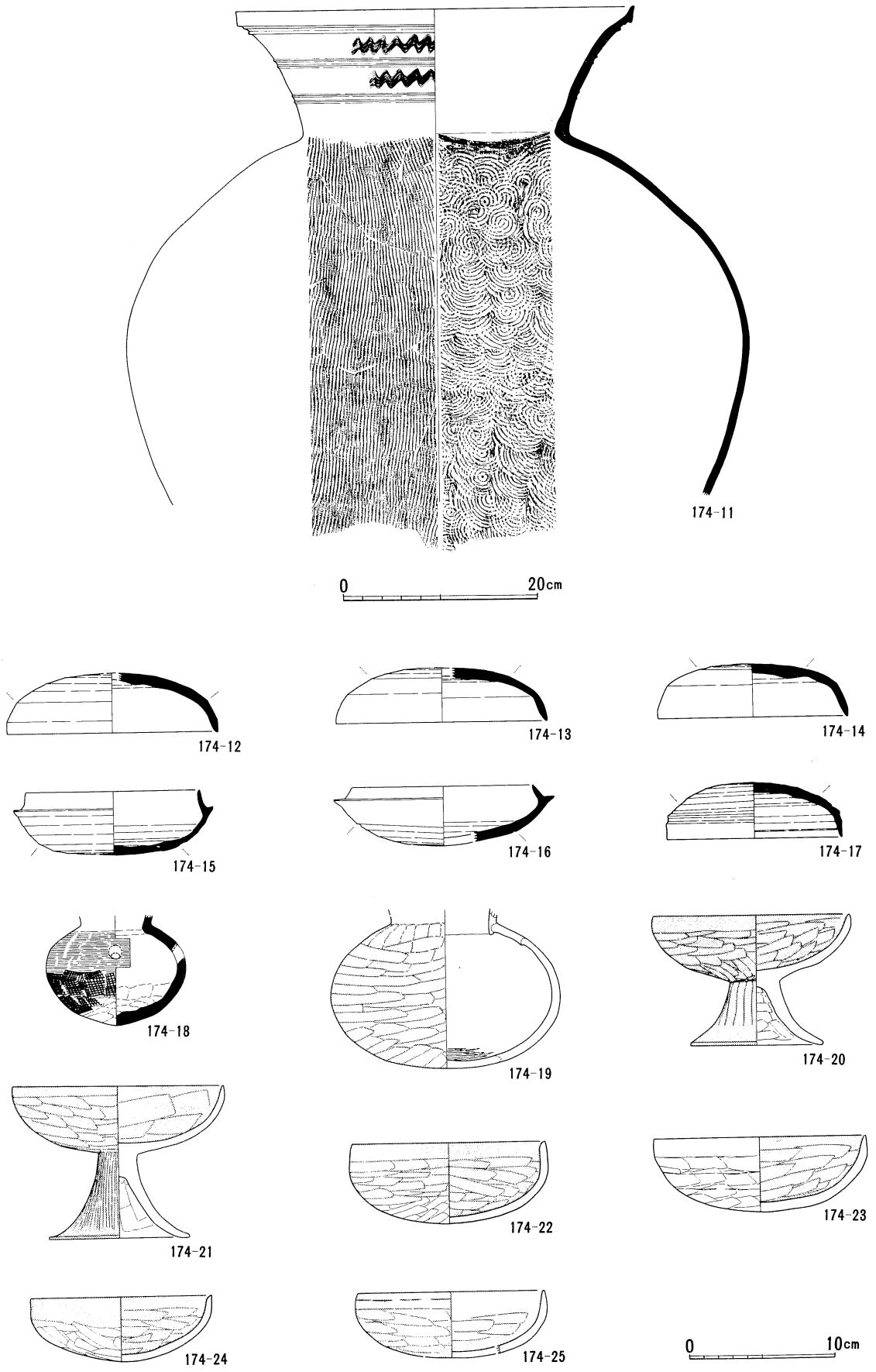
1a 混土貝層 イボキサゴ主体、大型ハマグリ、シオフキ、アサリ混入、まれにイタボガキ認められる。上部にイボキサゴ、下部にアサリ、ハマグリが主体になる傾向が認められる。
1b 混土貝層 1a層より土の混入多い。
2 茶褐色土層 間層、貝の混入が認められない。
3 混貝土層 アカニシ、ハマグリ、アサリなどを含む、暗茶褐色土層、ローム粒、炭化物多く含む。
4 暗黄褐色土層 ローム粒、ロームB含む。
5 褐色土層 ローム粒含み締る。
6 茶褐色土層 ローム粒、炭化物含む。
7 暗黄褐色土層 ローム粒、ロームB含む、4層より混入度合が多い。

0 2m

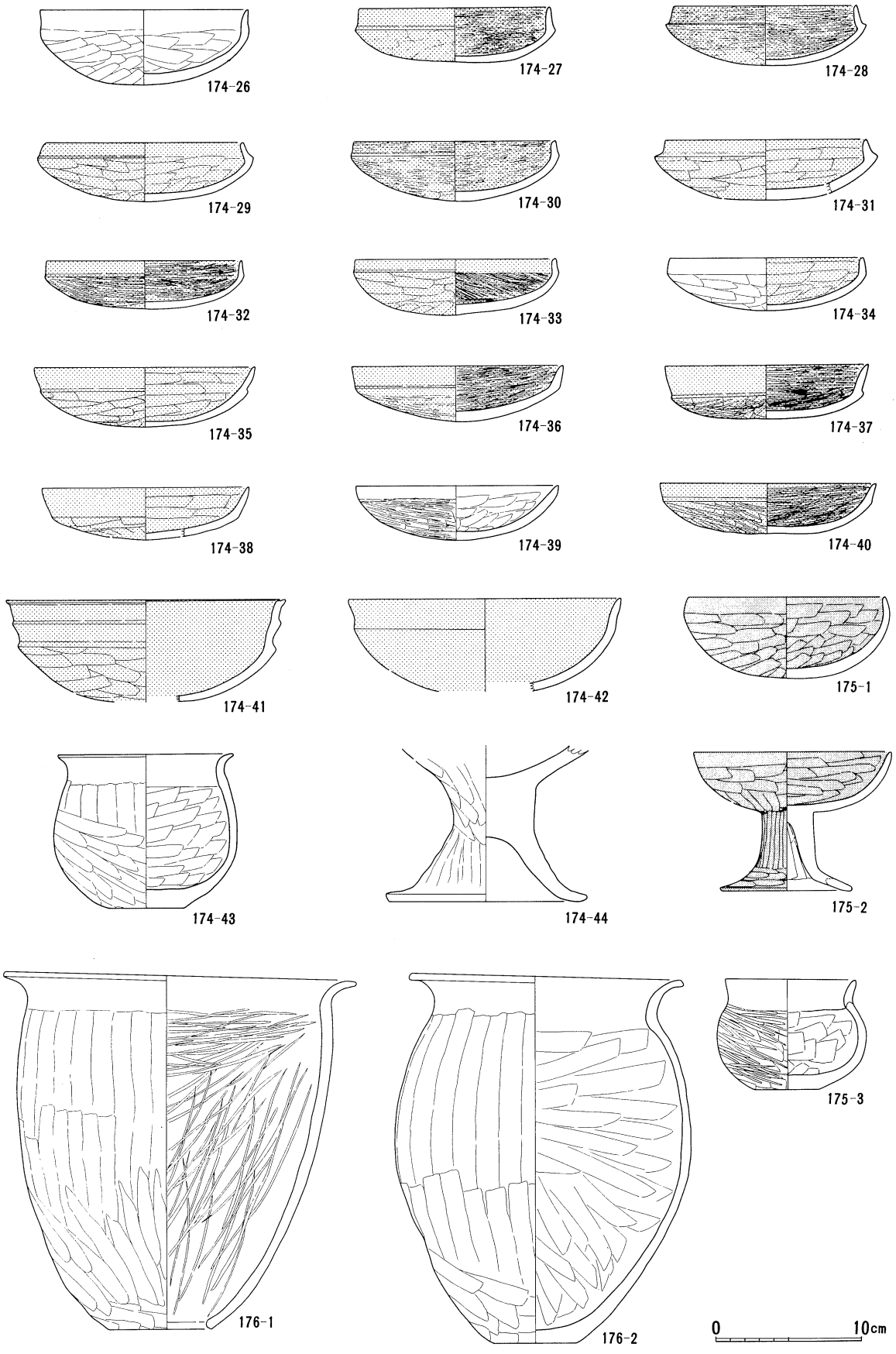
第96図 173～180号遺構実測図（174号遺構は椎津稲荷山古墳周溝）



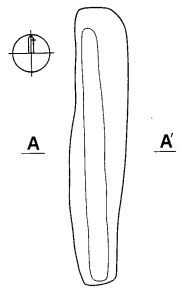
第97図　174号遺構（椎津稲荷山古墳周溝）出土遺物実測図

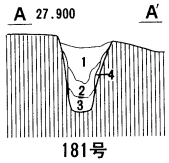


第98図　174号遺構（椎津稲荷山古墳周溝）出土遺物実測図



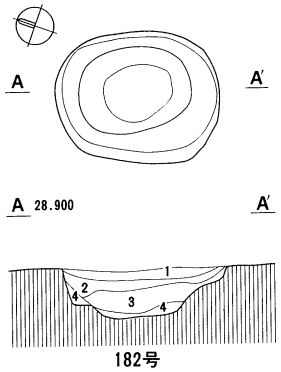
第99図　174号遺構（椎津稲荷山古墳周溝）出土遺物実測図及び175・176号貝ブロック出土遺物実測図





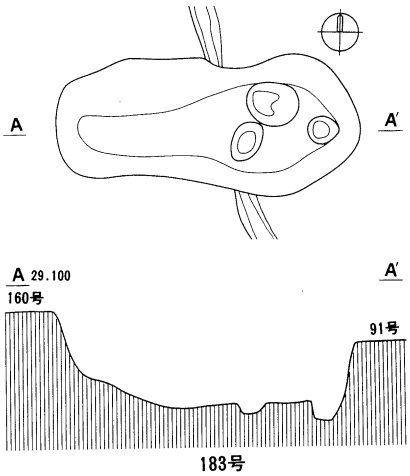
181号

1 暗褐色 ローム粒霜降状に散る。
2 暗褐色 ローム粒やや多く含む。
3 暗褐色 ローム粒、ロームB少量含む。
4 褐　色 ローム粒多量に含む。

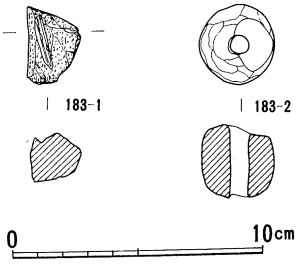


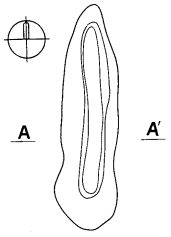
182号

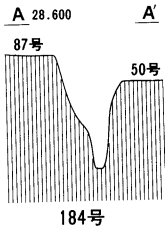
1 暗褐色 ローム粒、ロームB少量含む。
2 暗褐色 ローム粒、ロームB、粘土Bやや多く含む
3 白灰色 粘土
4 褐　色 ローム粒、ロームB多量に含む。



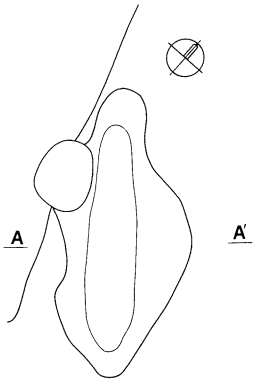
183号

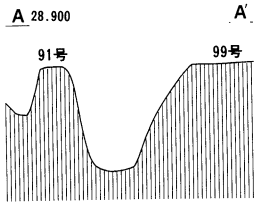




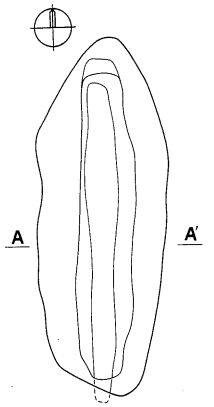


184号



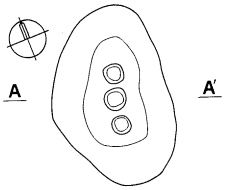


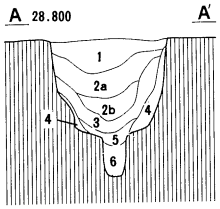
185号



188号

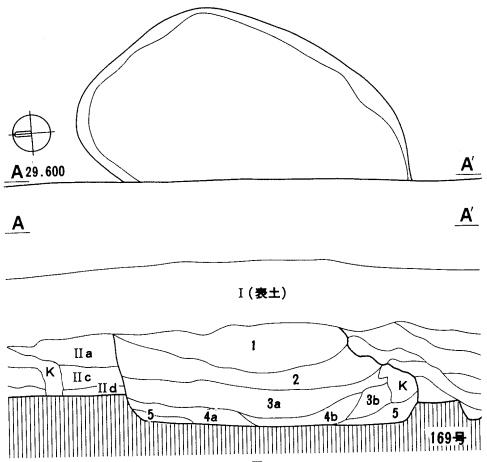
1 褐　色 ロームB、44号貼床部。
2a 黒褐色有機質土、 ローム粒ほとんど含まない。
2b 極暗褐色 ローム粒、若干含む。
2c 暗褐色 ローム粒、ロームB少量含む。
3 褐　色 ローム粒、ロームB多量に含む。
4 黒褐色 ローム粒若干含む。
5 暗褐色 ローム粒、ロームB少量含む。





186号

1 黒褐色 有機質性強。
2a 暗褐色 ローム粒霜降状に少量含む。
2b 暗褐色 a層よりローム量多い。
3 暗褐色 ローム粒やや多く含む。
4 褐　色 ローム粒多量に含む。
5 暗褐色 ローム粒少量含む、締る。
6 暗褐色 よごれたローム粒多量に含む。



187号

1 黒褐色 有機質土。
2 暗褐色 有機質土中に焼土粒少量含む。
3a 暗褐色 ローム粒、ロームB少量含む。
3b 暗褐色 ローム粒少量含む。
4a 暗褐色 ローム粒散る。
4b 暗褐色 ローム粒霜降状に含む。
5 褐　色 ローム多量に含む。

0 2m

第100図　181～188号遺構実測図、183号遺構出土遺物実測図

III　出土遺物の検討

はじめに

椎津茶ノ木遺跡の所在する舌状台地は、南北500m、総面積にしておよそ30,000㎡程の範囲と推定される。これに対し、その1/10にも満たない今回の調査範囲内から、縄文時代～平安時代に至る建替えを含めた総数193軒もの竪穴住居跡が検出された。これらの竪穴住居跡のうち建替え及び時期不明等を除いた宮ノ台式期以降の108軒の竪穴住居跡は、ほぼ継続的な変遷を遂げているものと考えられるが、細部において、たとえば古墳時代前期に対応するいわゆる五領式期においては、該当期の遺物検出を認めるものの全体的に貧弱であり、良好な平面プランを残す遺構も少ない。また遺構・遺物の検出を見なかった奈良時代末～平安時代前半代の特定の時期についても同様であり、弥生時代～平安時代の長期に及ぶ集落の変遷についての検討を加える上での確実さにやや欠けている。

これらの起因は、遺跡面積に対する調査面積の過少や、遺構間の重複が激しく、本来の包蔵に対する削平率の高さによるものと思われる。しかしそれでもなお和泉式期終末～奈良時代にかけての時期については、その継続性が認められ、また様式的土器セット関係の擁立が可能であるものと判断し、該当期における出土土器群について編年作業を行い、次章の足がかりとしておきたい。

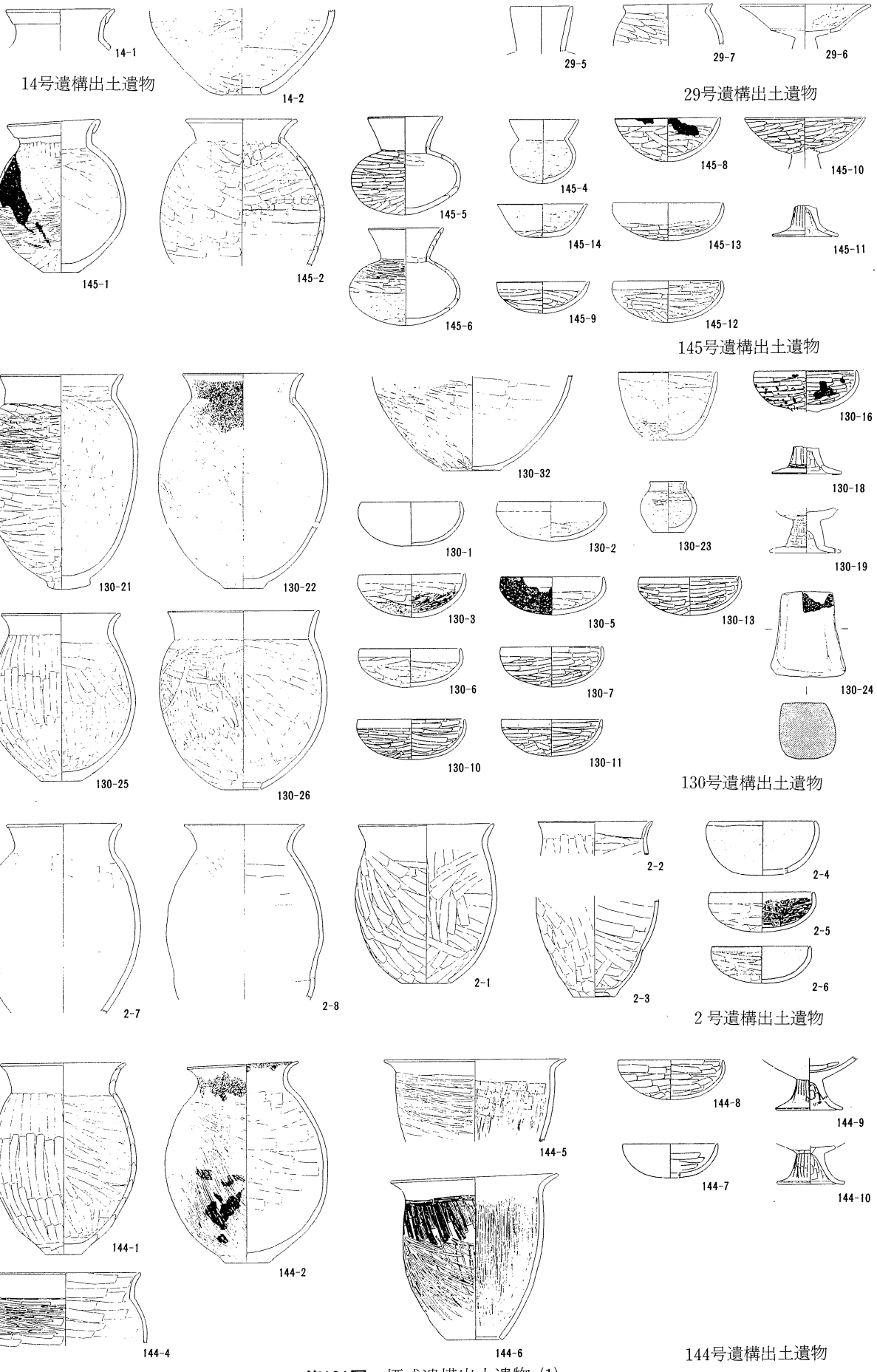
(1)　セット関係認定の方法

土器編年作業を行うにあたっては、その地域の拠点的集落跡とも言える長期にわたる継続的変遷を遂げた一遺跡を主体とし、共伴性の明らかな継続的時期差を有する良好一括資料を使用しなければならないことはいうまでもないが、各種遺構から検出されるすべての遺物が、該当遺構に直接伴うものと断言しえないことは周知の事実でもある。そのため、まず各期における良好資料を検出する遺構の選出と、その土器群のセット関係の認定、及び混入品の排除を行うことは、編年作業を行う上での第1歩であると言えよう。

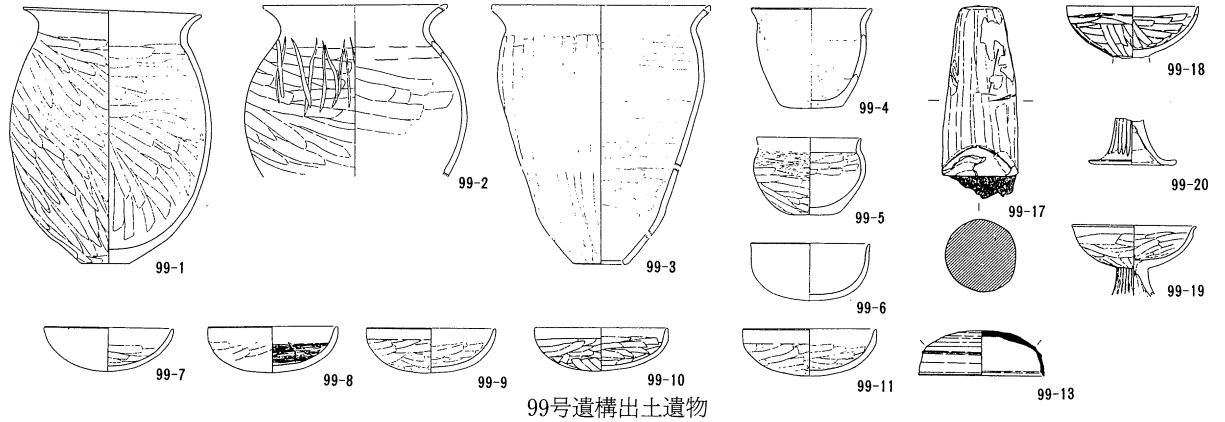
ここでは和泉式期～平安時代に比定し得る各期の竪穴住居跡検出土器群のうち、各期における様式的セット関係の擁立可能な良好資料を検出する竪穴住居遺構54軒を対象に混入品の排除等を行い、各器種ごとのセット関係を認定した。

作業をするにあたり、各遺構検出土器群のうちでもカマド・貯蔵穴内及び床密着の状況で検出された多量の完形品のみを使用し、資料作成することが最も望ましいものではあるが、ここでは床面から10cm以内で検出された資料のうちでも、完形あるいは比較的遺存度の良好な資料については各遺構に直接伴うものと判断して使用している。また一括で取り上げてしまった遺物や、床面より10cm以上浮いて存在する遺物については、併行して行った分類及び編年作業の過程において、間接的に伴うものと判断し得る土器群については一部掲載している。したがって間接的に伴うものと判断に至った土器群については、あくまでも参考資料という見解で望んでおきたい。(遺物観察表参照)

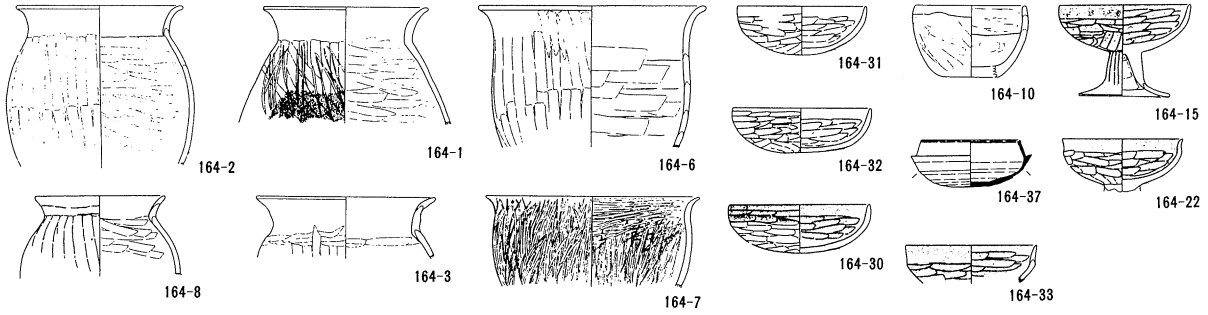
また奈良時代終末期から平安時代前半期については、資料的な断絶が認められることから、平安時代に比定される第15期の土器群については一括資料の掲載にとどめ、今回の編年上の対象から除外しておいた。



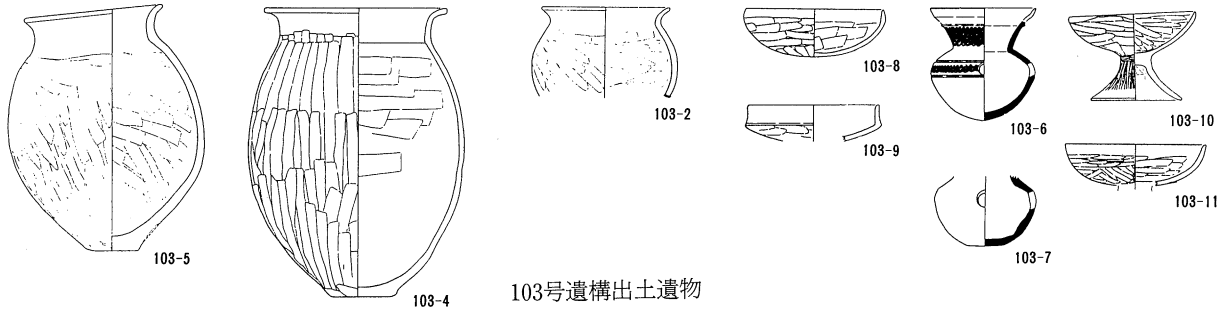
第101図　標式遺構出土遺物 (1)



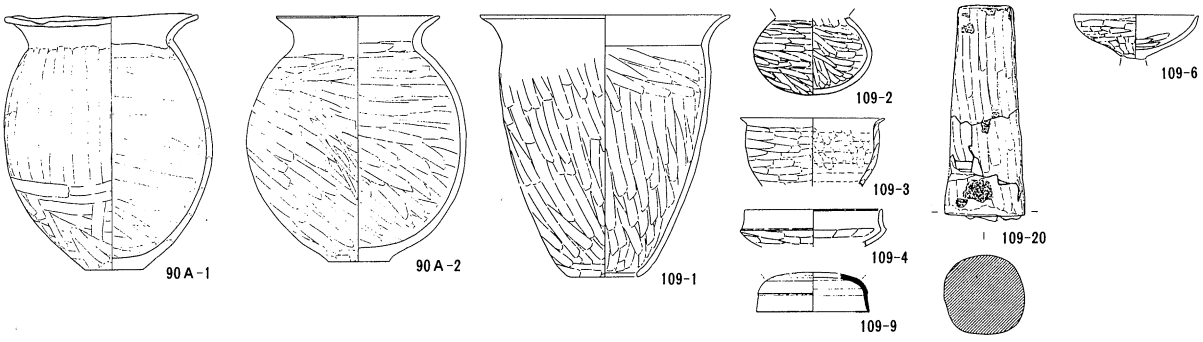
99号遺構出土遺物

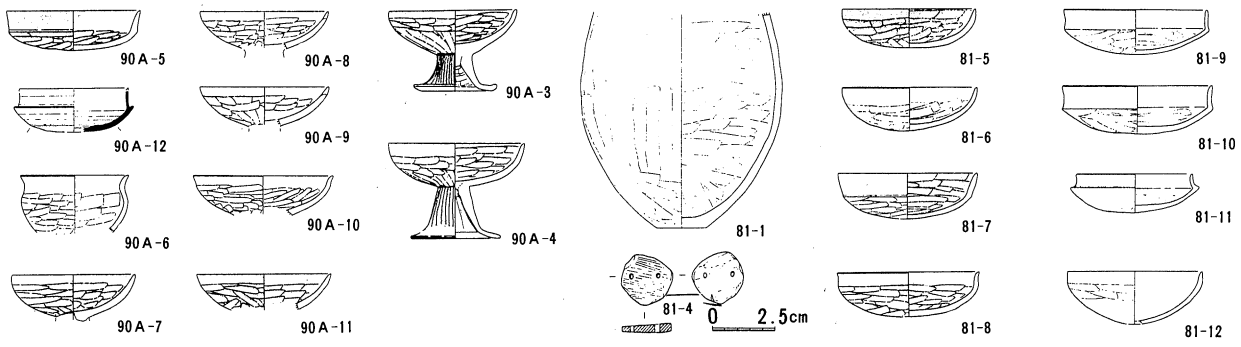


164号遺構出土遺物



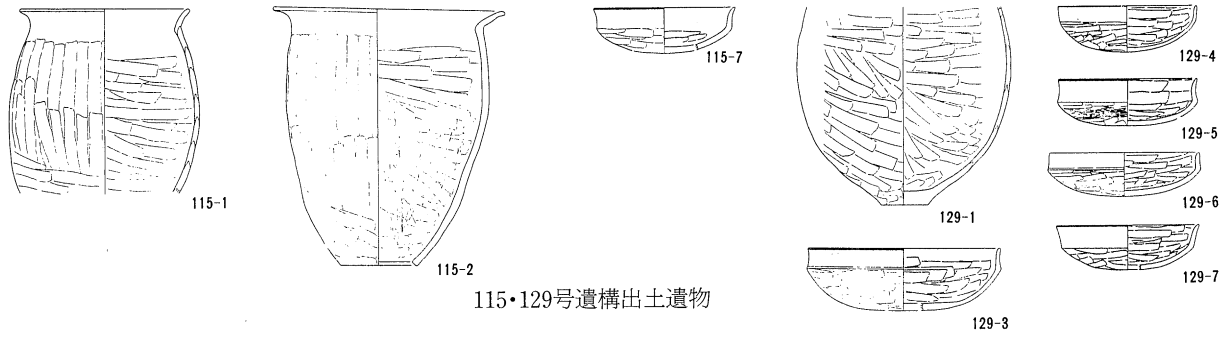
103号遺構出土遺物



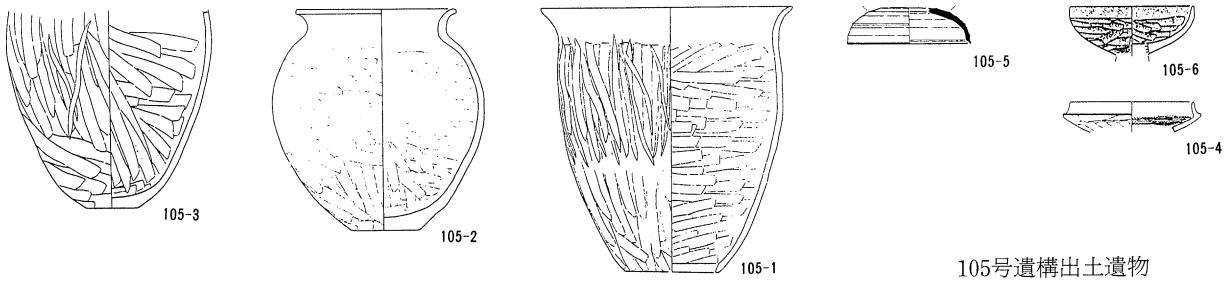


81・90A・109号遺構出土遺物

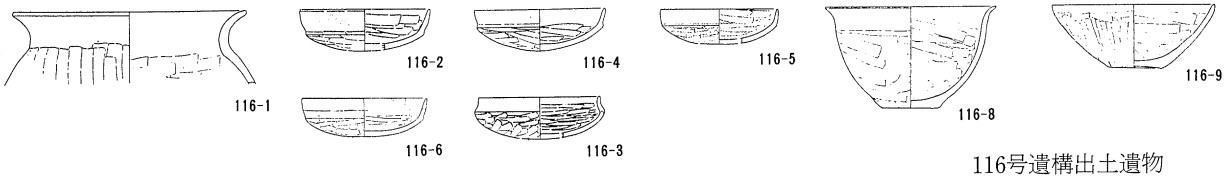
第102図　標式遺構出土遺物 (2)



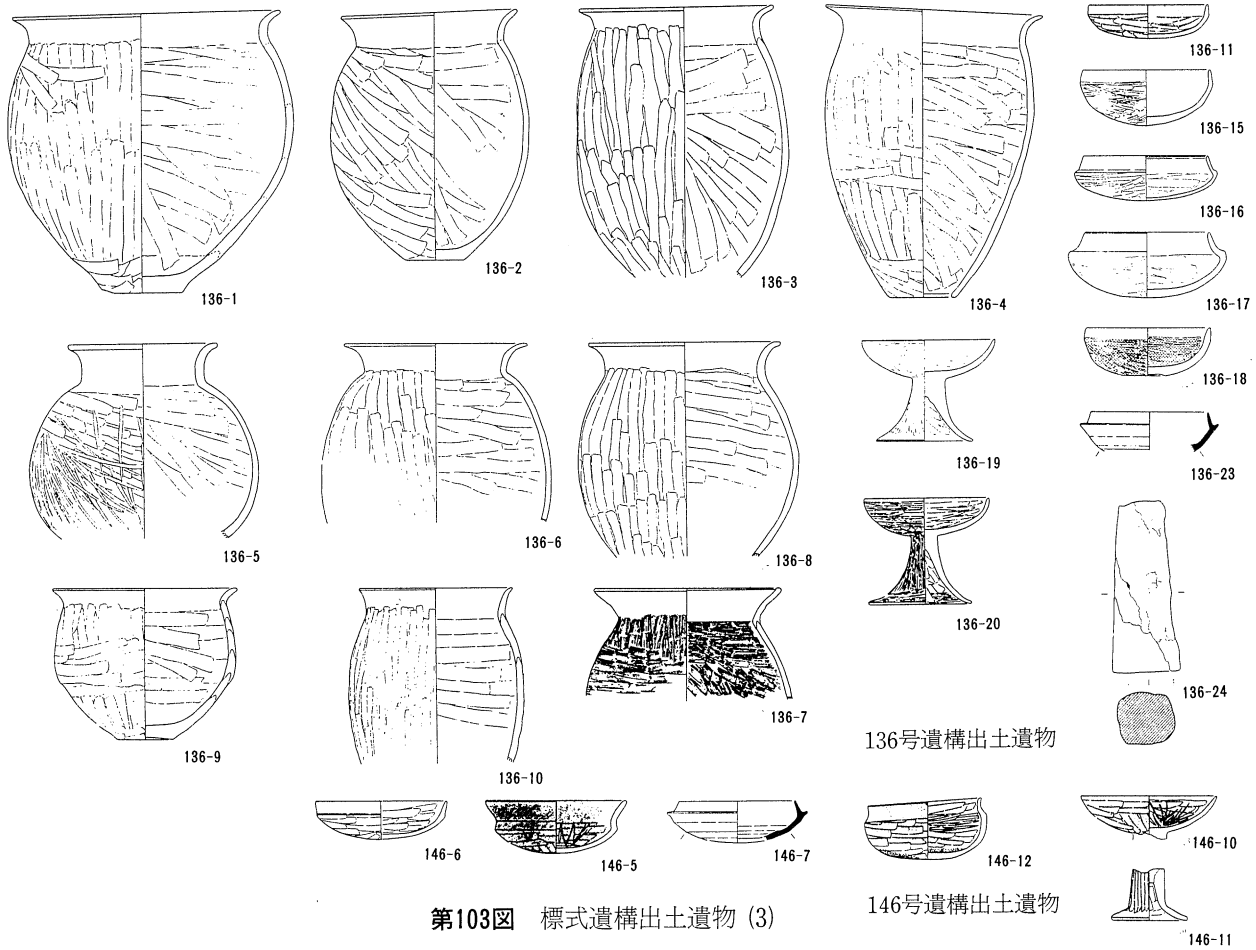
115・129号遺構出土遺物



105号遺構出土遺物



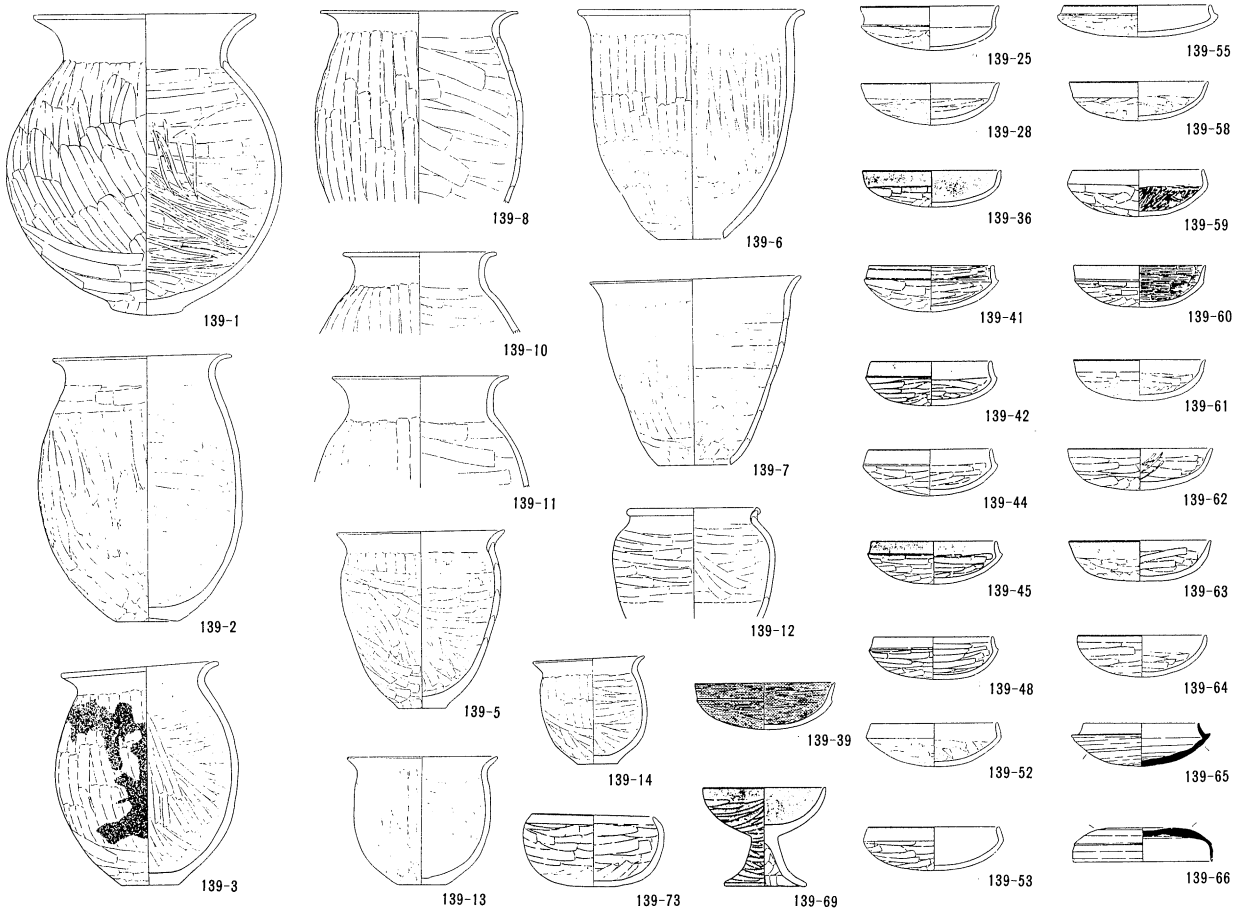
116号遺構出土遺物



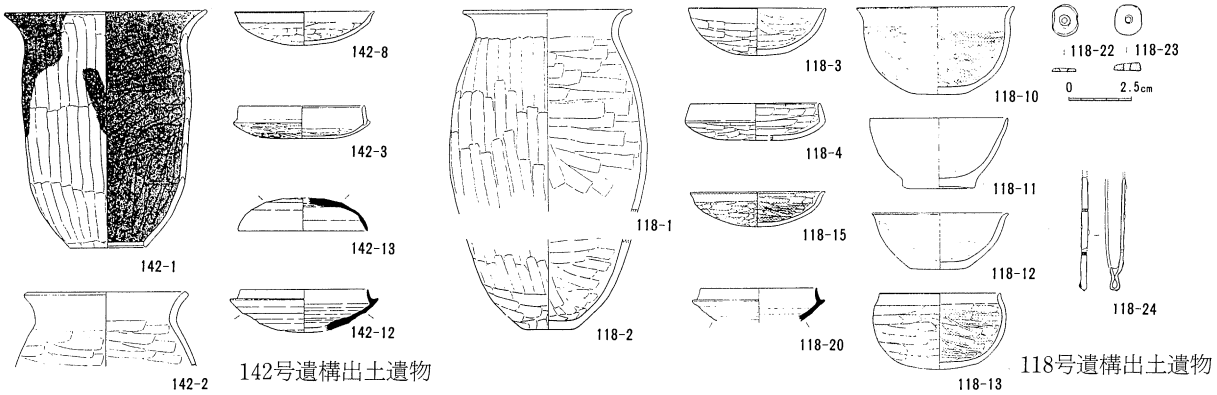
136号遺構出土遺物

146号遺構出土遺物

第103図　標式遺構出土遺物 (3)

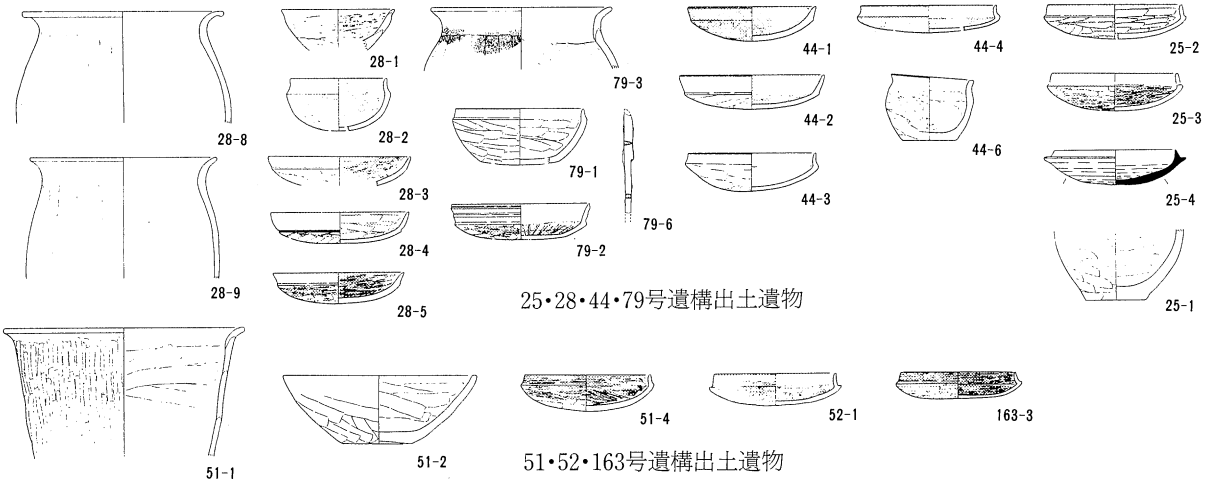


139号遺構出土遺物



142号遺構出土遺物

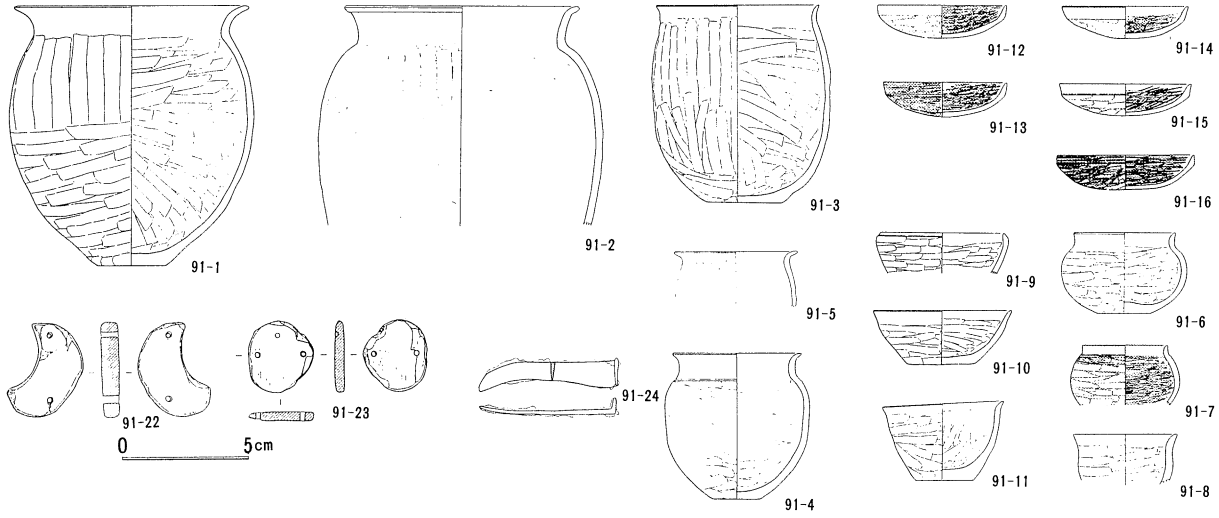
118号遺構出土遺物



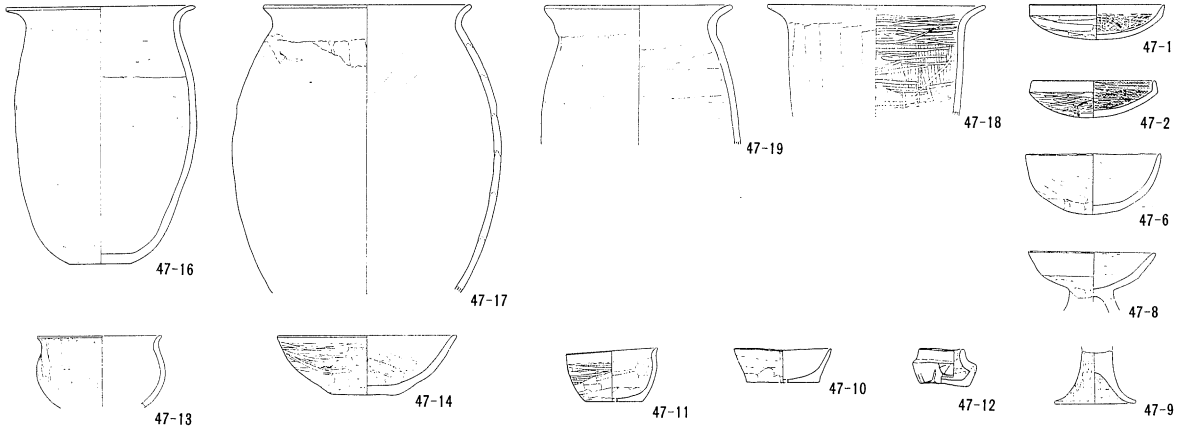
25・28・44・79号遺構出土遺物

51・52・163号遺構出土遺物

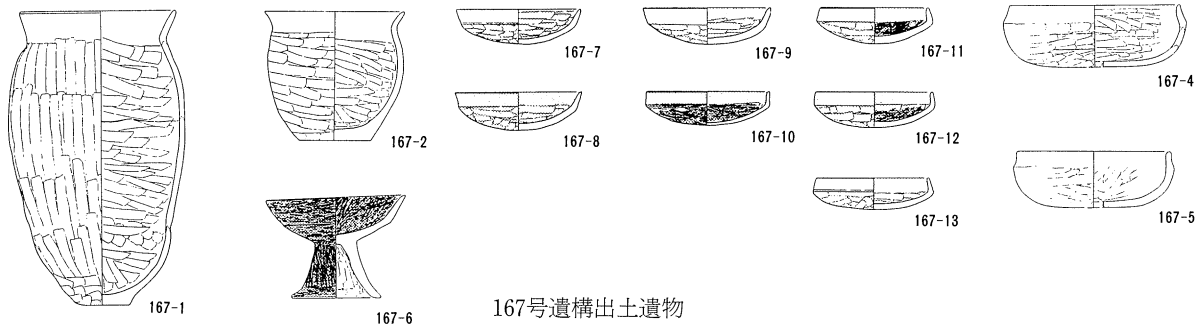
第104図　標式遺構出土遺物 (4)



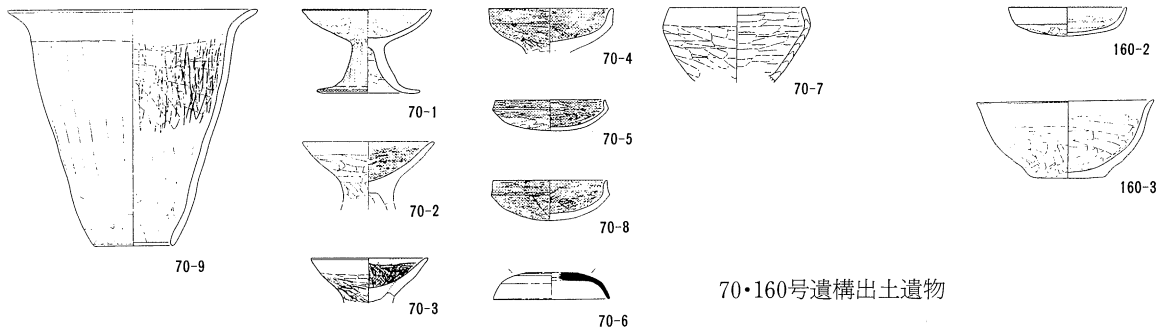
91号遺構出土遺物



47号遺構出土遺物

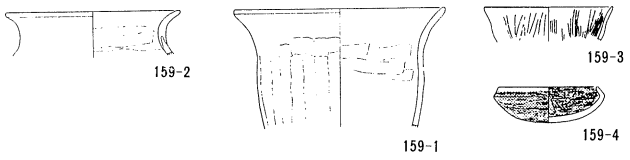


167号遺構出土遺物

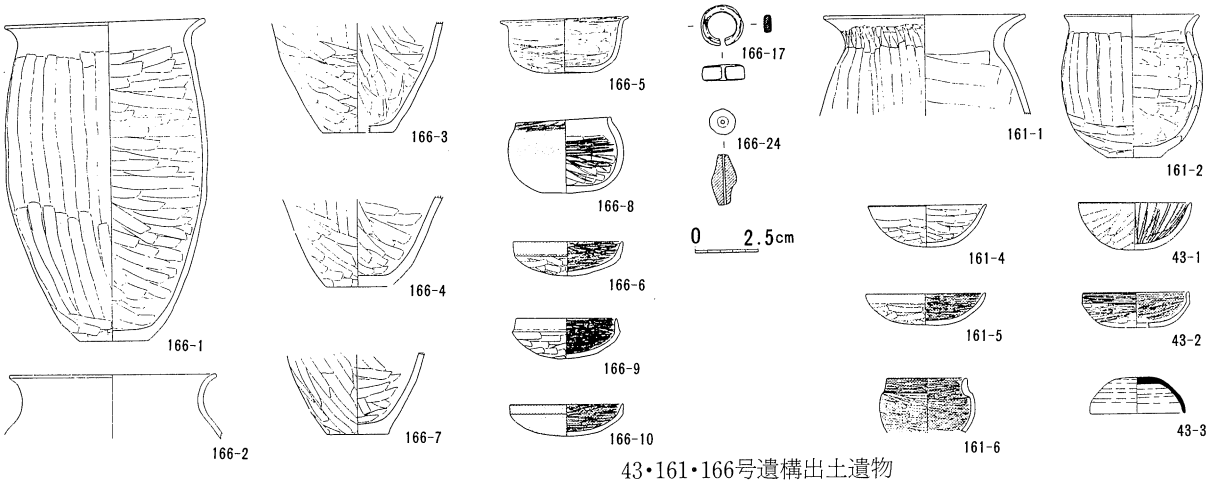


70・160号遺構出土遺物

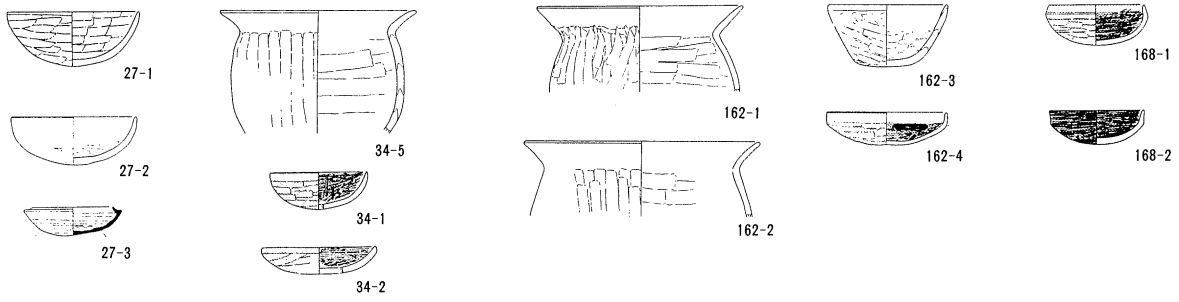
第105図　標式遺構出土遺物 (5)

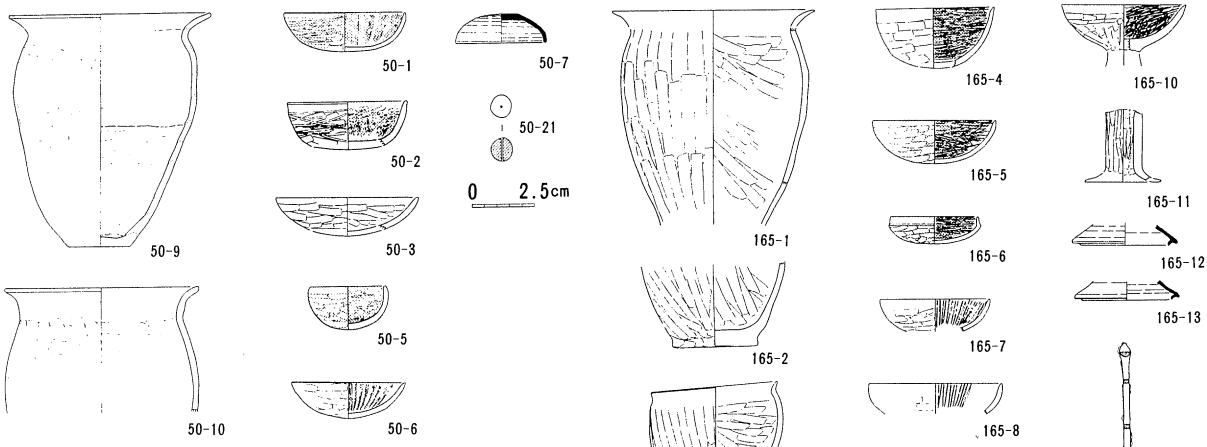


159号遺構出土遺物



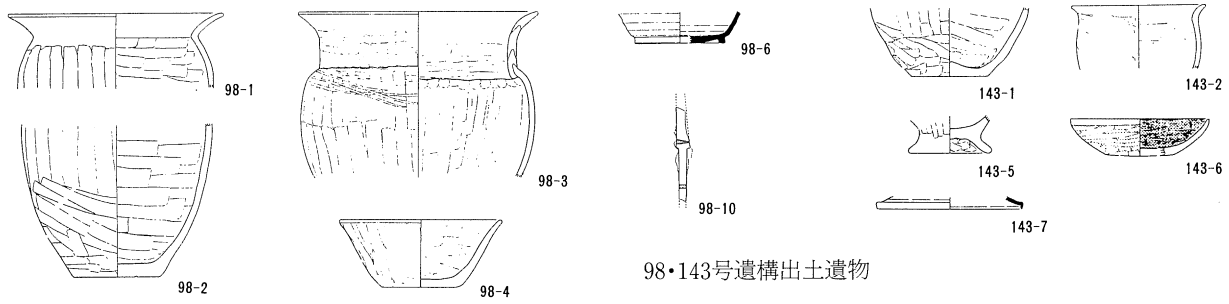
43・161・166号遺構出土遺物





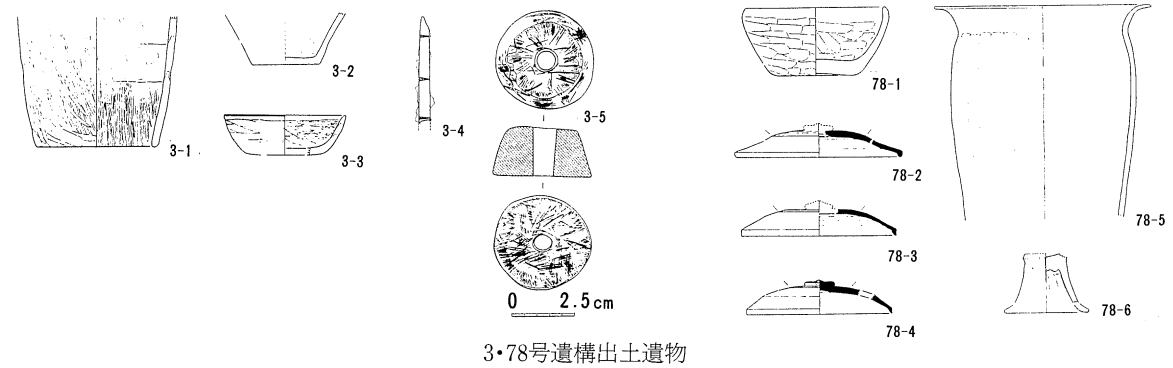
27・34・50・162・168号遺構出土遺物

165号遺構出土遺物

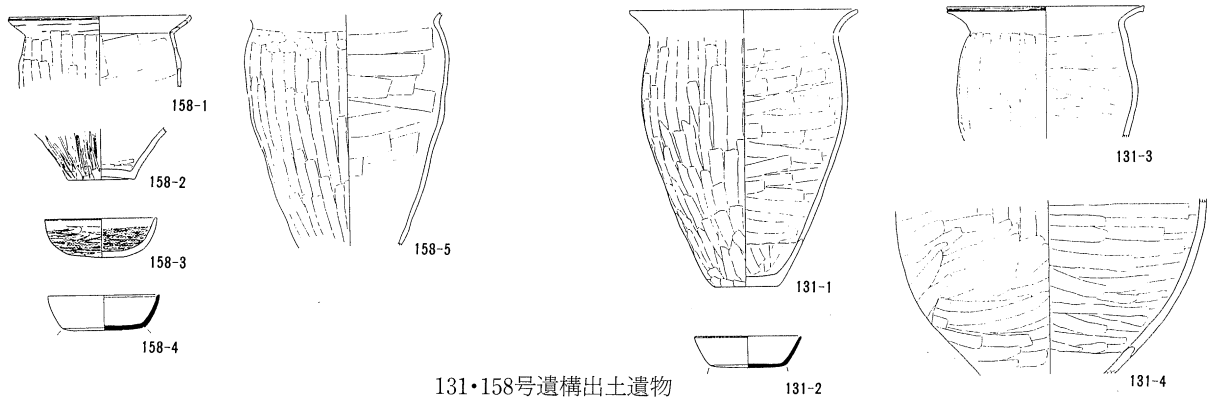


98・143号遺構出土遺物

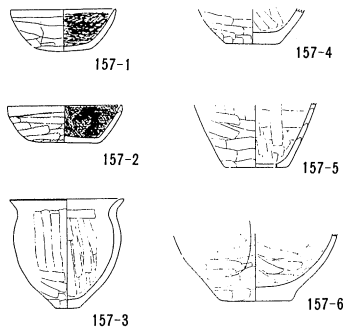
第106図　標式遺構出土遺物 (6)



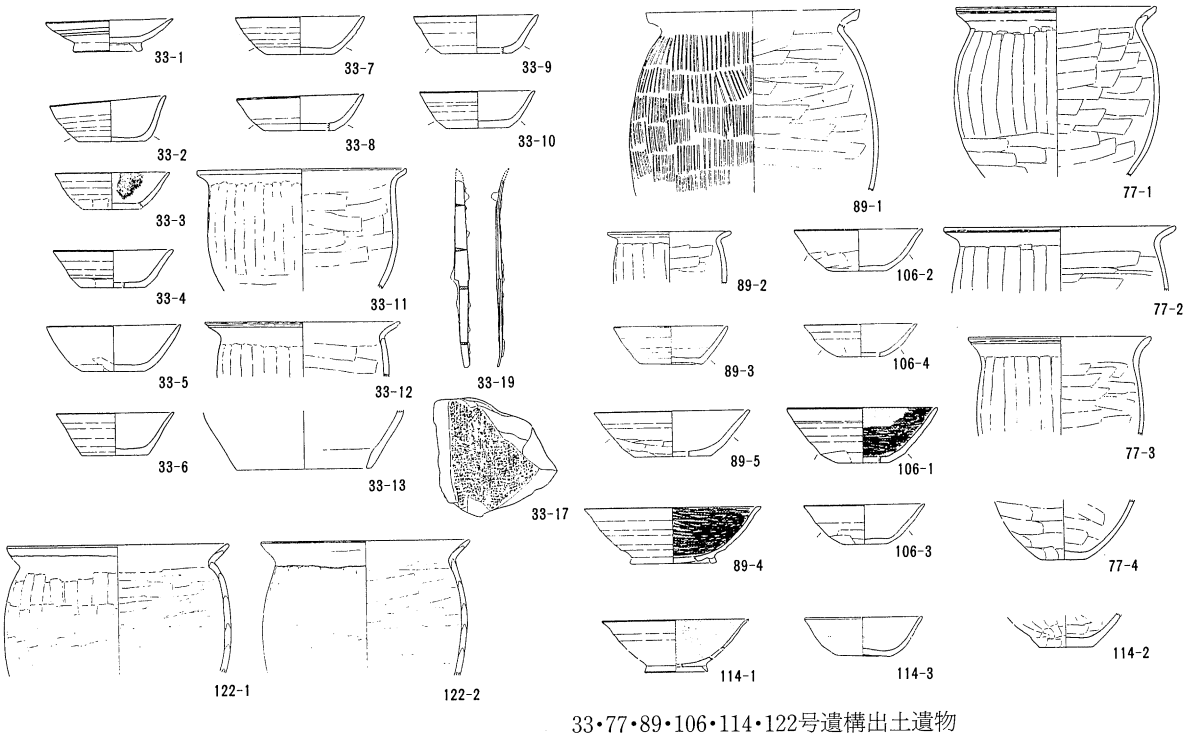
3・78号遺構出土遺物



131・158号遺構出土遺物



157号遺構出土遺物



33・77・89・106・114・122号遺構出土遺物

第107図　標式遺構出土遺物 (7)

(2) 分　類

近年の発掘調査の成果と各氏の積極的な編年作業の結果、房総におけるいわゆる鬼高式土器に対する編年観はほぼ確定し得る段階の域に達してきたと言っても過言ではない。ここではこれら諸氏の研究成果を踏まえ、あらかじめ選出された和泉式期から奈良時代に至る54軒の竪穴住居遺構を対象に分類作業を行っておきたい。

A　**長胴系甕**

a．くの字外反口縁部を持ち、最大径が胴部中位に存在するもので、底部が突出ぎみなもの。胴部外面にヘラケズリ後ヘラミガキが施されており、胴部の張りは比較的強い。

b．コの字外反口縁部を持ち、最大径は胴部中位に存在するもので、底部が突出ぎみになるもの。初期のものは、胴部外面ヘラケズリ後ヘラミガキが施されている。

c．比較的小型でくの字外反口縁部を持ち、最大径が胴部中位に存在するもの。器厚が厚く、質量の割に重い。

d．くの字外反する比較的長い口縁部を有し、最大径が胴部中位に存在するもの。底部は突出ぎみのものが存在する。

e．くの字外反口縁部を持ち、最大径が胴部中位に存在するもののやや胴部の張りが弱くなったもので、外面最終調整にヘラミガキが施されず、ヘラケズリの方向はタテとナナメの二種があり、底部が若干突出するものとしないものが存在する。

f．コの字外反口縁部を持ち、最大径が胴部中位に存在するもので、外面調整にヘラミガキが施されないもの。図示遺物に限れば、底部は若干突出ぎみである。

g．くの字外反する比較的短い口縁部を有し、最大径が胴部中位に存在するもの。尚底部形状については不明である。

h．胴部の内外面にハケ整形を施し、口唇部がわずかに肥厚するいわゆる駿東型の甕。

i．口唇部が横方向に水平にのびるもので、最大径が胴部中位 or 口唇部に存在するもの。

j．口縁部が緩かにくの字外反するもので、比較的長胴となる兆が認められるものの、最大径は依然胴部中位に存在するもの。

k．くの字外反口縁部を持ち、胴部の張りが弱くなり、より長胴的になったものであるが、最大径が依然胴部に存在するもの。

l．くの字外反口縁部を持ち、口径＝胴部中位となる長胴的なもの。

m．くの字外反口縁部を持つもので、頸部から口縁部にかけて発達しつつある段階であるが、まだ頸部に肥厚さが残り、最大径が胴部上位に存在するもの。

n．明瞭なくの字外反口縁部を持ち、頸部から口縁部にかけての発達が著しく、頸部が肥厚がなくなり、かつシャープで、最大径が口縁部に存在するもの。

o．くの字外反口縁部を持ち最大径が口縁部に存在するもので、口唇部が比較的横方向ぎみにのびるもの。

p．横方向へ平行的にのびる口縁部を持ち、胴部の張りが弱く、頸部以下が直線的形状となるもの。

q．摘み上りぎみの口唇部に、1ないし2条の沈線を有し、最大径が口縁部に存在するもの。

B　球胴系甕

a．くの字外反口縁部に強い球形の胴部を持つもの。

b．大型の球胴甕と推定されるもので、底部は突出し揚底ぎみなもの。

c．頸部に若干の面を有し、弱いコの字形を呈しながらやや長く外反する口縁部をもつもので、比較的強い球形の胴部をもつもの。底部は突出ぎみである。

d．短いコの字状の外反口縁部を持つもので、最大径が胴部中位よりやや上に存在し、底部が平底であるもの。

e．強いコの字外反口縁部と球形胴部を持つもの。

f．比較的弱い球形胴部に縦方向のヘラケズリが施されるもの。

C　大型甕

a．頸部が比較的縮まり壺形の器形に近いもので、長い口縁部と強い球胴部をもち、底部が突出しているもの。

b．頸部が広く、短い口縁部を有する大型品で、底部が若干突出ぎみなもの。

c．短いくの字外反口縁部を持ち、胴張りが弱く長胴形を呈するもの。

d．明瞭なコの字形の頸部をもち、口唇部が短く面を持って水平にのびるもので、肩張りの器形を呈するもの。

e．頸部から口縁部にかけて発達した強いコの字形を呈するもので、頸部と胴部の境に明瞭な段を有し肩張りの器形となるもの。

f．やや小型ではあるが、依然大型品の範疇に属するもので、やや長いコの字外反口縁部を有するもの。

壺形土器　検出された遺物は、14・145号遺構の2点のみである。

a．口縁部が折り返しによる複合口縁となるもので、平底を呈し、小型なもの。

甑形土器　球形の胴部を持つものと、深鉢形を呈するもの、甕形に近いものが存在する。

a．比較的球形に近い胴部と推定されるもので、底部に大型の一孔を有するもの。

b．緩やかに外反する口縁部と、膨らんだ胴部を有するもので、底部に大型の一孔を有し、端部に段を有するもの。

c．口縁部内面に折り返しによる段を有し、複合口縁を呈するもので、口縁部の外反及び胴部の張りが弱く、揚底で段を有し、底部に比較的小さな一孔を有するもの。

d．強く外反する口縁部を有し、わずかに張りをもつ深鉢形の胴部を有するもので、底部に大型の一孔を有するもの、口縁部は長いものと短いものが存在する。

e．頸部から口縁部にかけて、横方向ぎみに強く屈曲する長い口縁部を有し、d類とf類の中間的要素を持つもの。

f．外反する口縁部とやや張りをもつ胴部を有し、甕形土器に器形が近いもの。

g．短く屈曲する口縁部を有し、胴部中位より徐々に幅を減ずる深鉢型のもの。

h．やや小型でわすかに外反する口縁部からほとんど膨らみをもたぬまま底部に向かって幅を減ずるもの。

i．大きく外反する長い口縁部からほぼ垂直に下る胴部を有し、底部付近で急激に幅を減ずるも

の。

j．大きく外反する長い口縁部から底部に向かって直線的に幅を減ずるもの。

小型器種　その形体差から、短頸壺・小型球胴甕・深鉢形小型甕・坩・小型短頸甕・鉢・埦・模倣坏形大型品に分類したが、器形のあいまいなものが多く、分類に混迷した遺物も存在している。

短頸壺　文字通り頸部が短く、胴部に張りのあるものだけ集めた。

a．口唇部がシャープで頸部内面に面を持ち、強い球形の胴部を有し赤彩が施されるもの。

b．口唇部が肥厚で、胴部最大径が肩部に存在するもの。

小型球胴甕　いずれも底部を欠くものしか残存しない。口縁部は長く、胴部は丸い。

a．くの字外反口縁と球形の胴部を有し、赤彩が施されているもの。

b．やや短いくの字外反口縁を有するが、短頸壺ほど短くはない。球形の胴部を有し、無彩である。

c．口縁部がやや厚く、くの字外反するもので、胴部の張りは比較的弱い。赤彩が施されており、小型短頸壺、ないしは、鉢形土器等に類すべきものなのかも知れない。

深鉢形小型甕　外反する口縁部と比較的深い胴部を有する小型品で、鉢と甕との区別がつきにくいものが存在する。

a．緩やかに外反する口縁部を有し、底部は平底ぎみで、胴部の張りが少ないもの。

b．くの字外反口縁部を有し底部が平底であるもの。胴部の張りは少ない。

c．コの字外反口縁部を有し底部が平底であるもので、胴部の張りがやや強いもの。

d．短く外反する口縁部を有し胴部の張りが少なく、底部径が大きく平底ぎみであるもの。

e．くの字外反口縁部を有し、最大径が口縁部に存在するもの。底径が著しく小さい。

坩　大小の二種類が存在する。

a．口径があまり開かず、直立ぎみにたちあがる口縁部を有するもの。

b．くの字に大きく外反する口縁部を有し口径が開くもので、球形の胴部で丸底なもの。

c．小型でくの字外反口縁部を有するもので、球形の胴部で丸底なもの。

小型短頸壺　小型で直立ぎみにたちあがる短い頸部を有するもので、鉢・坏・埦との区別がつきにくいものが存在する。

a．小型で平底なもの、底径は口径より広い。

b．直立ぎみにたちあがるシャープな口唇部を有するもので、胴部にやや張りがあり、底部は平底ぎみなもの。

c．bがそのまま圧縮された様な器形で、稜を持って直立ぎみにたちあがる口縁部を有し、底部は丸底ぎみなもの。

d．稜を持って直立ぎみにたちあがる口縁部を有し、底部は丸底である。模倣坏に似るが、口径・器高等が模倣坏と明瞭に異なる。

e．稜を持って直立にたちあがる口縁部を有し、胴部は球形に近いもの。底部形状は不明。

f．eがそのまま退化した形状と言えそうな器形で、胴部と口縁部の境が不明瞭で、短く突出した頸部を有し、底部は平底ぎみなもの。ただし後述する埦形土器との区別も不明瞭である。

鉢　素縁系のものと短く外反する口縁部系や内彎系のものがある。平底を基本とし、深鉢形小型甕よ

りも器高は低く相対的に口径は広い。深鉢形と浅鉢形に細分が可能である。

a．素縁口縁で底部は平底を呈する揚底ぎみなもので、深鉢形なもの。

b．短く屈曲する外反口縁を有するもので、深鉢形なもの。

c．深鉢形小型甕bに似るが、相対的に器高が低く口径が広いもの。

d．体部が内彎ぎみにたちあがる逆梯形を呈するもので、底部が狭いもの。

e．素縁で底部が突出し、揚底ぎみなもの。

f．口唇部が短く外反する浅鉢形なもの。

g．小型で口縁部が短く外反し、口径と底径の差があまりなく相対的に深いもの。

h．素縁で手捏ね土器の範疇に属する大型品で、口径と底径差が少なく相対的に浅いもの。

i．内彎する口縁部を持つ深鉢形なもの。

j．口縁部が横方向に短く屈曲するもので、体部下端に丸味を有するもの。

k．小型で素縁丸底ぎみなもの。椀fとの区別は不明瞭。

l．体部が外反ぎみに開く逆梯形を呈するもので、底径の広いもの。

m．体部が内彎ぎみにたちあがるもので、底径の広いもの。

椀　椀形坏・小型短頸壺・鉢との区別があいまいな一群が存在しており、本来ならば小型器種すべての範囲で再分配する必要があるのかも知れないが、一まず椀形土器範疇として取扱っておく。

a．丸底ないし極小平底を呈するものと考えられるもので器高が高く、内彎ぎみにたちあがる体部を有するもの。内外面に赤彩が施されている。

b．丸底で器高が高いもので、口唇部がわずかに外反ぎみになるもの。図は内外面に赤彩が施されている。

c．丸底で器高が高く、内彎ぎみにたちあがる器形で、口縁部は内彎する。体部と口縁部との境はナデによる弱い稜を有している、図は内外面に赤彩が施されている。

d．丸底で器高が高く、内彎ぎみにたちあがる器形で、口縁部は内傾ぎみに直立する。体部と口縁部の境は明瞭な稜を持って区別されており、内外面に黒色処理が施されている。

e．椀dが偏平化した様な器形で、体部と口縁部の境は明瞭な稜を持って区分されており、口唇部は直立するもの。

f．鉢kや椀bと類似する器形を呈し、稜を持たないがナデによる明瞭な口縁部を有するもの。底部は丸底と推定され、内面に丁寧なヘラミガキと黒色処理が施されている。

模倣坏形大型品　模倣坏の大型なもので、坏・鉢・椀に区別しかねるもの。

a．身模倣坏の大型品。

高坏　いわゆる和泉式系と鬼高式系並びに椀形赤彩系と黒色処理系に細分可能である。

a．坏部下端に明瞭な稜と大きく外反する口縁を有するもので、口唇部には面を持つ。中空で柱状の長脚脚部を有するものと推定され、赤彩が施されている。

b．坏部下端の稜及び口唇部に面を持たないもので、柱状脚部ないしは短脚と推定されるもの。赤彩が施されている。

c．深い椀形坏と短脚の脚部を有するもので、口縁部は内彎し、裾部内面に稜を有し、屈曲度が強いもの。

d．深い埦形坏と短脚の脚部を有するもので、口縁部はわずかに外反ないしは直立ぎみで、裾部屈曲度がやや弱いもの。

e．ナデとヘラケズリの差異によって、体部と口縁部を稜的に分かち、口縁部が外反ぎみにたちあがるもの。脚部は短脚と推定でき、赤彩が施されるもの。

f．口縁部が内彎ぎみにたちあがる埦形坏部にハの字外反し、裾部は屈曲を持たない短脚を有し、器形が鼓状を呈するもの。赤彩が施されている。

g．埦形坏と短脚の脚部を有するもので、裾部の屈曲が強く、端部が上方にハネ上がるもの。赤彩が施されている。

h．埦形坏とやや長脚ぎみになった脚部を有するもので、裾部に弱い屈曲を有し赤彩が施されているもの。

i．浅い埦形坏と、比較的長脚の脚部を有し、裾部は屈曲を持たずハの字状に開くもの。赤彩が施されているものと、無彩のものが存在し、一部にヘラミガキを施したものが存在する。

j．口縁部からハの字状に外反する有稜坏部と、裾部に屈曲を持たず太く長い脚部を有するもの。脚内部を除いた全面にヘラミガキを施し、黒色処理が施されている。

k．開く様にたちあがる浅い坏部にやや長脚の脚部を有し、裾部が横方向に開くもの。黒色処理が施されている。

l．坏部に稜を持ち、直立ぎみにたちあがる口縁部を有し、脚接合基部が太いもの。坏部内外面にヘラミガキと黒色処理が施されている。

m．弱い稜を持ち、開く様にたちあがるやや深めの坏部に、太い脚部が接合するもの。坏部内面ヘラミガキと黒色処理が施されている。

n．稜の存在しない開きぎみのたちあがる深い坏部を有するもの。坏部内面にヘラミガキと黒色処理が施されている。

坏　埦形・蓋模倣・身模倣・皿状・平底・暗文系・小型埦形に大別される。

埦形坏　赤彩、無彩、黒色処理系に大別できる。

a．直線的に外傾する体部が深く、接地面が極めて少ない丸底を有するもので、赤彩が施されているもの。

b．直線的に外傾する体部で、底部が平底に近い丸底を呈し、鉢形に近い器形のもので、赤彩が施されているもの。

c．小型で外傾ぎみに開く体～口縁部を有するもので、赤彩が施されているもの。

d．大型で内彎ぎみにたちあがる体～口縁部を有するもので、赤彩が施されているもの。

e．深く無彩なもので、口唇部は内～外傾するものがある。外面ヘラケズリ、内面にヘラナデが施される。

f．深く赤彩が施されるもの。

g．やや浅く、内面にヘラミガキが施されるもの、無彩のものと、黒色処理が施されたものが存在する。

蓋模倣坏　直立、ないしは外反してたちあがる器形のもので、赤彩と黒色処理系に大別される。

a．ナデとヘラケズリ、及び輪積による不明瞭な稜が体部と口縁部の境とし、口縁部が外反し、

赤彩が施されているもの。

b．口縁部と体部を分ける稜は鋭い段状を呈し、体部はやや偏平的で、口縁部は外反、口唇部は鋭い。内外面に赤彩が施されている。

c．口縁部と体部を分ける稜は小さく鋭い段状を呈し、器高が高く体部が丸味を帯びるもので口縁部は外反する。内外面に赤彩が施されているものと無彩のものが存在する。

d．口縁部と体部を分ける稜は大きく鋭いが、明瞭な段をなすまで至っていない。比較的大型で器高が高く、口縁部は直立ぎみにたちあがる。内外面に赤彩が施されている。

e．ナデとヘラケズリの差異により口縁部と体部を境とし、稜はやや不明瞭。口縁部は直立ぎみにたちあがり、口唇部は短く外反する。内外面に赤彩が施されている。

f．口縁部と体部を分ける稜は大きく、やや鋭い。口縁部は直立ぎみにたちあがり、端部は鋭い。大型で器高が高く体部は丸味を帯び、内外面に赤彩が施されている。

g．ナデとヘラケズリの差異によって口縁部と体部を境とし、稜は不明瞭。口縁部は外反ぎみにたちあがり、大型で器高が高いが口縁部の割合が低く、体部は丸味が強い。内外面に赤彩が施されている。

h．口縁部と体部を分ける稜は小さくやや鈍いが、明瞭な段をなす。口縁部は直立してたちあがり、大型で器高が高いが口縁部の割合が低く、偏平化の徴候が認められる。外面の口縁部付近と内面全域に赤彩が施される。

i．口縁部と体部を分ける稜がやや鈍く、口縁部は外反する。赤彩と黒色処理されたものが存在し、一段と偏平化したものも存在する。

j．口縁部と体部を分ける稜が明瞭で、口縁は強く外反する。内外面に赤彩が施されている。

k．体部と口縁部を分ける稜が明瞭な段をなすもので、器高が高く口縁部は大きく外反する。いわゆる北関東ないし東北系の坏と考えられ、内外面に赤彩が施されている。

l．大ぶりで、体部と口縁部を分ける稜が不明瞭であり、口縁部が外反してたちあがる形状を呈し、模倣坏とも埦形坏とも区別しかねるもの。口縁部の外面及び内面全域に赤彩が施されている。

m．偏平で大ぶりの形状を呈し、体部と口縁部の稜は明瞭であり、沈線状を呈するものも存在する。

口縁部は外反し、内外面に黒色処理が施されている。

n．偏平でやや小ぶりになった形状を呈し、体部と口縁部を分ける稜は段をなして明瞭。口縁部はやや短く外反し、ヘラミガキが施され内外面に黒色処理されたものが主流である。

o．偏平で小ぶりの形状を呈し、体部と口縁部を分ける稜は、明瞭であるが段をなさない。口縁部は短く外反し、外面ヘラケズリ、内面ヘラナデを施し、内外面とも黒色処理されたものが主流である。

p．いわゆる有段口縁坏で、内外面に黒色処理が施されている。内面ヘラミガキによる放射状暗文が認められる。

q．偏平で大ぶりの形状を呈し、体部と口縁部を分ける稜は明瞭。口縁部は短く直立ぎみにたちあがり、内外面にヘラミガキと黒色処理が施されている。

r．体部と口縁部を分ける稜はやや甘く不明瞭。口縁部は直立してたちあがり、内外面にヘラミガキと黒色処理が施されている。

s．小ぶりで偏平ぎみの形状を呈し、口縁部と体部を分ける稜は鈍く、やや不明瞭。口縁部は大きく外反してたちあがり、器高に対する口縁部の割合は高い。内外面に黒色処理が施されている。

t．小ぶりで偏平ぎみの形状を呈し、口縁部と体部を分ける稜は、ほとんど見あたらない。口縁部は外反し底部は平底ぎみで、内外面に黒色処理が施されている。

u．小ぶりで、口縁部と体部を分ける稜は明瞭で段を有している。口縁部はやや外反ぎみにたちあがっており、内外面に黒色処理が施されている。

v．小ぶりで、口縁部と体部を分ける稜は比較的明瞭。口縁部は外反ぎみに短くたちあがっており内外面に黒色処理が施されている。

w．小ぶりで偏平な形状を呈し、口縁部はほとんど存在せず、口唇部と体部をナデによって区別している程度の形状を呈し、内外面に黒色処理が施されている。

身模倣坏　口縁部が内傾ぎみにたちあがる坏で、赤彩・無彩・黒色処理に大別できる。

a．大ぶりで器高が高い坏で、体部と口縁部を分ける稜は鋭く明瞭で、内外面に赤彩が施されているもの。

b．小ぶり口縁部と体部を分ける稜は大きくシャープに突出し、内外面に赤彩、ないし内面に黒色処理が施されたものが存在する。

c．大ぶりで、口縁部と体部を分ける稜は明瞭で段をなすもので、口唇部に明瞭な段が存在し、無彩なもの。

d．口縁部と体部を分ける稜は小さく鋭く突出するもので、口唇部が平らなものとシャープなものが存在する。外面の2/3ないし、内外面の全域に赤彩が施されている。

e．口縁部と体部を分ける稜はやや鈍く、口唇部が丸く直立ぎみにたちあがる。外面1/2～内面の全域に赤彩が施されている。

f．体部と口縁部を分ける稜がやや鈍く、口縁部はシャープさに欠いて内彎する。埦形坏との区別がやや曖昧で、内外面に赤彩が施されている。

g．大ぶりで器高が高く、体部と口縁部を分ける稜は大きく段をなす。無彩で坏形土器としてはあまりにも大型で、別系に属すのかも知れない。

h．大ぶりで著しく偏平な坏で、体部と口縁部を分けると稜は明瞭で段をなす。外面の一部及び内面の全域に赤彩が施されている。

i．身模倣坏bが偏平化した様な形状で、底部は平底ぎみになる。体部と口縁部を分ける稜は鈍く面的な様相となる。無彩。

j．身模倣坏cが偏平化した様な形状で、底部は平底ぎみになる。体部と口縁部を分ける稜は明瞭で段をなし、口唇部は明瞭な段が存在する。無彩。

k．比較的大ぶりな偏平坏で、体部と口縁部を分ける稜は明瞭で段をなす。内外面に黒色処理が施されている。

l．体部と口縁部を分ける稜がやや鈍く、さほど偏平化していない坏。口唇部はややシャープで、

直立ぎみにたちあがる。無彩。

m．小型化しはじめた坏で、体部と口縁部を分ける稜は鈍くやや不明瞭。口縁部はわずかに内彎ぎみにたちあがり、内外面に黒色処理が施されている。

n．小型で、体部と口縁部を分ける稜は鈍く、やや不明瞭。口縁部は内彎してたちあがり、内外面に黒色処理が施されている。

o．小型で、体部と口縁部を分ける稜は小さく鋭い。口縁部は直立ぎみにたちあがり、内外面にヘラミガキと黒色処理が施される。

p．小型で、体部と口縁部を分ける稜は鋭く段をなす。口径に対する器高はやや深く、口縁部は直立ぎみにたちあがり、内面にヘラミガキと黒色処理が施される。

q．小型で、体部と口縁部を分ける稜はやや鈍いが段をなす。器高に対する口縁部の割合が低く内外面に黒色処理が施される。

r．最も小型の偏平坏で、体部と口縁部を分ける稜はやや鋭く段をなす。内外面に黒色処理が施されている。

皿状偏平坏　盤と呼ぶほど大型ではなく、口径に対して器高が低く偏平感を受ける坏で、底部から口縁部にかけてほとんど屈曲を持たず直線的に外方に開く形状を呈するものをまとめた。

a．無彩で、底部が丸底ないしは丸底ぎみと推定されるもの。

b．内面に赤彩ないしは黒色処理を施し、底部が平底になるもの。

平底系坏　ヘラミガキと黒色処理による整形、調整等を主体とするもので、底部が平底ないしは平底ぎみになるものを集めた。ただし、互いに同一の系譜であるものとは断言し得ない。

a．底部に木葉痕を有する平底の坏で、内外面にヘラミガキと黒色処理が施されたもので、口縁部が直立ぎみにたちあがるもの。

b．体部と口縁部を分ける弱い稜が存在し、口縁部は直立ぎみにたちあがっている。内外面にヘラミガキと黒色処理を施し、底部は平底ぎみで、同時期の模倣坏と比べて底部形状の異なるもの。

c．底部が平底ないし平底ぎみを呈するものと推定され、体部と口縁部はナデによって区別され、明瞭な稜をもたないもので、口縁部が外反ぎみにたちあがるもの。ヘラミガキと黒色処理が施されている。

d．断面逆梯形を呈するもので、底部は完全な平底であり、ヘラミガキと内外面に黒色処理が施されている。

e．やや深めの断面逆梯形を呈するもので、無彩で内面にヘラミガキが施されているもの。

暗文系坏　縦方向のみのヘラミガキによる暗文系の土器を集めた。

a．頸部を有し、口縁部が外反するもので不連続の放射状暗文を有するもの。

b．内外面に黒色処理が施された。小型で深い埦形坏内面に、口唇部から底部に至る縦方向のヘラミガキによる放射状暗文を施すもの。

c．比較的浅めの埦形坏に、5～6条一組の放射状暗文を有するもの。内外面に黒色処理が施されたものが存在する。

d．底部が尖底ぎみで、2～3条一組の放射状暗文が施されているもの。内面に黒色処理を施す

ものが存在する。

小型埦形坏　内外面黒色処理と、内面にヘラミガキが施されているものを集めた。

a．極めて小型で、口径に対して器高が高く、半球形を呈するもの。

b．中型なもの。

以上が各器種ごとに分類された細目であるが、各々のタイプは器形や手法において差異を示すものの決して独立して存在している理由ではなく、ある系列上に存在することはいうまでもない。たとえば、カマド出現期における長胴系の甕はａ～ｄの４類が存在する。このうちｃ類は出現から消滅まで終始一貫して小型のままで大きな変化を見せないことから除外するとして、残りの３者はすべて口縁部形状の異なりが、分類基準の一つとなっている。たしかにこの口縁部形状の違いは編年上認められるものではあるが、この３者の共通点として横方向ヘラケズリ後ヘラミガキという手法要素が存在していることも事実であり、またこの手法が省略され、縦方向のケズリ甕へと変化する段階においては、３者の区別は困難であると言わざるを得ない。大極的な流れとして長胴甕本来の機能を優先する立場に立てば、すべては単一指向の長胴化へ向かって進化しているものと捉えられる。この様な関係を他の代表的器種の変遷とともに示せば以下の通りとなる。

長胴系甕ａ…
- 長ａ →（ヘラミガキ消滅）e →（縦ケズリ）e →（長胴化）j → k → l → m → n → o → p → q
- 長ｄ →（縦ケズリ）d
- 長ｂ →（縦ケズリ）b　　ｇ i →（口径≧胴部）i

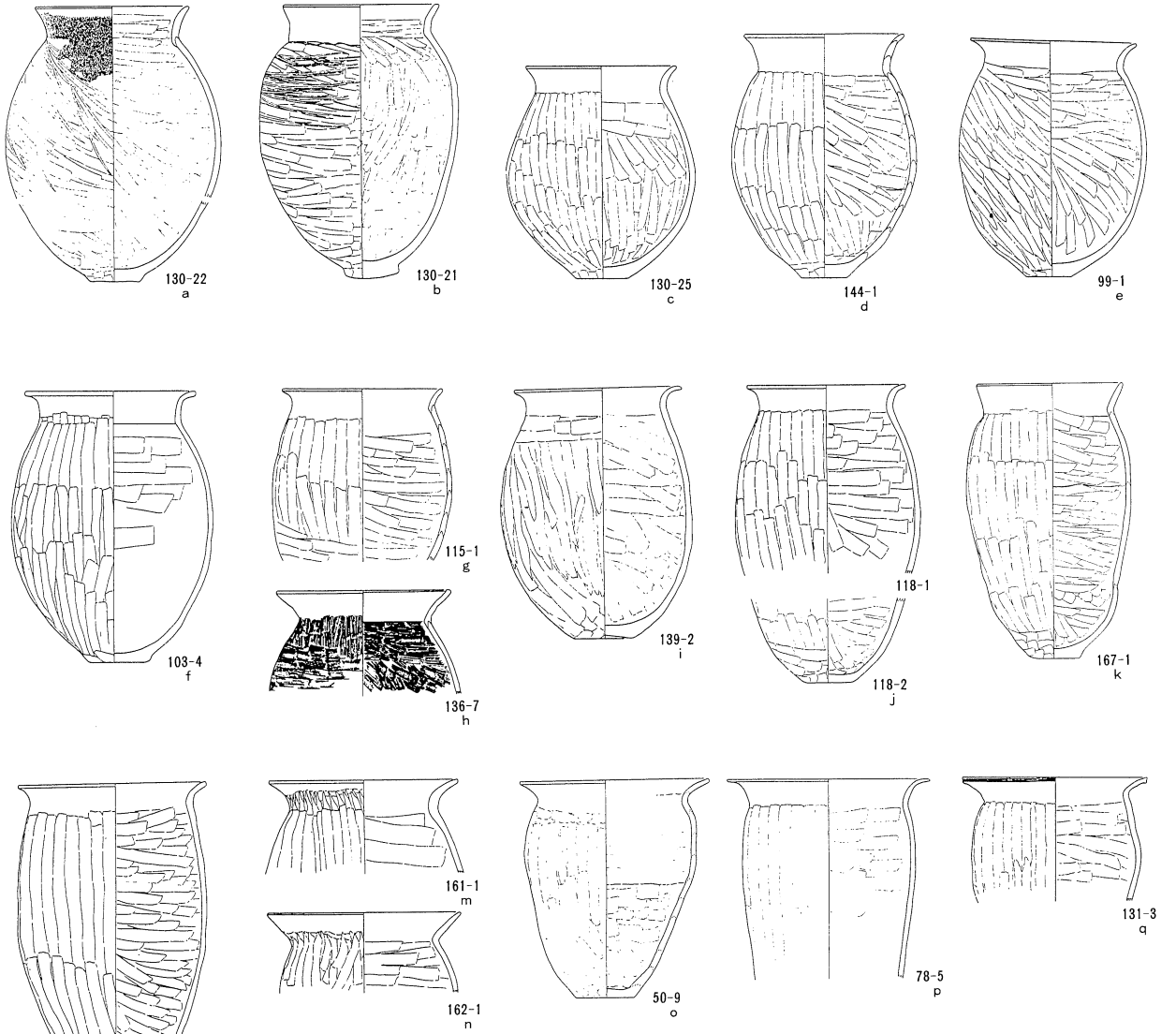
球胴系甕ａ…ｂ（横ケズリ） ｃ ｄ ｅ →縦ケズリ（ｆ）→消滅

高坏　a → b → [c d e f g] → h i → [j k l m n] ⇨ 赤彩→黒色処理→消滅
- [c d e f g]：初期鬼高系埦形高坏（短脚）（赤彩）
- h i：埦形高坏（長脚）（赤or無彩）
- [j k l m n]：黒色処理系高坏

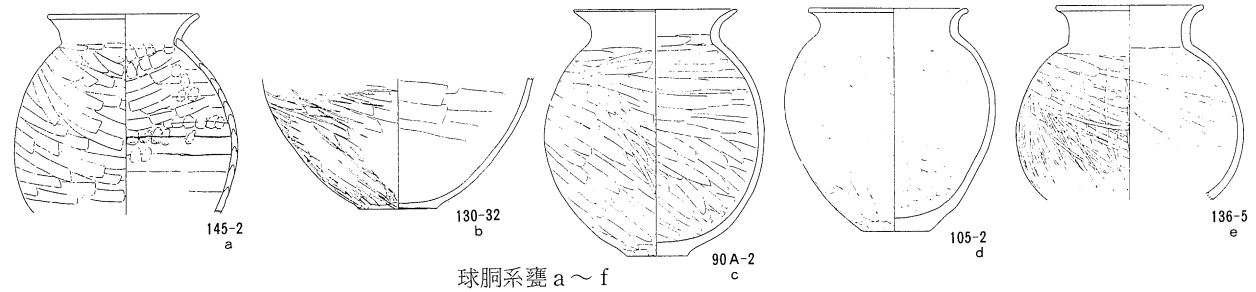
蓋坏　[a ～ j]　k　l　[m～n]（ｐを除く）　P ⇨ 赤彩→黒色処理→消滅（縮少偏平化）
- [a ～ j]：（赤彩）
- k：東北系坏（赤彩）
- l：外反系（赤彩）
- [m～n]：黒色処理
- P：有段口縁坏

身坏　[a～l]　[m～r] ⇨ 赤彩→黒色処理→消滅（縮少偏平化）
- [a～l]：（赤彩）一部無彩
- [m～r]：黒色処理
  - （同系列）
  - c → j → k
  - e → l
  - f → i → n
  - o → p → q → r

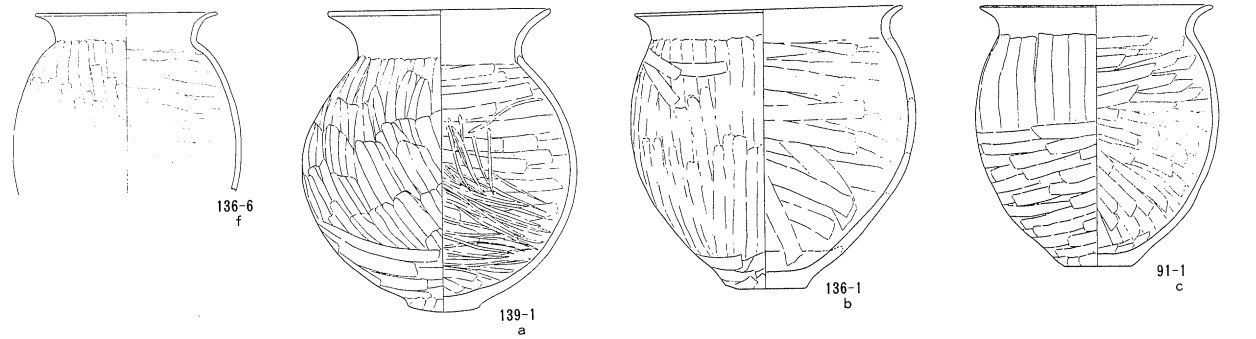
尚一括して取り上げてしまった資料でも、109・164号遺構の様に、上部遺構の削平が床面まで及んでいないものであり、なおかつ覆土残存高を考えると一括といえども極めて該当遺構に帰属する可能性の強いものに関しては、標式資料となり得るものと判断して使用していることを再度申し加えておきたい。



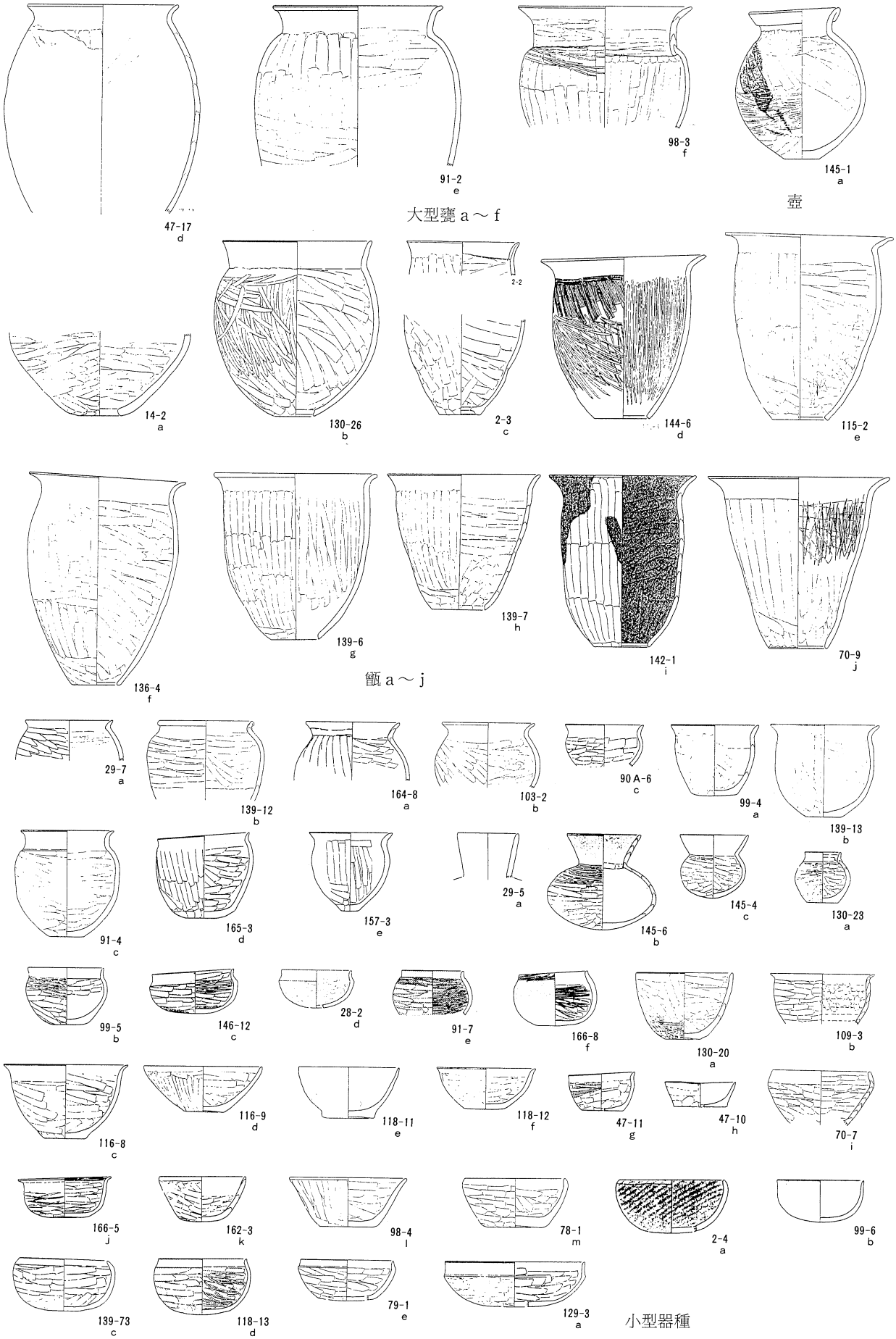
長胴系甕 a ～ l



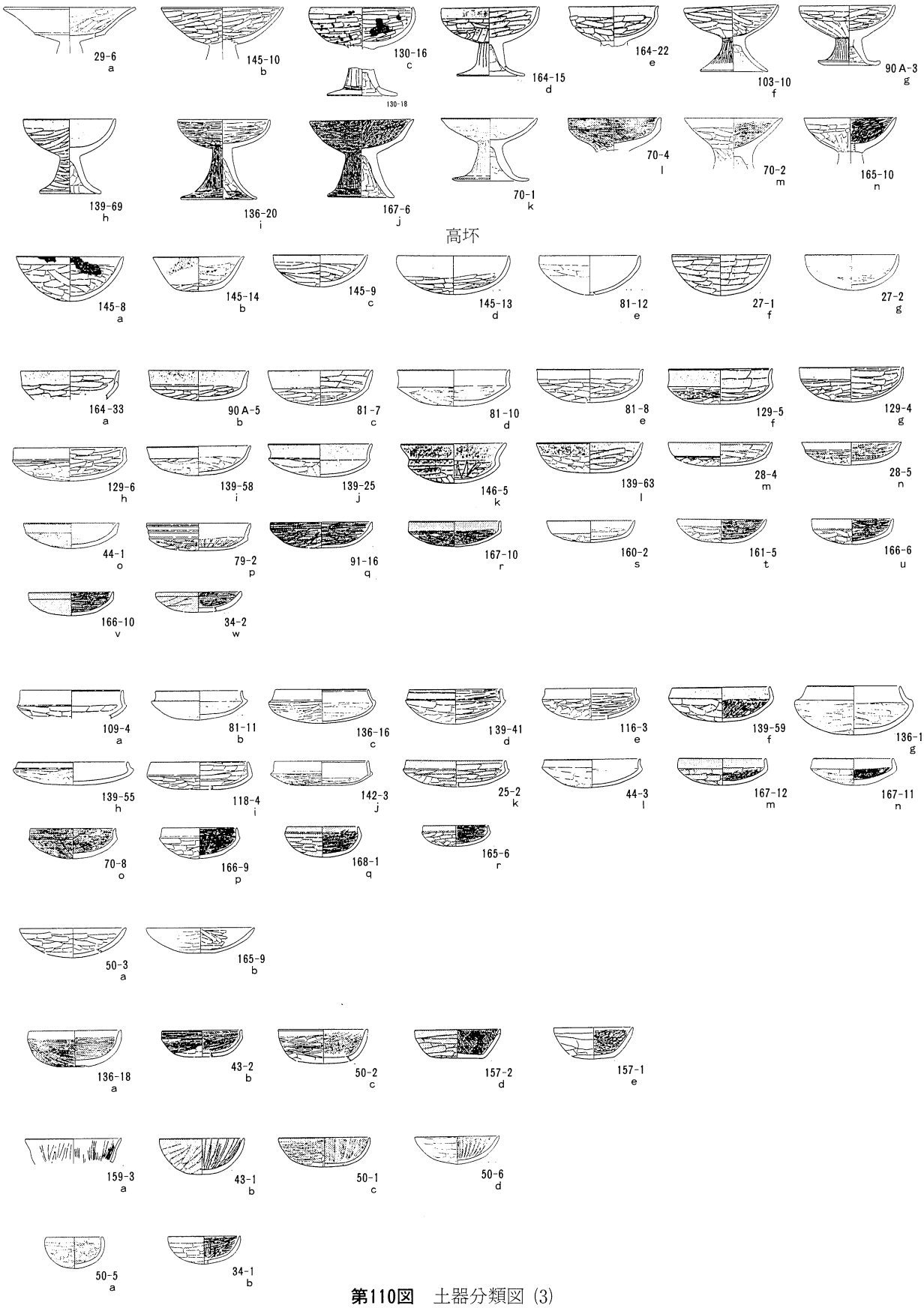
球胴系甕 a ～ f



第108図　土器分類図 (1)



第109図　土器分類図 (2)



第110図　土器分類図 (3)

(3) 変　遷

土器分類によって得られた各器種の消長と組合せ、形態、手法の変化に重複関係を加えて各期に細分し検討を加えていきたい。

第1期

第1期に比定できる遺構として14•29•145号が存在する。いわゆる和泉式期に相当する時期で、145号遺構は、その最終末期に比定することができる。器種は壺a、球胴系甕a、甑a、短頸壺a、坩a・b・c、埦形坏a・b・c・d、高坏a・bが存在する。全体的に和泉式期の様相をとどめている段階で、壺aは当期まで残存する。球胴系甕aは、次期以降の長胴系甕a及び球胴系甕cの母体的形状で、この系譜上に両者が派生する可能性も考えられる。甑aは強い球形の胴部を呈し、次期bよりもより古相を示しているといえよう。短頸壺aは陶邑TK－216号窯出土品に近似する器形を呈している。坩は大型・小型品が存在するが、平底ないしはソロバン玉形の胴部を呈するものが認められず、和泉式期でも新しい段階の所産と考えられる。埦形坏は、和泉式的様相が強いa・bと鬼高式古段階にしばしば共伴する口径が大きく深く、口縁部が内彎するdが存在する。またこの段階では、埦形坏でも口径が一廻り小さい小型品cが、確実に共伴しており、c・d両者の形態上の差異は肉眼でも明瞭である。高坏は柱状脚部を有すると思われ、和泉式土器のメルクマール的な坏部下端に明瞭な稜を有するaと、坏部下端の稜が失われたbが存在する。尚145号検出例は、一括検出ではあるが短脚を呈する脚部が検出されており、すでにこの段階でbの脚部が短脚化している可能性が考えられる。以上のことをまとめると相対的に145号が新しく、29号はやや古い様相を残しているものとして捉えられ、第1期はa・bの小2期に細分することが可能である。

第2期

住居跡にカマドが確実に伴う段階で、当期に比定できる遺構として130・144号が存在する。また完掘されておらずカマドの有無については不明ながら、その出土遺物から2号遺構も当期に比定することが可能である。器種は長胴系甕a・b・c・d、球胴系甕b、甑b・c・d、小型短頸壺a、鉢a、埦a、埦形坏c・d、高坏cが存在する。一部を除いて前段階の和泉式的な土器様相がほぼ消滅する段階であり、埦形坏d＋短脚脚部を有する高坏cの出現をもって鬼高式土器の成立と考える立場に立てば、この時点が鬼高式の成立期となろう。また標式遺構間に重複関係が存在し、130号→144号の変遷として捉えることが出来る。

長胴系甕a・bは、横方向のヘラケズリ後ヘラミガキが施されており、いずれも底部は突出している。また短胴のc、器高に対して頸部が長いdなどが存在し、いずれも底部は突出ぎみであり、特に長胴系甕dは、横方向のケズリから縦方向のケズリへと変化するものと捉えられる。球胴系甕bは、やや大型であり、直接対比する前後関係の土器が存在していないが、底部が突出、揚底ぎみであることは、前段階に共通する要素であるものと考えておきたい。甑は古相を呈するb・cと、新相として捉えられるdが存在し、dは後の甑形土器の基本的なスタイルとなる形状を呈しており、以後の製品はこのスタイルを基本的に大きく変えることはない。埦形坏はc・d類が存在するが、大ぶりなd類が主体となっている。高坏は完形品が残存していないが、c類をはじめとする埦形坏＋短脚のものが

主体であろうと推定される。尚130号資料の中に、坏部下端に有稜を呈する前段階的脚部を有する高坏が存在するが、すでに短脚化しており、この段階においての高坏形土器は完全に短脚化しているものと捉えることが可能である。この他の小型土器群については直接対比できる資料に欠いている。尚カマドの出現期と推定される130号遺構検出支脚は、太く短い特徴的な形状であることを指摘しておきたい。また当期は標式遺構が互いに重複関係を有しており、a・bの小2期に細分することが可能である。

第3期

住居跡に須恵器が確実に伴いまた後半には模倣坏が出現する段階であり、当期に比定できる遺構として99・164号が存在する。器種は長胴系甕a・b・d・e、球胴系甕c、甑e or b？、小型球胴甕a、深鉢形小型甕a、短頸壺b、鉢a、椀b、高坏c・d、椀形坏c・d、蓋模倣坏aなどが存在する。

長胴系甕aの系譜上に存在するeは、横ないし斜め方向へラケズリと底部の突出ぎみ形状を残しながら、外面のヘラミガキが消略され、胴部の張りが弱くなっている。また164号出土の長胴系甕a・b・dはいずれも縦方向のヘラケズリが施されており、当期において長胴系の甕は縦ヘラケズリが一般的になるものと推定される。球胴系甕・甑においては、全体の器形を知り得る資料に不足しており断定は避けておきたいが、それぞれc・e or b類の範疇に属するものと考えられる製品が存在する。

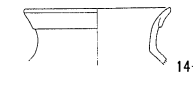
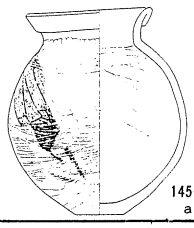
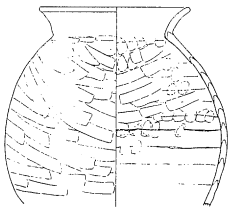
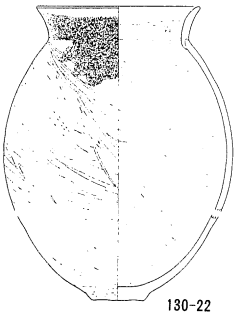
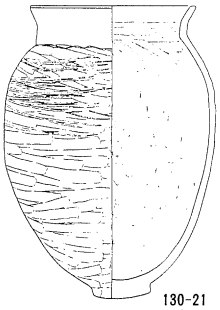
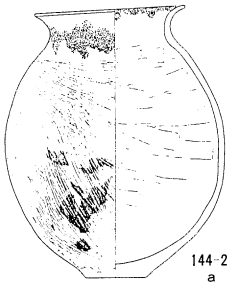
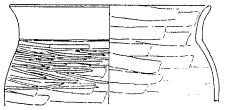
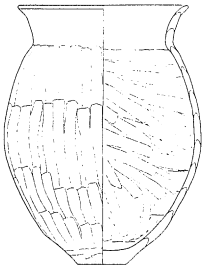
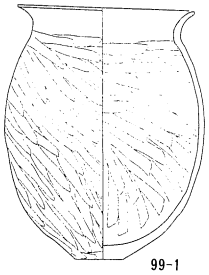
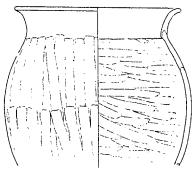
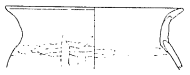
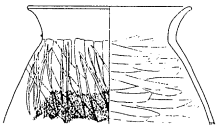
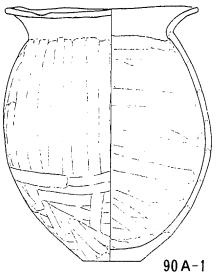
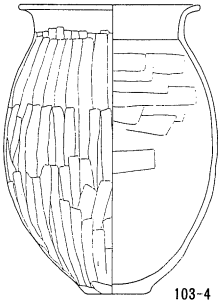
椀形坏はd類の小型化あるいは偏平化が進み、c類との区別が肉眼的にも法量的にも不明瞭となり、高坏はc・d・e類が存在するが、c類はほとんど消滅し、d・e類が主体となる。また深鉢形小型甕aは、底部中央が方形状にやや突出する特徴を有している。

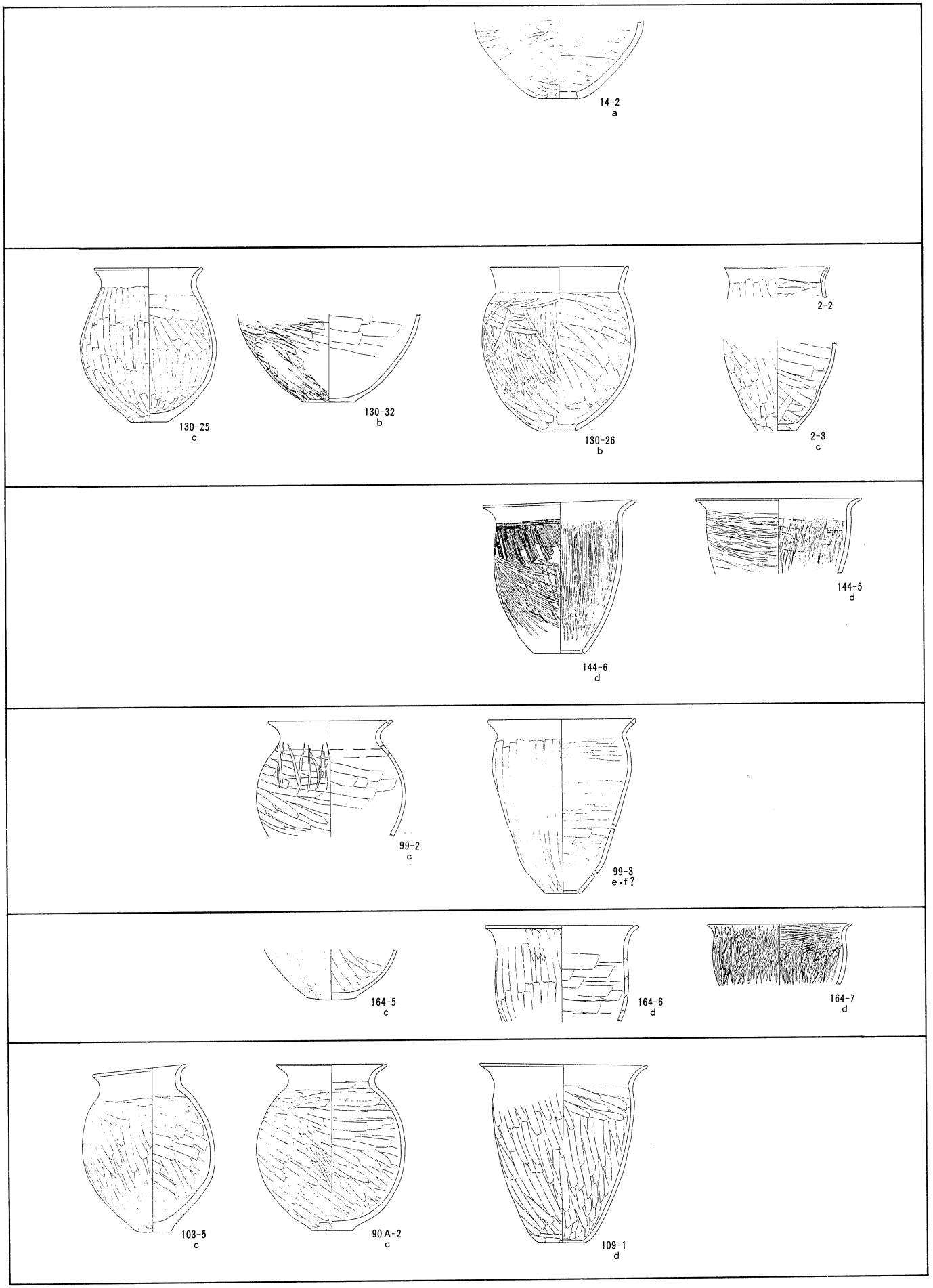
模倣坏は、蓋模倣タイプのaが164号に出現している。覆土一括で取り上げてしまったものであるが、当遺構は104・161～3号によってその上面を大幅に削平されており、覆土がほぼ焼土のみの単層であり、床面からの厚さが10cmに満たない状況であったことを考えれば、覆土一括ではあるものの、本跡に直接伴う可能性は極めて強いものであり、当該期の遺物として取り扱ってさしさわりがないものと判断し得る。須恵器はいずれも遺構に直接伴う状況で検出されており、遺存度も完形に近い。99－13はＴＫ－23型式後半に、164－37はＴＫ－47型式にそれぞれ比定することが可能であり、この他模倣坏の有無、長胴系甕形土器のヘラケズリ方向の差異等によっても、a・bの小2期に細分することが可能である。尚、模倣坏の出現をもって鬼高式土器の成立と考える立場に立てば、Ⅲ－b期をもって鬼高式が開始されることになろう。

第4期

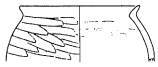
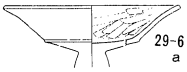
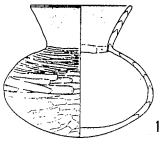
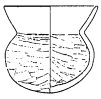
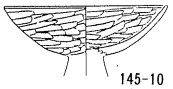
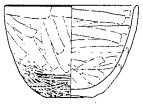
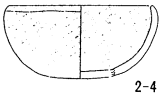
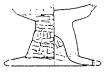
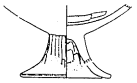
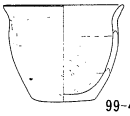
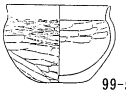
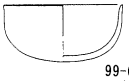
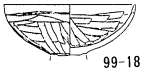
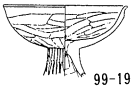
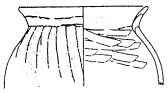
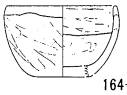
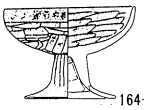
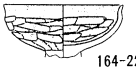
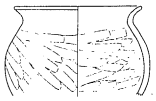
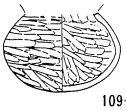
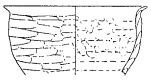
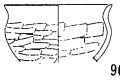
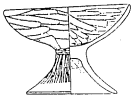
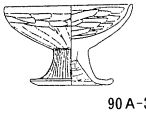
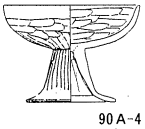
模倣坏が定着安定化し、本遺跡内におけるカマドの位置が東から北に大きく変化する段階であり、当期に比定できる遺構として、81・90A・103・105・109・115・129号が存在する。器種は長胴系甕c・e・f・g、球胴系甕c・d、甑d・e、小型丸胴甕b・c、坩a、鉢a・b、模倣坏形大型品a、高坏d・f・g、椀形坏d・e、模倣身坏a・b、模倣蓋坏d、等が存在する。

長胴系甕eは、前段階に引き続き縦方向のヘラケズリが施され、底部の突出が認められなくなる。長胴系甕bの系譜上に存在すると推定されるfは、コの字外反口縁部を有しながらも前段階に引き続

1 - b	 14-1 a  145-1 a  145-2 a
2 - a	 130-22 a  130-21 b 130-33 d
2 - b	 144-2 a  144-4 b  144-1 d
3 - a	 99-1 e
3 - b	 164-2 e  164-3 b  164-1 d
4 - a	 90A-1 e  103-4 f



第111図　椎津茶ノ木遺跡出土土器変遷図1

1 - a	 29-7 a 29-5 a  29-6 a
1 - b	 145-6  145-4  145-10 b 145-11
2 - a	130-23 a  130-20 a  2-4 a 130-16 130-18 c  130-19
2 - b	 144-9 144-10
3 - a	 99-4 a  99-5 b  99-6 b  99-18  99-19 99-20
3 - b	 164-8 a  164-10 a 164-14 a  164-15 d  164-22 e
4 - a	 103-2 b  109-2  109-3 b  90A-6 c  103-10 f  90A-3 g  90A-4 d